

令和5年度 生活困窮者就労準備支援事業費等補助金
社会福祉推進事業

根拠に基づく介護実践を推進するための
介護福祉士養成課程における介護過程教育のあり方
に関する調査研究事業

報 告 書

株式会社コモン計画研究所

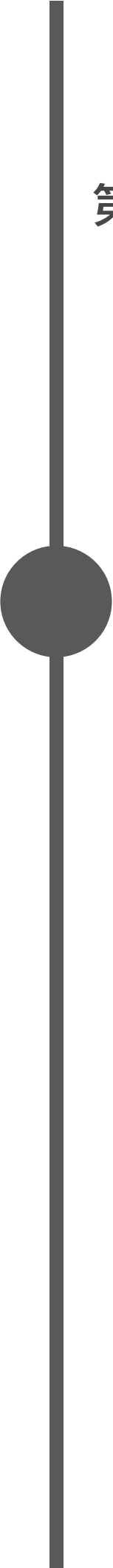
令和6（2024）年3月

根拠に基づく介護実践を推進するための介護福祉士養成課程における
介護過程教育のあり方に関する調査研究事業 報告書

目 次

第1章 調査研究の全体像	1
1 調査研究の背景と目的	2
2 本調査研究の枠組みと調査研究方法	3
(1) アンケート調査(量的調査)の実施概要	4
(2) ヒアリング調査(質的調査)の実施概要	5
(3) 関係者による意見交換の実施	6
(4) 検討体制	7
(5) 調査研究の経過	8
3 調査研究の総括	9
(1) アンケート調査(量的調査)のまとめ	9
(2) ヒアリング調査(質的調査)のまとめ	15
(3) 本調査研究のまとめと考察	20
第2章 根拠に基づく介護実践を推進する教育に関する調査(アンケート調査結果データ)	29
1 アンケート調査の基本的枠組み	30
2 調査票(紙面)	31
3 アンケート調査結果	35
3-1 回答養成校の基本属性	35
(1) 回答養成校の学校種別及び教育年限	35
(2) 生徒・学生数及び教員数	35
3-2 根拠に基づく介護実践と介護過程を結びつける教育	36
(1) 介護過程の定義や展開する意義・目的に関する認識	36
(2) 根拠に基づくアセスメントとは何だと考えますか	49
(3) 根拠に基づくアセスメントを教育するために工夫していること	53
(4) 根拠に基づくアセスメントを教育するためのツールや指標	56
(5) 根拠に基づく計画とは何だと考えますか	57
(6) 根拠に基づく計画を教育するために工夫していること	61
(7) 根拠に基づく計画を教育するためのツールや指標	64
(8) 根拠に基づく実施とは何だと考えますか	66
(9) 根拠に基づく実施を教育するために工夫していること	70
(10) 根拠に基づく実施を教育するためのツールや指標	73

(11)根拠に基づく評価とは何だと考えますか	74
(12)根拠に基づく評価を教育するために工夫していること	78
(13)根拠に基づく評価を教育するためのツールや指標	81
3-3 LIFEという仕組みが介護過程教育に与える影響	83
(1)LIFEの理解度	83
(2)教育においてLIFEを取りあげたこと	84
(3)教育においてどのようにLIFEを取りあげたか	85
(4)介護過程の教育におけるLIFE活用	86
(5)LIFEを介護過程の授業で取り入れた場合の効果	89
(6)介護過程の教育でLIFEを取り入れていく上での課題	92
(7)LIFEの理解は学生に必要なか	99
 第3章 LIFEを活用した介護過程実践に関する調査(ヒアリング調査結果データ)	103
1 ヒアリング調査の枠組み	104
2 ヒアリングガイド	105
3 ヒアリング調査結果	106
(1)介護過程教育の課題等	106
(2)介護過程の授業の工夫	108
(3)LIFEに関する教育の現状	109
(4)教育にLIFEを活用する効果	110
(5)LIFEを教育に活用するにあたっての課題	116
 第4章 関係者による意見交換の実施	121
■意見交換の記録	122

A thick, dark gray vertical line runs down the left side of the page. A solid dark gray circle is positioned on this line, approximately one-third of the way down from the top.

第1章 調査研究の全体像

1 調査研究の背景と目的

介護過程の展開(個別介護計画等を活用した PDCA サイクル)は、利用者の自立の維持・向上、利用者の望む生活の実現をするために必要な「根拠に基づく介護実践」である。介護過程は介護福祉士養成カリキュラムなどの介護人材の育成において重要な科目であり、介護福祉士の専門性の一つとして介護現場で実践することが期待されている。

一方で、令和3年度より始まった「科学的介護情報システム(LIFE)」(以下、「LIFE」という)は、アセスメント情報等のデータ登録及びフィードバックの活用を通じて、介護事業者におけるケアの質の向上を図る新たな取り組みである。LIFEの活用や推進において介護過程実践は重要であり、その担い手である介護福祉士及び介護職(以下、「介護福祉士等」という)の役割は大きい。

弊社では社会福祉推進事業において、令和2年度「介護現場における介護過程実践の実態調査及び効果検証に関する調査研究事業」を実施し、効果的な介護過程推進の要素及び介護福祉士等の役割を見出した。令和3年度「科学的介護情報システム(LIFE)を活用した介護過程実践に関する調査研究事業」では、LIFEを活用した介護過程実践の効果や影響及び令和2年度の残された課題について調査研究を実施した。また、令和4年度科学的介護情報システム(LIFE)を活用した介護過程実践に関する調査研究事業報告書」では、LIFEを活用した介護過程実践における介護福祉士等に必要能力や実践力に対応した介護過程教育の教育内容の整理・検討を行った(令和2年度以降の報告書の詳細は、以下を参照)。

▶ <https://www.comon.jp/dl/project.html>

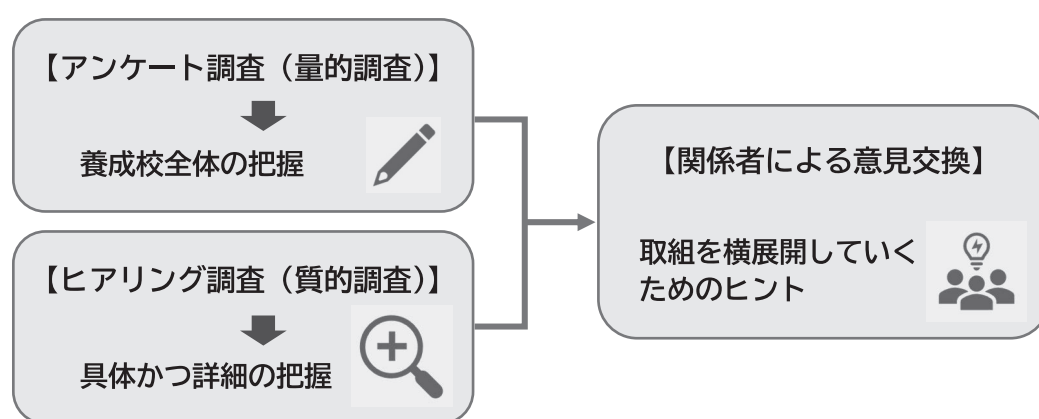


本年度は、介護福祉士養成校において、「根拠に基づく介護実践」の教育・授業がどのように行われているのか、LIFEを活用した介護過程実践の視点を介護福祉士養成校の「根拠に基づく介護実践」の教育・授業にどのようにコミットさせられるかを明らかにする。その上で、教育や授業の事例を見える化し、養成校において共有し、介護福祉士養成校における「根拠に基づく介護実践」の教育・授業の充実・深化を図ることを目的とする。

2 本調査研究の枠組みと調査研究方法

本調査研究では、根拠に基づく介護実践を教育するための取り組みや工夫、ツールや指標の実態を学校種別(教育課程別)に把握・分析するとともに、LIFEの取り組みを介護過程教育に取り入れることについて、その可能性や具体的な教育・授業例、留意点、工夫点などを把握することを目的に、【アンケート調査(量的調査)】及び【ヒアリング調査(質的調査)】を実施した。

また、これらの結果を踏まえ、LIFEの取り組みを介護過程教育に取り入れることに対する課題、課題解決のための取組や今後の可能性等について、【関係者による意見交換】の場を設け、取組を横展開していくためのヒントについての要点把握を行った。



次ページ以降では、【アンケート調査(量的調査)】、【ヒアリング調査(質的調査)】、【関係者による意見交換】について、その概要を記載する。

用語についての留意点

- ✓ 本調査研究では、介護福祉士養成校を調査対象としている。このことを背景に、アンケート調査の記述回答、ヒアリング調査や意見交換会における発言において「生徒」「学生」、「養成校」「養成施設」、「学習」「学修」などの表現がみられる。
- ✓ アンケート調査の記述回答、ヒアリング調査、意見交換会の結果においては、回答者がおかれている立場と考えを尊重し、表記は原文のとおりとしている。
- ✓ アンケート調査の質問文及びまとめ、ヒアリング調査のまとめ、本調査研究のまとめと考察においては、「学生」「養成校」で統一している。

(1) アンケート調査（量的調査）の実施概要

根拠に基づく介護実践を教育するための取り組みや工夫、ツールや指標の実態を学校種別（教育課程別）に把握・分析するとともに、LIFEの取り組みを介護過程教育に取り入れることについて、その可能性や具体的な教育・授業例、留意点、工夫点、課題などを把握するために、介護福祉士養成校を対象にアンケート調査を実施した。

本調査は、後述(2)ヒアリング調査(質的調査)のスクリーニングを兼ねるとともに、具体的事例としてまとめる際のポイント(視点)の論拠として活用することも目的としている。

本調査の結果データは、第2章に掲載している。

●名称：根拠に基づく介護実践を推進する教育に関する調査

●対象：介護福祉士養成校（全数調査）

●配布方法：郵送により送付

●回収方法：郵送、ウェブフォーム、エクセルダウンロードから回答者が選択し回答

●調査期間：令和5年10月18日～11月15日

締切後到着の調査票は対応が可能な範囲で集計の対象とした。

礼状兼督促のはがきを2回送付（10月30日、11月7日）した。

●サンプルと回収：	対象数	無効※	有効対象	回答数	回答率
福祉系高等学校	112	1	111	59	53.1%
専門学校	190	1	189	44	23.2%
短期大学	48	0	48	8	16.6%
4年制大学	59	1	58	10	17.2%
合計	409	3	406	121	29.8%

無効※：募集停止や閉鎖等の連絡があった養成校

●調査協力：全国福祉高等学校長会様、日本介護福祉士養成施設協会様に、名簿提供についてご協力をいただいた。

●調査における配慮・留意点

- ・LIFEについて知っていただくための説明書を調査票に添付した。
- ・①調査で得られた内容は安全措置を講じてデータの漏洩がないように管理・保管し、施設や回答者が特定できないよう統計処理すること、②調査への拒否があってもそのことで不利益が生じることはないこと、③目的外に利用しないこと、④回答にあたって合理的配慮が必要な場合は個別に対応する旨を明記した。

(2) ヒアリング調査（質的調査）の実施概要

アンケート調査の内容をより具体かつ詳細に把握するために、ヒアリング調査を実施した。ヒアリング調査の対象は、アンケート調査結果及び検討委員会での検討の結果をもとに有意に抽出をした。

本調査の結果データは、第3章に掲載している。

●対 象：6か所の介護福祉士養成校（有意抽出）

●ヒアリング日時・対象・実施者：

日時		対象	実施者
1	令和5年 12月5日（火） 14：00～	日本福祉大学 久世淳子先生 武田啓子先生 鈴木俊文先生	鈴木真智子氏（現地） 藤野裕子氏（現地） 相澤京美（現地） 下川玲子（現地）
2	令和6年 1月12日（金） 13：30～	和歌山YMC A国際福祉 専門学校 嶋田直美先生	品川智則先生（リモート） 鈴木真智子氏（リモート） 藤野裕子氏（リモート） 相澤京美（現地） 下川玲子（現地）
3	令和6年 1月15日（月） 13：00～	淑徳大学短期大学部 木田茂樹先生	野田由佳里先生（現地） 金山峰之氏（現地） 下川玲子（現地）
4	令和6年 1月16日（火） 8：50～	埼玉県立誠和福祉高等学校 中嶋芳乃先生 栗原真理江先生 大久保理沙先生	真田龍一先生（現地） 鈴木真智子氏（リモート） 金山峰之氏（現地） 下川玲子（現地）
5	令和6年 1月17日（水） 14：45～	大阪人間科学大学 時本ゆかり先生 水谷真弓先生 玉井美香先生	二瓶さやか先生（リモート） 鈴木真智子氏（リモート） 藤野裕子氏（リモート） 相澤京美（現地） 下川玲子（現地）
6	令和6年 2月21日（水） 13：00～	西九州大学 加藤稔子先生	井口健一郎先生（現地） 武田卓也先生（現地） 藤野裕子氏（リモート） 金山峰之氏（現地） 相澤京美（現地） 下川玲子（現地）

(4) 検討体制

以下の学識経験者、職能団体、事業者団体からの推薦者で構成される検討委員会を設置し、調査に関する方法及び内容の検討・精査・修正等に関する助言、調査結果を踏まえた今後の提言について検討を行った。

検討委員会開催は全てリモート実施とした。

検討委員会委員（50音順）

役職	所属等	氏名（敬称略）
委員	社会福祉法人小田原福祉会 理事 特別養護老人ホーム潤生園 施設長	井口健一郎
委員	山梨県立大学 人間福祉学部 准教授	伊藤 健次
委員	公益社団法人日本介護福祉士会 副会長 社会福祉法人不動園天ヶ瀬苑デイサービスセンター 施設長	柏本 英子
委員	全国福祉高等学校長会 事務局長	真田 龍一
委員	東京 YMCA 医療福祉専門学校 介護福祉科 専任教員	品川 智則
委員	日本福祉大学 健康科学部 教授	武田 啓子
委員長	大阪人間科学大学 人間科学部 教授	武田 卓也
委員	十文字学園女子大学 人間生活学部 准教授	二瓶さやか
委員	公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会 理事 聖隷クリストファー大学 社会福祉学部 教授	野田由佳里

オブザーバー

所属等	氏名（敬称略）
厚生労働省 社会・援護局 福祉基盤課 福祉人材確保対策室 介護福祉専門官	鈴木真智子
厚生労働省 社会・援護局 福祉基盤課 福祉人材確保対策室 介護人材定着促進専門官	藤野 裕子

なお、調査実施及び調査結果の分析については、金山峰之氏（ケアソーシャルワーク研究所）に協力をいただいた。

(5) 調査研究の経過

経過	内容
第1回検討委員会 令和5年8月28日(月) 16:00～ zoom	1. 挨拶 2. 委員紹介 3. 協議事項 (1) 令和5年度社会福祉推進事業 ・調査研究事業概要について ・スケジュールについて (2) アンケート調査について (3) その他
アンケート調査の実施 令和5年10月18日～11月15日	郵送配布 紙面・ウェブフォーム・エクセルによる回答
第2回検討委員会 令和5年11月28日(火) 16:00～ zoom	1. アンケート調査結果のその時点でのご報告 2. ヒアリング等候補先の検討と決定 3. ヒアリングガイド案検討 4. 座談会企画案検討 5. その他(今後のスケジュール等)
ヒアリング調査の実施1 令和5年12月5日(火) 14:00～	日本福祉大学
ヒアリング調査の実施2 令和6年1月12日(金) 13:30～	和歌山YMCA国際福祉専門学校
ヒアリング調査の実施3 令和6年1月15日(月) 13:00～	淑徳大学短期大学部
ヒアリング調査の実施4 令和6年1月16日(火) 8:50～	埼玉県立誠和福祉高等学校
ヒアリング調査の実施5 令和6年1月17日(水) 14:45～	大阪人間科学大学
第3回検討委員会 令和5年1月22日(月) 16:00～ zoom	1. ヒアリング調査進捗報告について 2. アンケート調査結果について 3. 報告書構成案について
ヒアリング調査の実施6 令和6年2月21日(水) 13:00～	西九州大学
第4回検討委員会 令和6年2月19日(月) 16:00～ zoom	1. ヒアリング調査結果の検討 2. 座談会について 3. その他
関係者による意見交換(座談会) 令和6年3月1日(金) 18:00～ zoom	LIFEの視点・要素を活用した介護過程教育 への期待～根拠に基づく介護実践につながる介 護過程教育を推進するために～
第5回検討委員会 令和6年3月12日(火) 16:00～ zoom	1. 報告書(案)について 2. その他

3 調査研究の総括

(1) アンケート調査（量的調査）のまとめ

アンケート調査の構成としては、「①現在の介護過程教育における教員の認識や工夫、ツール・指標」「②介護過程教育における LIFE の位置付けや実際、認識等」「③介護過程教育において LIFE を用いることの課題」の大きく 3 つとなっている。

それぞれの結果の概要について、②③は表を用いて総括する。調査結果の詳細については、第2章に掲載している。

①現在の介護過程教育における教員の認識や工夫、ツール・指標

■介護過程について(Q7)

介護過程の定義や意義・目的について尋ねたところ、「本人らしい生活・人生のため」「利用者のための実践」といった利用者にとって必要なものであるという認識を示す回答が多かった。次いで、「介護福祉の原則の実践のため」「専門職としての支援のため」といった、専門職として介護福祉の原則や理念を実践するものであるという認識が示された。

■根拠に基づくアセスメントについて(Q8)

アセスメントとは情報収集、解釈・関連付け・統合化、課題の明確化であるといった回答が多く、一定の共通認識が浸透していることがわかった。その中で多角的な視点や専門的知識技術を用いること、科学的根拠に基づくことや説明できるといった点の重要性が認識されていた。

アセスメントの教育では、既存・オリジナルを含むアセスメントシートや、実習受け持ち利用者や卒業生の事例などを用いるといった回答が多く、また ICF を筆頭に、各種指標などを用いながら教育を行っているという回答がみられた。また、介護過程最初のステップでつまづかないよう、学生同士や教員といった身近な人を題材にした情報収集や、段階的に情報量を増やすといった工夫、学生同士の対話や意見交換から他者との違いを自覚できるように工夫し、多角的に物事を捉える力を養うプログラムを取り入れているといった回答がみられた。

■根拠に基づく計画について(Q9)

計画とはアセスメントから得られた結果が反映されているものであり、利用者の望む生活への道筋が反映されていることや、チームで統一的なケアを行うためのもの、説明責任を果たす実際的手段であるという認識がみられた。

計画の教育ではアセスメント段階で精緻な取り組みを行い、計画として精度を高めること、具体的に達成可能な目標を設定すること、計画が利用者のためのものであるという意識付けをす

ることなどに重点が置かれていた。これに加え、言語化に苦手意識を持つ学生が計画を書き表せるよう、動画や定型文の例示、5W1Hのフレームワークなどの手順によって取り組みやすい工夫がなされていることがみえてきた。

■根拠に基づく実施について(Q10)

実施とはアセスメントや計画のプロセスを引き継ぎ、実際に行われることであり、チームで統一して行えるものといった回答が多くあった。これに加え、実際の利用者の状態に応じて介護福祉の原則や視点・技術に基づいて行うことや、実施内容を記録・評価して計画を修正していく次のステップにつなげるプロセスとしての認識がみられた。

実施の教育では、学内でのロールプレイや事例検討などがあげられたが、多くは実習を通して実際の利用者への関わりをとおして学びをすすめているという回答が多かった。そのため、教科書や動画教材などを用いつつも、比重としては実習記録や実習指導者の助言など実習施設で得られるものを教材としている傾向がみえてきた。

■根拠に基づく評価について(Q11)

評価とは計画に記した目標の達成度を明らかにするという回答が最も多く、それらは立案した評価基準に基づいて行われるという回答と連動していた。他には、アセスメントから続く支援プロセスの妥当性の確認、記録や利用者の反応を踏まえて計画の見直しなど、次の介護過程へとつなげるものであるという認識がみられた。

評価の教育では、実習で実施した事柄を踏まえて、実習中や実習後に振り返ることで評価を体験させているという回答が多かった。その中では、主観的で短絡的な評価にならないよう、客観的な情報と評価基準を照らし合わせて総合的に評価させるといった回答が多かった。また、LIFE に関連する評価項目など、様々な評価指標が用いられているということも結果からみえてきた。

②介護過程教育における LIFE の位置付けや実際、認識等

LIFE を介護過程教育の中でどのように活用できるかを尋ねたところ(Q15)、介護過程の各プロセス段階において根拠ある介護過程実践のために活用できること、介護現場における標準的な実践を理解することの促進につなげられる可能性などがあげられた。

一方で、LIFE への理解やイメージが持てないという理由から、具体的に教育の中で活用することは想定できないという回答も一定数みられた。

大項目	中項目
根拠ある介護過程実践のための活用	介護過程の各段階における根拠付として活用
	情報収集の手段として活用
	実習中の取り組みの評価に活用
	他職種連携の理解につながる
標準的な実践の取り組みの理解促進	現場の実践事例や標準事例として活用
	現場の実践を知る一助となる
	介護技術コンテスト等の事例として活用
活用の想定は難しい	想定できない

次に LIFE を授業で取り入れる効果について尋ねたところ(Q16)、「根拠ある介護過程実践に寄与する」といった回答が最も多く、次いで「養成校と現場のつながりが強くなる」という回答が多かった。学生が実際の現場実践をイメージできていないという課題は一定程度あるようで、養成校で習ったことと実習における実際とのギャップを埋めてくれる可能性が LIFE にはあると考える回答があった。また、実習指導巡回時に教員と学生、学校(教員と学生)と実習施設の間に共通言語ができることで、養成校と実習施設の指導に一貫性が生まれる可能性が感じられるという回答があげられた。

さらに、養成校を卒業して現場で働くことになった時に役に立つこと、介護現場における介護の質が高まるなどの声が聞かれた。

大項目	中項目
根拠ある介護過程実践に寄与	科学的根拠に基づく介護実践の重要性に気付ける
	より広い視野でアセスメントができる
	根拠ある計画立案につながる
	根拠に基づいた評価につながる
	介護過程の理解につながる
	学生の視点や知識に寄与する
養成校と現場のつながりが強くなる	実際の現場の実践事例をイメージしやすくなる
	学校と実習先の指導に一貫性が生まれる
	現場に出た際に役立つ
介護現場への寄与	多職種チーム連携につながる
	現場の介護の質が高まる
その他	介護の専門性につながる

学生が LIFE を学ぶ必要があると考える理由については(Q18)、介護過程教育における LIFE の活用は総じて学生にとって将来的に必要なものであり、専門性を高め、根拠ある介護過程実践につながる可能性があるという認識が教員の中で一定数あった。

大項目	中項目
将来的に必要なものだから	現場で実際に導入が進むものは理解しておく必要があるため
	介護現場への就職において必要になってくるため
	現場と養成校で同じものを理解しておくべきだから
専門性を高め、根拠ある介護過程実践につながるため	介護福祉士としての専門性を高めていくために必要だから
	幅広い視点や気づきの機会につながるため
	根拠に基づいた介護実践を行う上で必要だから
その他の必要性	学びの意欲向上につながるため
	ICT の活用、主体的に情報を入手する経験は必要であるため
	ケアの差が生じにくく、介護の質にばらつきがなくなるため
	国が推進しているから
	ICT の活用は今後必要な社会になっていくため
	介護を学ぶ上では身につけるべき考え方だから
	実践現場の全国的なアクションを理解することは介護福祉士の使命感育成につながるため

③介護過程教育において LIFE を用いることの課題(Q17)

【授業展開の課題】という点においては LIFE の特徴を理解したカリキュラム構成への課題が多くの教員からあげられた。LIFE に対する教員の理解が十分とはいえない中で、既存カリキュラムと調整しながら、かつ限られたコマ数であえて活用していくということについてはハードルを感じている意見がみられた。

また、LIFE を授業で活用する場合、現状のシステムは介護事業者向けとなっており、養成校で使えるものではないこと、コンテンツや事例が入手しにくいこと、中にはインターネット環境などの整備にハードルがあるという回答もあった。

大項目	中項目
LIFE の特徴を理解したカリキュラム構成	LIFE の理解が必要
	既存カリキュラムと調整しながらの導入検討
	時間数が限られている

大項目	中項目
学びの環境に関する課題	理解を深める事例や教材が必要
	学びの環境整備の課題
学ぶ力	学生の学ぶ力
	LIFE 以外の情報も活用すること
その他	個人情報の取扱い

授業への導入に際しての【教員側の課題】としては LIFE 自体の理解や利用経験がないこと、LIFE を知る機会や時間がないという課題に多くの回答があった。介護現場の実務経験がまったくない、長年実践から離れているなど、教員の経験に起因する課題もあげられていた。

そのほか、学内で他教員、他科目との連携といった学内の課題などもあげられていた。

大項目	中項目
LIFE の実際を知り理解すること	LIFE に関する知識、理解不足
	LIFE の実用が未経験であること
	LIFE を知る機会や時間がない
	導入現場を理解する必要
学内の調整等における課題	教員間での連携、共通理解
	カリキュラム等の検討
教員の能力や経験値	教員の能力や経験値

【学生の状況による課題】としては、習熟ペースが異なる学生や、多様な背景を持つ学生の学びの環境の整備、支援に関する課題が多く回答されていた。今現在の教育内容にさらに新しいことを導入することが、学生の負担となるという不安もあげられていた。

また、LIFE の導入によって学生の考える力が育たなくなるといった意見や、学習環境や教材の整備が進んでいないことも課題としてあがっていた。

大項目	中項目
学生の能力に関する課題	習熟ペースの差への配慮
	多様な背景を持つ学生への配慮(留学生など)
	根拠ある介護過程実践に必要な基本的力
	利用者の思いなどを把握する力
	習得に要する時間的課題
	学生の考える力が育たない危険

大項目	中項目
学び促進のための環境 的課題	学びの環境の課題
	習熟促進のための教材

最後に LIFE を介護過程教育に取り入れていくにあたっての【その他の課題】について尋ねたところ、LIFE 自体が養成校や現場で浸透し、様々な事例や教材が必要であるという回答がみられた。また、LIFE を介護福祉士の業務や介護過程の中でどのように位置付け、取り入れていくかという大きな意味でのコンセンサスが十分でないこと、LIFE のシステムやフィードバックの質の向上などの必要性が課題としてあげられていた。

中項目
LIFE が広く認知され浸透すること
介護福祉士の業務と LIFE のかわり
教授するための教材
具体的な事例
実習先との連携
養成校に内在する様々な課題
その他(フィードバック内容の精査、事例の個人情報保護について等)

(2) ヒアリング調査（質的調査）のまとめ

ヒアリング調査の結果は、「①介護過程教育の課題等」「②介護過程の授業の工夫」「③LIFEに関する教育の現状」「④教育にLIFEを活用する効果」「⑤LIFEを教育に活用するにあたっての課題」の5つでまとめている。

以下では、それぞれの結果の概要について総括する。調査結果の詳細については、第3章に掲載している。

①介護過程教育の課題等

介護過程教育の課題等として、ヒアリング対象となった養成校が共通してあげている課題はアセスメント及び評価に関する課題である。

アセスメントに関する課題として「アセスメントの理解にバラつき」「できる・している活動が曖昧」「情報の解釈、関連付け、統合化が苦手」、評価に関する課題として「評価に関する教授が不十分」などがある。また、他科目の知識応用の課題として「他科目の知識を介護過程につなげるのが難しい」、説明・言語化の課題として「説明できる力が弱い」などの課題があげられている。

上記は、過去の介護過程実践にかかる調査研究※において明らかにされた課題とも共通するものである。(※<https://www.comon.jp/dl/project.html>)

大項目	中項目
アセスメントの課題	アセスメントの理解にバラつき
	支援やサービスを考えがち
	心身機能・身体構造の理解が苦手
	優先順位が決められない
	できる・している活動が曖昧
	できる活動が難しい
	情報の解釈、関連付け、統合が苦手
計画・実践の課題	収集した情報を計画に生かせない
	情報を活動・参加につなげる力が弱い
	レクリエーションに偏る
評価の課題	評価に関する教授が不十分
説明・言語化の課題	説明する力が必要
	言語化が苦手
他科目の知識応用の課題	他科目の知識を介護過程につなげるのが難しい
事例教材不足	介護過程の事例教材不足
その他	リアル事例で情報や知識が使えない
	数値を読み解く力
	リーダー教育

②介護過程の授業の工夫

介護過程教育における授業の工夫や留意点等について、ヒアリング対象の養成校では環境整備や指導方法の工夫など、様々な取り組みがなされていた。教員体制(専任、複数体制)を整え、事例の工夫、視覚的な理解促進、個別指導とグループワークの効果的展開など、一人ひとりの底上げを図る丁寧な教授がなされていた。

大項目	中項目
教員体制	教員体制(専任、複数体制)
事例の効果的活用	実際の事例
	実習のフィードバック
	移動介助などの理解しやすい事例
	事例の工夫(他科目と同じ事例の利用等)
	食事と移動の事例
関連図作成による構造的理解	関連図作成による理解
文章化による理解	文章化による理解
指導方法	アセスメントの順番を工夫
	繰り返しの学び
	個人・グループワークでの気付き
	個別指導
その他	チェックリスト

③LIFEに関する教育の現状

LIFE に関する教育の現状については、授業の中で制度の紹介、導入の目的を説明をするにとどまっているという状況がある一方で、「介護現場の人が授業で説明」するなど現場との連携による先進的な取り組みがみられた。

また、「副教材でLIFEをとりあげている」という動きもみられた。

大項目	中項目
制度や全体像の理解	授業の中で触れている
	副教材でLIFEをとりあげている
介護現場と連携	介護現場の人が授業で説明

④教育にLIFEを活用する効果

教育にLIFEを活用する効果は、ヒアリング対象校から、多くの前向きな意見があげられた。まずは①であげた課題に対応する内容として、アセスメントへの寄与、評価への寄与がある。標準や明確化という言葉に表れているように、見える化された共通の視点を有することがアセスメントや評価に寄与するのではないかという期待となっている。

さらには教育全体への効果として、「LIFE が現場と教育の共通ツール」になり、現場との連携を進めるなどにも言及する意見が出されている。

大項目	中項目
アセスメントへの寄与	アセスメントの向上
	アセスメントポイント明確化
	できる・している活動の明確化
	ADL を指標化
	情報の解釈の補完
	情報を結び付ける教材となる
	活動、参加の向上のための視点
	情報の解釈を補填
	情報の見える化
	情報収集のツール
	情報収集の標準化
評価への寄与	具体的な評価につながる経験
	評価しやすい
	評価に LIFE を活用
PDCA への寄与	アセスメント～評価の一連性
変化への気付き、支援の 変更への寄与	変化をキャッチする
	気付きやすい、理解しやすい
	支援を見直すきっかけ
	リスクの予測
教育の全体への寄与	利用者情報の共有により教育の場で指導しやすくなる
	LIFE が現場と教育の共通ツール
	いろいろなデータを見る
	多文化でも共有しやすい
	バックグラウンドが違う教員の教育の均質化
	客観的に伝わりやすい
	具体的イメージがつきやすい
	文章化による理解につながる
	思考力の向上
	根拠につながりやすい

大項目	中項目
介護過程をよりよくするツール	LIFE を意識すると利用者主体につながりやすい
	数字で測りやすいデータを効果的活用
	介護過程をよりよくするツール
多職種連携	多職種との連携に必要な
チーム形成	チーム形成につながる
その他	利用者の生活の質の向上
	生産性の向上

⑤LIFEを教育に活用するにあたっての課題

LIFEを教育に活用するにあたっての課題については、「LIFE によるデータの蓄積と介護過程教育内容の整理」や「数字では表せない内容との精査」(QOL やご利用者の意向等)など、LIFEの特徴を生かしつつ、それを既存の介護過程教育にどう生かしていくのかという整理が不十分であること、さらには将来的に介護福祉士が「リーダーとして LIFE を使いこなす教育」が課題としてあげられた。

その前提として、そもそも教員が LIFE に触れたことがない、十分に理解できていないという指摘、LIFEは介護現場に広がっていないのではないのか、実習担当者が理解できていないのではといった介護現場との連携の課題、介護過程教育に生かせるLIFE事例確保へのハードル、LIFEに関連する教材開発も課題としてみえてきた。さらに、現場で LIFE のフィードバックが広がった際には、フィードバックを具体的にどのように介護過程教育にコミットさせていくかという点も今後の課題としてあげられていた。

大項目	中項目
教育内容	LIFE ありきという認識を助長させない
	使用している書式の見直し、再考が必要
	データを読む力をどうつけるか
	数字では表せない内容との精査
	介護過程と LIFE で必要な情報が一致しない
	LIFE の蓄積と介護過程教育内容の整理
	リーダーとして LIFE を使いこなす教育
現場と養成校の連携	LIFE の目的を現場と教員が共有
	現場・介護実習との連携
教員の理解	LIFE を活用する教員の力量
	教員の共通認識
事例	LIFE の個人フィードバックの活用
	実際の LIFE のシミュレーションが必要
	LIFE の具体的事例が必要

大項目	中項目
教材	LIFE を用いた教材が必要
	動画教材が必要
	副教材
	有効活用のための情報共有のあり方
その他	導入効果の明確化が必要
	その他

(3) 本調査研究のまとめと考察

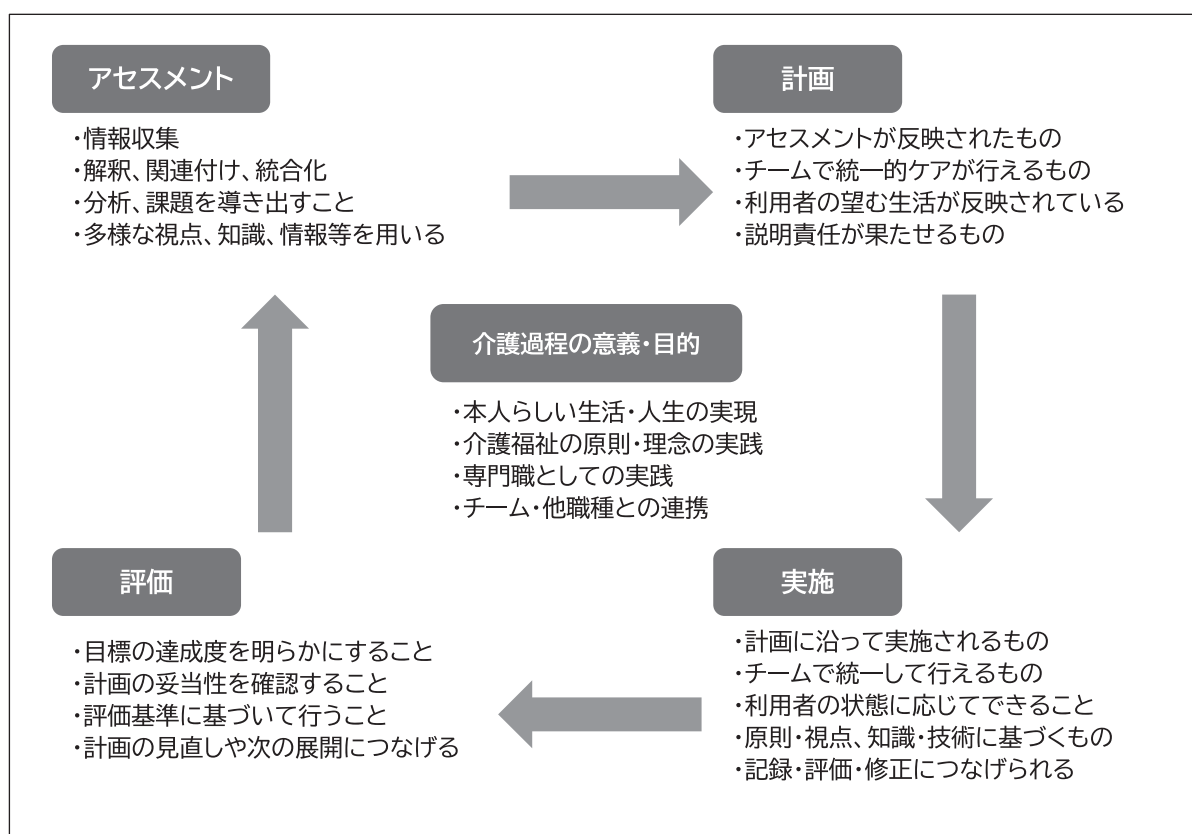
①教育現場における介護過程と介護過程教育の現状と課題、取り組みについて

介護過程が介護福祉士養成教育の正式なカリキュラムとして位置付けられて以降、教育現場では多様な取り組みと創意工夫を行い、学生への指導が行われてきており、LIFE という新たなシステムが介護現場に導入される以前から、根拠に基づく科学的介護実践のベースとなるのは介護過程だと位置付けられてきた。

本調査研究では、介護過程は利用者が望む暮らしの実現、そして利用者が社会の一員として尊厳と自立した日常生活を享受するための手段であり実践であり、介護福祉士が専門職である所以の一つとして教育現場では受け止められていることがみえてきた。

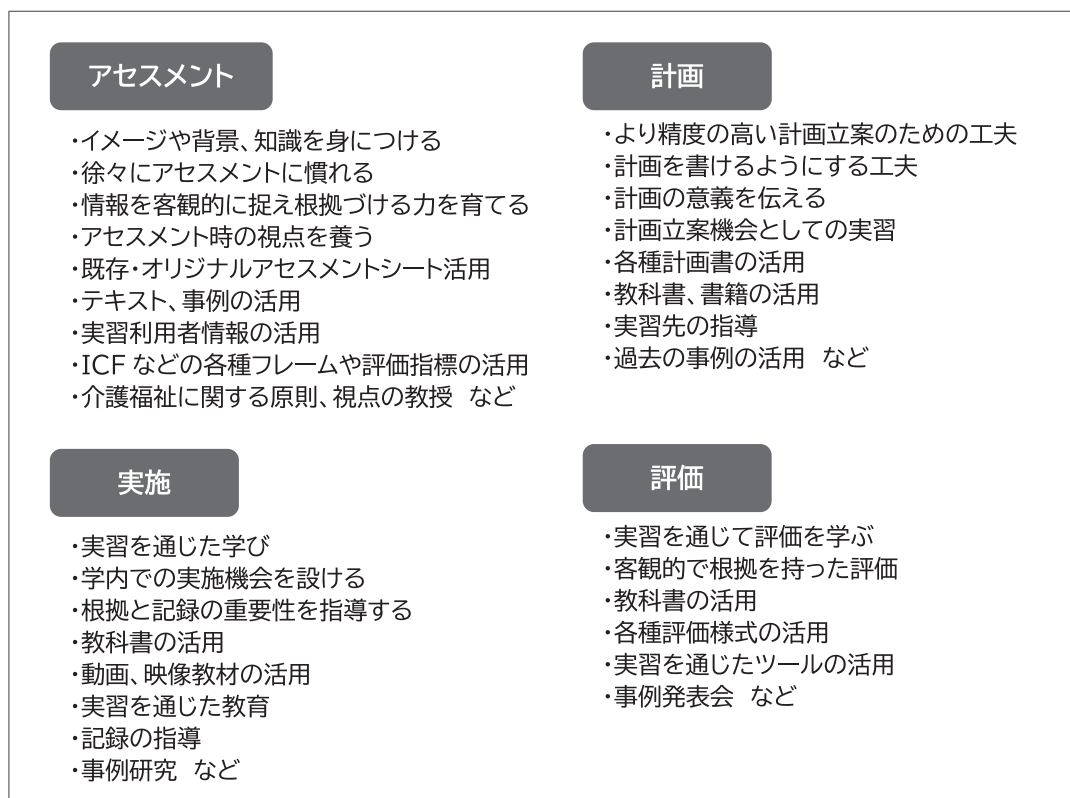
まず、介護過程とは何か、また介護過程を構成する各プロセス段階の意義とは何かについては下図のとおり、概ね共通の認識が教育現場に浸透していることが抽出された。こうした教員の共通認識は専門職養成における教育の標準化として重要な点である。

介護過程教育における介護過程の認識



本調査研究では、介護過程を介護福祉士の重要な専門性の柱であると位置付け、他の専門職種の教員や外部講師、実習施設等と連携しながら、様々な教授の工夫や取り組みを行っている様子が伺えた。こうした取り組みの工夫や手段のまとめについては下図のとおりである。

介護過程教育における教育の工夫や手段

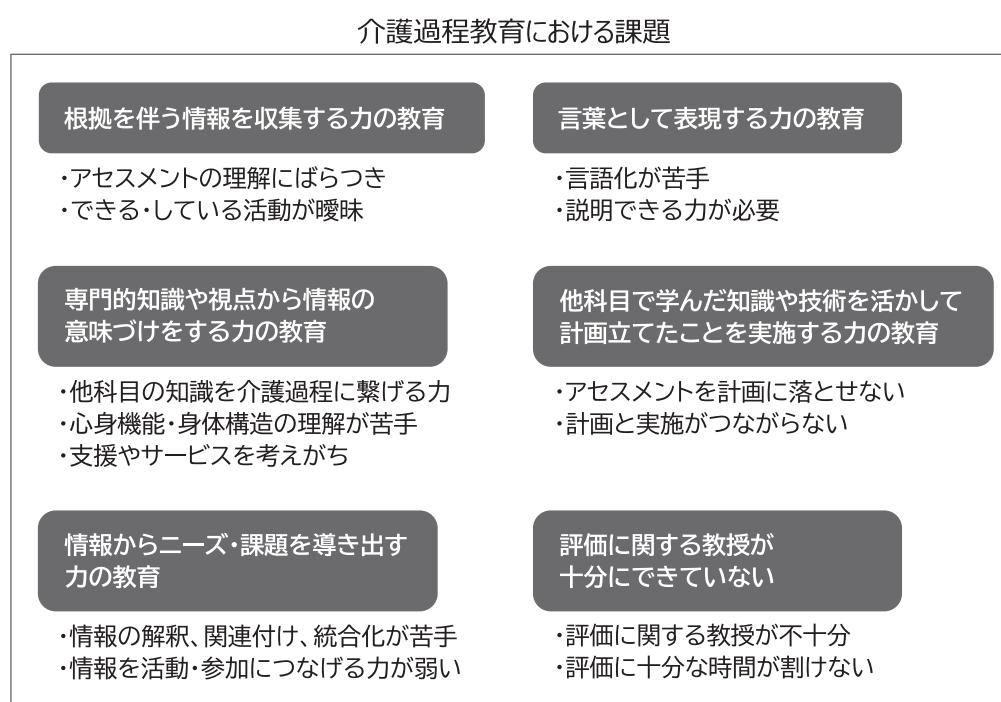


介護過程最初のステップであるアセスメントでは様々な工夫や取り組みがあげられていたこと、実習と密な連携を必要とする実施や評価での工夫など教育現場での苦心が伺えた。特にアクティブラーニングの取り組みへの工夫は調査の各所にみられた。また、ICT を活用して、これまでの手書きから、パソコンやタブレットなどを使いながらより良い学びの環境を整えて、習熟効果や指導時間の確保に努める取り組みも伺えた。これらの工夫や取り組みは、現在の教育や現場実践の実態に則したものであり、学生の介護過程に関する学びの環境をより良いものに行っていると考えられる。

一方、こうした工夫や取り組みの背景には、より質の高い教育実践を目指すということに加えて、以下のような課題への対応という面もあると考えられる。

下図は本調査研究全体から見えてきた、介護過程教育における課題をまとめたものである。課題に通底していることは、習熟ペースや多様な背景を持つ学生に対して、教員や学校側がより一層の環境整備や創意工夫が求められているという課題である。介護過程という介護福祉士の専門性の根幹を成すものの習得には、他科目や実習など養成カリキュラムの知識技術、倫理や学びを導入し、かつ継続的な反復トレーニングが求められる。

根拠に基づく介護実践を推進していく上でも、こうした課題やそれに対する各養成校の取り組みや成功例が広がり、共有されることが望まれる。



②介護過程教育現場における LIFE の活用効果について

ここまで、介護福祉士養成校における介護過程教育における取り組み・工夫と課題について見てきた。ここからは、根拠に基づく介護実践を促進する上で、介護過程教育に LIFE を活用することの効果や想定される価値、活用にあたっての課題について整理を行う。

次の図は本調査研究で得られた介護過程教育現場に LIFE を活用する効果をまとめたものである。これらからは先にあげられていた、介護過程教育や養成校の内在的な課題に向き合う上で一定の効果が期待されることが見えてくる。

介護過程教育に LIFE を活用する効果

アセスメント ・アセスメントの向上 ・アセスメントポイント明確化 ・情報収集の標準化 ・できる・している活動の明確化 ・活動、参加の向上のための視点 ・情報の解釈を補填できる可能性 ・考察力が向上する ・データを読むことに慣れる ・情報の見える化 ・情報を結びつける教材となる ・数字で測りやすいデータを効果的活用 ・根拠と LIFE を関連付ける など	教育の方法や質 ・バックグラウンドが違う教員の教育の均質化 ・利用者情報の共有により教育の場で指導しやすくなる ・多文化でも共有しやすい(外国籍の学生) など
PDCA ・アセスメント～評価の一連の流れ ・評価の視点が判りやすい ・評価に LIFE を活用できる ・具体的な評価につながる経験 ・変化をキャッチする ・支援を見直すきっかけ ・記録を補填するツール ・リスクの予測 など	学生への寄与 ・就職以降の将来に必要なもの ・専門性を高める など その他 ・根拠ある介護過程実践のための活用 ・標準的な実践の取り組みの理解促進 ・活用の想定は難しい ・多職種との連携に必要 ・生産性の向上の視点を養える ・利用者の生活の質の向上につながる ・養成校と現場のつながりが強くなる ・現場実践への寄与 など

■アセスメント

介護過程教育の課題として最も多かったアセスメントに対して、LIFE の活用は多くの期待が寄せられていた。

ヒアリング調査において LIFE について尋ねると、情報収集対象である各評価項目や指標を真っ先に想起する教員が多かった。LIFE の各評価項目や指標は学生が利用者の情報収集を行う際の収集ポイントになったり、情報の精度を向上させることに寄与することが期待されていた。また、こうしたある程度定量化される情報が増えることは、その後に続く解釈・関連付け、統合化に進む上で取り組みやすくする効果があるとする声が多かった。

これまで定性的な情報に偏ってしまいがちであったり、ICF のフレームに収めるまではできても、それらの情報を結びつけることが苦手だった学生も、見える化された具体的な視点で情報を評価できるようになり、根拠に基づく介護に一步近づける可能性が見出された。

一方で、利用者情報を数値化することや ADL など他職種の視点に偏重することへの危惧についても意見があった。介護福祉士の専門性は利用者の QOL やその人の望む暮らしに寄与するものであり、こうした専門性や独自性が失われるという懸念である。しかし、利用者の QOL 向上のために、定量的に得られる情報を適切に介護福祉士の専門性に引き寄せて活用していく

べきであるとする意見もあり、教育現場における LIFE への期待と懸念、教育での実際的な活用のあり方については今後も議論していく必要がある。

ヒアリング調査や授業視察では、学生の声として、LIFE の項目や評価基準がもたらす価値は半ばゲーム感覚のように情報を組み合わせていくフレームワークの要素があるようで、アセスメントという難しいステップを楽しいものに変化させているという話もあった。定性的な情報以外の情報を効果的に活用し、学生の苦手意識を解消するという意味でも LIFE の活用は意義があるといえる。

■PDCA

介護過程ではアセスメント、計画、実施、評価という一連の PDCA サイクルが展開されることが求められ、これらの一貫性は重要である。調査の中では「せっかくアセスメントで導き出したことが計画に落とし込めない」「計画立案した介護実践ではなく、自分がその時できることを場当たり的に実施してしまう」「評価基準が曖昧なため、計画と実施・評価がつけられない」といった課題の声があった。こうした PDCA サイクルの一貫性を担保する上で、LIFE の活用は一定の効果をもたらす可能性があると考えられる。

LIFE 関連の評価項目や評価基準が、ある程度定量的で客観的指標として用いられていることから、アセスメント段階で得た情報が、計画段階での評価基準として位置付けられたり、その後の実施での観察・情報収集ポイントとして認識され、評価段階でその項目がどのように変化、推移したかを客観的に評価することができるというものである。

また客観的な評価が可能であるため、他の学生や実習先の職員や指導者、巡回指導にあたる教員とも、共通言語として利用者情報を共有することができるという点も利点として認識されていた。

そして、学生にとっては「なんとなく利用者さんが喜んでくれた」「笑顔になった」という評価から、「このくらい改善した」と明確に自身の関わりが利用者に効果をもたらしたという実感、成功体験につながり、介護福祉のやりがいや達成感につながるという可能性もあげられていた。

このように、LIFE の評価項目のように一定の客観性を有する情報を用いることは、これまでの介護過程教育における課題を解消する可能性があると考えられる。

■教育の方法や質

ヒアリング調査から、教育現場の教員は、LIFE は科学的に信頼された評価指標に基づく客観的情報が活用されているものという認識がなされていた。そして、客観的情報が活用されるために、介護実践の標準化が一定程度進むというイメージにつながっていると考えられる。標準化は、学生に一定の模範的実践、標準的な実践とは何かを伝えるきっかけになると期待さ

れる。介護福祉士が専門職である以上、一定の標準的な実践が求められる。こうした背景が LIFE への期待となっていると考えられる。

介護実践の標準化がもたらされることは、つまりバックグラウンドの異なる教員の教育の均等化にもつながり、根拠ある介護過程実践の理解を促進することでもある。

また、標準化された介護実践や、客観的な情報は留学生など外国籍の学生にも理解しやすいものとなり、昨今の養成校が対峙しているいくつかの教育課題に効果をもたらすものだといえるだろう。

■学生への寄与

LIFE は今後現場に浸透していくものであり、また、社会はデータを用いた科学的根拠に基づく介護実践を求めてきている。このような認識も教員の中にあり、LIFE の活用がもたらす効果を学生の就職や将来に見出す意見も一定数みられた。

「現場で使われるものならば使いこなせなくてはいけない」「知っていれば就職で有利になる」といった声から、現場で必要なものは学んでおくべきという思いが伺える。また、様々なデータを活用して、介護過程を展開すること自体は学生の専門職としての力量を高めていく上で重要であり、今後はそれが当たり前になっていくという認識もみられた。現場で取り入れられるものは学生のうちから触れさせたいという思いが、教育現場にあることがわかった。

■その他

LIFE を活用した教育を受けた人材が現場に入っていくことはすなわち現場実践への寄与、利用者の生活の質の向上につながるという考えがみられた。また、共通言語がもたらすものは多職種連携や介護職チームの充実だけでなく、現場と養成校のつながりを強める効果も期待されるという意見があげられていた。

一方、LIFE 活用の効果について調査したものの、アンケート、ヒアリングともに「わからない」「想定できない」という声は少なからずあり、LIFE の理解、浸透が活用の大きな課題であることも見えてきた。

本調査研究からは、介護過程教育における LIFE の活用について様々な効果があることが明らかになった。これらの結果は、令和4年度社会福祉推進事業「科学的介護情報システム(LIFE)を活用した介護過程実践に関する調査研究事業」で得られた介護現場における LIFE を導入・運用したことによる介護過程への効果と重なるものも多々みられる。介護現場においても養成校においても、介護過程に LIFE を活用することに共通する効果が見出されたという点は大きな成果である。

②介護過程教育現場における LIFE の活用に関する課題

LIFE の活用は、現在の介護過程教育や養成校に内在するいくつかの課題に対して一定の効果をもたらすと期待されていることがわかった。しかし、LIFE の教育現場での活用については課題も多く認識されており、これらの課題に教員がどのように向き合っていくかはさらなる検討が必要である。本調査研究で得られた介護過程教育現場における LIFE の活用に関する課題については、下図のとおりである。

LIFE を介護過程教育に活用する上での課題

授業展開の課題	学生の状況による課題
・LIFE の理解が必要 ・既存カリキュラムと調整しながらの導入検討 ・時間数が限られている ・理解を深める事例や教材が必要 ・学びの環境整備の課題 ・学生の習熟ペースに応じた環境整備 ・LIFE に限らない情報も活用すること ・個人情報の取り扱い など	・習熟ペースの差への配慮 ・多様な背景を持つ学生への配慮(留学生など) ・根拠ある介護過程実践に必要な基本的力 ・利用者の思いなどを把握する力 ・習得に要する時間的課題 ・学生の考える力が育たない危険 ・学びの環境における課題 ・習得促進のための教材 ・個人情報の扱い など
教員側の課題	その他の課題
・LIFE に関する知識・理解不足 ・LIFE の実用が未経験であること ・LIFE を知る機会や時間がない ・導入現場を理解する必要 ・教員間での連携、共通理解 ・LIFE を活用した教材づくり ・知識、教授方法の確立 など	・LIFE が広く認知され浸透すること ・介護福祉士の業務と LIFE とのかかわり ・養成校に内在する様々な課題 ・実習先との連携 など

アンケート結果から、養成校の教員は LIFE について「あまり知らなかった」「知らなかった」の合計が全体で 58.7%であり、「説明できる程度」理解している割合は 6.6%にとどまっていた。介護現場でもようやく導入の途についた LIFE は、教育においては浸透していないことが明らかになった。これは本調査研究で得られた重要な知見である。

また、本調査研究から見てきたのは、単に教員が LIFE をよく知らないというだけではなく、LIFE に対する懸念など、一面的な情報によって抱いてしまう印象の影響も少なくないことである。その印象とは、利用者を評価尺度などの客観的数値で測ることで、これまで介護福祉士が大切にしてきた個別性やその人らしさといった部分が埋没してしまうことへの懸念だと考えられる。

LIFE 自体がまだ現場に浸透していない、システム自体が発展途上であるという認識が教員にある上に、教育のカリキュラムなどに盛り込まれるなどの外的動機が無い中で、主体的に LIFE の情報を集め、現行教育の中に活用していこうという積極的な対応までには至っていない。このため、LIFE に関する基本的理解が十分でないことに加え、LIFE が利用者や介護福祉士が大切にしていることを置き去りにしてしまうものであるという懸念を抱く状況にあることが伺える。このような状況においては、建設的に教育へ活用を想定することは困難だったと考えられる。

しかし、前述のように LIFE に対する多方面の期待もある。したがって、今時点では、根拠に基づく介護過程実践を促進するために、介護過程教育において LIFE をどのように活用していくかを教員や介護現場などの様々な立場の意見をもとに検討・議論していくことが重要である。教授方法の確立や教材の開発はもちろん、LIFE を活用するならば、教育現場でも LIFE を見ることができる、触ることができる仕組みをつくる必要もあるだろう。また、フィードバックの活用などを教育に取り入れていく上では、個人情報などへの留意も必要となる。

これまでの調査研究において、介護過程の各プロセス、チームケア実践、多職種連携などにおいて LIFE の活用効果が確認されていることはすでに述べたとおりであるが、これは「介護福祉士養成課程における習得度評価基準の策定等に関する調査研究事業報告書」(平成 30 年度生活困窮者就労準備支援事業等補助金社会福祉推進事業)の中で述べられている介護福祉士養成課程における習得度評価基準としてのコアコンピテンシーに通じるものでもあると言える。今後は、本来的に介護福祉教育に求められる方向性に対して、LIFE をいかに取り入れていくかについて、教員の懸念を払拭しながら、未来志向で考え、議論していくことが必要といえるだろう。

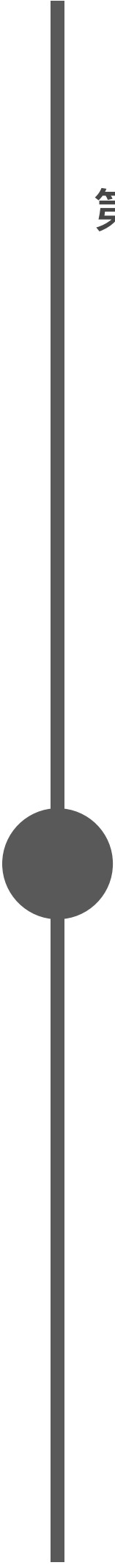
④本調査研究の課題と限界

アンケート調査は介護福祉士養成校のうち「4年制大学」「短期大学」「専門学校」「福祉系高等学校」の4種別に実施したが、回答率がそれぞれ 8.3%、6.6%、36.4%、48.8%と福祉系高等学校が最も多く、短大、大学の回収率が相対的に低くなった。回答の傾向に一定の偏りが生じたことや養成校種別ごとの傾向を把握するということとはできなかった。

また、先述したように教員の LIFE に対する理解が十分に浸透していない中であっては、本事業の探索的調査としての位置付けにも限界があった。しかしながら、今後 LIFE の成熟、介護現場への浸透と共に、教育に LIFE をどのように取り入れていくのか検討を深める必要がある。そして本調査研究で得られた LIFE 活用への期待と効果が、根拠ある介護過程実践を促進する一助になることが考えられる。

最後の課題として、本調査研究で得られた教育現場における介護過程への認識については分析していく中で「一定の共通理解」に収斂されていることがわかった。しかし、その認識につ

いて個々の回答を紐解くと、実に多様な言葉・解釈で表現されていた。介護福祉士養成校における介護過程教育の発展に向け、言葉の統一などさらに精査をすることが、根拠に基づく介護過程実践の促進を考えていく上で重要である。



第2章 根拠に基づく介護実践を推進 する教育に関する調査 (アンケート調査結果データ)

1 アンケート調査の基本的枠組み

調査の基本的枠組みと概要は、以下のとおりである。

●名 称：根拠に基づく介護実践を推進する教育に関する調査

●対 象：介護福祉士養成校（全数調査）

●配布方法：郵送により送付

●回収方法：郵送、ウェブフォーム、エクセルダウンロードから回答者が選択し回答

●調査期間：令和5年10月18日～11月15日

締切後到着の調査票は対応が可能な範囲で集計の対象とした。

礼状兼督促のはがきを2回送付（10月30日、11月7日）した。

●サンプルと回収：	対象数	※無効	有効対象	回答数	回答率
福祉系高等学校	112	1	111	59	53.1%
専門学校	190	1	189	44	23.2%
短期大学	48	0	48	8	16.6%
4年制大学	59	1	58	10	17.2%
合 計	409	3	406	121	29.8%

※無効：募集停止や閉鎖等の連絡があった養成校

●調査協力：全国福祉高等学校長会様、日本介護福祉士養成施設協会様に、名簿提供についてご協力をいただいた。

●調査における配慮・留意点

- ・LIFEについて知っていただくための説明書を調査票に添付した。
- ・①調査で得られた内容は安全措置を講じてデータの漏洩がないように管理・保管し、施設や回答者が特定できないよう統計処理すること、②調査への拒否があってもそのことで不利益が生じることはないこと、③目的外に利用しないこと、④回答にあたって合理的配慮が必要な場合は個別に対応する旨を明記した。

2 調査票(紙面)

Q2 教育年限をお教えください。() 年

Q3 生徒・学生数をお教えください。() 人
※介護福祉士養成に係る1学年あたりの定員数をご記入ください

Q4 教員数をお教えください。専任教員(必置教員) () 人
その他の教員 () 人
※介護福祉士養成に関係する学科、コースの教員数についてご回答ください

Q5 貴校(養成校)の特徴についてお教えください。
※例：在校生の属性、教育内容や方法、カリキュラム、教員体制など

Q6 この調査票にご回答いただく回答者の職位または立場をお教えください。
※記入例：学科主任、領域「介護」の主担当、介護過程の授業を担当 など
※複数で回答した場合は、代表者についてご記入ください

【B：根拠に基づく介護実践と介護過程を結びつける教育について】

Q7 貴校では、①介護過程の定義や②展開する意義・目的をどのように認識していますか。
①介護過程の定義

②展開する意義・目的

2

厚生労働省 令和5年度社会福祉推進事業
根拠に基づく介護実践を推進する教育に関する調査

●本事業は、「根拠に基づく介護実践を推進するための介護福祉士養成課程における介護過程教育のあり方に関する調査研究事業」(厚生労働省 令和5年度社会福祉推進事業)の1つとして行われる調査です。
●回答のご記入にあたって-----
※本調査は、学科主任、領域「介護」の主担当、介護過程の授業を担当されている方などにご回答をお願いしております。
※本紙による回答のほか、ウェブフォーム、エクセルによるファイル回答が可能です。
いずれか1つの方法でご回答ください。
ウェブフォーム → 
<https://x.gd/LyKYT>
エクセルダウンロード → 
<https://comon.jp/dl/kaigo.html>
※ご回答にあたり、合理的配慮が必要な場合は、回答のサポートをさせていただきます。お手数ですが、お申し出いただければ対応いたします。
※回答の 締切は令和5年11月15日(水) です。
●お問合せ先 -----
株式会社コモン計画研究所 <https://www.comon.jp/>
東京都杉並区成田東5-35-15 2F
担当：下川(しもかわ)、相澤(あいざわ)
kaigo@comon.jp 電話 03-3220-5415

↓ここから質問が始まります。

【A：貴校の基本属性】

Q1 学校種別をお教えください。(1つに○)
1. 4年制大学 4. 福祉系高等学校
2. 短期大学 5. その他
3. 専門学校 ()

1

31

※Q8～Q11は、介護過程のPDCAの流れで質問をしていきます。

Q8 根拠に基づく「アセスメント」について

(1) 根拠に基づく「アセスメント」とは何だと考えますか。

(2) 根拠に基づく「アセスメント」を教育するために工夫していることはありますか。

(3) 根拠に基づく「アセスメント」を教育するために用いているツールや指標には、どのようなものがありますか。

Q9 根拠に基づく「計画」について

(1) 根拠に基づく「計画」とは何だと考えますか。

(2) 根拠に基づく「計画」を教育するために工夫していることはありますか。

(3) 根拠に基づく「計画」を教育するために用いているツールや指標には、どのようなものがありますか。

Q10 根拠に基づく「実施」について

(1) 根拠に基づく「実施」とは何だと考えますか。

(2) 根拠に基づく「実施」を教育するために工夫していることはありますか。

- (3) 根拠に基づく「実施」を教育するために用いているツールや指標には、どのようなものがありますか。

Q11 根拠に基づく「評価」について

- (1) 根拠に基づく「評価」とは何だと考えますか。

- (2) 根拠に基づく「評価」を教育するために工夫していることはありますか。

- (3) 根拠に基づく「評価」を教育するために用いているツールや指標には、どのようなものがありますか。

- 次に「LIFEという仕組みと介護過程教育」について質問します。
- LIFEについては、同封の別紙をご参照ください。⇒ 別紙へ

【C：LIFEという仕組みが介護過程教育に与える影響】

Q12 LIFE（科学的介護情報システム）についてどのくらいご理解されていきますか。（1つに○）

1. 説明できる程度
2. だいたい理解していた
3. あまり知らなかった
4. 知らなかった

Q13 これまでの貴校の教育において、LIFEを取りあげたことがありますか。（1つに○）

1. 介護過程の授業でとりあげた
2. 介護過程以外の授業でとりあげた
→取り上げた授業をお教えてください
()
3. とりあげたことはない

Q14 Q13で「1. 介護過程の授業でとりあげた」「2. 介護過程以外の授業でとりあげた」と答えた方は、どのように取りあげたか教えてください。

Q15 介護過程の教育において、どのようにLIFEを活用することが想定できますか。

Q16 LIFEを介護過程の授業で取り入れるとしたら、どのような効果があると思いますか。

Q17 介護過程の教育において、LIFEを取り入れていく上での課題がありましたらお教えください。

①授業展開の課題	
②教員側の課題	
③生徒・学生側の課題	
④その他の課題	

Q18 LIFEの理解は学生にとって必要だと思いますか。 (1つに○)

1. とてもそう思う
2. そう思う
3. そうは思わない
4. 全く思わない

(1) Q18で回答した理由をお教えください。

D：今後の調査事業へのご協力について

Q19 今後、根拠に基づく介護実践教育として、介護過程の授業を見学させて頂くことは可能ですか。(1つに○)

1. はい → 下の★★にご記入ください
2. 学校の承諾があれば可能
3. いいえ

Q20 根拠に基づく介護実践教育についてヒアリングさせて頂くことは可能ですか。

(1つに○)

1. はい → 下の★★にご記入ください
2. 学校の承諾があれば可能
3. いいえ

Q21 根拠に基づく介護実践教育についての座談会にご参加いただくことは可能ですか。

(1つに○)

1. はい → 下の★★にご記入ください
2. 学校の承諾があれば可能
3. いいえ

★★Q19. 20. 21の「1はい」または「2 学校の承諾があれば可能」に○の場合は、以下にご記入をお願いいたします。

都道府県

養成校名

ご協力いただける先生のお名前

連絡先メール

本調査研究報告書の郵送をご希望の場合は、以下にご記載ください。

2024年4月以降に郵送させていただきます。

送り先住所

〒

お宛名

～お忙しいなか、ご協力をいただきありがとうございます～

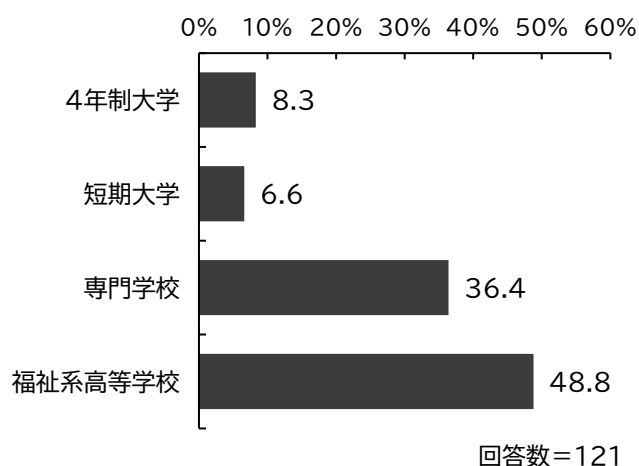
3 アンケート調査結果

3-1 回答養成校の基本属性

(1) 回答養成校の学校種別及び教育年限

Q1 学校種別をお教えてください。(1つに○)

Q2 教育年限をお教えてください。

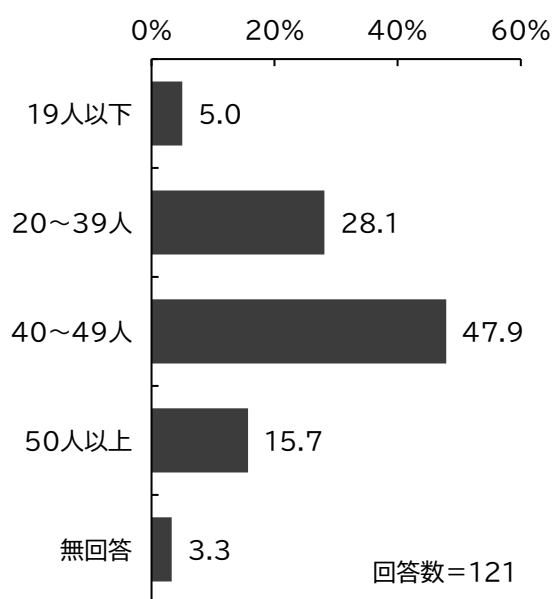


教育年限	回答数
1年	3
2年	50
3年	48
4年	12
無回答	8
合計	121

(2) 生徒・学生数及び教員数

Q3 生徒・学生数をお教えてください。

Q4 教員数をお教えてください。



教員数専任 回答数=121	
3人以下	27.3%
4人	29.8%
5人	19.0%
6人以上	19.0%
無回答	5.0%
教員数専任以外 回答数=121	
3人以下	26.4%
4~10人	29.8%
11人以上	18.2%
無回答	25.6%

3-2 根拠に基づく介護実践と介護過程を結びつける教育

(1) 介護過程の定義や展開する意義・目的に関する認識

Q7 貴校では、①介護過程の定義や②展開する意義・目的をどのように認識していますか。

①②の回答が混在していたため、下表の流れで整理している。

①介護過程の定義に記載されていた「介護過程の目的」

Q7①介護過程の定義に記載されていた「介護過程の目的」	コーディング	中項目	大項目
個々の利用者に対して、介護福祉士が利用者の生活課題を見出し、アセスメント、介護計画の立案、介護の実施、評価を行い、利用者にとって少しでもよりよい生活につなげて道筋のことである	少しでもより良い生活につなげる こと	より良い生活・ 人生の実現	本人らしい 生活・人生 のため
介護福祉職が利用者の生活上の課題を解決し、その人にとって「よりよい生活・人生」を実現していくための道筋のこと	その人にとってより良い生活・人 生を実現する		
介護福祉職が利用者の生活上の課題を解決し、その人にとってよりよい生活、よりよい人生を実現していくための道筋	その人にとってより良い生活、人 生を実現する		
介護福祉士の専門性のひとつであり、尊厳を守るために行われるもの、利用者が望む「よりよい生活、よりよい人生」を実現するために行う科学的な思考過程	尊厳を守るため 利用者が望むより良い生活・人生 を実現する		
対象者の望む生活(よりよい生活)を実現する思考・実践過程	望む生活(より良い生活)の実現		
介護過程とは、介護を必要としている利用者が望む「よりよい生活」「よりよい人生」を実現するという介護の目的を達成するために、介護の専門性にもとづき情報の収集・分析を行い、支援課題を整理し、根拠にもとづく介護を展開する支援過程	本人が望むより良い生活・人生を 実現する		
利用者の生活上の課題解決によって「よりよい生活・人生」を実現するための道筋	より良い生活・人生を実現すること		
利用者の生活上の課題を解決し、その人にとって「よりよい生活」「よりよい人生」を実現していくための道筋の事	より良い生活・人生を実現すること		
介護福祉職が利用者の生活上の課題を解決し、その人にとって「よりよい生活」「よりよい人生」を実現していくためのプロセス	より良い生活・人生を実現する		
介護福祉職が利用者の生活上の課題を解決し、その人にとってよりよい生活、よりよい人生を実現できるようにするために、全体像を把握し、その人の状態に合わせて、専門的知識、技術を活用した客観的で科学的な思考過程のこと	より良い生活・人生を実現できる ようにする		
利用者個々のニーズを導き出し、そのニーズに応じた介護の実践をおこない、よりよい生活を提供	より良い生活の提供		
その人にとって「よりよい生活」「よりよい人生」を実現していくための道筋のこと	より良い生活・人生を実現する		
利用者の生活の支援において、介護福祉職が利用者の生活上の課題を解決し、よりよい生活を実現するためのプロセス	より良い生活を実現する		
よりよい生活を実現するための道すじ	より良い生活を実現する		
利用者の「よりよい生活」「よりよい人生」の実現に向けて介護実践を展開するためのプロセス及びその技術・方法	より良い生活・人生の実現		
利用者のよりよい生活や人生を実現していくためのプロセス	より良い生活や人生を実現すること		
介護過程とは利用者が望む「よりよい生活」「よりよい人生」を実現するという介護の目的を達成するために、専門的知識・技術を活用した客観的で科学的な思考過程	利用者が望むより良い生活・人生 を実現する		
利用者の尊厳の保持、自立生活支援の観点から、利用者が望む「よりよい生活」「よりよい人生」を実現するという介護の目的を達成するために、専門知識を活用した客観的で科学的な思考過程のこと	利用者が望むより良い生活・人生 を実現する		

Q7①介護過程の定義に記載されていた「介護過程の目的」	コーディング	中項目	大項目
利用者の望む「よりよい生活」「よりよい人生」を実現するという介護の目的を達成するための専門的知識を活用した客観的で科学的な思考過程	利用者が望むより良い生活・人生を実現する	より良い生活・人生の実現	
利用者がより良い人生、より良い生活を送るために取り組む科学的思考と実践のプロセス	利用者のより良い人生・生活を送る		
利用者が望む「よりよい生活」「よりよい人生」を実現するという、介護の目的を達成するために行う専門知識を活用した客観的で科学的な思考過程	利用者が望むより良い生活・人生を実現する		
利用者のより良い人生、より良い生活に向けて取り組む	利用者のより良い人生・生活		
利用者の生活をより良くするために、客観的・科学的に介護することを目的とする	利用者の生活をより良くする		
利用者の自立の維持・向上そして利用者の望む生活の実現をするために、エビデンスに基づいた実践を行うこと	自立の維持・向上と望む生活実現	望む生活の実現	本人らしい生活・人生のため
利用者の望む暮らし、その人らしさを科学的な根拠に基づく思考過程	利用者の望む暮らし、その人らしさ		
利用者が望む生活の実現に向けて、意図的・計画的な介護を展開するプロセス	望む生活の実現		
「人間関係を築きながら対象者が望む生活を実現するために、専門的知識や技術を活用しながら生活課題を明確にし、根拠に基づく実践を示すための科学的な思考と導き出された支援を実践する過程である」と定義に授業で示すとともに、専任教員の共通認識のもとで教育にあたっている	対象者が望む生活を実現するために		
利用者が望む生活を実現するために必要な課題を解決すること	利用者が望む生活の実現		
利用者の望む生活を実現するために望ましい方法を利用者視点で考え、実践すること	利用者が望む生活の実現		
利用者の希望する生活の実現に向けて、意図的に介護を展開するためのプロセス	利用者が望む生活の実現		
利用者が望む生活を実現するために科学的思考にて、課題を展開し、介護実践する	利用者が望む生活の実現		
「利用者が望む生活を実現するために取り組む科学的思考と実践のプロセス」をいう、介護過程は、介護実践の根拠となるものであり、利用者の生活支援において、個別ケアの方向性や具体的な介護方法を示すものである	利用者が望む生活の実現		
利用者が望む生活を実現させるための科学的思考とプロセス	利用者が望む生活の実現		
利用者が望む生活の実現のために展開する思考と実践のプロセスである	利用者が望む生活の実現		
利用者の望む「よりよい生活」「よりよい人生」を実現するという介護の目的を達成するための専門的知識を活用した客観的で科学的な思考過程	利用者が望むより良い生活・人生を実現する		
利用者の望む生活実現のための科学的な思考過程および実践課程	利用者の望む生活の実現		
利用者の望む生活の実現	利用者の望む生活の実現		
利用者が望む生活を実現するために取り組む、科学的思考と実践のプロセスのことであり、介護実践の根拠となるもの	利用者が望む生活の実現		
利用者が望む生活を実現するために取り組む、科学的思考と実践のプロセスのこと	利用者が望む生活の実現		
利用者が望む生活を実現するために取り組む、科学的思考と実践のプロセス	利用者が望む生活の実現		
ご利用者が望む生活を実現するために取り組む、科学的思考と実践のプロセス	利用者が望む生活の実現		
利用者が望む生活を実現するために取り組む、科学的思考と実践のプロセスのこと	利用者が望む生活の実現		
利用者が望む日常生活を実現するために取り組む科学的思考と実践のプロセスで介護実践の根拠となるもの	利用者が望む日常生活の実現		
介護が必要な方の状況や、どのような生活を望んでいるかを把握し、望む生活の実現のためにはどのような支援が必要なのか介護福祉職の専門的な知識や技術を活用し思考言語化し、ケアの根拠を明確にした上で介護を提供する、また、それによって介護者それぞれの思いつきや感覚ではなくチームで統一したケアを行うこと	望む生活の実現		

Q7①介護過程の定義に記載されていた「介護過程の目的」	コーディング	中項目	大項目	
高齢者のその人らしい生活の実現のため、根拠をもって支援を行うためのもの	高齢者のその人らしい生活の実現	その人らしい生活の実現	本人らしい生活・人生のため	
介護を必要とする人の全体像を捉え、その人らしい生活を実現するためにどのような介護が必要なのか、目的にそったプロセスを経て介護計画を作成し、専門職として生活課題を解決させるための思考過程としている	その人らしい生活の実現 生活課題の解決			
利用者のその人らしい生活や自己実現を支援するための科学的な思考過程	その人らしい生活や自己実現支援			
利用者がその人らしい暮らしが送れるように課題を明確にし、改善策を実践していく過程のこと	その人らしい暮らしが送れる			
中央法規「介護福祉士養成講座 9 介護過程」において、「介護過程とは、介護福祉職が利用者の生活上の課題を解決し、その人にとってよりよい生活、よりよい人生を実現していくための道筋」と記されている、本校においても、その人らしさを実現するための思考プロセスであるとの認識に立ち、指導を重ねている	その人らしさを実現する			
介護過程とは、利用者がその人らしい生活を営むことができるよう利用者の生活上のニーズ(課題)を把握し、計画を立案し、実施、評価する一連の過程です	その人らしい生活ことができる その人らしい人生・生き方をサポートする			
その人らしい人生、生き方をサポートするための道しるべ				
利用者の方がその人らしく生活できるよう、またそれを維持する為に意図的に介護を計画・実践し、評価する	その人らしく生活し、維持する			
利用者の生活の質を向上させるための課題解決に向けた問題解決プロセス思考というような定義をしています	利用者の生活の質を向上させる	生活の質の向上		
介護過程は、利用者様の健康や生活の質を向上させるための計画的で継続的なアプローチと認識しています また、家族や他の関係者、職員との連携、専門職との協力を通じて、総合的なサポート体制を構築することも重要だと考えています	利用者の健康や生活の質を向上させる			
利用者にあった個別ケアを実践するための、客観的で科学的な思考過程のこと	個別ケアを実践する		個別ケアの実践	介護福祉の原則の実践のため
介護福祉職が利用者の生活上の課題を解決し、その人の個性に応じた生活、人生を実現していくためのプロセスと認識(高校教科書と介護福祉士テキストを参考にしている)	個性に応じた生活・人生を実現する			
利用者一人ひとりの状態に応じた適切な支援を行うためのプロセス(PDCA サイクル)、また情報分析や課題抽出、目標設定に「介護福祉士」の支援の特徴や価値観が表出され、多職種における介護福祉職の特徴があらわれる	利用者一人ひとりの状態に応じた適切な支援を行う			
利用者の尊厳の保持と自立支援に向け、本人や家族が望む生活の元、ICF の観点の枠組みから生活課題を明らかにし、計画的・継続的によりよい生活を送るためのツール(手段)	利用者の尊厳の保持と自立支援	利用者の尊厳		
利用者の尊厳を主とした介護実践	利用者の尊厳			
介護福祉の専門性をいかして利用者の尊厳を守りながら自立支援を行い、利用者の状況に応じた個別ケアを実践するための思考過程、介護実践の過程	利用者の尊厳、自立支援、個別ケアを実践する			
科学的で根拠のある介護を実践するため、情報収集、課題(ニーズ)の抽出、計画、実施・評価を行うもの	科学的で根拠ある介護を実践する	根拠ある実践	専門職としての実践のため	
根拠に基づく介護実践を行うための思考過程を可視化したもの	根拠に基づく介護実践を行うため			
アセスメント、介護計画の立案、実施、評価の 4 つのプロセスで構成され、専門的で根拠ある介護の内容と方法で実践するための思考過程	専門的で根拠ある介護の内容と方法で実践する			
根拠のある介護実践のため、利用者理解、専門職としての専門性	根拠のある介護実践			
根拠ある介護を展開するために専門家として行う客観的で科学的な思考過程であり、サービス提供において果たすべき約束事、多職種連携を図る共通言語	根拠ある介護を展開する			
介護過程は、アセスメント、介護計画、実施、評価の一連のプロセスであること、介護過程の過程(プロセス)には、介護における支援の根拠を明確にし、妥当性のある根拠に基づく実践を導くための思考過程と支援を行うための実践過程があると認識している	支援の根拠を明確にして妥当性のある根拠に基づく実践を導く			
介護が必要な人の生活課題を明確にし、解決するための支援の方法を計画し、実施評価する一連の支援過程	生活課題を解決する			

Q7①介護過程の定義に記載されていた「介護過程の目的」	コーディング	中項目	大項目
生活上の困難、支障をかかえている人の生活課題を解決する、科学的活動のプロセス—個別ケア		生活課題を 解決する	専門職として の実践のため
利用者の生活上の課題解決に向けて取り組むプロセス	利用者の生活上の課題解決		
人間としてあたりまえの日常生活を送る上での、生活上の支障を抱えている人の生活課題を、解決するために取り組む、科学的活動のプロセスとして介護過程がある	生活課題を解決すること		
経験則に伴わない、科学的な介護福祉実践のための思考過程	科学的な介護福祉実践	科学的 介護実践	
科学的介護を実践するためのプロセス	科学的介護を実践する		
養成校で学ぶべきこと	養成校で学ぶべきこと	その他	その他
利用者本位を念頭にした、介護サービスの提供全般	利用者本位		
介護実践のための一連の思考の過程と実践のプロセス	介護実践		
質の高い介護を提供するため、利用者の情報収集から介護計画を立案するもの	質の高い介護を提供する		

①介護過程の定義に記載されていた「介護過程の手段・方法」

Q7①介護過程の定義に記載されていた「介護過程の手段・方法」	コーディング	中項目	大項目
個々の利用者に対して、介護福祉士が利用者の生活課題を見出し、アセスメント、介護計画の立案、介護の実施、評価を行い、利用者にとって少しでもよりよい生活につなげて道筋のことである	アセスメント、介護計画の立案、介護の実施、評価を行う	アセスメント・計画・実施・評価のプロセスで	科学的アプローチによって
介護過程とは、介護を必要としている利用者が望む「よりよい生活」「よりよい人生」を実現するという介護の目的を達成するために、介護の専門性にもとづき情報の収集・分析を行い、支援課題を整理し、根拠にもとづく介護を展開する支援過程	情報の収集・分析を行い、支援過程を整理し、根拠に基づく介護を展開する		
利用者の方がその人らしく生活できるよう、またそれを維持する為に意図的に介護を計画・実践し、評価する	意図的に介護を計画・実践し、評価する		
介護の目的を達成するために必要な各プロセスにそって考え、言語化して行動を記録し、関係者と話し合い、協力関係を築き、介護職を教育・訓練する方法であり技術	必要な各プロセスにそって考え、言語化して行動を記録し、関係者と話し合い、協力関係を築き、介護職を教育・訓練する		
介護過程とは、利用者がその人らしい生活を営むことができるよう利用者の生活上のニーズ(課題)を把握し、計画を立案し、実施、評価する一連の過程です	生活上のニーズを把握、計画立案、実施、評価する		
介護を必要とする人の全体像を捉え、その人らしい生活を実現するためにどのような介護が必要なのか、目的にそったプロセスを経て介護計画を作成し、専門職として生活課題を解決させるための思考過程としている	その人の全体像を捉え、目的に沿ったプロセスを経て介護計画を作成		
介護過程とは、利用者1人ひとりが望む生活を実現するために、多角的な情報収集を行い、生活上のニーズや解決すべき課題を明確にし、介護計画を立案、実施、評価する一連の思考と実践の過程である、この過程は、利用者との関係が続く限り継続する	多角的な情報収集を行い、生活上のニーズや解決すべき課題を明確にし、介護計画を立案、実施、評価する		
アセスメント、介護計画の立案、実施、評価の4つのプロセスで構成され、専門的で根拠ある介護の内容と方法で実践するための思考過程	アセスメント、介護計画の立案、実施、評価の4つのプロセス		
介護が必要な人の生活課題を明確にし、解決するための支援の方法を計画し、実施評価する一連の支援過程	支援の方法を計画し、実施評価する	科学的思考で	
利用者が望む生活を実現するために科学的思考にて、課題を展開し、介護実践する	科学的思考にて課題を展開し、介護実践する		
よりよい介護を提供するまでの道筋を科学的思考と問題解決思考に基づいて介護を展開する支援過程	科学的思考と問題解決思考に基づいて		
「人間関係を築きながら対象者が望む生活を実現するために、専門的知識や技術を活用しながら生活課題を明確にし、根拠に基づく実践を示すための科学的な思考と導き出された支援を実践する過程である」と定義に授業で示すとともに、専任教員の共通認識のもとで教育にあたっている	人間関係を築きながら、生活課題を明確にし、根拠に基づく実践を示すこと	根拠に基づいて	
介護が必要な方の状況や、どのような生活を望んでいるかを把握し、望む生活の実現のためにはどのような支援が必要なのか介護福祉職の専門的な知識や技術を活用し思考言語化し、ケアの根拠を明確にした上で介護を提供する、また、それによって介護者それぞれの思いつきや感覚ではなくチームで統一したケアを行うこと	専門的知識や技術を活用して言語化し、ケアの根拠を明確にして介護を提供する		
介護福祉士の専門性を見出す重要な科目と考えている 利用者の方がその人らしい生活・望む生活が送れるように生活課題を解決(エビデンスに基づいた介護展開を実施)していく道筋であると考え	生活課題をエビデンスに基づいた介護展開で解決する		
利用者の尊厳の保持と自立支援に向け、本人や家族が望む生活の元、ICFの観点の枠組みから生活課題を明らかにし、計画的・継続的によりよい生活を送るためのツール(手段)	ICFの観点から生活課題を明らかにし、計画的・継続的に行う		
利用者がその人らしい暮らしが送れるように課題を明確にし、改善策を実践していく過程のこと	課題を明確にし、改善策を実践する	生活上の課題解決によって	生活課題の解決によって
利用者の生活上の課題解決によって「よりよい生活・人生」を実現するための道筋	生活上の課題解決		
介護福祉職が利用者の生活上の課題を解決し、その人にとって「よりよい生活」「よりよい人生」を実現していくためのプロセス	生活上の課題を解決する		

Q7①介護過程の定義に記載されていた「介護過程の手段・方法」	コーディング	中項目	大項目
介護福祉職が利用者の生活上の課題を解決し、その人にとってより良い生活、よりよい人生を実現できるようにするために、全体像を把握し、その人の状態に合わせて、専門的知識、技術を活用した客観的で科学的な思考過程のこと	全体像を把握、その人の状態に合わせて、専門的知識、技術を活用し生活上の課題を解決する	生活上の課題解決によって	生活課題の解決によって
介護福祉職が利用者の生活上の課題を解決し、その人の個性に応じた生活、人生を実現していくためのプロセスと認識(高校教科書と介護福祉士テキストを参考にしている)	利用者の生活上の課題を解決する		
介護福祉職が利用者の生活上の課題を解決し、その人にとってより良い生活、よりよい人生を実現していくための道筋	利用者の生活上の課題を解決する		
利用者の生活の支援において、介護福祉職が利用者の生活上の課題を解決し、よりよい生活を実現するためのプロセス	利用者の生活上の課題を解決する		
介護福祉職が利用者の生活上の課題を解決し、その人にとって「よりよい生活・人生」を実現していくための道筋のこと	利用者の生活上の課題を解決		
利用者の生活上の課題を解決し、その人にとって「よりよい生活」「よりよい人生」を実現していくための道筋の事	利用者の生活上の課題を解決		
介護過程とは利用者が望む「よりよい生活」「よりよい人生」を実現するという介護の目的を達成するために行う、専門的知識・技術を活用した客観的で科学的な思考過程	専門的知識・技術を活用する	専門的知識を活用して	専門的知識によって
利用者の尊厳の保持、自立生活支援の観点から、利用者が望む「よりよい生活」「よりよい人生」を実現するという介護の目的を達成するために、専門知識を活用した客観的で科学的な思考過程のこと	専門的知識を活用		
利用者の望む「よりよい生活」「よりよい人生」を実現するという介護の目的を達成するための専門的知識を活用した客観的で科学的な思考過程	専門的知識を活用		
利用者が望む「よりよい生活」「よりよい人生」を実現するという、介護の目的を達成するために行う専門知識を活用した客観的で科学的な思考過程	専門的知識を活用		
利用者が望む生活の実現に向けて、意図的・計画的な介護を展開するプロセス	意図的・計画的な介護を展開する	その他	その他
利用者のできること、できないこと、望んでいることを把握して、専門的知識を活用し、利用者の状態に応じて行う計画的で客観的で科学的な思考過程	利用者のことを把握し、利用者の状況に応じて行う		
利用者のフェルトニーズを理解し実現できるよう支援することは勿論ではあるが、専門職として基礎知識をもとにノーマティブニーズを考え実践すること	フェルトニーズとノーマティブニーズを考え		
介護過程は単なる経験にもとづく技術を積み重ねていくだけでなく、個別事例から積み上げてきた知識をもとに、介護の原理原則を導き出し、介護の専門性や質を向上させていくことである	積み上げられた個別事例の知識をもとに介護の原理原則を導き出す		
利用者の希望する生活の実現に向けて、意図的に介護を展開するためのプロセス	意図的な介護を展開する		
利用者個々のニーズを導き出し、そのニーズに応じた介護の実践をおこない、よりよい生活を提供する	利用者個々のニーズを導き出し、ニーズに応じた介護実践を行う		

①介護過程の定義に記載されていた「介護過程とは」

Q7①介護過程の定義に記載されていた「介護過程とは」	コーディング	中項目	大項目
利用者のできること、できないこと、望んでいることを把握して、専門的知識を活用し、利用者の状態に応じて行う計画的で客観的で科学的な思考過程	客観的で科学的な思考過程	科学的思考過程	科学的思考過程
中央法規「介護福祉士養成講座 9 介護過程」において、「介護過程とは、介護福祉職が利用者の生活上の課題を解決し、その人にとってよりよい生活、よりよい人生を実現していくための道筋」と記されている、本校においても、その人らしさを実現するための思考プロセス	思考プロセス		
「人間関係を築きながら対象者が望む生活を実現するために、専門的知識や技術を活用しながら生活課題を明確にし、根拠に基づく実践を示すための科学的な思考と導き出された支援を実践する過程である」と定義に授業で示すとともに、専任教員の共通認識のもとで教育にあたっている	科学的な思考、導き出された支援を実践する過程		

Q7①介護過程の定義に記載されていた「介護過程とは」	コーディング	中項目	大項目
利用者にあった個別ケアを実践するための、客観的で科学的な思考過程のこと	客観的で科学的な思考過程	科学的思考過程	科学的思考過程
介護過程とは利用者が望む「よりよい生活」「より良い人生」を実現するという介護の目的を達成するために行う、専門的知識・技術を活用した客観的で科学的な思考過程	客観的で科学的な思考過程		
利用者が望む生活を実現するために取り組む、科学的思考と実践のプロセスのことであり、介護実践の根拠となるもの	科学的思考と実践のプロセス、介護実践の根拠		
利用者が望む生活を実現するために取り組む、科学的思考と実践のプロセスのこと	科学的思考と実践のプロセス、介護実践の根拠		
利用者の尊厳の保持、自立生活支援の観点から、利用者が望む「よりよい生活」「よりよい人生」を実現するという介護の目的を達成するために、専門知識を活用した客観的で科学的な思考過程のこと	客観的で科学的な思考過程		
利用者の望む「よりよい生活」「よりよい人生」を実現するという介護の目的を達成するための専門的知識を活用した客観的で科学的な思考過程	客観的で科学的な思考過程		
介護過程とは、利用者1人ひとりが望む生活を実現するために、多角的な情報収集を行い、生活上のニーズや解決すべき課題を明確にし、介護計画を立案、実施、評価する一連の思考と実践の過程である、この過程は、利用者との関係が続く限り継続する	一連の思考と実践の過程		
対象者の望む生活(よりよい生活)を実現するための思考・実践過程	思考・実践過程		
利用者が望む生活を実現するために取り組む、科学的思考と実践のプロセス	科学的思考と実践のプロセス、介護実践の根拠		
アセスメント、介護計画の立案、実施、評価の4つのプロセスで構成され、専門的で根拠ある介護の内容と方法で実践するための思考過程	思考過程		
介護福祉の専門性をいかして利用者の尊厳を守りながら自立支援を行い、利用者の状況に応じた個別ケアを実践するための思考過程、介護実践の過程	思考過程、介護実践の過程		
利用者の生活の質を向上させるための課題解決に向けた問題解決プロセス思考というような定義をしています	課題解決に向けた問題解決プロセス思考		
利用者がより良い人生、より良い生活を送るために取り組む科学的思考と実践のプロセス	科学的思考と実践のプロセス		
「利用者が望む生活を実現するために取り組む科学的思考と実践のプロセス」をいう、介護過程は、介護実践の根拠となるものであり、利用者の生活支援において、個別ケアの方向性や具体的な介護方法を示すものである	科学的思考と実践のプロセス		
利用者の望む暮らし、その人らしさを科学的な根拠に基づく思考過程	科学的な根拠に基づく思考過程		
利用者が望む「よりよい生活」「よりよい人生」を実現するという、介護の目的を達成するために行う専門知識を活用した客観的で科学的な思考過程	客観的で科学的な思考過程		
よりよい介護を提供するまでの道筋を科学的思考と問題解決思考に基づいて介護を展開する支援過程	よりよい介護を提供するまでの道筋を展開する思考過程		
利用者の望む生活実現のための科学的な思考過程および実践過程	科学的な思考過程・実践過程		
介護福祉士の専門性のひとつであり、厳を守るために行われるもの、利用者が望む「よりよい生活、よりよい人生」を実現するために行う科学的な思考過程	科学的な思考過程・実践過程		
根拠に基づく介護実践を行うための思考過程	根拠に基づく介護実践を行うための思考過程		
ご利用者が望む生活を実現するために取り組む、科学的思考と実践のプロセス	科学的思考と実践のプロセス		
利用者が望む生活を実現するために取り組む、科学的思考と実践のプロセスのこと	科学的思考と実践のプロセス		
利用者が望む生活を実現させるための科学的思考とプロセス	科学的思考とプロセス		
利用者のその人らしい生活や自己実現を支援するための科学的な思考過程	科学的な思考過程・実践過程		
介護福祉職が利用者の生活上の課題を解決し、その人にとってより良い生活、よりよい人生を実現できるようにするために、全体像を把握し、その人の状態に合わせて、専門的知識、技術を活用した客観的で科学的な思考過程のこと	客観的で科学的な思考過程		
利用者様にあった介護を展開するための思考過程	利用者にあった介護を展開するための思考過程		
経験則に伴わない、科学的な介護福祉実践のための思考過程	思考過程、介護実践の過程		

Q7①介護過程の定義に記載されていた「介護過程とは」	コーディング	中項目	大項目
根拠ある介護を展開するために専門家として行う客観的で科学的な思考過程であり、サービス提供において果たすべき約束事、多職種連携を図る共通言語	客観的で科学的な思考過程	科学的思考過程	科学的思考過程
介護過程は、アセスメント、介護計画、実施、評価の一連のプロセスであること、介護過程の過程（プロセス）には、介護における支援の根拠を明確にし、妥当性のある根拠に基づくと実践を導くための思考過程と支援を行うための実践過程があると認識している	思考過程と実践過程		
客観的で科学的な思考と実践の過程	客観的で科学的な思考と実践の過程		
根拠に基づいた思考過程	根拠に基づいた思考過程		
利用者が望む日常生活を実現するために取り組む科学的思考と実践のプロセスで介護実践の根拠となるもの	科学的思考と実践のプロセス		
個々の利用者に対して、介護福祉士が利用者の生活課題を見出し、アセスメント、介護計画の立案、介護の実施、評価を行い、利用者にとって少しでもよりよい生活につなげて道筋のことである	道筋	道筋	
利用者の生活上の課題解決によって「よりよい生活・人生」を実現するための道筋	道筋		
よりよい生活を実現するための道筋	道筋		
その人にとって「よりよい生活」「よりよい人生」を実現していくための道筋のこと	道筋		
介護過程とは、利用者がその人らしい生活を営むことができるよう利用者の生活上のニーズ（課題）を把握し、計画を立案し、実施、評価する一連の過程です	一連の過程		
介護福祉職が利用者の生活上の課題を解決し、その人にとって「よりよい生活・人生」を実現していくための道筋のこと	道筋		
利用者の生活上の課題を解決し、その人にとって「よりよい生活」「よりよい人生」を実現していくための道筋の事	道筋		
介護福祉職が利用者の生活上の課題を解決し、その人にとってより良い生活、よりよい人生を実現していくための道筋	道筋		
介護福祉士の専門性を見出す重要な科目と考えている、利用者の方がその人らしい生活・望む生活が送れるように生活課題を解決（エビデンスに基づいた介護展開を実施）していく道筋と考える	道筋		
利用者のよりよい生活や人生を実現していくためのプロセス	プロセス		
人間としてあたりまえの日常生活を送る上での、生活上の支障を抱えている人の生活課題を、解決するために取り組む、科学的活動のプロセスとして介護過程がある	科学的活動のプロセス	一連のプロセス	プロセス
利用者が望む生活の実現に向けて、意図的・計画的な介護を展開するプロセス	プロセス		
利用者の「よりよい生活」「よりよい人生」の実現に向けて介護実践を展開するためのプロセス及びその技術・方法	実践プロセス・技術・方法		
介護福祉職が利用者の生活上の課題を解決し、その人にとって「よりよい生活」「よりよい人生」を実現していくためのプロセス	プロセス		
生活上の困難、支障をかかえている人の生活課題を解決する、科学的活動のプロセス個別ケア	科学的活動のプロセス個別ケア		
利用者の希望する生活の実現に向けて、意図的に介護を展開するためのプロセス	プロセス		
介護福祉職が利用者の生活上の課題を解決し、その人の個性に応じた生活、人生を実現していくためのプロセスと認識（高校教科書と介護福祉士テキストを参考にしている）	プロセス		
利用者の生活上の課題解決に向けて取り組むプロセス	プロセス		
利用者一人ひとりの状態に応じた適切な支援を行うためのプロセス（PDCA サイクル）、また情報分析や課題抽出、目標設定に「介護福祉士」の支援の特徴や価値観が表出され、多職種における介護福祉職の特徴があらわれる	プロセス		
介護が必要な人の生活課題を明確にし、解決するための支援の方法を計画し、実施評価する一連の支援過程	一連の支援過程		
利用者の生活の支援において、介護福祉職が利用者の生活上の課題を解決し、よりよい生活を実現するためのプロセス	プロセス		
介護を行っていくうえで、必要な考え方のプロセス	のプロセス		
科学的介護を実践するためのプロセス	プロセス		
介護実習や介護総合演習と連携して取り組むもの、サービスを利用しようとしたところからサービスの終了までの一連の流れ	サービス利用開始時から終了までの一連の流れ		
利用者が望む生活の実現のために展開する思考と実践のプロセスである	思考と実践のプロセス		
介護実践のための一連の思考の過程と実践のプロセス	一連の試行の過程と実践のプロセス		

Q7①介護過程の定義に記載されていた「介護過程とは」	コーディング	中項目	大項目
介護過程とは、介護を必要としている利用者が望む「よりよい生活」「よりよい人生」を実現するという介護の目的を達成するために、介護の専門性にもとづき情報の収集・分析を行い、支援課題を整理し、根拠にもとづく介護を展開する支援過程	根拠に基づいた支援過程	根拠に基づくもの	専門職としての支援
高齢者のその人らしい生活の実現のため、根拠をもって支援を行うためのもの	根拠を持って支援を行うためのもの		
根拠に基づく介護実践	根拠に基づく介護実践		
利用者が望む日常生活を実現するために取り組む科学的思考と実践のプロセスで介護実践の根拠となるもの	介護実践の根拠となるもの	専門性たるもの	
介護過程は単なる経験にもとづく技術を積み重ねていくだけでなく、個別事例から積み上げてきた知識をもとに、介護の原理原則を導き出し、介護の専門性や質を向上させていくことである	介護の専門性や質を向上させること		
根拠のある介護実践のため、利用者理解、専門職としての専門性	利用者理解、専門職としての専門性		
介護福祉士の専門性の根幹となるもの、思考過程の重要なアセスメントを適切に行える介護福祉分野の専門性	介護福祉分野の専門性	統一したケアを行うためのもの	
介護が必要な方の状況や、どのような生活を望んでいるかを把握し、望む生活の実現のためにはどのような支援が必要なのか介護福祉職の専門的な知識や技術を活用し思考言語化し、ケアの根拠を明確にした上で介護を提供する、また、それによって介護者それぞれの思いつきや感覚ではなくチームで統一したケアを行うこと	チームで統一したケアを行うこと		
介護・福祉の現場では、介護福祉士などの専門職以外の人たちも、共に介護や支援など専門職と同じ対応方法を提供し働いている、異なる考え方や価値観を持った人と人が関わるその中で、安心安全を保障できる活動がなされるためにも、専門的知識を持った人が中心となり、誰にでもわかりやすく、明確な目的を持った支援が提供できるように準備されるものであると理解している	誰にでもわかりやすく、明確な目的を持った支援が提供できるよう準備されるもの		
教科書通り	教科書通り	その他	その他
どのような状況になっても、基本的人権が守られること	基本的人権が守られること		
厚労省の規定通りです	厚労省の規定通り		
利用者理解の方法	利用者理解の方法		
その人らしさを見つめるもの	その人らしさを見つめるもの		
利用者、家族のニーズあったケアプラン	利用者、家族のニーズあったケアプラン		
介護過程は、利用者様の健康や生活の質を向上させるための計画的で継続的なアプローチと認識しています、また、家族や他の関係者、職員との連携、専門職との協力を通じて、総合的なサポート体制を構築することも重要だと考えています	計画的で継続的なアプローチ		

②介護過程を展開する意義・目的

介護過程を展開する意義・目的	コーディング	中項目	大項目
介護福祉士の一方的な援助、支援とならぬように尊厳の保持や自立支援、利用者本位を念頭に置きながら、その方らしい生活の再構築を支援することを目的とする	その方らしい生活の再構築を支援すること	その人らしい生活の実現	利用者のための実践
利用者によって異なる生活課題に応じて、その人らしい生活を側面的に支援し、個別的なケアとして実践できるものとして展開されるものである	その人らしい生活を側面的に支援		
利用者主体の計画を作成し、実践することでよりよい暮らし、その人らしい生き方を支援するために、必ず必要な手立て	よりよい暮らし、その人らしい生き方を支援する		
対象者が望む自分らしい生活の実現に向けて適切な支援を考えることができる	対象者が望む自分らしい生活の実現に向けて適切な支援を考えることができる		
利用者一人一人のその人らしさ、個人因子から生活や人生に対する思い、望みを知り、介護福祉士の専門的知識で、その実現のためのケアを考、ケアの標準化、統一を図る	利用者一人一人のその人らしさ、その実現のためのケアを考える		
利用者がその人らしくより良い生活が送れるよう支援すること	利用者がその人らしくより良い生活が送れるよう支援する		
介護過程とは、利用者がその人らしい生活を営むことができるよう、利用者の生活上のニーズ(課題)を把握し、計画を立案し、実施・評価する一連の過程である	利用者がその人らしい生活を営むことができる		
老いこともなう心身のおとろえ、障害があることによって生じる生活上の困りごとを解決し、利用者が望むその人らしい生活を支援するため	利用者が望むその人らしい生活を支援する		

介護過程を展開する意義・目的	コーディング	中項目	大項目
その人らしい生活の実現するために行うこと	その人らしい生活の実現するために行う	その人らしい生活の実現	
その人らしい暮らしが送れるように問題点の改善・解消を目的とし、どのような介護が必要なのかを考え実践するというプロセス	その人らしい暮らしを送るための問題点の改善・解消		
利用者が望むその人らしい生活の実現を目指し、生活上のニーズや解決すべき課題を明確にし、介護計画を立案、実施、評価する一連の思考と実践の課程	利用者が望むその人らしい生活の実現		
高齢者の質の高い生活の実現のため、他の科目で学んだ知識、根拠をもってその人らしい生活の実現にむけ支援を行う思考と実践の過程	その人らしい生活の実現にむけ支援を行う		
科学的根拠に基づき、利用者にその人らしい生活を過ごしていただくための介護を提供するためには計画的に行う介護過程が必要不可欠であることを意識させてます	利用者にその人らしい生活を過ごしていただくため		
その人らしい生活を実現させるために必要なもの	その人らしい生活を実現させるため		
利用者のその人らしい生活を実現するため	利用者のその人らしい生活を実現するため		
4つのプロセスを繰り返し展開することを通して、利用者の望むその人らしい生活の実現をサポートするもの	利用者の望むその人らしい生活の実現をサポートする		
利用者のその人らしい生活や自己実現を支援するために必要なこと	利用者のその人らしい生活や自己実現を支援するため		
利用者の全体像を把握して課題を導き出し、根拠のある最適な介護を意図的に展開できるように計画を立て、実施、評価、再アセスメントを繰り返しながら、利用者本人が望むその人らしい生活の再構築を側面的に支援することができる	利用者本人が望むその人らしい生活の再構築を側面的に支援する		
利用者のQOLの向上、利用者の望む生活実現に向けて一人ひとりの適切な支援を導き出す	利用者の望む生活実現	望む生活の実現	利用者のための実践
利用者の思いを実現するため、カンや経験だけで介護をするのではなく、根拠や理由があって行うもの、課題を抽出し、それらを解決するための実践	利用者の思いを実現する		
介護が必要な方の心身の状況に合わせ、尊厳や自立に配慮したケアをチームで提供することで、生活の質を高め、その方の望む生活を実現を支援する また介護福祉職の知識や技術を活用した根拠のある介護実践を行うことが介護福祉職の専門性につながっていく	その方の望む生活を実現を支援する		
生活支援における専門知識を活用したケアの標準化、利用者の心身の状況に応じたケアの個別化を他職種を含めたチームで実践し、その人が望む暮らしの実現をサポートする	その人が望む暮らしの実現をサポートする		
利用者の望む生活の実現(定義、意義、目的を同程度に認識)	利用者の望む生活の実現		
サービス利用者の複雑化、多様化、高度化する介護ニーズがあるなかで介護過程の展開を常に意識しながら、サービス利用者の望む生活を実現するために必要な課題を解決すること	利用者の望む生活を実現するため		
利用者の望む生活の実現	利用者の望む生活の実現		
利用者が望む生活実現のためのもの 介護過程はチームで行うもの、介護過程の展開により利用者に関わる全ての関係者が共通認識を持ち他職種との連携が図れる	利用者が望む生活実現のため		
介護福祉の倫理に基づいた思考と行動を実践し、サービス利用者の生活の質・人生の質を改善し、保ち、高め、サービス利用者が満足のいく生活を継続できることを目的とする	利用者が満足のいく生活を継続できること		
利用者の望む生活を実現する、根拠に基づいた介護を実践する	利用者の望む生活を実現する		
利用者のよりよい生活やよりよい人生を実現するために実施する	利用者のよりよい生活やよりよい人生を実現する	よりよい生活・人生の実現	
利用者の自立を支援するため、よりよい生活を送るため	よりよい生活を送るため		
利用者の自立を支援し、「よりよい生活」「よりよい人生」の実現すること	「よりよい生活」「よりよい人生」の実現する		
利用者にとって「よりよい生活」「よりよい人生」を実現するために、利用者のできること、できないこと、望んでいること等を把握し、専門的な知識・技術を活用した客観的で科学的な思考過程によって支援していく	「よりよい生活」「よりよい人生」を実現する		
介護福祉職が利用者の生活上の課題を解決し、その人にとって「よりよい生活」「よりよい人生」を実現していくための道筋のこと	その人にとって「よりよい生活」「よりよい人生」を実現していくため		
対象者一人ひとりのよりよい生活支援のためのツール、根拠ある介護福祉実践、本人・関係者との連携・協働、介護評価・介護福祉の質の向上	よりよい生活支援のため		
より良い人生を実現するために必要な課題を解決することや介護の質を統一、向上させるため	より良い人生を実現するために必要な課題を解決すること		

介護過程を展開する意義・目的	コーディング	中項目	大項目
利用者の生活を「よりよいもの」にするために介護福祉士としての視点から課題を見出し、解決する一連の流れ	利用者の生活を「よりよいもの」にするため	よりよい生活・人生の実現	利用者のための実践
利用者の QOL の向上、利用者の望む生活実現に向けて、一人ひとりの適切な支援を導き出す	利用者の QOL の向上	QOL の向上	
根拠に基づいた介護を行うため、科学的な支援により利用者の生活の質を向上させる	利用者の生活の質を向上させる		
アセスメント→計画→実施→評価を繰り返し展開していくことにより、利用者が望む生活の実現に向けたアセスメントで生活課題を導き出し、介護福祉士が一番考えなければならない QOL の向上を実践できるようにすること	QOL の向上を実践できるようにすること		
介護福祉職は利用者ができること、できないこと、望んでいることなどを把握し、アセスメントの結果から、根拠に基づいた支援を行っていくことで、利用者の QOL の向上につながる	利用者の QOL の向上につながる		
利用者が望む生活を実現するうえで生じている生活課題を解決することにより、利用者の QOL (生活の質) を向上させること	利用者の QOL (生活の質) を向上させること		
専門職として介護の根拠を示し、多職種と連携を図りながら利用者の生活の質を向上を目指す	利用者の生活の質を向上を目指す		
本人が望む生活を実現するうえで生じている生活課題を解決することにより、本人の生活の質を向上させること	本人の生活の質を向上させること		
1 人の人のニーズを見出し、その方の QOL の向上を目的とするもの	その方の QOL の向上を目的とする		
介護過程の展開によって、利用者の心身の状況に応じた質の高い個別ケアを提供でき、利用者の QOL の向上につながる	利用者の QOL の向上		
利用者のより良い生活を目指す 根拠に基づく支援を学ぶ、思考のあり方を学ぶため	利用者のより良い生活を目指す		
ご利用者が望む生活を実現するうえで生じている生活課題を解決することにより、ご利用者の QOL を向上させることを目的とする	ご利用者の QOL を向上させること		
利用者の自立支援、生活の質の向上を目的として、専門的知識、技術を持って展開されるもの	生活の質の向上		
自己実現のための課題解決と、目指す方向に近づくための支援を生活面からアプローチしていく際に、支援の個別化と標準化を図り実践をふりかえることが、利用者の生活の質の向上につながるため、介護過程の考え方を学ぶことに意義があると考えている	利用者の生活の質の向上につながるため		
利用者の QOL の向上、利用者の望む生活実現に向けて、一人ひとりの適切な支援を導き出す	一人ひとりの適切な支援を導き出す	個別ケアの実践	介護福祉の理念の実践
利用者によって異なる生活課題に応じて、その人らしい生活を側面的に支援し、個別的なケアとして実践できるものとして展開されるものである	個別的なケアとして実践できる		
利用者一人ひとりに適した質の高いケアを提供すること(個別ケアの実践)	個別ケアの実践		
介護過程を展開する意義・目的は、対象者一人一人のその人らしさを理解し、個別化の原則に則り自己実現を図っていくことにありと解している そのためには、マズローの欲求階層説に照らした基本的人権(尊厳)を尊重し、ICF に基づく科学的根拠による援助が不可欠であると認識している	個別化の原則に則り自己実現を図っていくこと		
根拠に基づいた介護の展開によって、利用者の心身の状況に応じた質の高い個別ケアを提供でき、利用者の QOL の向上につながる 利用者が望む生活を実現する上で生じる生活課題を解決し、自己実現を目指しつづけていくこと	利用者の心身の状況に応じた質の高い個別ケアを提供でき、利用者の QOL の向上につながる		
個別ケアの推進、根拠を示したうえでケアができる	個別ケアの推進		
客観的で科学的な思考過程であり、目的は、尊厳を守るケア、個別ケアの実践のためと認識している(高校教科書と介護福祉士テキスト、介護実習の実習指導者や、外部講師の話を参考にしている)	個別ケアの実践のため		
利用者個々の生活のニーズを解決するために介護過程の展開をおこなう	利用者個々の生活のニーズを解決するため		
介護過程の展開によって、利用者の心身の状況に応じた質の高い個別ケアを提供でき、利用者の QOL の向上につながる	質の高い個別ケアの提供		
利用者の個々の特性と状態に応じた支援を行うための思考過程である	利用者の個々の特性と状態に応じた支援を行うため		
利用者の自立を支援するため、よりよい生活を送るため	利用者の自立を支援するため	利用者の自立支援	

介護過程を展開する意義・目的	コーディング	中項目	大項目
利用者の自立を支援し、「よりよい生活」「よりよい人生」の実現すること	利用者の自立を支援	利用者の自立支援	介護福祉の理念の実践
利用者の自立支援を実現する上で、援助者が身につけておくべき考え方	利用者の自立支援の実現		
実践の目的は、次のような視点をもって位置付けている 「活動の維持改善」「参加や役割の維持・拡充・実現」「健康の維持・改善」「社会生活の維持・拡充」「安心・安楽、生活の満足感」また、実践の基盤として「介護サービスの理念」や「尊厳の保持」「利用者主体」「自立支援」を位置付けている 介護過程の展開が、利用者主体や自立支援といった価値を実現するための方法として考えるようにしている	利用者主体や自立支援といった価値を実現するため		
利用者の自立支援、生活の質の向上を目的として、専門的知識、技術を持って展開されるもの	利用者の自立支援		
根拠に基づいた介護を行うため 科学的な支援により、利用者の生活の質を向上させる	根拠に基づいた介護を行うため	根拠に基づく介護実践	専門職としての支援のため
根拠に基づいた介護を行うため	根拠に基づいた介護を行うため		
経験や勘・偶然のみに頼らず、根拠にもとづいて客観的にアセスメントを行い、介護を実践すること	経験や勘・偶然のみに頼らず、根拠にもとづいて客観的にアセスメントを行い、介護を実践すること		
根拠のある介護実践のため 利用者全体の生活支援の実践のため	根拠のある介護実践のため		
①予測性をもった根拠が明確な介護	予測性をもった根拠が明確な介護		
確かな根拠をもとに介護ケアを行うための過程であり、4つのプロセスから介護過程を進めていくことにより、一人ひとりに適切でよりよい介護ケアを提供できるようになる	確かな根拠をもとに介護ケアを行うため		
介護実践の根拠となるもの	介護実践の根拠となるもの		
根拠ある介護実践に必要な考え方	根拠ある介護実践に必要な考え方		
根拠のある介護の実績に向けて必要である	根拠のある介護の実績に向けて		
思いっぴきではなく、科学的な根拠に基づく支援 科学的に進めていくためには調査し、その内容を分析、相関関係、分類するなどの科学的な手続きによって生活主体者のニーズや生活課題の抽出を行う客観的にかつ、仮説的な思考することと、さらにそれらのプログラムを計画的に実施して評価するという仕組みによって、より効果的に実践する一連の活動	科学的な根拠に基づく支援		
学んだ専門知識の統合、思考過程の文章化、介護福祉士の専門性、根拠のある介護	介護福祉士の専門性、根拠のある介護		
根拠に基づく介護を行うための思考過程の訓練	根拠に基づく介護を行うため		
根拠に基づいた介護の実践、皆が同じ方向を向いて介護をすすめる	根拠に基づいた介護の実践		
介護職が専門的な知識や技術を持ちいて介護過程を展開することで、科学的根拠に基づいた介護の実践が可能となり、実践結果を客観的に評価することが可能であり、それによって介護が必要な人のQOLを向上させることにつながる また介護過程の一連のプロセスを展開することで、介護が必要な人の望む生活の実現や継続を支援できる	科学的根拠に基づいた介護の実践が可能となる		
根拠を示した介護を実践すること	根拠を示した介護を実践すること		
介護過程の実践の成果を蓄積することで、専門知識や技術を進展させ、介護福祉の理論の構築や介護福祉士の成長につなげることができる	介護過程実践の成果蓄積により、介護福祉の理論の構築や介護福祉士の成長につなげること	介護の専門性への寄与	
日本介護福祉士会は介護過程の展開による根拠に基づいた介護実践をあげており、介護福祉士としての専門性を向上・確立させる大きな柱となるものである ＊参考：①・②ともに実教出版『介護福祉基礎』p126 日本介護福祉士 HP	介護福祉士としての専門性を向上・確立させる大きな柱となるもの		
経験に基づく技術を積み重ねていくだけでなく、個別事例から積み上げてきた知識をもとに、介護の原理原則を導きだし、介護の専門性や質を向上させていくこと	介護の専門性や質を向上させていくこと		
介護の学問としての構築、介護福祉士の自己成長	介護の学問としての構築		
介護が必要な方の心身の状況に合わせ、尊厳や自立に配慮したケアをチームで提供することで、生活の質を高め、その方の望む生活を実現を支援する また介護福祉職の知識や技術を活用した根拠のある介護実践を行うことが介護福祉職の専門性につながっていく	介護福祉職の専門性につながっていく		

介護過程を展開する意義・目的	コーディング	中項目	大項目
対象者一人ひとりのよりよい生活支援のためのツール、根拠ある介護福祉実践、本人・関係者との連携・協働、介護評価・介護福祉の質の向上	介護福祉の質の向上	介護の専門性への寄与	専門職としての支援のため
より良い人生を実現するために必要な課題を解決することや介護の質を統一、向上させるため	介護の質を統一、向上させるため		
利用者一人ひとりの状態に応じた適切な支援を行うためのプロセス(PDCA サイクル)および介護福祉職の特徴や役割を明確にする	介護福祉職の特徴や役割を明確にする		
加齢に伴う身体的・精神的な変化や障害の状況、これまでの生活や価値観、考え方などにより「望む生活」は人それぞれである これからの生活をどのように送りたいか、夢は何かを考え介護福祉士としての専門的知識・技術を持って客観的で科学的に考えていくことができる	介護福祉士としての専門的知識・技術を持って客観的で科学的に考えていくことができる		
介護福祉士の専門性	介護福祉士の専門性	チームケア	連携のため
対象者個々の個別ケアを提供するために介護福祉職の同職種、多職種とのチームアプローチができる	介護福祉職の同職種、多職種とのチームアプローチができる		
利用者一人一人のその人らしさ、個人因子から生活や人生に対する思い、望みを知り、介護福祉士の専門的知識で、その実現のためのケアを考える また、ケアの標準化、統一を図る	ケアの標準化、統一を図る		
根拠ある介護をチームとして行い、利用者の方を支えるため	根拠ある介護をチームとして行い 利用者を支える		
意義として、長期・短期の介護目標の実現に向けて、介護職だけでなく他職種が関わることで、支援の幅・質が広がる また、介護という業務が、個々の職員による行き当たりばったりや思い付きで支援をするのではなく、根拠に基づいたケアをチームとして実践ができる	根拠に基づいたケアをチームとして実践ができる		
根拠立てて適切なケアをチームで取り組むことができる	根拠立てて適切なケアをチームで 取り組むことができる		
チームで取り組む際にも、どの段階の話をしているのかなど確認を確実に実施することができる	チームで共通認識を持ちやすい		
①予測性をもった根拠が明確な介護、②利用者の選択の自由の保障、③多職種連携、④介護の伝達、⑤介護の学問としての構築、⑥介護福祉士の自己成長	多職種連携	他職種連携	
他職種と連携・協働することができること	他職種と連携・協働することができること		
意義として、長期・短期の介護目標の実現に向けて、介護職だけでなく他職種が関わることで、支援の幅・質が広がる また、介護という業務が、個々の職員による行き当たりばったりや思い付きで支援をするのではなく、根拠に基づいたケアをチームとして実践ができる	介護職だけでなく他職種が関わることで、支援の幅・質が広がる		
利用者が望む生活実現のためのもの 介護過程はチームで行うもの、介護過程の展開により利用者に関わる全ての関係者が共通認識を持ち他職種との連携が図れる	利用者に関わる全ての関係者が共通認識を持ち他職種との連携が図れる		
(定義にも重複しますが)福祉従事者として利用者を共感的に理解し、福祉の理念や倫理に則って根拠ある支援を展開していくためにもとても重要だと考えます また、他の専門職と共通言語や共通理解のもとケアやサービスを進めていくためにも重要な意義があります	他の専門職と共通言語や共通理解のもとケアやサービスを進めていくため	その他	その他
ある程度の手順を踏むことで、見落としや取りこぼしなく目的をもって取り組むことができると考えている	支援の見落としを減らして網羅的に取り組める		
利用者の心身の状況に応じた介護実践を可能にする	利用者の心身の状況に応じた介護実践を可能にする		
専門職として介護を展開するための思考過程 他科目での学びをアウトプットする授業	他科目での学びをアウトプットする		
介護過程の一連の展開プロセスを通じて、利用者様が尊重され、自己決定権を持ち、尊厳ある生活を送ることが可能となると認識しています	利用者様が尊重され、自己決定権を持ち、尊厳ある生活を送ることが可能となる		

(2) 根拠に基づくアセスメントとは何だと考えますか

Q8 (1)根拠に基づく「アセスメント」とは何だと考えますか。

Q8(1)根拠に基づくアセスメントとは何だと考えますか	コーディング	中項目
利用者に対して、先入観や偏見を持たずにコミュニケーションを図りながら情報収集を行うこと と同時に観察として主観的観察、客観的観察を行いながら生活課題を明確化することである	観的観察、客観的観察を行いながら生活課題を明確化すること	課題を導き出すこと
利用者の望む生活に向け、生活上の支障や課題が解決達成できるよう、まつわる情報を収集し解釈、分析、判断を通し、解決すべき課題を明らかにするものである	情報を収集し解釈、分析、判断を通し、解決すべき課題を明らかにするもの	
利用者が望む生活の実現に向けた生活課題を導き出すこと そして、なぜそのケアをするのかの理由となるもの 本人や家族に対し、その方へのケアを説明していく時に何を根拠にそのケアが必要なのか？が説明できないといけないもの	利用者が望む生活の実現に向けた生活課題を導き出すこと	
情報の収集、情報の解釈・関連づけ・統合化、課題の明確化	課題の明確化	
収集した情報を「解釈・関連付け・統合化」することで、利用者の生活課題を明確にすること	生活課題を明確にすること	
根拠に基づくアセスメントとは、利用者さんの過去の情報や実際に関わることで得られる日々の情報と専門的な知識に裏付けられた、利用者理解及び課題の明確化	日々の情報と専門的な知識に裏付けられた、利用者理解及び課題の明確化	
利用者の介護に必要な情報を収集し、専門的知識・技術を根拠としたものから専門的な視点で分析・解釈を加え、複数の情報を関連付けて統合化することで、どのような介護が必要か生活上の課題を明確にすること	どのような介護が必要か生活上の課題を明確にすること	
面接、観察、資料に基づく情報収集から利用者を知り、利用者の思いをもとに介護福祉職としての専門知識を加えて言語化し、生活課題を導き出すこと	利用者の思いをもとに介護福祉職としての専門知識を加えて言語化し、生活課題を導き出すこと	
介護が必要方がどのような生活を望んでいるのか、望む生活を実現するためにはどのような支援が必要なのかを明確にすること	介護が必要方がどのような生活を望んでいるのか、望む生活を実現するためにはどのような支援が必要なのかを明確にすること	
情報の収集、分析、解釈、統合、判断をふまえて、生活課題を明確化すること、きちんとした判断に基づいた課題を明確にできること	情報の収集、分析、解釈、統合、判断から生活課題を明確化すること	
情報の意味と繋がりを分析し、課題の予測を立てること	情報の意味と繋がりを分析し、課題の予測を立てること	
情報を集め、集められた情報を解釈・関連づけ・統合し、本人の生活上の課題を明確にすること	情報を集め、集められた情報を解釈・関連づけ・統合し、本人の生活上の課題を明確にすること	
利用者の情報を多角的に収集し、本人の想いを課題を明確にすること	利用者の情報を多角的に収集し、本人の想いを課題を明確にすること	
収集した情報を解釈・関連付け・統合化し、生活課題を明確にすること	収集した情報を解釈・関連付け・統合化し、生活課題を明確にすること	
自立(自律)の可能性・その人らしさ・快適性などの視点からの情報を統合して、生活課題(現状と達成の可能性)を抽出	情報を統合して、生活課題を抽出	
その方の情報を集め課題を見出すもの	情報を集め課題を見出すもの	
情報を収集し、それをもとに課題を明らかにし、その方のその人らしい生活を実現するために必要なこと	情報を収集し、それをもとに課題を明らかにすること	
介護の必要性を統合的に判断するために、利用者について「情報収集」をし、「情報の解釈・関連づけ・総合化」を行い、「課題の明確化」を行うこと	情報収集、解釈・関連づけ・総合化を行い、課題の明確化を行うこと	
正しい情報収取を行い、科学的な分析で生活課題を導く	正しい情報収取を行い、科学的な分析で生活課題を導く	
利用者の状況把握と分析をして課題を明確にすること、事前評価、情報収集	利用者の状況把握と分析をして課題を明確にすること	
情報の解釈、関連付け、統合化による課題の明確化	情報の解釈、関連付け、統合化による課題の明確化	

Q8(1)根拠に基づくアセスメントとは何だと考えますか	コーディング	中項目
さまざまな知識・経験をもとに対象利用者と未来のイメージを共有し、そのイメージに近づくために課題(ニーズ)を明らかにすること	様々な知識・経験をもとに対象利用者と未来のイメージに近づくために課題(ニーズ)を明らかにすること	課題を導き出すこと
利用者の心身の状況や取り巻く環境、困りごとなどの全体像をICFの視点で把握し、その情報を専門的知識を加えて解釈・関連付け・統合化し、生活課題(真のニーズ)を導き出すこと	ICFの視点で把握し、その情報を専門的知識を加えて解釈・関連付け・統合化し、生活課題(真のニーズ)を導き出すこと	
集めた情報を根拠に情報をまとめ課題を明らかにするアセスメントを含め介護過程の展開が介護実践の「根拠」になるのではないのでしょうか、根拠に基づいたアセスメントとはどのようなものかわかりません	集めた情報を根拠に情報をまとめ課題を明らかにする	
的確に情報収集を行い、生活課題を導き出す思考	的確に情報収集を行い、生活課題を導き出す思考	
過去・現在・未来をしっかりとらえ、それらの情報を正確に分析することだと考えます	過去・現在・未来の情報を正確に分析すること	分析
サービス利用者の人権を尊重し、その人らしい生活を実現するためにどのような介護が必要なのか、あるいはどのような介護サービスが求められているのかを考え、科学的根拠にもとづいた情報収集と分析を行うこと	科学的根拠にもとづいた情報収集と分析を行うこと	
知識と客観的データにもとづいた、情報収集と分析生活課題抽出の過程である	知識と客観的データにもとづいた、情報収集と分析	
利用者一人ひとりに合った介護を行うための情報収集、課題分析の明確化	利用者一人ひとりに合った介護を行うための情報収集、課題分析の明確化	
利用者の人権を尊重し、その人らしい生活を実現するためにどのような介護が必要なのか、あるいはどのような介護サービスが求められているのかを考え、科学的根拠に基づいた情報収集と分析を行うこと	科学的根拠に基づいた情報収集と分析を行うこと	
アセスメントとは、利用者の人権を尊重し、その人らしい生活を実現するためにどのような介護が必要なのか、あるいはどのような介護サービスが求められているのかを考え、科学的根拠にもとづいた情報収集と分析を行いことをいう	どのような介護が必要なのかを考え、科学的根拠にもとづいた情報収集と分析を行うこと	
事実や現状を見る、意識すること、それに基づいた分析、研究だと考えて指導しています 生活を支える専門職ということで、生活を見つめるのですが、生活は私たちにとって当たり前の活動です 当たり前のことに対して、通常は見逃してしまったり、勝手に予測してしまったりすることが多いと思います そのため、1つひとつの活動はその時にしか見ることができない姿であり、意識して事実や現状を見ることを目指しています	事実や現状を見る、意識すること、それに基づいた分析、研究	
利用者が本来もっている力に着目しながら支援に必要な情報を収集し、その人らしく生き生きと元気に生活するために必要なことは何か、どのような支援が必要かをイメージしながらあらゆる可能性(自己実現に近づくプラスの可能性、本人の力を奪うマイナスの可能性)を考え分析する 他科目で学習した知識・技術を活用して分析する⇒生活課題を明らかにする	他科目で学習した知識・技術を活用して分析する	
ICFに基づく多角的な情報収集と分析	ICFに基づく多角的な情報収集と分析	
行動、言動分析	行動、言動分析	
利用者が望む生活を実現するために必要な情報収集と分析	利用者が望む生活を実現するために必要な情報収集と分析	
必要な情報の収集、複数の情報の関連づけと統合化	複数の情報の関連づけと統合化	解釈・関連付け・統合化
情報の収集、情報の解釈・関連づけ・統合化、課題の明確化	情報の解釈・関連づけ・統合化	
収集した情報を「解釈・関連付け・統合化」することで、利用者の生活課題を明確にすること	収集した情報を「解釈・関連付け・統合化」すること	
利用者の介護に必要な情報を収集し、専門的知識・技術を根拠としたものから専門的な視点で分析・解釈を加え、複数の情報を関連付けて統合化することで、どのような介護が必要か生活上の課題を明確にすること	利用者の介護に必要な情報を収集し、専門的知識・技術を根拠としたものから専門的な視点で分析・解釈を加え、複数の情報を関連付けて統合化すること	
1つひとつの情報がもつ意味を専門的な知識や技術を根拠として解釈すること	1つひとつの情報がもつ意味を専門的な知識や技術を根拠として解釈すること	

Q8(1)根拠に基づくアセスメントとは何だと考えますか	コーディング	中項目
必要な情報を収集し、専門的知識・技術を根拠として情報の関連付けと統合化を行う	必要な情報を収集し、専門的知識・技術を根拠として情報の関連付けと統合化を行う	解釈・関連付け・統合化
客観的・主観的な情報収集と課題抽出・分析	客観的・主観的な情報収集と課題抽出・分析	
利用者の情報を収集し、その情報の解釈・関連付け・統合化	利用者の情報を収集し、その情報の解釈・関連付け・統合化をしていく	
利用者の心身の状況、生活の状況、希望、願いなどについて必要な情報を収集する 1 つひとつの情報がもつ意味を専門的な知識、技術を解釈し、複数の情報と関連づけ統合化を行う	1 つひとつの情報がもつ意味を専門的な知識、技術を解釈し、複数の情報と関連づけ統合化を行う	
情報(基本)に基づき分析解釈をすること 利用者の現在の生活の全体像を把握し、情報を知識を活用し理解すること	情報(基本)に基づき分析解釈をすること	
集めた情報から利用者の現実(事実)を推測し、自分で見て、聞いて、関わることによって利用者の希望や思いを解釈すること	集めた情報から利用者の現実を推測し、見聞きして関わることで利用者の希望や思いを解釈すること	
利用者に対して、先入観や偏見を持たずにコミュニケーションを図りながら情報収集を行うこと と同時に観察として主観的観察、客観的観察を行いながら生活課題を明確化することである	先入観や偏見を持たずにコミュニケーションを図りながら情報収集を行うこと	情報収集
必要な情報の収集、複数の情報の関連づけと統合化	必要な情報の収集	
32 項目が理解でき、目的を持った情報収集	目的を持った情報収集	
情報の収集、情報の解釈・関連づけ・統合化、課題の明確化	情報の収集	
利用者の心身の状況、生活の状況、生活に対する希望や願い等について、必要な情報を収集し、利用者の全体像を捉える	必要な情報を収集し、利用者の全体像を捉える	
効果的な情報収集	効果的な情報収集	
利用者のニーズは何か、どのような援助方法があるかを知るために多角的に情報を収集すること、ニーズの明確化	多角的に情報を収集すること	
原則科学的な根拠に基づいた情報を収集すること	原則科学的な根拠に基づいた情報を収集すること	
利用者の状況把握と分析をして課題を明確にすること、事前評価、情報収集	情報収集	
利用者の心身の状況、生活状況基本情報及び、相互作用関係社会支援ネットワーク、多職種の本人や家族の意見、地域住民などからの情報を含め、様々な角度から必要な情報を正確に収集する客観的な情報収集	様々な角度から必要な情報を正確に収集する 客観的な情報収集	
経験や勘に頼るのではなく、専門的な知識を用いてその人にとって必要な支援を導き出すこと	専門的な知識を用いてその人にとって必要な支援を導き出すこと	専門的知識や技術を用いる
アセスメントは、「情報収集」、「情報の解釈・関連付け・統合化」、「課題の明確化」から成り立っています 情報を集めるときの視点や方法、解釈・関連付け・統合化する際の知識や技術、課題を明確化した後の優先順位のつけ方など、随所に福祉の専門知識や専門技術が必要になる この専門知識や専門技術に基づくアセスメントが、科学的な根拠に基づくアセスメントであると考えます	専門知識や専門技術に基づくアセスメント	
利用者の介護に必要な情報を収集し、専門的知識・技術を根拠としたものから専門的な視点で分析・解釈を加え、複数の情報を関連付けて統合化することで、どのような介護が必要か生活上の課題を明確にすること	利用者の介護に必要な情報を収集し、専門的知識・技術を根拠としたものから専門的な視点で分析・解釈を加え、複数の情報を関連付けて統合化すること	
面接、観察、資料に基づく情報収集から利用者を知り、利用者の思いをもとに介護福祉職としての専門知識を加えて言語化し、生活課題を導き出すこと	利用者の思いをもとに介護福祉職としての専門知識を加えて言語化し、生活課題を導き出すこと	
利用者を理解したうえで、なぜその介護なのか、なぜその介護をしているのか、基礎知識をもとに理論的に説明できること	なぜその介護なのか、基礎知識をもとに理論的に説明できること	
1 つひとつの情報がもつ意味を専門的な知識や技術を根拠として解釈すること	1 つひとつの情報がもつ意味を専門的な知識や技術を根拠として解釈すること	
利用者が本来もっている力に着目しながら支援に必要な情報を収集し、その人らしく生き生きと元気に生活するために必要なことは何か、どのような支援が必要かをイメージしながらあらゆる可能性(自己実現に近づくプラスの可能性、本人の力を奪うマイナスの可能性)を考え分析する	他科目で学習した知識・技術を活用して分析する	

Q8(1)根拠に基づくアセスメントとは何だと考えますか	コーディング	中項目
必要な情報を収集し、専門的知識・技術を根拠として情報の関連付けと統合化を行う	必要な情報を収集し、専門的知識・技術を根拠として情報の関連付けと統合化を行う	専門的知識や技術を用いる
さまざまな知識・経験をもとに対象利用者と未来のイメージを共有し、そのイメージに近づくために課題(ニーズ)を明らかにすること	様々な知識・経験をもとに対象利用者と未来のイメージに近づくために課題(ニーズ)を明らかにすること	
利用者の心身の状況、生活の状況、希望、願いなどについて必要な情報を収集する 1 つひとつの情報がもつ意味を専門的な知識、技術を解釈し、複数の情報と関連づけ統合化を行う	1 つひとつの情報がもつ意味を専門的な知識、技術を解釈し、複数の情報と関連づけ統合化を行う	
知識と客観的データにもとづいた、情報収集と分析 生活課題抽出の過程である	知識と客観的データにもとづいた、情報収集と分析	客観的な情報に基づくこと
科学的客観的データに基づいたアセスメント	科学的客観的データに基づいたアセスメント	
事実や現状を見る、意識すること、それに基づいた分析、研究だと考えて指導しています 生活を支える専門職ということで、生活を見つめるのですが、生活は私たちにとって当たり前の活動です 当たり前のことに対して、通常は見逃してしまったり、勝手に予測してしまったりすることが多いと思います そのため、1 つひとつの活動はその時にしか見ることができない姿であり、意識して事実や現状を見ることを目指しています	事実や現状を見る、意識すること、それに基づいた分析、研究	
自分の頭の中ではなく、事実に基づいたもの	事実に基づいたもの	
客観的・主観的な情報収集と課題抽出・分析	客観的・主観的な情報収集と課題抽出・分析	
客観的な情報収集	客観的な情報収集	
客観的に収集した情報やデータなど	客観的に収集した情報やデータなど	
客観的情報、主観的情報を収集し、利用者の課題や願い、支援方法を明らかにすること	客観的情報、主観的情報を収集し、利用者の課題や願い、支援方法を明らかにすること	
教科書的にいうと情報収集などであるが、情報収集だけでなく、全ての観察だと考える 客観的观察だけでなく感情なども含めての観察 観察からの気づき全てがアセスメントと言える	客観的观察だけでなく感情なども含めての観察、気づき全て	
利用者の人権を尊重し、その人らしい生活を実現するためにどのような介護が必要なのか、あるいはどのような介護サービスが求められているのかを考え、科学的根拠に基づいた情報収集と分析を行うこと	科学的根拠に基づいた情報収集と分析を行うこと	科学的根拠に基づいていること
アセスメントとは、利用者の人権を尊重し、その人らしい生活を実現するためにどのような介護が必要なのか、あるいはどのようなサービスが求められているのかを考え、科学的根拠にもとづいた情報収集と分析を行いことをいう	どのような介護が必要なのかを考え、科学的根拠にもとづいた情報収集と分析を行うこと	
原則科学的な根拠に基づいた情報を収集すること	原則科学的な根拠に基づいた情報を収集すること	
正しい情報収取を行い、科学的な分析で生活課題を導く	正しい情報収取を行い、科学的な分析で生活課題を導く	
なぜその介護を必要とし何を目的に行うのかを、専門知識と問題解決思考を用いて説明できること	なぜその介護を必要とし何を目的に行うのかを説明できること	説明できること
一貫性があり言語化して説明できること、明確な評価基準(例えば尺度)が設定されていること	一貫性があり言語化して説明できること	
何らかの指標をもって説明責任が果たせるための方法であり、その能力だと考えます	何らかの指標をもって説明責任が果たせるための方法であり、その能力	
介護行為を言語化し説明するためのツール	介護行為を言語化し説明するためのツール	

(3) 根拠に基づくアセスメントを教育するために工夫していること

Q8 (2)根拠に基づくアセスメントを教育するために工夫していることはありますか。

Q8(2)根拠に基づくアセスメントの教育で工夫していること	コーディング	中項目	大項目	
事例や実際の体験談を取り入れる また、実際の現場から講義に来ていただく	実際の現場の体験談を伝える	現場の話でイメージを持つ	イメージや背景、知識を身につける	
私自身が、臨時免許教員であるため現場での実践してきた介護技術を含め、症例など具体的にイメージを持たせながら説明していくことで理解を促すことができるよう工夫している	実際の現場事例でイメージを持たせる			
日本人の文化、気質の違いのりかい	日本人の文化、気質の違いの理解	人や利用者の背景を理解する		
人間、高齢者の生きてきた人生とは何か、映画などの DVD 視聴	人間や高齢者の理解に映画などを視聴			
時代背景が現在とは全く違うので、利用者の生きてきた時代・生活背景を理解するために、昭和初期～の出来事などを事前に学習させる	利用者の時代背景の事前学習			
要介護高齢者等の画像、動画、実際の対象者を観察する授業を設けている	要介護高齢者等の画像、動画、対象者を観察させている			
介護に関する事柄以外の題材をアセスメントに活用する	介護以外の題材をアセスメント	介護以外の身近な情報収集から始める	徐々にアセスメントに慣れる	
広く情報収集する姿勢を理解する為に、色んな人(多くの人)にインタビュー形式で、情報収集する体験 身近な事例から、アセスメントする(まずは個人ワーク→グループワークの順)	インタビュー形式での情報収集体験			
高校生は生活や人生経験が少なく、人間を見る、人の生活を見る、人の話を聞く、人の人生について聞くという事に慣れていません そのため、何気ない会話や様々な場面からその人の背景などの分析をするのが難しいです 事例では、できるだけ文章ではなく映像や実在する人を対象として検討します	映像や実在する人物を用いた事例検討から文章事例へ移行			
まずは「クラスメイトの旅行先提案」の演習でアセスメントのイメージを作り、紙上事例や映像事例を活用して個人ワーク→グループワークで意見交換→全体共有(発表)を行い、考え方・視点などの確認を行っている	「クラスメイトの旅行先提案」を例題演習としてイメージ作りをする			
学生たちの日常生活を例に出し、身近なところから理解を深められるようにしている	学生の日常生活を例に身近なところから理解			
いきなり要介護高齢者のアセスメントをせず、身近な人物や自身をアセスメントしてみる	身近な人物のアセスメントから始める			
教員の情報収集をすること	教員の情報収集			
事例を用いたり、教員自身を利用者に見立てて実際にアセスメントを行うなど、実践的な内容を取り入れるように工夫している	教員自身を利用者に見立ててアセスメント			教員を題材にアセスメント
誌上事例や教員が高齢者(麻痺など設定)となり、アセスメントを行う	教員が高齢者役となりアセスメントを行う			
授業では、級友の困りごと、どのような生活をしたいかなどの望みを聞き、それを目標と捉える その上で級友から収集した情報より目標達成のための生活課題を相手が納得できるよう根拠立てて説明できるように取り組む 介護実習では、利用者の情報収集を行い、ICFをベースにしたアセスメントシートに記録 実習後の授業で分析・統合し、利用者の生活課題を導き出す	学生同士で利用者に見立てて演習			学生同士でアセスメントを行う
情報の収集の仕方をコミュニケーションから行う場合、生徒同士で互いの困っていることや望みを聞き出すことを演習で行っている	生徒同士でお互いの情報を聞き出す演習			

Q8(2)根拠に基づくアセスメントの教育で工夫していること	コーディング	中項目	大項目
友人のアセスメントを取る、事例の課題のアセスメントを取る、施設でアセスメントを取るなど順を追いつながら行っています	友人のアセスメントを行う	学生同士でアセスメントを行う	徐々にアセスメントに慣れる
事例を活用、最初は自分自身について、又はクラスメイト同士で互いにアセスメントしてみる等をしている 介護実習においては利用者に対して事実をしっかりとみるように言っている 方法については模索中	クラスメイト同士で互いにアセスメント		
最初は単語や一文程度を題材に、科学的に解釈できる事柄を言い合うなど、繰り返しトレーニングをしている	段階的に難易度を上げる	情報量を段階的に増やして慣れる	
事例をつかって「情報の解釈・関連づけ・統合化」をする まず少ない情報で分析を行い、その後いくつかの情報を追加して再度「情報の解釈・関連づけ・統合化」をする 内容の変化を確認し、情報の重要性を認識する 介護実習Ⅱの施設実習後、事例を持ちよりグループワークを実施 グループで1つの事例を選び、グループごとにアセスメントの再検討を実施する	情報量を段階的に上げて情報の重要性を認識させる		
友人のアセスメントを取る、事例の課題のアセスメントを取る、施設でアセスメントを取るなど順を追いつながら行っています	友人、事例、実習と段階的に進める		
提示する情報の量を段階的に増やす 思考過程を可視化すること アセスメントシートは養成過程2年間共通のものを使用する 授業時に関連する科目のテキストを準備するように指導している	提示する情報量を段階的に増やす		
学生自身への自己覚知を行う	自己覚知を行う	自分の主観の偏りや他者との違いを自覚	情報を客観的に捉え根拠づける力を育てる
物事の捉え方や考え方には自分なりの癖がある(人それぞれ感じ方、受け止め方はちがう)ことを自覚させ、自身の主観や判断を入れない状況の観察しその状況の言語化をさせる	主観の偏りを自覚させ、主観を除いた客観的な情報を言語化させる		
想像力の低下・核家族など、人と人との付き合いの希薄化 年々、感じている学生の状況から、まずは色々な表情をしている人物のイラストを見て、学生たちの価値観や違いを感じる そのイラストを見て状況を考える	学生の感じ方の違いを認識させる		
自分の考えだけでなく、他者の意見を聞くことで自分の考える「普通」や「当たり前」がそうではない場合があることを知ることができるように取り組んでいる	他者の意見を聞き、自分の普通が当たり前ではない場合があることを知る		
学生自身に自分のアセスメントをさせている→まずは、自分自身の介護過程を立案させている 学生は自分自身のことを深く考えるきっかけとなり、理解もし易いと意見が多かった 他者理解をする前に、自己を知ることが重要(自己覚知)	学生自身をアセスメントさせ自己覚知させる	意見交換しながら情報を客観化する	
グループワークや演習を多く取り入れ、互いに学び合い多角的に物事を判断できるような構成にしている	多角的に物事を判断できるようなグループワーク		
その人が望んでいることが、ニーズなのかデマンドなのかを把握するために、さまざまな意見を出し合い、客観的に情報をとらえられるようにグループワークの機会を多く取り入れている	グループワークで様々な意見を出し合わせ情報を客観化する		
事例を用いたワークシートを活用し、ペアワークやグループワークなどを取り入れて、生徒の主観だけにならぬよう客観的なアセスメントができるように工夫している	主観にならないようグループワークで客観化させる		
1つのものごとをみんなで掘り下げていくことをしている (例) 食事が食べられない→なぜをみんなで考えて→さらになぜをたくさんあげていく	グループで”なぜ”を繰り返させる	事象や情報を客観的に捉え根拠づけを行う	
分析の段階で、起こっている事象の根拠となるものをテキストや文献で調べさせ、文章化させている 状況に応じて根拠文献も提示させる	分析時に根拠となる文献の活用をさせる		
一つの情報にこだわらず複数の手段を用いて情報の信頼性を高めること 持っている知識や経験をもとに根拠のある推測を行いニーズの抽出を行うこと	情報の信頼性を高めて根拠あるニーズを抽出させる		
なぜ、どうしてという視点を持って言語化して記録するように伝えている	疑問を持ち言語化して記録することを伝える		

Q8(2)根拠に基づくアセスメントの教育で工夫していること	コーディング	中項目	大項目
利用者の課題を見つけることだけに集中するのではなく、利用者についてどのような人なのかを多角的な視点で情報収集するよう教授する、本人、家族、他職種など、利用者に関わる人から情報収集を行う	利用者について多角的な視点で情報収集するよう教授する	事象や情報を客観的に捉え根拠づけを行う	情報を客観的に捉え根拠づける力を育てる
情報収集する際に、先入観等を排除した客観的な事実となるデータを収集すること また、一つひとつの情報が持つ意味を考え、それらと関連する内容を意識しながら構成していく思考過程を重視	客観的な情報収集と情報の関連付けを意識させる		
客観的情報と主観的情報を区別させる	客観的情報・主観的情報を区別させる		
生徒に対して、手に入れた情報に対して多角的な視点で見えるよう指導している	多角的な視点で見る指導		
生徒の考えた観察の視点がどのような項目に該当するのかというような授業を実施し、観察力を高める工夫を介護実習の前に行っています	観察の着眼点や事実と考察を弁別するための観察力を高める		
一つの情報だけでなく、いくつかの情報を見比べることを指導している	複数の情報を見比べさせる		
なぜ、なぜ、なぜと3回掘り下げる	なぜを繰り返す	事象や情報を客観的に捉え根拠づけを行わせる	
事実だけを捉えられるトレーニングを重ねている	事実を捉えるトレーニング		
事例による学習の中で、具体的な疾患名や障がい提示し、その疾患や障がいのある人に介護をする際の留意点は何かなどを考えさせることにより、科学的根拠に基づくアセスメントを意識できるようにしている	事例中の疾患や障害に関する知識と結びつけて考えさせる	根拠を持つために他科目の知識等を関連づける	
他の科目で学んだ知識を再確認しながら、持っている知識と事例が統合できるよう他の科目との関連性を意識すること	他科目で学んだ知識と事例の関連性を意識させる		
「介護に必要な気づきの視点」を6つの視点を踏まえて学習させ、気づいたものをピックアップしている	介護に必要な気づきの6つの視点に応じたピックアップ	モデル・視点を踏まえた教育	アセスメント時の視点を養う
「空・雨・傘」理論で論理的なストーリーを作り、集めた情報を分析・解釈し、文章にするトレーニングをしている	空・雨・傘理論の活用で分析のトレーニング		
介護過程の授業のみならず、生活支援技術においても、場面によって③に示す「自立、快適、安全の視点」に応じた声かけや支援のバリエーションを考える機会をつくる	自立、快適、安全の視点を基にして考えさせる		

(4) 根拠に基づくアセスメントを教育するためのツールや指標

Q8 (3)根拠に基づく「アセスメント」を教育するために用いているツールや指標には、どのようなものがありますか。

Q8(3)根拠に基づくアセスメントを教育するためのツールや指標	コーディング	中項目
ICF の構成要素	ICF の構成要素	ICF
ICF	ICF	
ICF	ICF	
ICF	ICF	
ICF	ICF	
基本的には、ICFの視点に基づいて「アセスメント」をしていくように指導をしている	ICF	
ICF	ICF	
考え方の基本として、ICF を用いている	ICF	
ICF	ICF	
ICF は、情報に偏りや不足は無いか確認するために使用しています	ICF	
ICF	ICF	
「ICF」	ICF	
ICF の活用	ICF	
ICF 生活機能の構成要素の相互作用、している活動できる、活動する活動	ICF	
ICF	ICF	
ICF	ICF	
ICF	ICF	
ICF	ICF	
ICF	ICF	
ICF	ICF	
テキストに沿った ICF 視点からの指標	ICF 視点からの指標	
ICF モデル	ICF モデル	
ICF など	ICF	
ICF	ICF	
マズローの 5 段階欲求階層説～優先順位の指標として	マズローの 5 段階欲求階層説	マズローの 欲求階層説
マズローの欲求階層説	マズローの欲求階層説	
マズロー	マズロー	
認知症高齢者の日常生活自立度	認知症高齢者の日常生活自立度	認知症高齢者の日 常生活自立度
認知症高齢者の日常生活自立度判定基準	認知症高齢者の日常生活自立度判定基準	
研修で教えていただいた P.E.I.P も参考に組み込んでいます	P.E.I.P	P.E.I.P
「P.E.I.P」	P.E.I.P	
アセスメントの 3 つの視点に関連づけて思考する 自立の視点、快適の視点、安全の視点	自立の視点・快適の視点・安全の視点	自立、快適、安全 の視点
自立、快適、安全の視点(中央法規出版のテキストに記載された内容)	自立、快適、安全の視点	
障害高齢者の日常生活自立度	障害高齢者の日常生活自立度	障害高齢者の 日常生活自立度
WHO 健康の定義	WHO 健康の定義	WHO 健康の定義
「ヘンダーソンの看護理論」	ヘンダーソンの看護理論	ヘンダーソンの 看護理論
認定調査	認定調査	認定調査
DBD13	DBD13	DBD13
バーセルインデックス	バーセルインデックス	バーセル インデックス
LIFE データ項目等	LIFE データ項目	LIFE データ項目

(5) 根拠に基づく計画とは何だと考えますか

Q9 (1)根拠に基づく「計画」とは何だと考えますか。

Q9(1)根拠に基づく計画とは何だと考えますか	コーディング	中項目
利用者の望む生活を実現するために、アセスメントで得た情報に基づいた、そのための援助方法	アセスメントで得た情報に基づいた本人のための援助方法	アセスメントから得られた結果が反映されたもの
ICFの視点を基に導き出した生活課題解決のため、個別化の原則に従って立案された計画だと考えている 計画の立案においては、学習指導要領で示された「尊厳の保持や自立支援」「多職種連携」の視点到留意し、科学的根拠に基づいた具体的かつ安全の視点が大切であると指導している	ICFの視点を基に導き出した生活課題解決のため、個別化の原則に従って立案された計画	
アセスメントの生活課題で、すでに根拠となる課題が導き出されているかがポイントで、課題を基に計画を立案できているか 計画の中身もなぜそれが必要なのかが言えること	アセスメントで根拠となる課題が導き出され、課題を基に立案された計画	
利用者の現状を把握し、明確になった課題を解決するための方法のこと	利用者の現状を把握し、明確になった課題を解決するための方法	
アセスメントによって得られた情報・課題等(←これが根拠となる)に基づき、利用者が望む「よりよい生活」「よりよい人生」を実現するという計画	アセスメントによって得られた情報・課題等に基づき、利用者が望む「よりよい生活・人生」を実現する計画	
根拠に基づくアセスメントによって、明らかになった生活課題を解決するための目標(短期・長期)や具体的援助内容を、福祉の専門知識や専門技術を取り入れて作成した計画だと考えます	根拠に基づくアセスメントから得た生活課題を解決するための目標や具体的援助内容を、福祉の専門知識や専門技術を取り入れて作成したもの	
得られた直接的・間接的情報を解釈・分析し、ニーズ・課題として位置づけ、利用者の方の環境因子や個人因子などを含めて介護の計画を立てること	アセスメントにより得られたニーズ・課題を背景因子を含めて立てた計画	
分析内容に基づいた、矛盾のない計画	分析内容に基づいた、矛盾のない計画	
利用者の介護に必要な情報を収集し、専門的知識、技術を根拠にしたものから、専門的な視点で分析・解釈を加え、複数の情報を関連付けて統合化することで、どのような介護が必要か生活上の課題を明確にし、その課題を解決するのが根拠に基づく計画だと考える	アセスメントから得られた課題を解決する計画	
なぜそのケアが必要なのかという根拠であるアセスメントの結果が反映されており、5W1Hの記載がされている 内容は具体的に実現の可能なものであり、誰が見ても統一したケアの実施ができるチームで統一したケアを行うことで望む生活の実現につなげることでできるもの	アセスメント結果が反映され、具体的に実現可能なもの	
アセスメントした結果をもとに、利用者の性格、価値観、優先順位等を加味して作成された計画	アセスメントした結果をもとに、利用者の性格、価値観、優先順位等を加味して作成されたもの	
アセスメントで見つかった課題を解決するための計画 目標設定と目標達成までのプログラム	アセスメントで見つかった課題を解決するための計画	
利用者の情報を集め、課題を分析した後、何をめざし、何のために、いつ、何を、どのような時に、どのような方法で実施するかを、利用者の意思を確認しながら決めるものだと考える	アセスメント後に何をどのような方法で実施するかを利用者の意思を確認しながら決めるもの	
前述の根拠に基づく「アセスメント」をふまえて関連した介護計画であり、チームの指示書として客観的に実践および評価できる計画のこと	アセスメントをふまえて関連した介護計画	
アセスメントによって明確にした生活上の課題をもとに利用者の希望する生活を実現するための計画	アセスメントで得た課題をもとに利用者の希望する生活を実現するためのもの	
計画とは、利用者の情報を集め、課題を分析した後、何をめざし、何のために、いつ、何を、どのような時に、どのような方法で実施するかを、利用者の意思を確認しながら決めるものである	アセスメント後に何をどのような方法で実施するかを利用者の意思を確認しながら決めるもの	
利用者の生活全般や思いをアセスメントを通して導き出し、根拠を示す	アセスメントを通して導き出し、根拠を示すもの	

Q9(1)根拠に基づく計画とは何だと考えますか	コーディング	中項目
目的を明確化したうえで合理的根拠、エビデンスに基づくものであることが大切である	目的を明確化したうえで合理的根拠、エビデンスに基づくもの	アセスメントから得られた結果が反映されたもの
アセスメントで得られた情報を解釈・分析された計画	アセスメントで得られた情報を解釈・分析された計画	
解決すべき課題に対する解決策と積極的な対策を援助方法にしてまとめること	課題に対する解決策を援助方法としてまとめたもの	
抽出された生活課題に対して、課題を解決するための目標を設定し、その目標を達成するための内容と方法	課題を解決するための目標を設定し、その目標を達成するための内容と方法	
情報収集を元に、利用者のニーズや改善方法をICFの観点も入れながら構築していく	利用者のニーズや改善方法をICFの観点も入れながら構築していくもの	
「情報の解釈・関連づけ・統合化」によって導き出した生活課題を解決するための介護について計画する 「情報の解釈・関連づけ・統合化」が計画された介護内容の根拠となることを説明する	アセスメントで得られた生活課題を解決するための介護について計画したもの	
明確になった生活課題を解決するもの	明確になった生活課題を解決するもの	
アセスメントで明確になった課題を解決し、その人らしい生活の実現につながるもの	アセスメントで明確になった課題を解決し、その人らしい生活の実現につながるもの	
明確となった生活上の課題を解決するために目標設定し、具体的援助内容と支援方法を組み立てること	明確になった生活課題を解決するために目標設定し、具体的援助内容を組み立てること	
アセスメントに基づいて、課題を明確にし、計画を作成することで根拠のある介護につながる	アセスメントに基づいて課題を明確にして計画を作成すること	
利用者のニーズに応じた計画の作成	利用者のニーズに応じた計画の作成	
アセスメント(本学)において現状および目標達成の可能性を分析し、計画の根拠とする	アセスメントを計画の根拠とする	
アセスメントで見出した課題について計画を考える また、ケアマネが考えたケアプランを軸に計画を立てると考える	アセスメントで得た課題について計画を考える	
介護計画の立案では、アセスメントによって抽出した生活課題を解決するための「介護目標」を設定し、その介護目標を達成するために必要な支援、内容及び支援方法を組み立てる	アセスメントで得られた生活課題を解決するための介護目標を達成するために必要な支援内容を組み立てる	
計画に必要なのはニーズや生活課題を抽出がしっかり出来ていないとその計画の土台が安定しない それをベースとして長期目標というアウトカムを設定し、それを達成するためのスモールステップの設定、それらに基づいた内容を示したもの すべての人が見て分かりやすいケアの設計図	アセスメントでニーズや生活課題の抽出がしっかりできている計画	
生活課題を解決するための介護目標の設定と、その目標達成のための具体的内容・支援方法	生活課題を解決するための介護目標と具体的支援内容	
アセスメントから適切な情報を抜き出し計画をたてる	アセスメントから得た情報を抜き出し計画する	
アセスメントによって明確化された生活課題を解決するための計画	アセスメントによって明確化された生活課題を解決するもの	
アセスメントにより明確になった生活課題を解決、軽減に向けた目標の設定と目標達成、そのための支援内容、方法を書式にあらわす	アセスメントで明確になった生活課題を解決、目標、支援内容を表したもの	
情報を解釈し生活課題を明確にした上での計画立案	アセスメントで生活課題を明確にした上での計画	
アセスメントで明確になった課題に対して、立てるもの	アセスメントで明確になった課題に対して、立てるもの	
アセスメントで導き出された課題に対して、目的を明確にした上で立案する支援計画	アセスメントで得た課題に対して目的を明確にして立案するもの	
根拠あるアセスメントによって明確になった生活課題を解決するために、介護目標の設定とその目標達成のための具体的な支援内容・支援方法を書き示すこと	アセスメントで得た課題を解決するために介護目標と支援内容を書き示すこと	

Q9(1)根拠に基づく計画とは何だと考えますか	コーディング	中項目
利用者の情報から専門職として視点で分析し導き出したニーズ、支援方法	アセスメントで導き出したニーズ、支援方法	アセスメントから得られた結果が反映されたもの
アセスメントにて導き出した思いや課題、その解決を目指した具体的で実現可能な内容がプランされていること	アセスメントで得た課題の解決を目指した具体的内容があること	
アセスメントの結果と連動性があること	アセスメントの結果と連動性があること	
アセスメントから見出させた課題を解決することのできる計画	アセスメントで得た課題を解決できるもの	
アセスメントに基づく計画	アセスメントに基づく計画	
利用者やその家族の状況や希望を踏まえ介護サービスの目標を設定し内容をまとめたもの	アセスメントから介護目標を設定してまとめたもの	
アセスメントから導き出された課題に取り組み、目標達成するための具体的な介護の支援内容を形成すること	アセスメントで得られた課題に取り組み、目標達成のための介護内容を形成すること	
生活課題の解決に向けて目標が設定され、目標達成に向けて、利用者が無理なく進められる計画	生活課題の解決に向けた目標、利用者が取り組めるもの	
アセスメントした事柄から、既存の知識と、新たに必要とされる知識を用いながら、ニーズや支援内容を検討し、生活に密着した現実的な目標と方法(時間や回数の目安などがあれば)を具体的に可視化すること	アセスメントから目標と方法を具体的に可視化すること	
作成したアセスメント表を基にして、利用者とともに考えられた計画であり、他職種で共有できる内容であること	利用者とともに考えられた計画であり、他職種で共有できる内容であること	チームで統一的なケアが行えるもの
利用者の生活課題を解決するための目標設定(長期・短期)と、達成のための介護内容を書式として表し、チームで共有するものである ～個別援助計画としての重要な位置付け	チームで共有するもの	
利用者の思いから課題を抽出し、それらを解決できるよう、長期・短期目標を設定し、実際に介護福祉職としてどのように援助すれば良いのか、統一したケアが行えるようにしたもの	課題を解決できるよう長・短期目標を設定し、統一したケアが行えるようにしたもの	
内容は具体的で実現の可能なものであり、誰が見ても統一したケアの実施ができるチームで統一したケアを行うことで望む生活の実現につなげることのできるもの	誰が見ても統一したケアの実施ができるもの	
ケアの標準化やケアの個別化の視点を持ち、必要な支援の明確化 多職種連携を図ること	ケアの標準化やケアの個別化の視点を持ち、必要な支援の明確化	
前述の根拠に基づく「アセスメント」をふまえ関連した介護計画であり、チームの指示書として客観的に実践および評価できる計画のこと	チームの指示書として客観的に実践および評価できるもの	
利用者が望むよりよい生活 利用者が望むよりよい人生 を実現させるもの 計画を立てた人以外の誰もが計画を実施できるように作成する	計画を立てた人以外の誰もが計画を実施できるもの	
他にも、チームとしての方向性を確認できるものでもありと考えます 学校ではなかなか身を持って体験することが難しいですが	チームとしての方向性を確認できるもの	
すべての人が見て分かりやすいケアの設計図	全ての人が見てわかりやすいケアの設計図	
アセスメントによって明確化された生活上の課題に対して、目標、支援内容・方法など多職種連携も合わせて立案する	アセスメントで明確化した生活課題に対して目標、支援内容などを多職種連携で立案する	
チームで共有するため、計画した本人だけが分かる表現方法ではなく、チームメンバーが理解でき、実施できる表現であることも重要である	チームメンバーが理解、実施できる表現であること	
「計画」は、介護福祉士であれば「誰でも実践できる」ことが必要であり、商品の統一性と「なぜその支援が必要か明確に説明できること」が計画の科学性と捉えている	介護福祉士であれば誰でも実践できること	
本人の思いが十分反映され、尚かつ実現できるもの	本人の思いが十分反映され、尚かつ実現できるもの	利用者の望む生活が反映されているもの
介護福祉士として生活支援をする専門職であることから、利用者の望む生活、生活の質の向上を目指す内容 また、身体介助においては、本人の自立を促せるような、より具体的な計画を作成する	利用者の望む生活、生活の質の向上を目指す内容	
対象利用者の、なりたい姿を文章化した、長期目標であると考えます	対象利用者のなりたい姿を文章化した、長期目標	
利用者の「よりよい生活」「よりよい人生」の実現に向けて介護実践を展開するための指針	利用者のよりよい生活・人生の実現に向けて介護実践を展開するための指針	

Q9(1)根拠に基づく計画とは何だと考えますか	コーディング	中項目
利用者が望むよりよい生活、利用者が望むよりよい人生を実現させるもの、計画を立てた人以外の誰もが計画を実施できるように作成する	利用者が望むよりよい人生 を実現させるもの	利用者の望む生活が反映されているもの
対象となる人の生活の質の向上につながるツールであると考えて指導をしています 基本的には、再アセスメントを繰り返していくことが前提であると思います 他にも、チームとしての方向性を確認できるものでもあったと考えます 学校ではなかなか身を持って体験することが難しいですが	対象となる人の生活の質の向上につながるツール	
利用者のニーズに適している、利用者の ADL、コンプライアンス	利用者のニーズに適している	
利用者の生活課題を利用者本人も納得した上で、よりよい生活・人生が送られるように具体的に道筋を立てること	よりよい生活・人生が送られるように具体的に道筋を立てること	
利用者が自分らしく生活しやすい環境にするもの	利用者が自分らしく生活しやすい環境にするもの	
利用者がその人らしい生活を行う上で必要な 1 日を過ごす上での援助内容	利用者がその人らしい生活を行う上で必要な 1 日を過ごすための援助内容	
利用者に必要な事であり生活のためのもの	利用者に必要なこと、生活のためのもの	
相手が望む生活を実現するために、納得して合意いただける提案	利用者が望む生活を実現するために納得、合意できる提案	
利用者中心のニーズに応じた継続的支援に結びつくケア項目	ニーズに応じた継続的支援に結びつくケア項目	
なぜ「その人」に「その計画」が必要なのか明瞭であり、生活にとけ込める内容であること	なぜ「その人」に「その計画」が必要なのか明瞭であること	説明責任が果たせるもの
まさに、「説明責任」が果たせるかという点だと思います また、測定可能な計画(評価を見据えたもの)であることも重要な要素になると考えます	説明責任が果たせるかどうか	
介護計画は、本人や家族に説明と同意のもと、利用者一人ひとりに応じた介護方針や内容を共有するものである なぜ、その介護が必要かを言語化しないと伝わらない	本人や家族に説明し同意を得るために共有するもの	
「なぜその方法を選択するのか」「なぜその期間で実施するのか」など理由を説明することができる	介護の方法と期間の理由を説明できるもの	
この計画を行う理由が説明でき、対象利用者が「やってみたい」と思えるもの、また「アセスメント」において理由付けができていくもの	計画を行う理由が説明できるもの	
「なぜその支援が必要か明確に説明できること」が計画の科学性と捉えている	支援の必要性を説明できること	
介護福祉専門員の作成するケアプランに沿い、利用者のニーズを捉え、生活課題を解決するためのプロセスが明確に示されているもの	ケアプランに沿って、利用者の生活課題を解決するためのプロセスが示されているもの	ケアプランに沿ったもの
ケアマネが考えたケアプランを軸に計画を立てると考える	ケアマネが考えたケアプランを軸に計画を立てる	
自分がしたい、やりたい介護にならないために必要	自分がやりたい介護にならないためのもの	その他
なぜ「その人」に「その計画」が必要なのか明瞭であり、生活にとけ込める内容であること	生活にとけ込める内容であること	
測定可能な計画(評価を見据えたもの)であることも重要な要素になると考えます	測定可能な計画であること	
アセスメントには介護福祉独自の視点を活用しますが、計画では近接領域も含め、さまざまな知見を活用して、適切な支援計画の根拠をつくる 例えば、90 歳代の高齢者の余暇活動として適切な時間や回数など	近接領域も含め、さまざまな知見を活用して、適切な支援計画の根拠をつくる	
対象利用者が「やってみたい」と思えるもの、また「アセスメント」において理由付けができていくもの	利用者がやってみたいと思えるもの	
実施可能な計画作成	実施可能なもの	

(6) 根拠に基づく計画を教育するために工夫していること

Q9 (2)根拠に基づく「計画」とを教育するために工夫していることはありますか。

Q9(2)根拠に基づく計画を教育するために工夫していること	コーディング	中項目	大項目
学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」の視点に留意し、グループワークやディスカッションを多用した授業を展開している 具体的には、介護現場で実際に行われているカンファレンスを模擬体験する中で、自らが立案した計画を言葉で説明し、質疑応答や議論の時間を多く取っている このことにより、言語活動の充実を図るとともに、専門職として科学的な根拠に基づく具体的な計画を共に考える機会としている	自らが立案した計画をグループディスカッションして言語活動の充実を図る	作成した計画を学生同士で確認	より精度の高い計画立案のための工夫
学校の授業でも、学生同士で確認し合うようにし、複数の目で根拠のある計画になっているか確認している	学生同士で確認し合い、根拠のある計画になっているか確認させる		
授業では、各自が計画したものを介護職役と利用者役のペアで実践し、振り返り・評価を行い、立案した計画に無理や矛盾がないかを確認し、修正する必要がある場合は修正する	学生ペアになり互いの計画に無理や矛盾がないか確認して必要に応じて修正している		
事例を用いたワークシートを活用し、ペアワークやグループワークなどを取り入れて、生徒同士で計画の内容を確認できるよう工夫している	ペアワークやグループワークにより生徒同士で確認させる		
上事例や映像事例を活用して個人ワーク→グループワークで意見交換→全体共有(発表)を行い、考え方・視点などの確認を行っている 実際に計画したものを想定して実施してみ、第三者も計画通り実施できるか、利用者の生活に不都合がないか確認させている モデルプランを参考にする、作成した計画を閲覧し他者と意見交換して視野を広げる、計画のプレゼン、計画に基づいて実施してみるなど	グループワークによる意見交換で考え方、視点の確認を行い、計画に不備がないか確認させる 作成した計画を他者と意見交換して視野を広げる		
生活課題を解決するために行う具体的援助について、その援助内容が課題の解決につながる根拠があるかを考えて計画を立てさせるようにしている また、具体的援助内容を添削する際にも、そういった視点で見るとしている	根拠があるかを考えて計画を立てさせる		
分析内容、目標、計画、評価の視点が矛盾なく、筋の通った内容になっているか確認	分析内容や目標に矛盾がなく筋が通っているか確認	根拠に基づく計画	
計画表に、「何のためにこの計画を行うのか」を再度記入させている	計画表に「何のためにこの計画を行うのか」を再度記入させる		
生活支援技術、こころとからだのしくみなど、他科目で援助に対しての根拠(意味づけ)を考えながら、教育している	他科目の学びを根拠づけて考えるよう教育している		
生活支援技術、こころとからだのしくみ、障害の理解、認知症の理解のテキストに示されている知見を取り入れた計画にする	他科目の知見を取り入れた計画にさせる		
生活支援技術の基本的な介助手順と関連づけて具体的な計画を立案するようにしている	他科目と関連付けて立案	現実的で具体的な計画を立案	
課題を解決した姿のイメージを作る、現実的であること	現実的であること		
望む生活の実現へ向けての目標を実現するために実現可能な小さな目標を分割して設定していくイメージをさせる	実現可能な小さな目標を分割して設定させている		
学生には、①具体的に書く②実践可能なこと③個性をとらえ介護する際の留意点、注意することなどを書く	具体的で実現可能なことを書かせる		
達成可能な目標を設定する	達成可能な目標を設定させる		
実現および実施可能な計画づくりを意識させている	実施可能な計画を意識させる		
具体的であること	具体的であること		
ひとりの利用者にひとりの介護福祉職が関わるだけでなく、複数の職員が関わることを想定し、より個別的により具合的に立案することを指導している 統合化し、本人家族の意向、安全性など優先順位を決めながら計画立案する	個別的、具体的に立案することを指導		

Q9(2)根拠に基づく計画を教育するために工夫していること	コーディング	中項目	大項目
5W1Hを意識して計画を作成、1 つひとつの支援の手順を細かく記載	5W1Hを意識し、細かな手順を記載させる	わかりやすい書き方の指導	より精度の高い計画立案のための工夫
介護計画を、介護福祉職の誰もが、実践継続できるように 5W1Hを用いて記すこと	5W1Hを用いて記させる		
何故その支援が必要なのか他者に伝わるように言葉で表せるように指導している	他者に伝わる表現で表すよう指導		
具体的な数値や目で見てわかることなど、具体性をもたせること	具体的な数値や目視できることなど具体性を持たせる	客観的評価が可能な具体的画	
内容は変化の観察をすることができ、測定が可能な内容にしていく 数値化したり観察の基準を設ける 写真等に残していく	観察、測定可能な内容にして、数値化、観察基準を設ける		
自立と利用者のストレングスの視点、優先順位、計画の具体性(数値化を用いる)など	計画の具体性(数値を用いる)など		
Q8 の回答にあるアセスメント能力の育成に力を入れている 利用者が抱える問題の所在を明らかにすることが一番難しく、問題の所在が明らかになると計画等次の段階が立てやすくなると考えている これについて参考にする考えとして「55 分は問題を定義することについて考えることに費やす そして、残りの 5 分でそれを解決しようと試みるだろう」というアインシュタインの言葉(諸説ある)がある アセスメントによって得られた情報や課題を根拠に、計画を立てるようにしている	アセスメントに大半の時間を費やして計画を立てさせている	計画立案のためのアセスメントの重要性を教授する	
学生自身が「したい」支援にならないよう、アセスメントによって明らかになった根拠をもとにした計に画なること	学生の主観ではなく、アセスメントを根拠に計画立案させている		
根拠に基づく「計画」を立てるには、しっかりとしたアセスメントが必要であることを教授する	アセスメントの重要性を教授する		
情報収集、分析などのアセスメントとの関連性が必要不可欠なため、介護過程の展開は一方通行ではなくアセスメント⇔計画など、振り返りながら立案する視点に留意している	アセスメントのと計画立案の関連性が必要であることに留意している		
計画を立案する前に課題の関連付け・統合化をすることで、課題の明確化し、根拠ある内容になっているか視覚化する	計画立案前のアセスメントを視覚化する		
アセスメントをしっかり行い、根拠を明らかにしながら計画を考えさせる	アセスメントで根拠を明らかにして計画を考えさせる		
グループワークで他者と連携して計画を立案する	グループワークで他者と連携して立案	学生同士で意見交換をして計画を立案	
1 人の人を考えてその人のために計画立案できるよう、まずは身近な友達同士などから取り組む	身近な友達同士で計画立案する		
介護計画立案のなかでは、長期目標、短期目標とその期間を設定する目的を理解しにくい様子がみられるため、その後の実施と評価をイメージしながら設定するよう促している	実施と評価をイメージしながらの立案を促す	計画の後の介護過程プロセスを意識化	
介護計画を立案、実践することで対象者がどのようになったのかを動画で確認することを教育内容として組み込んでいる	計画を実施後に対象者がどうなったかを動画で確認する		
過去の学生が取り組んだ(作成)事例を授業の中で話している	過去の学生が取り組んだ事例を授業中に話す	過去の学生の計画を事例	
授業の中では事例を用いての「計画」としてしか実施することができないため、教科書の事例だけでなく、卒業生等が計画したプランを事例化している	卒業生の計画を事例として活用		
ほとんどの学生が文章化できないため、定型文を例示し、体裁を整えるように指導している(最低限)	定型文を例示して体裁を整えるよう指導	計画立案に取り組むハードルを下げる	
模範例を用いて説明をする	模範例を活用		
動画や実習などイメージが付きやすいようにしています	動画や実習でイメージを持たせる		
「根拠」となるものの例を提示する	根拠となるものを例示する		
学生が創造しやすいテーマの選定	学生が創造しやすいテーマ選定		
わかりやすく、取り組みやすい事例の活用	取り組みやすい事例の活用		
実際により良い方向に変わった介護計画の例を参考にして授業を実施している	好事例を参考にする		

Q9(2)根拠に基づく計画を教育するために工夫していること	コーディング	中項目	大項目
実際の現場での体験、経験談を活かして伝えと、よりリアリティがあり生徒には伝わっていると思う	教員の現場体験、経験を活かして伝える	計画立案に取り組むハードルを下げる	計画を書けるようにする工夫
計画作成で Google のジャムボードを活用して言語化、共有	Google のジャムボードを活用して言語化し共有		
利用者の方がどのように毎日過ごしていて、生きがいや満足感を何で感じているのかを介護者が考える・イメージできるようにすることを大切にしている 介護計画を実践することで、よりその人らしく生き生きと生活できる、また、それを継続できるのか考えるよう伝えている	介護計画の実践がその人らしい生活につながるかを考えさせる	利用者のための計画であることを意識づける	計画の意義を伝える
利用者の生活歴とその時代の日本における生活スタイルの理解、日課として継続可能なものであると同時に、できる限り利用者自身に日常生活を送る上で必要な動作につながる計画を考えさせる	利用者の日常生活で必要な動作につながる計画を考えさせる		
主体が介護者とならないようにすることを常に伝えています また、レクリエーションを実施して1回で何か成果や結果を得ることに偏らないことを意識させています 生活の中に、どのような工夫が必要なのかなどを考えるように伝えています 介護実習などでも、自分自身が〇〇をやった、〇〇できた、〇〇と言ってもらったなど自分への評価を大切にしている様子が見られます そのため、自分の計画がうまくいくように操作しないことなどを伝えています	計画の遂行の可否が主軸とならないよう、伝えている		
利用者の持つ思いや、力を引き出す計画の立案	利用者の思いや力を引き出す計画立案		
言語化、文章化 言葉にこだわる 用い方が不適切であれば利用者の尊厳に関わる 自分自身の考えている言葉一つにこだわること	言語化、文章化、言葉一つにこだわること		
自分本位ではなく、利用者の望む生活は何かを常に意識すること	自分本位ではないことを意識させる		
目標が生活課題を解決するためのものか考えさせる、実施の期間を考えさせる	目標が生活課題を解決するためのものか考えさせる		
実習後の学生それぞれのアセスメント表を学生間で交換し、計画を立案してみるを行っています	実習後の学生のアセスメント表を学生同士で交換して計画立案させている	実習利用者の計画を立案	計画立案機会としての実習
介護実習に於ける受け持ちケース選定を通し、計画立案の演習を行っている 事例学習として、演習に取り組んでいる	実習受け持ちケースの計画立案		
実習において、段階的に介護過程の展開を実習課題に組み込んでいる 実際に実習で経験した事例(自身及び他の学生)をもとに計画の立案を行っている	実習事例で計画立案		
校外での介護実習で実際に行ったアセスメントの内容を活用して担当利用者への計画を立ててみるようにしている	実習の担当利用者への計画を立案		
介護実習の機会を活用し、実際の利用者の計画を立案する 2か月半後に再度アセスメントをおこない、計画が利用者の現状に即しているよう、修正をしている	実習担当利用者への計画立案と計画の修正		
校内で介護過程の授業を行った後、3年次での介護実習の内容に介護過程を組み込み、実習先の利用者の計画を作成している	実習先の利用者の計画を作成		
介護実習時に現場で学習を深めている	実習で学習を深めさせる		
実習時のカルテや、実際にアセスメントを行った実習対象者の情報を基に、計画を立てる	実習対象者の計画を立てる		
実際の受け持ち利用者実践させてもらっている	受け持ち利用者で実践		
2年生の後半の介護実習で、担当利用者の情報収集の練習、計画立案の練習を実践にさせてもらい、3年生までに経験を積ませている	実習担当利用者で計画立案		

(7) 根拠に基づく計画を教育するためのツールや指標

Q9 (3)根拠に基づく「計画」とを教育するために用いているツールや指標には、どのようなものがありますか。

Q9(3)根拠に基づく計画を教育するためのツールや指標	コーディング	中項目	大項目
中央法規出版株式会社より出版されている「介護過程」より介護過程の実践的展開のシートを活用している	中央法規「介護過程」介護過程の実践的展開のシート	中央法規『介護過程』の計画書	教科書、書籍
中央法規「介護福祉士養成講座 9 介護過程」において示されている、「介護計画書」をツールとして使用している	中央法規「介護過程」介護過程の介護計画書		
最新介護福祉士養成課程 9「介護過程」(中央法規)	中央法規「介護過程」介護過程の個別介護計画書		
中央法規出版の介護過程のテキストを参考にしてている	中央法規「介護過程」教科書		
中央法規出版の教科書にもとづいて行っている介護実習Ⅱ(担当利用者)のアセスメントの再検討から介護計画立案の再検討を行う	中央法規の教科書		
中央法規及び介護協テキスト	中央法規の教科書		
生徒が作成したものを介護実習先で添削してもらう中央法規の介護過程Ⅱ	中央法規の介護過程Ⅱ		
教科書、独自に作成した資料	教科書		
教科書	教科書		
テキスト	テキスト		
教科書	教科書	教科書、参考図書	
教科書やテキストの内容参考	教科書		
教科書	教科書		
教科書、参考図書など	教科書、参考図書		
留学生が多いため使用教科書を指標にしている	教科書		
テキスト	テキスト		
テキスト介護過程 終崎京子編著 にあるシートやツールを使用	建帛社のテキスト介護過程		
教科書	教科書		
テキスト	テキスト		
ケアマネジメントに於ける(施設・居宅)ツールを用いる	ケアマネジメントの施設・居宅ツール		実用されている計画書
さまざま企業の計画書と評価項目	様々な企業の計画書と評価項目		
実際の事業所プランや多職種のプランの参照など	実際の事業所のプランなど		
本校で作成した個別援助計画表	学校作成の個別援助計画表		
本校で使用している「介護計画表」	学校の介護計画表		
関係書籍等を参考に、本学独自のものを使用	学校独自のもの		
計画には観察計画(目標達成の指標)を含む	観察計画(目標達成の指標)		
介護計画シートは独自のシートを作成している	独自の介護計画シート		
オリジナルワークシート	オリジナルワークシート		
本学独自の記録様式を活用し演習	学校独自の記録様式		
本校指定の介護計画表を使用している	学校指定の介護計画表		
本校が使用している介護過程の様式(アセスメント、介護計画、実施、評価記録など)	学校独自の介護過程様式		
学内の様式	学内の様式		
本校独自のシートを活用しています	学校独自のシート		
長期目標、短期目標、具体的な計画、目標達成の評価欄のある「個別援助計画シート」を用いている	個別援助計画シート		
個別援助計画書	個別援助計画書		
介護計画書	介護計画書		
個別援助計画	個別援助計画		
個別および集団援助計画表、レクリエーション実施計画表などを作成している	個別計画書、集団援助計画書、レクリエーション実施計画表		
介護実習時に施設の介護計画を見させていただく機会を設ける	実習先の介護計画書を見学		
1年次の介護実習の時から、実際の「計画」を見ておくように指示をしている	実習先の介護計画書を見る		

Q9(3)根拠に基づく計画を教育するためのツールや指標	コーディング	中項目	大項目
介護実習の実習指導者の助言を参考にする	実習指導者の助言	実習先の指導	実習先の指導
指導者のアドバイス	実習指導者の助言		
生徒が作成したものを介護実習先で添削してもらう	実習先で添削してもらう		
介護実習施設指導者の意見	実習指導者の意見		
これまでの学生が作成した計画例	過去の学生が作成した計画例	過去の例	過去の例
過去の介護過程の実践例	過去の介護過程実践例		
過去の実践事例	過去の実践事例		
一人一台タブレット端末を活用し、ロイロノートスクールなどのアプリケーションを効果的に活用するよう努めている	タブレット端末によるロイロノートスクールアプリ	その他のツール	その他のツール
動画サイト	動画サイト		
ケアチェック表	ケアチェック表		
測定・客観的な判断ができる記入形式を用いる	測定・客観的な判断ができる記入形式		
アセスメントシートと連動した計画書	アセスメントシートと連動した計画書		
自分で作ったシート、ツール	自分で作ったシート、ツール		

(8) 根拠に基づく実施とは何だと考えますか

Q10 (1)根拠に基づく「実施」とは

Q10(1)根拠に基づく実施とは何だと考えますか	コーディング	中項目
介護計画に盛り込まれた内容を的確に行うこと	介護計画の内容が的確に行われる	計画に沿って実施されるもの
介護計画に示された介護目標の達成を意識して、実践することにより、統一した介護が提供できるものである 実施過程は利用者の反応や心身の変化によって、目標等を(内容も含む)追加・変更することに繋がる貴重な機会である	介護計画の目標達成を意識した実践	
計画に沿った支援を提供すること	計画に沿った支援	
専門知識をベースに、計画の内容を実際のご利用者の状況に合わせて支援が行われること なぜそれを行うのか、それによって何を達成しようとしているのか、利用者・他職員に説明ができること	計画の内容を利用者の状況に合わせて支援する	
目標達成のために立案された介護計画にそって実施することであり、計画に盛り込まれた支援内容・方法について、確実に行うことだと考えている 併せて、安全性・快適さ・自立の各視点に基づき、対象者の反応も大切に実施することが求められる	介護計画に沿って実施すること	
既に根拠を基に導き出された生活課題から、計画を立てたものを実施するもの 日々の介護現場での個別のケアそのものだと考える	根拠をもとに導き出された生活課題から立案された計画を実施する	
利用者の「よりよい生活」「よりよい人生」の実現に向けて立案した計画に基づく介護実践	計画に基づく介護実践	
根拠に基づいて立案した計画を、その狙いや意味も理解したうえで実施すること	根拠に基づいて立案した計画を実施すること	
利用者の意向や身体状況や生活環境など本人の状況を踏まえ、広く利用者を理解したうえで、計画を実施すること	利用者理解をした上で計画を実施すること	
分析内容、目標、計画、評価の視点が矛盾なく、筋の通った実施である かつ、実施した内容について、事前に立てた評価の視点にてあらしあわせて、日々、評価し、考察を加えていること 利用者の状況にあわせて、実施した内容の結果をスケール等を使用し評価していること	分析内容、目標、計画、評価の視点が矛盾なく筋が通っている実施	
個別援助計画を基に、利用者の体調や気持ちを考え、把握しながら実施 実施の中で、利用者にてきたことで意欲や自信を持ってもらう 継続して行うことの必要性	個別援助計画をもとに利用者の状況を把握しながら行うこと	
介護計画内の長期目標、短期目標を理解し、利用者に関わる職員全員で情報共有し、統一したケアをおこなうこと	介護計画の目標を踏まえ、職員全員で情報共有、統一したケアを行うこと	
「目指す状態」「介護の方向性」で整理した根拠、特に具体的援助内容に根拠づけをする 何のためにその実施を行うかの理由を明確にする(長期(短期)目標を視野に入れて実施をする、観察項目を含める)	目指す状態、介護の方向性を根拠に具体的援助内容に根拠づけをする	
介護計画をもとに実施し、実施の状況を詳細に記録として言語化し、チームで共有する	介護計画をもとに実施する	
アセスメントした内容→介護計画に基づいている	アセスメント内容と介護計画に基づいている	
「計画」に基づく実施 自立支援、安全と安心、尊厳の保持を視点において行うこと	計画に基づく実施	
根拠に基づいたアセスメント・計画を「実施」すること	根拠に基づいたアセスメント・計画を実施すること	
アセスメントにより、導き出された課題＋ニーズへの対応	アセスメントにより導き出された課題・ニーズへの対応	
前述の根拠に基づく「アセスメント」「計画」をふまえた実施であり、実施する根拠および目的を理解し、評価視点を持って行うこと	アセスメント、計画を踏まえた実施	
目標達成のために立案された介護計画にそって実際に介護を実施すること	介護計画に沿って実際に介護を実施すること	

Q10(1)根拠に基づく実施とは何だと考えますか	コーディング	中項目
利用者の会話、表情、しぐさなど様々な視点から得られた情報による実施	利用者様々な情報を得て実施すること	計画に沿って実施されるもの
アセスメントをいかし、本人主体で計画を実施すること	アセスメント、計画を実施すること	
利用者の個に応じた計画実施	計画の実施	
計画をベースに実施し、記録をすることだと考える	計画をベースに実施	
利用者の意思を尊重し、介護計画の意図を考えながら実施する	介護計画の意図を考えながら行う	
目標を達成するために立案された個別援助計画に沿って実施すること	個別援助計画に沿って実施すること	
アセスメントや計画を通して職員が考案した計画が、利用者が実際に生活を通してどのように感じるかを確認するもの	計画が実際に利用者が生活の中でどう感じるかを確認するもの	
アセスメント、計画で構築した目標や根拠がブレることなく実施できること	アセスメント、計画で構築した目標や根拠が実践できること	
介護計画にもとづいて、介護福祉チームでばらつきなく個別ケアを実施する また、他職種を含めたチームアプローチを実践し、利用者が望む生活を支援する (つまり短期目標、長期目標を意識して支援する)	介護計画に基づいて介護福祉チームで個別ケアを行う	
立案した介護計画にもとづく介護の実践	介護計画に基づく実践	
アセスメント・計画に基づいた支援	アセスメント・計画に基づいた支援	
利用者のニーズを解決するための計画に基づき、利用者の状態に応じて計画を実施する	計画に基づき利用者の状態に応じて行う	
十分なアセスメントに基づく計画の沿った実践	アセスメント、計画に沿った実践	
計画に基づく実施	計画に基づくこと	
支援内容と方法に添って実際に確実に行うことで、行わなければ意味のないものになってしまう	支援内容と方法に沿って実際に確実に行うこと	
介護計画に基づく根拠のある介護実践をいう 介護過程の展開における「実施」は、日々の介護の実践そのものであり、立案した計画を実行することである	介護計画を実行すること	
介護計画に盛り込まれた支援内容・方法について、確実に実施すること	介護計画を確実に行う	
介護福祉職が計画を具体化するために行う適切な関わり	計画を具体化するために行う適切な関わり	
介護計画に示された介護目標を達成するための介護実践	介護計画の目標を達成する介護実践	
介護計画に基づいた介護の実施ができる 利用者の状況に応じ、計画を実践する その際、利用者の安全や自立を意識し利用者のもつ力を活かすことができるように注意する	介護計画に基づいた介護を行うこと	
計画を進めること	計画を進めること	
介護計画に示された介護目標の達成を意識した介護実践	介護計画の目標達成を意識した介護実践	
介護計画で示した、介護目標を達成させるための実践	介護計画の目標を達成させるために行うこと	
アセスメントで得た内容に対して、立案した計画をもとに、行うもの	アセスメント、計画をもとに行うもの	
計画に沿って実施をすることだと思います	計画に沿って行うこと	
上記の根拠に基づくアセスメント、介護計画立案で計画に示された目標の達成を意識した介護実践を行うこと	アセスメント、介護計画の目標達成を意識した介護を行うこと	
介護計画に沿った支援の実施	介護計画に沿った支援	
実施計画に準じた展開であるとともに、原則(安全、安楽、自立支援・QOL、ボディメカニクスなど)に則った生活支援を展開すること	実施計画に準じたこと	
利用者の生活の全体像やアセスメントの内容が反映された個性のある具体的計画にそって実施されるもの アセスメントの結果をふまえて評価の視点を明確にし、実施、記録できること	具体的計画に沿って実施されるもの	
計画に基づいて共通認識を持ち利用者のケアを行う	計画に基づいて行うこと	
介護計画に基づいて介護を実践していくこと	介護計画に基づいて行う介護	
まずは、計画に沿って実施すること 必要であれば理由を示して計画内容や方法を修正できること 介護者が適切に利用者にあった支援ができること	計画に沿って行うこと	

Q10(1)根拠に基づく実施とは何だと考えますか	コーディング	中項目
計画に基づいて、当事者である利用者の状況を絶えず確認すること、状況判断をしながら適切な技術(介護、コミュニケーション)を提供することで利用者の生活を継続していくこと	計画に基づくこと	計画に沿って実施されるもの
一人の介護福祉士が行うだけではないため、統一されたケアが提供できることであると考えます	統一されたケア	
介護計画に示された介護目標の達成を意識して、実践することにより、統一した介護が提供できるものである 実施過程は利用者の反応や心身の変化によって、目標等を(内容も含む)追加・変更することに繋がる貴重な機会である	統一した介護	
チームで同じ目標をもって活動することで、新しい角度からの視点を獲得できることも期待できます	チームで同じ目標を持って活動すること	
実施とは、介護計画を介護福祉職チームで共有し、介護計画に基づく根拠のある介護実践をいう 介護過程の展開における「実施」は、日々の介護の実践そのものであり、立案した計画を実行することである	介護計画を介護福祉職チームで共有する	
介護福祉職が共有できること	介護福祉職が共有できること	
支援内容の手順や留意点が明確になっているものであり、介護福祉職が誰でも対応できるようなもの	介護福祉職誰もが対応できる内容であること	
実施については、実習時に展開の際、現実的に取り組めるもの、チームでとりくめる内容で、あり、利用者の生活にそったもの	チームで取り組めるもの	
利用者の状態やその日の様子に合わせて、利用者の方と楽しく計画を実践すること	利用者のその日の状態に応じて楽しく実践する	利用者の状態に応じてできること
安全性・快適さ・自立の各視点に基づき、対象者の反応も大切に実施することが求められる	対象者の反応も大切に実施すること	
アセスメントで収集した情報を元に、利用者に応じた的確な生活支援技術を提供する	利用者に応じた的確な生活支援技術を提供する	
利用者のニーズに適した支援内容	利用者ニーズに適した支援	
利用者の価値に根拠を統合し、利用者が置かれている環境(利用可能な資源)、身体状況などをふまえて、適切な介護を行う	利用者が置かれている環境、状況を踏まえて適切な介護を行うこと	
個々の心身の状況に応じた介護実践	個々の心身の状況に応じた介護	
利用者の状況や状態に応じた援助を行うこと	利用者の状況、状態に応じた援助	
利用者の心身の状況に応じた実施	利用者の心身の状況に応じて行うこと	
介護者が適切に利用者にあつた支援ができること	利用者にあつた適切な支援ができること	
計画に基づいて、当事者である利用者の状況を絶えず確認すること、状況判断をしながら適切な技術(介護、コミュニケーション)を提供することで利用者の生活を継続していくこと	利用者の状況を確認判断しながら適切な技術を提供すること	
短期目標を意識した日々の介護提供と記録が必要となる 日々の実践記録が重要なデータとなる	短期目標を意識した介護提供と記録が必要	評価・記録 できること
実施した内容について、事前に立てた評価の視点にてあらしあわせて、日々、評価し、考察を加えていること 利用者の状況にあわせて、実施した内容の結果をスケール等を使用し評価していること	実施内容に評価、考察を加えていること	
実施する根拠および目的を理解し、評価視点を持って行うこと	実施の根拠と目的を理解して評価視点を持って行うこと	
計画をベースに実施し、記録をすることだと考える	記録すること	
実施において利用者に対してニーズの充足、リスクマネジメントなどが妥当かどうかを意識して実施 その後その内容が行われているのかを評価する 行われている場合は継続性効率性、効果性についてまた行われていない場合にはどのような理由で行われていないのかを意識して実施	実施した内容の継続性、効率性、効果性などを評価する	
アセスメントの結果をふまえ評価の視点を明確にし実施、記録できること	評価の視点を明確にして実施、記録できること	
「身体機能」+「意欲」が基本*心を動かし、身体が動き出すような計画が結果的に根拠に基づく計画になるのだと思います	心を動かし身体が動き出すような計画	利用者の主体性を引き出すもの

Q10(1)根拠に基づく実施とは何だと考えますか	コーディング	中項目
利用者が自ら取り組みたいと思える内容	利用者が自ら取り組みたいと思える内容	利用者の主体性を引き出すもの
できることできそうなことを踏まえ、実施する	できること、できそうなことを踏まえて実施する	
個別援助計画を基に、利用者の体調や気持ちを考え、把握しながら実施 実施の中で、利用者にてきたことで意欲や自信を持ってもらう 継続して行うことの必要性	利用者に意欲や自信を持たせ、継続できること	
計画を立てたものが、達成感や満足が感じられるもの	計画したものが達成感や満足を感じられるもの	
利用者をエンパワメントし、QOLを向上させること	利用者をエンパワメントし QOL を向上させること	
介護過程を実践していくなかで、検討し修正することをチームで取り組むことが必要 短期目標を意識した日々の介護提供と記録が必要となる日々の実践記録が重要なデータとなる	チームで検討、修正すること	計画を修正していけること
専門職としての見方を持って、計画の実行・中止・変更すること	専門職として計画を実行・中止・変更すること	
まず計画段階で Q9 に示すように学んだことを活かす次に実施では「利用者の反応によって、計画内容を随時変更すること」	利用者の反応によって、計画内容を随時変更すること	
実施にするにあたり、本人の状態の変化を把握して、状況に合わせながら修正変更できること	本人の状態の変化を把握して、状況に合わせながら修正変更できること	
必要であれば理由を示して計画内容や方法を修正できること	必要時に理由を示して計画を修正できること	
自立支援、安全と安心、尊厳の保持を視点において行うこと	自立支援、安全と安心、尊厳の保持を視点において行うこと	原則や視点、技術に基づくもの
実施は、介護過程の中心となる部分であり、実施に介護を提供することにより、支援の意義を形にして示す段階である 介護職は尊厳の保持、自立支援、安全・安心など、介護の理念を意識する必要がある 適切なアセスメントを行い、利用者の生活課題の解決に向けて適切な介護計画を立案しても、実施する介護職にこれらの視点が備わっていなければ、十分な効果を得られない 実施に至るまでの視点等を身につけ、担当利用者に適した介護を提供したい	尊厳の保持、自立支援、安全・安心など、介護の理念を意識して行う	
安全安楽であり、その人らしい生活の実現につながるもの	安全安楽であること	
3つの視点を踏まえ、利用者が納得し、介護福祉職が共有できること	3つの視点を踏まえること	
利用者の安全や自立を意識し利用者のもつ力を活かすことができるように注意する	利用者の安全や自立を意識し本人の持つ力を活かすこと	
原則(安全、安楽、自立支援・QOL、ボディメカニクスなど)に則った生活支援を展開すること	安全、安楽、自立支援、QOL、ボディメカニクスなどの原則に則った生活支援技術の展開	
生活支援技術などにおける基本的介助手順や留意点に基づくものであり、さらに利用者の生活の全体像やアセスメントの内容が反映された個別性のある具体的計画にそって実施されるもの	生活支援技術などに基づくもの	
科学的根拠をもとに介護を行い、自立支援、尊厳を守る実践	自立支援、尊厳を守ること	
本人がやりたいことだけをする計画にならないこと	本人がやりたいことだけをする計画にならないこと	
介護実習との連携	介護実習との連携	
専門職としての責任と誇り	専門職としての責任と誇り	その他

(9) 根拠に基づく実施を教育するために工夫していること

Q10 (2)根拠に基づく「実施」を教育するために工夫していることはありますか。

Q10(2)根拠に基づく実施の教育で工夫していること	コーディング	中項目	大項目
介護実習Ⅱに於いて、期間内で実施する様指導し、その進捗状況について、適宜、指導や助言を受けられる様にしている	実習中に適宜指導助言ができる状況づくり	実習の中で 実施に 取り組む	実習を通じた 学び
実習区分Ⅱの2回の実習においては、2回ともに実施・評価をするまでを課題としている 短期目標に基づいた実践のなかで、2日間以上の実践記録を課して記録させている また実践のなかで、計画等の見直し修正を図り実践を繰り返す学生もいる	実習中で実施させ、適宜計画の見直しをと実施を繰り返す		
授業で学んだことを介護実習において実践する 3年生の介護実習において、担当利用者を決め、情報収集からアセスメント、生活課題の明確化、目標設定、計画・実施・評価の介護過程の一連の過程を実践する 実習の巡回指導やカンファレンスにおいて、取り組み状況を把握し、助言指導を行う	実習にて実施 実習巡回で助言を行う		
利用者の日々の生活・利用者の置かれた環境・家族・過去の生活歴を総合的に見て、利用者のニーズを踏まえた上で無理のない実施計画を立てた上で、実施する 現場実習中には、職員の方のアドバイスを参考にして、実施するよう指導している	実習で職員の助言を参考に して実施するよう指導している		
学内では紙上演習のため「実施」はしていない 第3段階実習で取り組んでいる	実習で取り組んでいる		
校内では特になし 施設実習において、介護過程Ⅱの実習で実践	実習で実施		
介護実習を活用し、施設で生活されている利用者に対して計画の実施を行っている 実施の時は、計画どおりに支援ができていないか確認の行い、あらかじめ決められた目標の達成状況を確認する	実習で実施		
実習担当の先生方が定期的に巡回に行き生徒の意見を聴くなど適宜指導を行っている	巡回時に適宜指導		
実習で介護過程の展開を意識して、実施は3回以上するように指導している	実習で実施		
介護実習時に現場で学習を深めている	実習で実施		
実際に3年次の介護実習で担当利用者を決め、個別援助計画の実施を行う	実習で実施		
実習の際の声かけ	実習での声かけ		
実習を通して実施を行い、担当利用者を決め行う	実習で実施		
介護実習で実践を行い、振り返りを行う	実習で実施し振り返る		
実習で実際に、対象者が体調の悪化や認知症が進むのを目の当たりにして、一度考えた計画も修正が必要であることを体験してもらう	実習を通じて、立案した計画の修正の必要性を体験させる		
介護実習Ⅱでは、教員と現場の指導者で指導している 実習の帰校日に計画に沿った支援が実践されているかチェックして修正をしている	実習指導者と連携して指導	実習で実施 機会を得られるよう 相談する	
実習指導者との打ち合わせや話し合い、実施にあたっての協力を依頼している	実習指導者に実施の協力依頼		
実習生は現場の職員ではないので、現場の実情(人員の配置、対応ができるか、時間が確保できるか等)やコスト面等も含め、職員と相談の上実施させてもらっている その点から、職員との協力の上で実施できていると言える それが学生の今後の自信にも繋がると考えられる	実習先の職員と相談して実施 機会を作る		
施設職員に相談し生徒が実現可能な実施内容	実現可能な実施内容を施設職員に相談		

Q10(2)根拠に基づく実施の教育で工夫していること	コーディング	中項目	大項目
生徒が考えた計画を実習中に実践させてもらえるようお願いしている	実習中に実施できるよう相談している	実習指導者や職員に助言をもらう	実習を通じた学び
教員や実践現場職員から指導を受ける、実習事業所との連携など	実習現場職員からの指導、実習事業所との連携		
現場の実習指導者からも指導助言を受ける	実習指導者に指導助言を受ける		
介護実習の実習カンファレンスにおいて、「介護過程の展開」の状況を学生が報告し助言を受ける(カンファレンスシートの達成すべき課題として介護過程の項目を設定)	実習カンファレンスで実施内容の報告を行い指導を受ける		
実習施設にて指導者の助言をもらっている	実習指導者の助言をもらう		
介護実習で担当職員からアドバイスをいただきながら実施	実習担当職員から助言をもらう	実習で実際の実施を見学させてもらう	
実際に3年生の介護実習で担当の利用者を受け持たせてもらい、実習指導者にアドバイスをもらいながら介護計画を実施している	実習で実習指導者に助言をもらいながら実施		
介護実習の際に実施の様子を見学させていただく	実習で実施の様子を見学させてもらう		
クラスメイトや教員を利用者に見立てて、考えた計画を実際に実践させる	クラスメイトなどで模擬実施	学内で演習やロールプレイを行う	学内での実施機会を設ける
計画の立案にて実施したカンファレンスをベースに、実際に利用者役・介護者役に分け実施を行う授業を展開している 実際に実施する中で解釈の違いなどが生じることがある そのズレを学びの起点とし、時に計画の立案に立ち戻るなど、PDCA サイクルを意識した指導を行っている	立案した計画を利用者役・介護者役に分けて実施を行う		
学内演習でロールプレイ	学内演習でロールプレイ		
1人で実施を進めることはほとんどないと考えています そのため、授業の中では、クラスメイトと共に役を決めてロールプレイをしながら、修正点などを検討させるようにしています	クラスメイトとロールプレイ		
介護実習Ⅱの担当利用者事例のグループワーク(アセスメントの再検討、介護計画立案の再検討を経て、「介護の実施」としてロールプレイを行いグループ発表をする 発表中は、グループ外のクラスメイトを利用者役として設定し、職員役の学生からの支援に利用者として反応する 発表グループは実施状況をよく観察しメモしながら行う	実習利用者を事例にロールプレイとグループ発表		
校内の事例検討で実際に介護計画を立案し、模擬利用者に支援を提供する練習なども行っている	校内の模擬事例で練習		
事例をもとにした支援のロールプレイを反復する、作成した支援計画にそった実践(演習・派遣実習)	事例のロールプレイを反復		
ロールプレイの実施、生活支援技術レポートや実習記録を通して準備→実施→評価の思考過程を学ぶ	ロールプレイの実施		
立案した計画にもとづいた実践のロールプレイを行うことで具体的な方法や観察の視点、様々な想定をしながらイメージをつくり、実践の根拠を考えることができるようにしている	ロールプレイの実施		
根拠をもとに作成した介護計画を実際の対象者に実践する機会を介護実習の他に設けている 実施を行う際の対象者を数名登録している	実施を行う対象者を数名登録して、計画を実施する機会を実習の他に設けている		
それを行うことで何がどのようになるのか、どのような専門的な知識や技術が用いられているのか、それを行うことで得られるメリットと同時に起こりうるデメリットを検討する時間とるようにしている	実施に用いる専門性やメリット、デメリットを考えさせる	根拠を持って実施することを指導する	根拠と記録の重要性を指導する
実習時に対象利用者様に対して、計画を実施するにあたり、なぜこのケアが必要なのか?といった明確な根拠をもって実施に当たるように指導している	根拠を持って実施することを指導		
介護計画に基づいて行われることを理解して実施できるように、実施内容をその都度実施する目的を計画書にまとめる このことが、介護福祉職の行為が具体化されていること、根拠を持った適切な関わりを出来るようになると思う	実施内容と目的を計画書にまとめ根拠を持たせる		
介護実習で実際に計画を実施する際に、利用者の方の表情や言動、計画の評価に必要な事柄を漏らさず観察し記録するよう指導している	実施時は評価に必要な情報の観察と記録を指導している	実施に伴う状況や観察内容を記録する指導	

Q10(2)根拠に基づく実施の教育で工夫していること	コーディング	中項目	大項目
チームで介護方法を共有するためには、実施の状況を記録として言語化して記述すること 記録は客観的な事実を意識し記入すること そして記述して終わりではなく、実施の結果がチームの中で共有ができるようにしておくこと 目で見て観察できるものは写真として残り経過を観察できるようにする	実施状況を客観的な事実として記録して共有し得るものにさせる	実施に伴う状況や観察内容を記録する指導	根拠と記録の重要性を指導する
本校で使用している「介護計画表」に基づき、実施する利用者の反応、可能性の発掘 新たな課題の発見 実施状況の経過及び結果の記録を行う	実施時の利用者の反応や経過などを記録させる		
記録の方法やポイントを伝え、実施場面の映像を流し記録をする練習をしている その後グループワークで意見交換し、全体で情報共有している	実施場面の映像を流し、記録する練習をさせる		
実践記録に対象者の状態・変化【観察計画に基づく】をきちんと残す指導	観察計画に基づく実施記録を残させる		
実施をした日については、実施しても実施できなくても、理由を記録する	実施の可否ともに理由を記録させる		
実施した支援内容、利用者の反応や言動、観察した内容や判断の根拠などを、記録として残すようにしている	実施した内容や観察内容、判断の根拠を記録させる		
実習記録の記入の中で、実施したことを根拠とともに明確化するように指導している	実施内容を根拠とともに記録させる		
利用者への説明と同意 体調や安全に配慮すること(無理に実施しない)	利用者への説明と同意、安全への配慮	利用者への説明と配慮	
実施する内容を利用者が納得して実施する様指導すると共に、利用者の体調への配慮	利用者の納得を得て、体調に配慮するよう指導		

(10) 根拠に基づく実施を教育するためのツールや指標

Q10 (3)根拠に基づく「実施」を教育するために用いているツールや指標には、どのようなものがありますか。

Q10(3)根拠に基づく実施を教育するためのツールや指標	コーディング	中項目	大項目	
教科書、独自に作成した資料	教科書	教科書	教科書	
教科書	教科書			
テキストが中心である	テキスト			
特別なものはありません(学校で使用しているテキストの様式)	テキスト			
教科書やテキストの内容参考	教科書			
教科書、指導者のアドバイス	教科書			
教科書、参考図書など	教科書			
留学生が多いためツール等は使用教科書を指標にしている	テキスト			
テキスト、視聴覚教材、キャリア段位制度の指標(参考)など	テキスト			
テキスト	テキスト			
中央法規の介護過程Ⅱ	中央法規の介護過程テキスト	中央法規出版 の教科書		
中央法規出版の介護過程のテキストを参考	中央法規出版の介護過程テ キスト			
中央法規出版の教科書にもとづいて行う(生活支援技術など他科 目で学習した知識・技術、これまでの介護実習で学んだこと、介護 施設でのアルバイトでの体験等を思い出し思い出しながらすすめる)	中央法規出版の教科書			
中央法規及び介護協テキスト	中央法規出版の教科書			
動画教材を活用し、実施の際の留意点を学んでいます 中央法規出版株式会社より出版されている「介護過程」より介護過 程の実践的展開のシートを活用している	動画教材			
映像教材	映像教材	動画、映像 教材等	動画、映像 教材等	
iPad、映像資料を使用	タブレット、映像資料			
動画サイト	動画サイト			
視聴覚教材	視聴覚教材			
実施の演習において、タブレット端末を使用し実演風景を撮影後、 検討するなど振り返りにつなげている	実施演習をタブレットで撮影 し振り返り検討			
介護実習の機会を活用	実習機会	実習機会	実習を通じた 教育	
実習での実践をふまえて、振り返る	実習の振り返り			
介護実習時に現場で学習を深めている	実習時に学習を深める			
実習施設でのカンファレンス	実習でのカンファレンス			
介護実習の実習指導者の助言を参考にする	実習指導者の助言	実習指導者の 助言		
指導者のアドバイス	指導者の助言			
介護実習施設指導者の意見	実習指導者の意見	実習記録		
実習中のノートや表	実習ノート			
介護過程に関連する介護実習記録なども使用している	介護実習記録			
実習記録用紙	実習記録用紙	記録の指導		記録の指導
実施→評価の記録用紙、記録の書き方ふりかえりの授業の実施	記録用紙、記録の書き方			
実施記録の書き方についての指導	実習記録の書き方について の指導			
実際に行った時の反応・様子・状況を伝える資料	実施時の反応などを伝える 資料	その他の実施 教育ツール	その他の実施 教育ツール	
本学オリジナルの生活支援技術演習「チェックリスト」	オリジナルの生活支援技術 演習チェックリスト			
実施記録	実施記録			
実施シートは、独自のシートを作成している	独自の実施シート			
数値化できる等の様式	数値化できる等の様式			
本学独自の記録様式を活用	学校独自の記録様式			
ツールとしては事例研究の意義目的および事例研究方法を明示し たツールを使用している	事例研究の教示	事例研究	事例研究	

(11) 根拠に基づく評価とは何だと考えますか

Q11 (1)根拠に基づく「評価」とは何だと考えますか。

Q11(1)根拠に基づく評価とは何だと考えますか	コーディング	中項目
生活課題や長期目標や短期目標について、成果の確認がなされていること だと思います 計画を立案しただけではなく、支援内容や方法の振り返りも必要であると思う	生活課題、長短期目標の成果の確認ができていないこと	目標の達成度を明らかにすること
目標に沿った介護実践を経て、達成の可否、程度、その理由等を明らかにすることで、今後に必要な関わり方や、ケアの方向性を示す、いわば再アセスメントの機会である、～循環過程に於ける折り返し点となる	目標達成の可否、程度その理由を明らかにすること	
評価基準と合わせて考えるもの、目標の達成状況を明らかにするもの	目標の達成状況を明らかにするもの	
目標がどの程度達成できたのか、出来なかったとしたらどのような理由からで、今後どのような支援が望ましいと考えるのかを、専門知識を基盤としながらさらに誰にでもわかる言葉で説明できること	目標の達成度合い、今後の望ましい支援が誰にもわかる言葉で説明できること	
長期目標に近づく、短期目標がどれくらい達成できたかを図ることができる具体的な視点	長短期目標の達成度を測る視点	
利用者の「よりよい生活」「よりよい人生」の実現に向けて立案した計画に基づく介護実践についての評価 目標の達成度を利用者の生活の向上、満足度、課題などの観点から振り返り・評価し、再アセスメント・計画の修正の必要性などを検討する	目標の達成度を様々な観点から振り返る	
実施中・後に得られた情報・課題等(←これが根拠となる)に基づき、実施したことで得られた成果や課題を確認し、計画や目標に対して現在どの位置にいるかの現状把握を行う その際、計画の継続や変更等も視野に入れる	実施中・後に得られた情報・課題等に基づき、計画や目標の現状把握を行うこと	
生活課題、目標がクリアになったかどうか、分析ができていないこと	生活課題、目標がクリアになったか分析ができていないこと	
実施した計画について、記録に基づいて効果を判定し、目標達成度を評価し、目標達成に至らなかった場合は、自身が収集した情報と計画を実施した記録をもとに、計画の見直し修正を行う	記録に基づいて効果、目標達成度を判定すること	
実施した結果から、できたこと・一部できたこと・できなかったことを、理由を考え評価する、次回アセスメントにつなげるもの	実施結果から達成度を理由を考えて評価すること	
プロセスを振り返り目標が達成できているかを検証し、評価を客観的に行う実践項目について目標達成の程度やケアを判断し根拠を記入する	目標達成度を判断する	
支援の効果を言語化し客観的に評価を介護計画で定めた目標が、どの程度達成できたかを評価する 定めた支援内容が適切であったかを確認し、介護が必要の望む生活に近づけたかを確認する	目標達成度を判断する	
根拠に基づき設定した目標が、利用者にどの程度の効果をもたらしたのか、また適切だったのかを判定するものとする	目標の効果、適切さを判定するもの	
実践した介護の効果がどの程度であったか判定し、目標の達成度を評価する	実践の効果、目標達成度を判定する	
目標に対しての達成度、実践しての振り返り	目標の達成度、実践の振り返り	
前述の根拠に基づく「アセスメント」「計画」「実施」をふまえた評価であり、目標に対する到達度とともに実施内容、ご利用者の反応、アセスメント・計画内容の再確認など、介護過程全体の意義を理解し総合的に評価すること	目標の達成度と実施内容などの再確認	
介護計画に沿って実施後の観察結果から目標に達しているのか、利用者のニーズは満たされたか判断する	実施後の観察結果から目標の達成度を判断する	
個別援助計画にもとづいて実施した結果、目標の達成度や計画内容の適正、また計画通りに実践しているか、新たな課題や可能性はないかなどを評価すること	実施結果、目標達成度、計画の適正、計画の進捗、新たな課題などを評価すること	
介護計画で設定した目標にどの程度近づいていたか、介護の実施は利用者の状況に合っていたか	目標の達成度、自立、安全、チームケアなど多角的に評価する	
実践を経て、目標の達成度を判定すること	目標の達成度を判定すること	
十分なアセスメントから導き出された目標の達成度および介護実践の実績評価②③適切な評価にするための実習指導者・担当教員・学生によるカンファレンス、実習後の介護過程の振り返り(追加・修正)	目標の達成度と実践者の実績評価	

Q11(1)根拠に基づく評価とは何だと考えますか	コーディング	中項目
目標達成のために効果を上げているかどうかを確認すること	目標達成効果の確認	目標の達成度を明らかにすること
立案した計画が達成できたか、適切であったかを振り返り、次に繋げるもの	計画の達成度と適正を振り返り次に繋げるもの	
介護実践の後には、その評価を客観的に行う必要がある これまでのプロセスを振り返り、目標が達成できているか検証し、そのうえで実践された介護を今後どのようにするのかを検討する 評価は立案時に設けた期限(評価日)及び利用者の生活状態に変化が生じたときに行う	目標の達成度の検証	
評価は利用者の最終アウトカムに近いのか、そのために設定したスモールステップが達成できているのか、また持続可能性、効果性などの実施状況を客観的に実施状況としてまとめ、それらを評価すること	目標の達成度合い、持続可能性、効果性を客観的に実施状況として評価する	
計画に基づいて実施した結果、計画に盛り込んだ目標がどれくらい達成されたかを客観的に判断すること	目標の達成度を客観的に判断する	
立案した介護目標の達成度、成果の確認	介護目標の達成度、成果の確認	
これまでのプロセスを振り返り、目標が達成できているか、できていないのか検証できること	目標の達成度の検証	
設定された目標が達成できたか否かを、客観的に判断することができる また、日々行われる支援において、利用者の反応や言葉、姿勢などを観察し記録することができる 実践ののち、「望む生活」にどれだけ近づくことができたか、近づくことができなかったのかを明確にし、本人の満足度や達成感、新たな目標を持つことができるような支援を行うことができるよう支援していくことが重要だと考える	目標の達成度を客観的に判断すること	
実践して短期目標を達成させるために効果的であったか考察すること	短期目標達成に効果的だったか考察すること	
立案した介護目標がどれくらい達成されているかの判定	介護目標の達成度合いの判定	
介護実践を重ねたあと、目標がどれくらい達成されているか、成果を確認すること(課題の解決・軽減につながっているか)	目標の達成度や成果を確認すること	
決められた期間内で短期目標や長期目標がどうだったか、達成した理由も考える 達成できなかった場合も改善点を考える	長短期目標の達成度や理由、改善点を考えること	
根拠となっている事実に変化はあるのか、利用者の状態はどのように変わったのか、目標は達成できたのか等、客観的に判断すること	利用者状態の変化や目標達成度等を客観的に判断すること	
上記の根拠に基づくアセスメント、介護計画立案、実施を重ねた後に、当初立案した介護目標がどれくらい達成されているか、その成果を判定すること	介護目標の達成度や成果を判定すること	
計画で設定した目標がどのように実践されているか確認し、修正を行い次の実践(アセスメント)につなげる	目標への実践状況確認と修正や次のアセスメントにつなげる	
生活課題や長期目標や短期目標について、成果の確認がなされていることだと思います 計画を立案しただけではなく、支援内容や方法の振り返りも必要であると思います	支援内容や方法の振り返り	支援内容など計画の妥当性を確認すること
支援内容・方法が適切であったかの評価	支援内容、方法の適切さ	
考えた計画が利用者にとって適切なものだったのか、見直すこと	計画が利用者にとって適切かどうか見直すこと	
提供したサービスが利用者の生活課題を解決するものであったかを再確認し、多くの視点から結果を検討し、今後の介護に活かすこと	実施内容が生活課題を解決するものだったかを再確認すること	
実施サービスの内容が利用者の生活課題に沿っているかの再確認、計画の妥当性、利用者の満足度を知る	実施が生活課題に沿っているかの再確認、計画の妥当性、利用者満足度を知る	
実施したサービスが利用者の求める生活課題にそっているかを再確認し、それを踏まえて介護過程が適切に展開されるように検討することだと考える	実施が生活課題に沿っているかを再確認すること	
立案した計画が利用者の生活課題の改善にどれだけ役に立っているか、残された課題としてどのようなものがあるかを明確にすること	計画が生活課題の改善に役立っているか	
実施したサービスが利用者の求める生活課題にそっているかを再確認し、それを踏まえて介護過程が適切に展開されるように検討することである	実施が生活課題に沿っているかを再確認すること	
立案した計画が利用者の生活課題の改善に役に立っているか、残された課題としてどのようなものがあるかを明確にすることが評価で明らかになる	計画が生活課題の改善に役立っているか	
生活課題の解決に向け、効果を上げているかどうかを確認し、介護計画の妥当性を測ることをいう	生活課題の解決、効果を確認して介護計画の妥当性を測ること	

Q11(1)根拠に基づく評価とは何だと考えますか	コーディング	中項目
標準化されたケアであれば、複数の職員が評価をしても、一定の妥当性を担保できるのが、根拠に基づく「評価」にあると考えます また、「計画」段階での測定可能な目標設定が「評価」に影響を及ぼすので一体的なものとしてとらえています	標準化されたケアによる複数職員の評価で一定の妥当性を担保できること	支援内容など 計画の妥当性を 確認すること
記録、観察により得られた情報から生活課題の解決に向けて効果を上げているかどうかを確認する	記録、観察情報から生活課題解決の効果を確認する	
現在展開している援助がその人に合った内容かどうかを確認すること	進行中の援助がその人に合った内容か確認すること	
客観的な観察、計画の妥当性？	客観的な観察と計画の妥当性	
評価基準と合わせて考えるもの、目標の達成状況を明らかにするもの	評価基準と合わせて考えるもの	評価基準に 基づいて 行うこと
実施をする際に、事前に評価項目を作成し観察、利用者の変化が根拠になると考える	実施前に作成した評価項目の観察や変化を根拠とする	
具体的援助が計画通りに進んだかどうか、また、支援の効果がどの程度あったのかを客観的にはかれること	支援の効果を客観的にはかれること	
事前に作成した「評価の視点」にそって、分析、評価していること	事前に作成した「評価の視点」にそって、分析、評価していること	
客観的な指標を基に評価すること	客観的な指標をもとに行うこと	
根拠に基づいたアセスメント・計画に対して、定量的・定性的に振り返ること	定量的・定性的に振り返ること	
評価基準にそって、客観的に評価すること	評価基準に沿って客観的に評価すること	
利用者の前向きな言葉、表情、動きのスムーズさ、笑顔の数など	利用者の言葉、表情、動き、笑顔の数など	
「計画」段階での測定可能な目標設定が「評価」に影響を及ぼすので一体的なものとしてとらえています	計画段階の測定可能な目標設定	
客観的な視点から評価を行う	客観的な視点から行うこと	
評価基準が利用者・家族のみならず、計画を実施する介護職員が理解できるもの	介護職員や本人家族が評価基準を理解できるもの	
目標の達成度を利用者の生活の向上、満足度、課題などの観点から振り返り・評価し、再アセスメント・計画の修正の必要性などを検討する	再アセスメント・計画の修正の必要性などを検討する	計画の見直しや 次の展開に つなげること
実施中・後に得られた情報・課題等(←これが根拠となる)に基づき、実施したことで得られた成果や課題を確認し、計画や目標に対して現在どの位置にいるかの現状把握を行う その際、計画の継続や変更等も視野に入れる	計画の継続や変更等も視野に入れる	
実施した計画について、記録に基づいて効果を判定し、目標達成度を評価し、目標達成に至らなかった場合は、自身が収集した情報と計画を実施した記録をもとに、計画の見直し修正を行う	目標未達成時に計画の見直し修正を行うこと	
実施した結果から、できたこと・一部できたこと・できなかったことを、理由を考え評価する 次回アセスメントにつなげるもの	次回アセスメントにつなげるもの	
残された課題としてどのようなものがあるかを明確にすること	残された課題を明確にすること	
アセスメントと計画の目標設定は適切で、利用者に合った介護になっていたかを評価し、今後の生活の課題、計画の修正等も検討する	アセスメントや計画、目標の適性を評価して今後の課題、計画の修正を検討すること	
実践された介護を今後どのようにするのかを検討する 評価は立案時に設けた期限(評価日)及び利用者の生活状態に変化が生じたときに行う	実践された介護を今後どうするのかの検討	
また残った課題はどれだけあるかを明確にする	残った課題を明確にする	
PDCA サイクルの実現:利用者の反応に応じて、実施計画を変更する	利用者の反応に応じて実施計画を変更する	
実践経過記録をベースにして、複数の指標からの客観的な効果・変化測定、利用者の満足度からの効果・変化測定など、生活支援を振り返り次のブラッシュアップした展開へつなげること	生活支援を振り返り次の展開へ繋げること	
介護計画の実施によって、次の課題を根拠立てて明らかにできるか	実施から次の課題を根拠立てて明らかにできるか	
実践してみて、本人の思いがどれくらい反映されているのか、どのくらいの変化があったのか、具体的に表現できること	実践後の本人の思いの反映や変化を具体的に表現できること	記録や利用者の 反応から 振り返ること

Q11(1)根拠に基づく評価とは何だと考えますか	コーディング	中項目
実施状況下での利用者の様子や言動、その後の変化を基に評価すること	実施状況下での利用者の反応や変化をもとに行うこと	記録や利用者の反応から振り返ること
記録	記録	
対象となる人の反応や姿を確認すること、利用者の生活の質の評価であると考えています また、介護職の考え方を振り返ることもあると考えています	対象者の反応を確認すること	
実施記録をもとに、正確な分析ができていることであるとする 目標や評価基準を常に意識して一つ一つの状況に対して「なぜそうなったのか」を考えていくことが大切である	実施記録から正確な分析ができていること	
実施前と実施後と比較し、本人から聞き取りをする	実施前後の比較して本人から聞き取りをする	
日々行われる支援において、利用者の反応や言葉、姿勢などを観察し記録することができる	支援による利用者の反応や言葉などを観察記録すること	
実施の際、またその語の利用者さんの様子や反応、一連のプロセスの振り返り	実施中、後の利用者の様子や反応の振り返り	
実践経過記録をベースにして、複数の指標からの客観的な効果・変化測定、利用者の満足度からの効果・変化測定など、生活支援を振り返り次のブラッシュアップした展開へつなげる	記録や指標による客観的な効果・変化測定、利用者の満足度などから振り返ること	
実践(事実)を記録し、支援者側の働きかけや行動、その結果(実施状況が評価できる情報)、利用者の反応(言葉、表情、動作)をもとに行動の意味や実践の効果を振り返ること	実施結果や利用者の反応、実践記録をもとに行動の意味や実践効果を振り返ること	その他
自分ががんばったから評価が良くなるのではないこと	自分ががんばったから評価が良くなるのではないこと	
モニタリングではなく、あくまでエバリュエーションであること	モニタリングではなくエバリュエーション	

(12) 根拠に基づく評価を教育するために工夫していること

Q11 (2)根拠に基づく「評価」を教育するために工夫していることはありますか。

Q11(2)根拠に基づく評価の教育で工夫していること	コーディング	中項目	大項目
実習後の実習指導者からの意見等を個々の学生にフィードバックしています	実習指導者の意見を学生に伝える	実習を通じて評価を体験	
介護実習Ⅱでの評価機会の設定 学内でのフィードバックの機会も作っている	実習での評価機会の設定		
3年次の介護実習において、実際に介護過程を展開し、アセスメントから評価まで一連の実践を経験する その際、先の実施における「実施状況」を踏まえ、評価を体験する	実習で行った実施状況の評価を体験		
介護実習の最終カンファレンスにおいて、実践した介護計画及び実施の評価を行い、施設の実習指導者及び担当教員から指導助言を行う	実習の最後に介護計画の実施評価を行い指導者から助言をもらう		
施設での評価の仕方についてアドバイスをもらっている	実習施設から評価の仕方の助言をもらう		
各施設の担当教員によって、実施した介護計画について検討します また、介護実習の反省会の際、各施設の実習担当者から評価についてアドバイスをいただきます	実習担当者から評価について助言をもらう		
介護実習時に現場で学習を深めている	実習で深める		
介護実習の実習カンファレンスにおいて、「介護過程の展開」の状況を学生が報告し助言を受ける	実習中のカンファレンスにて助言を受ける		
介護実習で担当指導者からアドバイスを得ている	実習指導者からの助言		
実際に3年生の介護実習で担当の利用者を受け持たせてもらい、立案した介護計画を実施し、評価を行っている	実習の担当利用者への実施内容を評価している		
すべての実習の終了後に、介護過程Ⅳにおいてケーススタディに取り組んでいる ツールとしては事例研究の意義目的および事例研究方法を明示したツールを使用している	実習後のケーススタディや事例研究の学習	実習後に様々な形で振り返る	実習を通じて評価を学ぶ
介護実習後の授業「介護総合演習」において、「事例研究」として各自が取り組んだ介護実習における介護過程の実践を改めて考察し、評価する	実習後に事例研究を行い振り返る		
実習後に実習事例を学内演習し個々の介護過程実践力および他事例から視野を広げる機会を設定している	実習後に学内演習で振り返る		
実習でもち帰った事例を振り返りながら考える	実習の事例を振り返る		
3年次に介護実習事例研究発表会の実施をしている	介護実習事例研究発表会の実施		
介護実習Ⅱの担当利用者事例に関するグループワークで実施したロールプレイ(介護の実施)の実施状況記録からイメージしてグループで評価をおこない、グループごとに発表し、クラス全体で共有する	実習担当利用者事例に関する実施状況記録をグループで評価させる		
介護実習において施設での指導を受けるものの、「評価」に関する指導(「評価」の評価)は十分なものではないと感じています そのため、介護実習終了後に学校で「評価」をさせることが多いです	実習終了後に学校で評価をさせる		
実習後、学校で実際の事例について時間をかけて評価	実習後に学校で評価させる		
施設実習後の事後指導	実習後の事後指導		
実習指導者を招いて介護報告会の発表・文集作り	実習指導者を招いて介護報告会の発表		
実習先で実施後、フィードバックしてもらったのを授業で振り返る	実習先での助言を学校で振り返る		
評価基準を明確に	評価基準を明確に	数値などを用いて客観的評価ができるような指導	客観的で根拠を持った評価

Q11(2)根拠に基づく評価の教育で工夫していること	コーディング	中項目	大項目
数値など客観的な視点をもってできる限りわかりやすい(評価しやすい)ものとなるよう指導している	数値など評価しやすい客観的視点の指導	数値などを用いて客観的評価ができるような指導	客観的で根拠を持った評価
計画を立案する際に、評価を見据えて具体的な数値目標などを入れるようにしている	計画立案段階で数値目標などを入れるようにしている		
①事前に、評価方法や視点を決めさせている ②QOLの向上など、あいまいなものの評価についても、フェイススケールなど、客観的に評価できるスケールを使用する	事前に評価方法や視点を決め、スケールなどを活用して客観的な評価をさせている		
客観的な事実が記載された実施記録から、介護者の主観ではなく数値の変化や状態、言動の変化から客観的に評価する	数値の変化や状態、言動の変化から客観的に評価させる		
「評価」を実施するためには、「計画」を立てる段階でしっかりと「目標」を立てておくことが重要であることを認識させるよう工夫している	計画段階からしっかりと目標を立てることを認識させる		
計画の段階で評価できるように具体的に立案すること(定量・定性)	評価できるような具体的な計画立案を指導		
評価基準が正しく評価できているものかどうか、みんなで考えることをしています	評価基準の評価の妥当性を学生たちに考えさせる		
客観的判断を行う思考を養う	客観的判断を行う思考を養成		
数値化できる評価指標の作成、活用	数値化できる評価指標の作成、活用		
計画作成時に計画を作るだけでなく、評価基準も併せて作成することを伝える 使用教科書のツールを使用しているが、評価基準を作成するスペースを確保し記入するように伝える	計画立案時に評価基準を併せて作成させる		
客観的評価をする必要があるため、計画段階より評価基準を設けて客観的に評価できるようにしています	計画立案時から評価基準を設けて客観的に評価できるようにしている	評価が主観的にならないよう様々な角度から考える	
実施前から、実施後の評価項目を具体化する 常に評価項目から振り返り、次のケアへの繋がりとしていく	実施前から評価項目を具体化させる		
評価の用紙に、利用者のケアのアプローチ前・アプローチ中、アプローチ後とどのような場面で声かけをし、どのような様子だったのかを含め記録をするように指導している そして、それはなぜできたのか？できなかったのか？の考察を書き、次へのアプローチへつなげるようにしている(毎回同じ職員が実施するわけではないので、細かく記載するようにしている)	実施評価の考察を書かせる		
実施した計画を、本人や家族の立場になって考えてみることで、気づきを持たせる	実施した計画を本人・家族の立場になって考えさせる		
変化等を、表などにまとめて、比較させる 日々の評価と、最終評価を書かせている 結果の根拠について書かせている	評価のまとめ方や根拠を書かせる		
達成できたことよりも、達成できなかったことをしっかり考える	達成できなかったことを考えさせる		
できたことだけでなく考察、分析し追記させ根拠づけをさせている 実施項目について目標達成の程度やケアの継続、追加、変更、中止(終了)を判断する根拠を記入させる	実施項目の目標達成の程度やケアの評価を判断する根拠を記入させる		
計画通りに実施できなかったら、何が悪かったのか、例えば、利用者の状況なのか、学生の声掛けなのか、実施自体のテクニックなのか、そもそもアセスメントが不十分だったのか(利用者理解ができていなかった、情報収集が不十分だったなど)と言うことを考えています	計画通り実施できなかった原因を様々な角度から考えさせる		
評価の視点を教える、例えば・・・利用者の意向に沿うものであったか、実施は計画に沿って行われたか、計画に無理はなかったか、アセスメントの情報に不足はなかったか、情報の解釈・判断に偏りはなかったか	評価の視点を教える		
事実に基づいた結果を見る、プロセスを振り返ることで次への課題を見つける	事実に基づいた結果を振り返らせる		
「できた」「できない」の２択ではないことを説明する	２択でないことを伝える		
自己評価と他者評価の違いは当然出るが、その差の意味を考えること	自己評価と他者評価の差を考えさせる		

Q11(2)根拠に基づく評価の教育で工夫していること	コーディング	中項目	大項目
上手くいって嬉しかったという生徒の感想で終わらないように気をつけている、利用者にどのような効果があったのか客観的に考えるよう指導する	利用者にどのような効果があったかを客観的に考えるよう指導する	評価が主観的にならないよう様々な角度から考える	客観的で根拠を持った評価
評価ツールを作成して、介護過程の展開でアセスメントが重要であること、再アセスメントの必要性を指導している	作成した評価ツールを使用し再アセスメントにつなげる	評価ツール、書式の活用	
評価を記入する際に、客観的情報・主観的情報・専門的な知見からの成果と課題を記入する欄を設ける	客観的情報、主観的情報、専門的知見からの成果と課題を記入できる書式		
評価ツールの複数体験	評価ツールの複数体験		

(13) 根拠に基づく評価を教育するためのツールや指標

Q11 (3)根拠に基づく「評価」を教育するために用いているツールや指標には、どのようなものがありますか。

【ツール】

Q11(3)根拠に基づく評価を教育するためのツールや指標	コーディング	中項目	大項目	
中央法規出版株式会社より出版されている「介護過程」より介護過程の実践的展開のシートを活用している	中央法規出版株式会社 介護過程の実践展開シート	中央法規の教科書	教科書	
中央法規「介護福祉士養成講座 9 介護過程」において示されている、「実施評価表」	中央法規 介護過程 実施評価表			
最新介護福祉士養成課程 9「介護過程」(中央法規)	中央法規 介護過程テキスト			
中央法規出版の介護過程のテキストを参考	中央法規 介護過程 テキスト			
中央法規出版の教科書にそっている	中央法規の教科書			
中央法規及び介護協テキスト	中央法規の教科書			
中央法規 介護過程Ⅱ	中央法規 介護過程			
教科書、独自に作成した資料	教科書			
介護過程の教科書	介護過程の教科書	教科書		
教科書	教科書			
教科書を用いる	教科書			
教科書やテキストの内容参考	教科書			
教科書	教科書			
教科書、参考図書など	教科書			
テキスト	テキスト			
学内用書式、ケアマネジメントに於ける事例集	学内様式			学校独自の様式
介護計画の達成度を図るための「短期目標を評価するためのチェックポイント」シート	短期目標を評価するためのチェックポイントシート			
学生が記入する評価表をオリジナルで作成し、それを各教員が評価し、再アセスメントの指導ができるように教員用の評価ツールを作成している	オリジナルの学生記入用評価表、指導するための教員用評価ツール			
当校独自の評価表	学校独自の評価表			
実施評価表(1)(2)(3)	実施評価表			
本校が使用している「介護計画表」の書式に、実施した日付、実施した結果・反応・評価・修正する項目があり、実施した後の振り返りができるようになっている(自由記述式)	実施した結果・反応・評価・修正項目がある学校の介護計画表			
本校の介護計画の要旨を元に検討します	学校の介護計画			
関係書籍等を参考に、本学独自のものを使用	学校独自のもの			
実施経過表	実施経過表			
評価シートは、独自のシートを作成している	独自の評価シート			
評価表などの記録ツールを使用する	評価表			
各種の評価スケールの表現を参考にする	各種評価スケール			
数値化できる評価指標の作成、活用	数値化できる評価指標			
オリジナルワークシート	オリジナルワークシート			
本学独自の記録様式を活用	学校独自の記録様式			
本校指定の介護計画表を使用し評価を行う	学校指定の計画表			
本校が使用している介護過程の様式(評価記録など)	学校使用の評価記録			
自主作成評価シート、他団体・専門職の評価シートや評価の視点など	自主作成評価シート、他団体・専門職の評価シート			
記録や介護計画と連動した書式	記録や介護計画と連動した書式			
本校独自の評価シートを活用しています	学校独自の評価シート			
「ICF」の概念図を用いて、「実施」後にどのように生活全般が変容したのかについて「再アセスメント」をさせるようにしています	ICF 概念図	既存の評価様式		
プロセスレコード	プロセスレコード			
担当利用者に関わる実習中の「経過記録」・「実施状況の記録」	実習中の経過記録、実施状況の記録	実習時の情報	実習を通じたツール	
実習時アセスメントを行った実習対象者の情報を基に、実際に評価を行う	実習時の対象者情報			

Q11(3)根拠に基づく評価を教育するためのツールや指標	コーディング	中項目	大項目
介護実習の機会を活用	実習の機会を活用	実習の機会 実習中の指導者の意見 実習事例研究発表会	
介護実習時に現場で学習を深めている	実習時に現場で学習		
現場実習中においては、職員さんからのアドバイス等	実習中の職員の助言		
介護実習施設指導者の意見	実習指導者の意見		
介護実習事例研究発表会	実習事例研究発表会		事例発表会

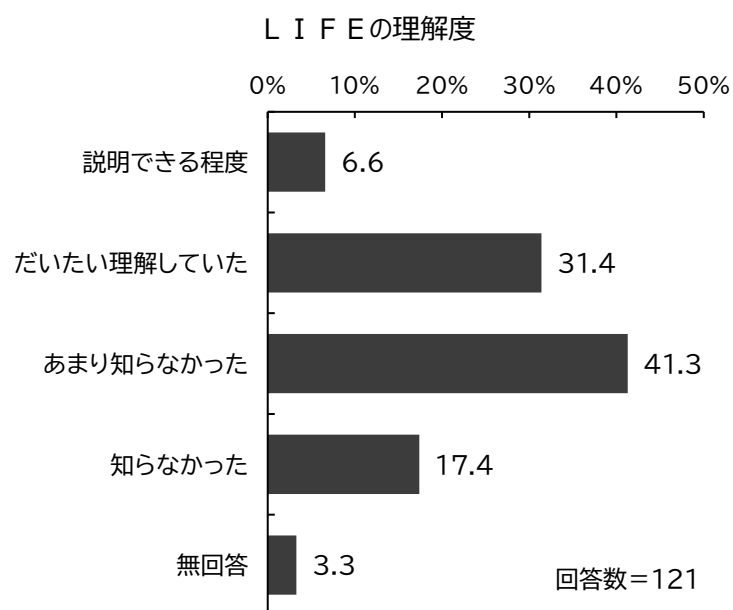
【指標】

Q11(3)根拠に基づく評価を教育するためのツールや指標	コーディング	項目
バーセルインデックス	バーセルインデックス	バーセルインデックス
バーゼルインデックス	バーセルインデックス	
FIM	FIM	FIM
LIFE データ項目等	LIFE データ項目	LIFE データ項目
DBD13	DBD13	DBD14
長谷川式認知症スケール	長谷川式認知症スケール	長谷川式認知症スケール
心理尺度	心理尺度	心理尺度
フェイススケール	フェイススケール	フェイススケール
行動分析学的評価を用いる	行動分析学的評価	行動分析学的評価
ペインスケール	ペインスケール	ペインスケール
QOL 評価	QOL 評価	QOL 評価
定量評価(数的)	定量評価(数的)	定量評価(数的)
定性評価(利用者や家族の声)	定性評価(利用者や家族の声)	定性評価(利用者や家族の声)

3-3 LIFEという仕組みが介護過程教育に与える影響

(1) LIFEの理解度

Q12 LIFE(科学的介護情報システム)についてどのくらいご理解されていましたか。



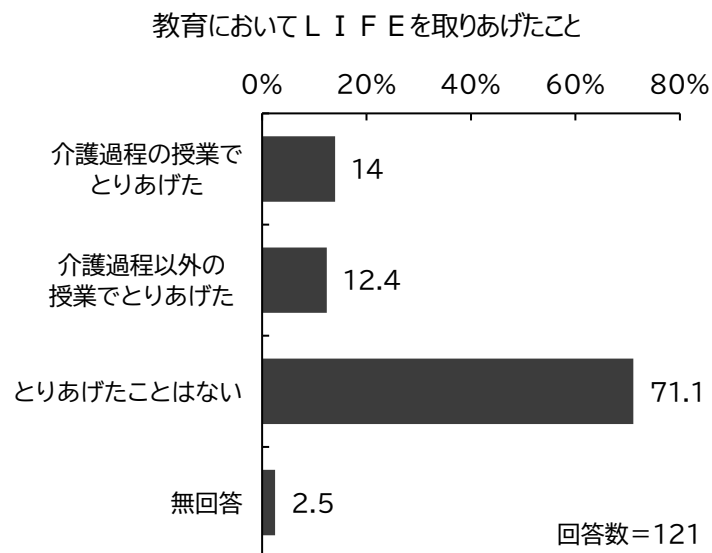
学校種別×LIFEの理解度

	合計	説明できる程度	だいたい理解していた	あまり知らなかった	知らなかった	無回答
全体	121 100.0	8 6.6	38 31.4	50 41.3	21 17.4	4 3.3
4年制大学	10 100.0	1 10.0	5 50.0	4 40.0	0 0.0	0 0.0
短期大学	8 100.0	1 12.5	3 37.5	3 37.5	1 12.5	0 0.0
専門学校	44 100.0	5 11.4	15 34.1	20 45.5	2 4.5	2 4.5
福祉系高等学校	59 100.0	1 1.7	15 25.4	23 39.0	18 30.5	2 3.4

※上段は実数、下段はパーセント

(2) 教育においてL I F Eを取りあげたこと

Q13 これまでの貴校の教育において、LIFEを取りあげたことがありますか。



学校種別×教育においてL I F Eを取りあげたこと

	合計	介護過程の授業でとりあげた	介護過程以外の授業でとりあげた	とりあげたことはない	無回答
全体	121 100.0	17 14.0	15 12.4	86 71.1	3 2.5
4年制大学	10 100.0	4 40.0	1 10.0	5 50.0	0 0.0
短期大学	8 100.0	1 12.5	2 25.0	5 62.5	0 0.0
専門学校	44 100.0	7 15.9	10 22.7	25 56.8	2 4.5
福祉系高等学校	59 100.0	5 8.5	2 3.4	51 86.4	1 1.7

※上段は実数、下段はパーセント

(3) 教育においてどのようにLIFEを取りあげたか

Q14 Q13で「1. 介護過程の授業でとりあげた」「2. 介護過程以外の授業でとりあげた」と答えた方は、どのように取りあげたか教えてください。

Q14 教育においてどのようにLIFEを取りあげたか	コーディング	中項目	大項目
LIFEの活用が介護実践の場で広まっており、データの蓄積から根拠ある介護が展開できるようなシステムが構築されている 今後どのように活用されていくのか、注目していく必要がある、程度です	LIFEの背景等情報伝達	LIFEの背景や概要の紹介	LIFEの概要などを紹介
LIFEの概要として、なぜLIFEが始まったのか、今後どのように活用されていくか、現場のLIFEに関する取り組みの現状と課題など	LIFEの背景について		
介護評価を新しい視点で行うシステムとして紹介、介護評価だけでなく介護現場の業務の再構築につながる可能性(期待として)	LIFEの可能性について紹介		
個別支援の結果について、利用者の反応に関する評価を数値化して評価する指標を作成、活用しているので、実践現場でも「数値化」「フィードバック」「ケア方法の改善」の仕組みが進んでいることを例示	現場でも評価の数値化が進んでいることとして紹介		
LIFEの資料を用いて、説明した	資料を用いてLIFEの説明		
情報収集のツールの1例として	情報収集のツール例として紹介		
加算などの説明を通して授業を行った	加算などの説明を通じた授業		
使用教科書に掲載されているため、概要を伝えた	教科書に掲載されている概要を伝える		
単元の中の項目の一つとして(厚労省の資料を引用)	厚生労働省の資料を引用して		
まだ「しっかりと教育に活かせる」レベルではなく、紹介程度である	紹介程度		
紹介、目的等	目的などを紹介		
別紙解説資料に掲載されている内容のようなことを説明する程度にとどまっています	本調査別表資料程度の内容を説明		
電子記録体験のなかで	電子記録体験の中で取り上げた	ICT関連授業で取りあげる	LIFE実践現場職による講義として
ICT概論でLIFEについて取り上げていた	ICT概論で取り上げた	LIFE導入事例・施設紹介	
介護過程実践事例集を紹介、LIFE導入事例(施設)を紹介	LIFE導入事例施設の紹介	LIFE実践現場職による講義として	
実際にLIFEを実践している施設の職員からのスペシャリスト授業	LIFE実践施設職員の授業	介護過程実践のための一手段として紹介	介護過程実践のための一手段として紹介
地域にある事業所で、LIFEを初期段階から活用している方に講師として実践例を話して頂いた	LIFE実践事業所を招いての授業		
施設の職員からの講義	施設職員による講義		
LIFEの目的とLIFEのアセスメントをふまえた介護過程を展開する意義を伝えている 介護現場でLIFEを活用していくためには、まずは根拠を踏まえた介護を展開する介護過程の実践が不可欠であることを伝えている	介護過程の重要性とLIFEの関連について	介護過程実践のための一手段として紹介	介護過程実践のための一手段として紹介
介護過程の1回目の授業の中で、介護の専門性とは何か、介護過程とは何か、について対話形式で授業を行う その中で根拠にも基づいた介護実践の一例として、LIFEを紹介している	介護過程との関連におけるLIFEの紹介		
科学的根拠に基づく介護を実践する必要性をふまえて、介護過程のひとつのシステムとしてLIFEの目的、活用法を説明した	介護過程実践の活用事例としてLIFEを紹介		
LIFEの概念とシステムを説明すると同時に、LIFEの限界、つまり、LIFEの分析する情報を入力するのはケアワーカーの業務であり、ワーカー自身がケアのPDCAサイクルの重要性を理解して自律的なケアができることが求められることを取り上げました また、LIFEが運用されていれば、利用者のニーズが直接的に解決するわけではないことも取り上げました	LIFEの概要と限界、活用する側に求められることについて		

(4) 介護過程の教育における L I F E 活用

Q15 介護過程の教育において、どのようにLIFEを活用することが想定できますか。

Q15 介護過程の教育において想定されるLIFE活用	コーディング	中項目	大項目
アセスメントの視点、実践に向けての方向付けが不足していないかどうか、客観的に把握することができる	客観的なアセスメントの視点	介護過程の各段階における根拠付として活用	根拠ある介護過程実践のための活用
アセスメント(特に情報収集) 情報を分析する段階においては、LIFE の数値情報を踏まえた分析ができる目標を具体的な数値として設定することが可能となる 実施前の状態が数値化されてわかるため、実施途中にも変化がとらえやすい、計画の遂行状況によっては適宜見直しがしやすくなる 数値的にみえるので評価方法が設定しやすく、達成度が測りやすくなる 達成度が客観的に見えると本人をはじめ、職員のモチベーションにつながる	数値による情報で介護過程の各プロセスに取り組みやすくなる		
アセスメントに入れ込むことができれば、アセスメントの根拠も、なぜのそのような計画の内容にしたかも更に信憑性が増すし、家族や本人への説明ができると考えられる	LIFE データの実際を知ることでアセスメントや計画の根拠が増す		
主観や経験に拠らない、客観的な根拠とは何かを理解させ、アセスメントや評価の際に根拠に基づく介護とは何かを学ぶ際に活用できると考える	アセスメントや評価における客観的な根拠を学ばせられる		
養成校用にログインでき、実際に入力などできるのであるならば、PDCA サイクルを活用し根拠に基づく支援は何なのか？という教育に繋がられる可能性はある	養成校用にログインできれば入力や根拠に基づく支援として教育に繋がられる		
ケアの標準化を説明する際に使います	ケアの標準化の説明に使う		
科学的根拠による介護の実践へつなげることができる	科学的根拠による介護の実践へつなげられる		
日々の実践に関する PDCA サイクルの根拠の一つ	PDCA サイクルの根拠		
科学的根拠	科学的根拠		
ケア現場において「根拠ある介護過程を展開し定着するための実践方法」として紹介できる	根拠ある介護過程の実践方法として紹介		
LIFE への理解が深まることで、根拠に基づいた実践が共通理解のもと実施できるようになる	共通理解のもと根拠に基づいた実践が実施できる	情報収集の手段として活用	
介護過程は適切な介護の提供に必要なデータを集め、それに基づいて科学的な介護を展開していくことが求められる 教育するにあたり、信頼のおけるデータを集めるのに LIFE を活用できる	信頼あるデータ収集に活用できる		
科学的な介護実践を目指すには、客観的な根拠のあるデータ、分析、説明などが求められる 介護過程の教育において、まずは情報収集の視点などに LIFE を活用できるのではないだろうか	情報収集の視点に活用できる		
情報収集のツールの 1 例として	情報収集ツールの 1 例として		
可視化に効果的である	可視化に効果的		
利用者の状況等の把握ができやすくなり、利用者らしい生活の実現のために何ができるのか考えやすくなるのではないかとと思う 養成校用のシステム等になれば授業でも活用できると思う(事例とかを活用して)	利用者の状況等の把握がしやすくなる	実習中の取り組みの評価に活用	
実習で作成した個別援助計画についての有用性を評価し、計画立案への改善指導に使用できるのではないかと	実習で作成した計画の有用性を評価できる		
生徒が介護実習で取り組んだ「個別介護計画の作成・実施・評価等」の妥当性の検証	生徒が実習で取り組んだ計画等の妥当性が検証できる		
介護実習の中で、本校 2 年生が行っている「介護探求」において、情報収集に活用できる可能性はある また、3 年生の介護過程の展開で、評価する際に活用できる	実習の情報収集や評価に活用できる		

Q15 介護過程の教育において想定されるLIFE活用	コーディング	中項目	大項目
多角的な視点でのアセスメントや、他職種連携の促進につながる	多角的なアセスメント、 他職種連携の促進	他職種連携の 理解に つながる	根拠ある介護 過程実践 のための活用
介護の知識だけでなく、リハビリテーションや医療知識等、蓄積されたデータから分析できるため、介護の知識が深まり、データに基づいた介護過程が反映できるのではないかと	他職種領域の知識や データからも分析でき 介護過程に反映でき る		
事例集を活用した実際の展開状況を知る、視点の工夫について理解する	実際の展開事例として 活用できる		
LIFE で得られた情報を元に、介護福祉施設を利用している標準的な利用者像を作成、各養成施設に提示し、その方の介護過程(アセスメントから介護計画まで)を展開する また LIFE のデータを元に標準的な利用者像に実際にこういう介護を行うとこのような成果や課題が出ると予想されるなどの一つの模範解答を提示することで、専門的な知見に生徒がふれることができる	標準的な利用者事例 に取り組ませることで 専門的な知見に触れ ることができる	現場の実践事例や標準事例 として活用	標準的な実践 の取り組みの 理解促進
介護過程の展開も PDCA サイクルに似ている部分があるため、LIFE を活用することで、再アセスメントの具体的なイメージを持たせることや、記録の重要性などに気づく授業に活用できるのではないかとと思う	再アセスメントのイメージや記録の重要性につなげる		
事例集等を活用し、先行研究、先行事例として、計画立案時に参考にする	先行事例として参考に できる		
第3段階の介護実習で介護過程を実践します 学生自身で展開したものと、LIFE にその情報を入力したらどのような結果になるのか比較ができる 学生自身に足りなかった視点が見えてくることがある また、その逆もあると思います	LIFE を取り組みの一つとして学生の介護過程と比較できる		
現場での実践例を紹介し、自分であればどの形が最も理解できたか確認してみようという間接的な経験	現場での実践例として 紹介し理解を促進できる		
実践結果や事例などが増えると授業で取り上げやすくなる	実践事例として取り上げやすくなる		
事例を用いた演習の中で、チームで共有すべき各段階の解釈の方法として活用できる	演習中の各段階の解釈方法として活用できる		
事例演習やチームアプローチの授業において、事例としてデータを活用する	演習等で事例としてデータを活用		
学生に介護を必要とする利用者の症状別に「必要な介護の方向性」をイメージを抱かせるために利用することが可能であると考えます しかし多くのデータを収集し、そのデータを基に作られた計画等が対象利用者に必ず合致するとは言いきれないので、確認が必要	利用者の症状別に必要な介護の方向性イメージを抱かせる		
今後は、現場でどのように取り入れて、どのような効果があったのか、現場の取り組みの実際の声も反映したい	現場の実際の活用例、効果を反映する		
事例として	事例として		
全く別の事例を活用して、一連のシステムの有効性を学ぶことや、必要な情報を判断し記録する演習等活用できるかもしれない	演習等への活用		
データベースを使用してケーススタディや模擬状況を作成し、実践的な経験を積むなど	ケーススタディや模擬実践		
生徒は知識として介護過程を理解する中で、介護実習に参加する 実習では利用者のケアに視点が行きがち 施設での介護過程の展開は見えにくいものとなっている 施設の支援を仕組みとして理解するために、紹介できると考える	見えにくい実習先の介護過程の展開を理解する一助になる	現場の実践を知る一助 となる	
実際の施設において、利用者への介護過程実践について知ることができる	事業所の介護過程実践の実際を知ることができる		
基礎的なことを学ぶことに時間をかけていることから、応用しての現場の状況を知るといことを想定	現場の状況を知ること を想定		
毎年標準的な利用者像を全国の養成施設に課題として提示し、各校が作成した介護過程を共有したり、コンテスト的な要素を持たせて、最優秀賞を選出したりする この取り組みにより、養成施設の教育効果の充実や、介護業界の専門性の向上に寄与することが期待できる	標準的な利用者像に対する介護過程への取り組みをコンテスト化して養成校の教育効果の充実などに活用する	介護技術 コンテスト事例 としての活用	

Q15 介護過程の教育において想定されるLIFE活用	コーディング	中項目	大項目
介護事業所での活用が増えれば、現在各施設独自の介護過程の考え方に統一性が出ると考えるため、学校の指導も一貫性がうまれると考えられる	各事業所ごとの介護過程の考え方の統一性が進み、学校教育との一貫性が生まれる	その他	その他
LIFE 自体の仕組みだけでなく、データ作成や加算要件の確認など介護保険費の請求なども理解することにつながる	加算など介護保険請求等の理解につながる		
難しい	難しい	想定できない	想定は難しい
まったくわからない、イメージがつかない しかし、活用することが必要だと考えている、介護協などで研修会をしてほしい	まったくわからない		
LIFE を実際に使用したこともないのでわからないが、実習の場面でも取り上げている施設がないのか？ 一切そのようなシステムを学生からも聞いたことがない	LIFE を使用したことがないためわからない		
他の専門職との連携によるケアの見直しや理解ができる 運動プランを介護職が実施できる機会が増える 口腔衛生の取組等の LIFE の活用	他職種連携におけるケアの見直しや理解ができる		
まだ想定できません	まだ想定できない		
わからない	わからない		
現段階ではデータを集めたい国と加算を取りたい事業者の話のみで利用者や専門職の視点が欠けているため、想定が難しい フィードバックされた情報をどのように活用していくのか、事業所間でも違いが出てくるであろうし、もう少し時間が必要だと思う	想定が難しい		
まだ考えられていない	まだ考えられない		

(5) LIFEを介護過程の授業で取り入れた場合の効果

Q16 LIFEを介護過程の授業で取り入れるとしたら、どのような効果があると思いますか。

Q16LIFEを介護過程の授業で取り入れた場合の効果	コーディング	中項目	大項目
原因を結果等の因果関係を示す根拠にもなる	因果関係を示す根拠になる	科学的根拠に基づく介護実践の重要性に気付ける	根拠ある介護過程実践に寄与
数値(データ)から介護の根拠を考えることが出来るようになる	介護の根拠を考えることができるようになる		
これまで教育の場において蓄積された指導方法を踏まえつつ、より科学的な視点に基づいた介護過程の理解につながるのではない	より科学的な視点に基づく介護過程の理解につながる		
科学的根拠の重要性と必要性をわかりやすく学ぶことができる 客観的データなど科学的根拠に基づく介護の理解が深めることができる	科学的根拠に基づく介護の重要性と必要性をわかりやすく学べる		
根拠に基づく支援の理解	根拠に基づく支援の理解		
数値によって客観的なアセスメントや評価が行われることで、経験値が低い学生でも根拠に基づいた介護過程の実践が可能になる	経験値が低い学生でも根拠に基づいた介護過程実践が可能になる		
根拠となります	根拠になる		
可視化に効果的であり、思考を明確にできる	可視化に効果的		
データや根拠の重要性を理解できる	データや根拠の重要性を理解できる		
エビデンスの共有、確率	エビデンスの共有、確率		
根拠に基づく介護実践において LIFE の視点を活かすことができる	根拠に基づく介護実践に活かすことができる		
介護は、科学的な根拠に基づいているということの証明として生徒に提示することで、根拠の大切さを伝えることができるのではないかと考える	介護が科学的根拠に基づいていることを生徒に示し、根拠の大切さを伝えることができる		
根拠ある介護が意識化できる 可視化でき、共有しやすいため作業効率が良い	可視化でき共有しやすくなる	より広い視野でアセスメントができる	
情報の解釈、関連づけがもっと広い視野を持つてできるようになるのではと考えます	情報の解釈、関連付けが広い視野を持つてできる		
介護実習において、利用者のケアを観察する際の視野が広がると推察する(施設のケアマネジメントを考えることができるのではない)	実習で利用者のケアの観察の視野が広がる		
情報が可視化できることによって、気づかなかった視点からアセスメントすることができる	情報の可視化により気づきにくい視点からアセスメントできる		
いろいろな視点から、利用者をみることができる	色々な視点から利用者をみることができる		
新しい視点からの学びが得られると思う	新しい視点からの学びが得られる		
より細かなデータを学生が知ることができると思う	より細かなデータを学生が知ることができる		
データに基づいた介護計画の立案	データに基づいた介護計画の立案		
PDCA サイクルを回すことにより、どのように利用者の状態が変化していったのか、また介護計画内容の変更点などを知ることで、利用者に合わせた介護計画の立案の手順や目標設定を理解できる効果があるのではないと思う 利用者の変化を実感することができるのではない	利用者に合わせた計画立案の手順や目標設定の理解、利用者の変化の実感に効果がある		
これまでの立案に比べより利用者のニーズに沿った立案ができ、適切な介助へつながる	より利用者のニーズに沿った計画立案、実施へつながる		
将来の介護負担軽減や根拠のある適切な介護計画などに効果があると思う	根拠ある介護計画に効果がある		
介護過程から介護計画への立案を行いやすくする	介護計画立案が行いやすくなる		

Q16LIFEを介護過程の授業で取り入れた場合の効果	コーディング	中項目	大項目	
学生の効果としては、実践を何で評価するのがわかりやすくなるため目指すものがみえやすい 結果が見えやすくなることで介護実践のやりがいにつながるのではない	評価がわかりやすく、目指すものが見えやすくなる	根拠に基づいた評価につながる	根拠ある介護過程実践に寄与	
介護福祉士が行うケアの評価、成果が可視化される	ケアの評価、成果が可視化される			
LIFE を実際に使用したこともないのでわからないが、実際の授業の中では利用者への効果というのは図れない LIFE を基にして根拠のあるアセスメントや計画を立てられたとしても、それが利用者へ提供して初めて効果があった、ケアの内容が的確だったと判断するものであると考えられる 学生が授業の中では根拠を基にアセスメントができたかどうかという部分でしか評価できないのではない	学生が根拠をもとにアセスメントができたかを評価できる			
データによる分析があることでより根拠に基づいた評価が可能になる	データによる分析で根拠に基づいた評価ができる			
客観的データを用いて評価する練習になる、またその必要性を理解することにつながる可能性がある	客観的データを用いて評価する必要性の理解、練習になる			
利用者の経過をいくつかの側面からモニタリングし変化をみることが出来る(一日、1週間、1か月の活動状況等)	利用者の経過的变化をいくつかの側面からモニタリングできる			
LIFE の活用によって、自己の提供するケアが利用者の ADL、QOL の向上につながったと自覚できると考えます	利用者の ADL、QOL の向上につながったと自覚			
心身の障害等へのケアの有効性に関しては客観的評価につながる可能性はある	客観的評価につながる			
評価の認識につながり、評価力が向上する	評価の認識につながり、評価力が向上する			
介護過程の展開プロセスの理解や、評価基準の明確化などにつながる	評価基準の明確化			
情報や根拠の可視化につながり、生徒同士で情報を共有することが可能になり、思考過程を理解する効果が上がると思います	生徒同士で情報を共有でき、思考過程を理解する効果が上がる	介護過程の理解につながる	養成校と現場のつながりが強くなる	
介護過程の PDCA の理解	介護過程の PDCA の理解			
介護過程の展開プロセスの理解	介護過程のプロセス理解			
介護の視点の深まり	介護の視点が深まる	学生の視点や知識に寄与する		
生徒の知識量が増える	生徒の知識量が増える			
生徒の意識づけには繋がると思います	生徒の意識づけになる			
学生の知識の幅や実践力に繋がるとは思いませんか？	学生の知識の幅や実践力			
利用者の個々の情報や状況を詳細に把握することができ、課題解決に向けた介助方法やケア内容の実践に繋がるとは思いませんか？	利用者個々の状況を詳細に把握して実践に繋がられる	実際の現場の実践事例をイメージしやすくなる		
介護現場におけるケアマネジメントシステム及びプロセスの理解 介護保険制度とケアマネジメントシステムとの関連についての理解	現場のケアマネジメントシステム・プロセス介護保険制度との関連の理解			
現場ですでに実践されている、様々なエビデンスに基づいた先行事例を参考にすることができる	エビデンスに基づいた現場の選考事例を参考にできる			
施設実習に行く前の、介護過程における事前学習となる 施設での介護過程の展開・実践の理解につながる	実習先の介護過程の理解			
Q15 に記載した標準的な利用者像の介護過程の展開や模範解答にふれる活動は、介護実習で行う介護過程を展開する際に、専門的な知見に裏打ちされた一つの指針として大いに役立つと思います	標準的な利用者像に対する介護過程の模範解答として示す			
実際の事例としての活用ができるのであれば、教科書等の事例よりさらに実践的な介護過程の展開につながるのではないかとと思う	実際の事例として実践的な介護過程の展開につながる			
介護実習や現場における介護職の取組みとして、イメージを持つことができる程度になってしまおうと思います 実際に指標等を検討する力はまでは望めないです	実習先や現場の介護職の取り組みとしてイメージを持てる			
より具体的な学びができる	より具体的な学びができる			
実際の事例として活用できるため、利用者さんがどのように変化したかや、職員がどのような支援を行ったかなどを理解し、学びを深めることができる	実際の事例として利用者変化や職員の支援内容を学べる			
展開のイメージづくり	展開のイメージづくり			
症例問題を学生と共有できる	症例問題を学生と共有できる			

Q16LIFEを介護過程の授業で取り入れた場合の効果	コーディング	中項目	大項目
生徒の現場経験の少なさを蓄積データで補う	生徒の現場経験の少なさを蓄積データで補う	実際の現場の 実践事例を イメージしやす くなる	養成校と 現場のつなが りが強くなる
文字による情報に慣れ、データから事例(利用者像)を想像し、理解し、課題を検討することができるようになる	文字情報に慣れて利用者像を想像しやすくなる		
実際の介護シナリオやケーススタディをシミュレートできる これにより、理論だけでなく実践的な介護スキルや計画の立案、実施に関する経験を積むことができる	実践的な介護スキルや計画の立案、実施に課する経験を積める		
社会(介護現場)との接続、介護過程のよりよい統一化が考えられる	現場と介護過程の統一化が図れる	学校と実習先 の指導に一貫 性が生まれる	
学校でも施設でも同様の思考過程で介護されているという理解ができる効果	学校と施設で共通の思考過程で介護がされているという理解		
Q15でも述べたとおり、施設と学校現場の指導体制に一貫性がうまれると思う 学校での授業と施設での学びがリンクすること、利用者へのケアの質の向上のためにLIFEなど情報システムの必要性も理解できると考える	施設と学校の指導体制に一貫性が生まれる		
LIFEを導入している施設へ入職した場合、スムーズに実践できる	LIFE導入施設就職時にスムーズに実践できる	現場に出た際 に役立つ	
LIFEが現場の介護の質を上げるだけでなく、その恩恵を養成施設でも得られることで、今の生徒たちがLIFEを入力する・活用する際に意味や意義を理解したうえで前向きに取り組むことが期待できます(LIFEの恩恵を養成時代に受けることのメリット)	学生のうちにLIFEの意義を理解することで前向きに取り組むことができる		
現場において、即戦力となる	現場で即戦力になる		
現場で活用している事業所もあると思うので、心構えができる	現場に出る心構えができる		
システムの紹介をすることで、今後介護業界に進んだ際に活用できることを知ってもらう機会になる	介護業界に進んだ際に活用できることを知る機会		
介護現場へ就職した際の知識として	介護現場へ就職した際の知識		
現場の施設ではLIFEを取り入れている所が多いので、卒業後に活かせると思うので、介護過程が授業で活用できれば、就職先でも活かせると思う	卒業後に就職先で活かせる		
就職後に活用できるスキル修得につながる	就職後に活用できるスキル習得		
現場に出たときに即戦力…とまではいかないかもしれないが、根拠に基づいた介護実践を実施する牽引者になってくれることが期待できる	現場に出た時に根拠に基づいた介護実践の牽引車になる期待		
チームとして共通認識すべきツールとして活用される	チームの共通認識につながる	多職種チーム 連携に つながる	
フィードバック情報を活用することで、利用者の支援計画をチーム(役割分担:介護職、看護、リハビリ等)で検討することができるのではないか	支援計画を多職種で検討できる		
データ分析により、リハビリテーション、栄養状態の改善が数値化して分かる等により、チームで協力する効果があると思う	多職種チームで協力する効果	現場の介護の 質が高まる	
現場の効果としては、「介護過程の展開を踏まえた実践」といったPlan-Do-Seeという個別介護計画の必要性が高まると考える	現場における計画の必要性が高まる		
ライブの活用が、経験の浅い介護職員も根拠に基づいた介護の提供が可能になり、ケアの向上につながる	経験の浅い介護職員が根拠に基づいた介護が提供可能になる	介護の専門性 につながる	
介護の科学的実践が積み重なり介護の専門性の評価につながるのではないか	介護の専門性の評価につながる		
自分たちが行う介護の価値や専門性について再確認できる	介護の価値や専門性の再確認ができる	その他	
質の高い介護につながる	質の高い介護につながる		
産学連携による体験型授業が作れると思うので、理解度・関心度が高まると思います	産学連携による体験型授業が作れる		
介護過程の枠を超えて、介護保険全体の理解と自立支援の重要性に結びつく	介護保険全体と自立支援の重要性が結びつく		

(6) 介護過程の教育でLIFEを取り入れていく上での課題

Q17 介護過程の教育において、LIFEを取り入れていく上での課題がありましたらお教えてください。

①授業展開の課題

Q17 授業展開の課題 ①授業展開の課題	コーディング	中項目	大項目	
もう少し LIFE についての知識が必要である	LIFE の知識が必要	LIFE の理解 が必要	LIFE の特徴 を理解したカリキュラム構成	
R4 などさまざまなアセスメント方式で施設がケアマネジメントを展開しているため、LIFE がどこでどのように活用されているのかイメージがつかみにくい	現場ごとの LIFE 活用イメージがつかめていない			
LIFE の概要を理解できていないため、適切な指導できない	LIFE の概要を理解できていない			
教員側の知識不足という点があげられるため、LIFE に関する調査研究や事例等から知識を深める必要がある	教員側の知識不足、知識を深める必要性がある			
紹介はできると思うが、生徒にうまく伝えることができるかわからない 教員側も知らない人の方が多いと思うため	教員側も知らない人が多い			
教員の理解度	教員の理解度			
勉強不足もあり、具体的なフィードバック内容と根拠がわかりにくい	具体的なフィードバック内容と根拠がわかりにくい			
ある程度介護過程への理解が進んだ状態でなければ、有効的な活用が望めないのではないか 活用するにしても、2 年次終盤か 3 年次になると予想される	介護過程への理解がある程度進んだ状態でなければ活用は望めない、カリキュラム終盤になる	既存カリキュラムと調整しながらの導入検討		LIFE の特徴 を理解したカリキュラム構成
介護保険制度の理解を他の科目と連携してすすめる	介護保険制度の理解を他科目と連携して進める			
カリキュラム(授業時間配分)	カリキュラム(授業時間配分)			
少ない介護過程の時間で情報システムだけが授業ではない よって、他科目とのリンクが必要になる	介護過程の時間の中では時間が少ない、他科目とのリンクが必要			
時間数の役割分担や、担当する教員の人数など差異がある現状である	役割分担や教員の人数			
シラバスの見直し	シラバスの見直し			
授業のどの段階でとりいれるのか、具体的な教授法がわからない	具体的な教授方法がわからない			
これまで以上に、科目横断的な内容になっていくと考えられます 介護過程での取り扱いのみならず、「福祉情報」での AI 活用の概念とデータ入力規則の取り扱い、個人情報保護の観点、介護実習における実践との連動制など、同時に考えなければならぬことが多いです また、介護実習においても実際のシステムの見学などを計画する必要もあります	科目横断的な内容になるため規則や実習との連動など検討事項が多い			
介護総合演習等、他科目との授業内容の連携と統合	他科目の授業内容の連携と統合			
どの教科で、どの単元で取り入れていくのか	どの教科、単元で取り入れるか			
導入のタイミング	導入のタイミング			
介護過程教育の中での効果やどのように取り入れるかの具体例	介護過程教育の中での効果やどのように取り入れるかの具体例			
どの段階で取り入れていくか	どの段階で取り入れていくか			
限られた時間の中で教材として、どこを取り上げることができるのか不明	時間が限られている	時間数が限られている		
授業できる時間数がない 2〜3 コマならできなくはないが、中途半端で終わってしまう	授業できる時間数がない			
基礎的な理解時間が必要である	基礎的な理解時間が必要			
演習で時間をほとんど使うため、講義のどの段階で使えるか(15 回中)	演習で時間をほとんど使ってしまう			
学習時間の増加	学習時間の増加			
授業展開の課題→十分な授業時間が確保できない	十分な授業時間が確保できない			

Q17 授業展開の課題 ①授業展開の課題	コーディング	中項目	大項目
標準テキストに、その記載が無いので、改訂版を発行すべき	テキストを改訂すべき	理解を深める事例や教材が必要	学びの環境に関する課題
どのように教材に取り込んでいけばよいのか	教材への取り込み方		
現場の方がこのシステムを使用する際、実在する利用者（人物）がいるので、情報内容も正確だと思いますが、生徒（授業として）が使用する場合は実在する人物の情報やアセスメント内容は使えないと思いますし…架空の人物（事例）の情報でもこのシステムは使用可能ですか？それとも、テスト事例のようなものを生徒は使用するのでしょうか？	生徒が LIFE を使用するための架空の人物事例が必要		
介護過程の教育において、LIFE を取り入れることで、どのような力が育めるのか明確でない LIFE の恩恵を受ける・受けていると感ずることができる学習コンテンツ（Q15 に記載した標準化利用者像・介護過程コンテスト）を作っていただけると大変ありがたいです	LIFE の恩恵を感じられる学習コンテンツが必要		
事例として使用し、介護過程の展開を行うには、情報が少ない施設で導入している LIFE について、福祉系高校で使っている教科書とどうリンクさせ、どう展開していけばいいのかわからない	事例として情報が少ない、使用中の教科書とどうリンクさせるべきか		
授業で取り入れていくのであれば、その事例に基づいた映像資料もセットで活用したい 利用者の情報や介護過程の展開例を読むだけでは、介護過程を展開していく力は身につかないため、実践形式でできるような内容が望ましい	事例に基づいた実践形式の映像資料などがある事例を活用したい		
テキストがない	テキストがない		
事例集などが欲しい	事例集が欲しい		
LIFE システムの導入、資金 介護保険制度の理解を他の科目と連携してすすめる	LIFE システム導入、資金	学びの環境整備の課題	
タブレットなどの端末が生徒全員に確保されていない	生徒全員にデバイスが確保されていない		
本学は、PC 必携なのでよいが、学校によっては使用環境が整備されていないこともある	使用環境の整備		
インターネットの環境が良くないため、授業中に活用することが難しい	ネット環境が整っていない		
授業でシステムを活用する環境の確保ができるか	授業でシステムを活用する環境の確保		
利用者理解、アセスメント能力の低下（思考整理）、観察力	利用者理解、アセスメント能力の低下、観察力	学生の学ぶ力	
生徒の学力も年々低下してきているため、どのように教えていくかが課題である あまり複雑なものは興味・関心がなくなる また、生活力が乏しいため、中々考えができないのが本校としては現状である	生徒の学力低下		
学生ごとの理解レベルの個人差をどのように対応するのか	学生の理解レベルの個人差への対応		
学生の介護過程の展開が LIFE の評価項目に偏ったものに偏る可能性があると考え よって介護過程を展開するために LIFE の理解が必要である 全人的に対象者を捉え理解した介護過程の展開するためには、LIFE を活用することに加え、数値で表せないもの、LIFE で取り扱わないものにも気づかせ、そうしたアセスメントを含めた全人的観点が重要であることを理解させアセスメント力を養う必要があると考える	全人的に利用者を捉える介護過程展開のために、LIFE を含めたアセスメント力を養う必要がある	LIFE 以外の情報も活用すること	学ぶ能力
データから情報を選択する際に、あわせて利用者・家族の意思、社会資源の活用等、周囲の環境も取り入れながら展開する必要があると考える	データ情報以外に主訴や環境情報なども取り入れる必要がある		
ICF における背景因子が LIFE にどう反映されているかわかりにくい	ICF における背景因子が LIFE にどう反映されているかわかりにくい		
個人情報の取り扱いとなるため、個人情報に留意する必要がある	個人情報への留意	個人情報の取扱い	その他
個人情報の扱い	個人情報の扱い		

Q17 授業展開の課題 ①授業展開の課題	コーディング	中項目	大項目
LIFE を活用する目的、範囲の明確化など	LIFE を活用する目的、範囲の明確化など	その他	その他
実践結果がまとまっていない	実践結果がまとまっていない		
国家試験との関係性はどうか	国家試験との関係性をどうするか		

②教員側の課題

Q17 授業展開の課題 ②教員側の課題	コーディング	中項目	大項目
教員の理解、ICT の活用方法の理解	教員の理解	LIFE に関する知識、理解不足	LIFE の実際を知り理解すること
教員側の理解	教員の理解		
教員も LIFE を机上のみでなく実践的に学ぶ必要があると考える	実践的に LIFE を学ぶ必要がある		
介護過程を評価するための評価指標について理解した上で教授する必要があると考える	介護過程を評価するための評価指標の理解		
LIFE についての理解が不足している、介護過程について現場との連携	LIFE についての理解不足		
LIFE についての知識と実習先や施設での導入状況を見せてもらっていないと、学生への説明もできない	LIFE についての知識不足		
教員側が、システムの内容や施設での活用方法などについて熟知しておく必要がある	システム内容や施設での活用方法を熟知する必要がある		
効果的に LIFE を授業に導入するにあたり、教員の研鑽が深められていない為、LIFE を授業にどのように取り入れると効果的なのかなどの具体的な話し合いが行われにくい	LIFE に関する教員の研鑽が深められていないため具体的な話し合いが行われにくい		
LIFE 自体を理解できていない	LIFE 自体を理解できていない		
LIFE について知らない教員もいると思うため、LIFE について事前に学習する必要がある	LIFE についての事前学習が必要		
LIFE についての理解と既存の学習内容にどのようにとり入れるかを考えていく課題がある	LIFE についての理解不足		
理解不足	理解不足		
教員がまずは勉強すること	教員がまずは勉強すること		
LIFE の理解がなされていない	LIFE の理解がなされていない		
まずは教員が LIFE について理解することが重要であり、課題である	LIFE について理解すること		
介護施設ではないので情報が入らない、知識不足	情報が入らず知識不足		
LIFE に対する理解度を高める	LIFE に対する理解度を高める		
LIFE について教員の理解不足	LIFE についての教員の理解不足		
LIFE の理解	LIFE の理解	LIFE の実用が未経験であること	
実践の場で活用した経験がないのでイメージが付きにくい	イメージできない		
LIFE の活用方法をきちんと理解しなければならない	LIFE 活用方法の理解		
授業での活用方法がわからない	活用方法がわからない		
LIFE を実際運用した経験がないため、実際の現場においてどのように LIFE を活用しているのかイメージがつかめていない	LIFE 実用経験がないため実際の活用イメージが掴めない		
取り入れていないので分からない	取り入れていないのでわからない		
LIFE を現場で使ったことがないため、そのあたり	LIFE の実用経験がないこと		
LIFE の活用事例などを十分に理解できていない	LIFE 活用事例を十分理解できていない		
教員が LIFE の運用をしたことがない点が最大の課題だと思います	教員が LIFE を運用したことがない点		
LIFE のようなツールによる介護実践の未経験	LIFE を使用した介護実践が未経験		
ライフに関する理解やシステムを活用できるようになる必要がある今の現場に即した指導ができるかという不安がある	LIFE やシステム活用の理解	LIFE を知る機会や時間がない	
ライフについての知識が乏しいため、教員にまずは指導をしてほしい	LIFE について教員に指導してほしい		
教員側の課題→取り組むまでの教員自身の勉強が必要であり、その時間の確保が難しい	教員自身の勉強とその時間の確保		
研修	研修		

Q17 授業展開の課題 ②教員側の課題	コーディング	中項目	大項目	
生徒に理解させるために LIFE に関する知識を深める必要があるが、研修等の参加の機会が少ない	LIFE に関する知識を深めるための研修機会が少ない	LIFE を知る機会や時間がない	LIFE の実際を知り理解すること	
研修会への参加	研修会への参加			
LIFE について学修できる機会が少ない、事例で体験できるような学習用のコンテンツがあればよいと思います	LIFE について学修できる機会が少ない			
研修を受けていない	研修を受けていない			
研修会の参加・他の教員への指導、伝達	研修会の参加、他の教員への指導、伝達	導入現場を理解する必要		
LIFE についての知識と実習先や施設での導入状況を見せてもらっていないと、学生への説明もできない	実習先などでの導入状況理解			
LIFE の理解、実践現場からのヒアリングなどが必要	実践現場からのヒアリングが必要			
施設のケアマネジメントの全体像(施設ケアマネージャーの役割や動きの実情など)を教員が理解しておく必要があるのではないかと	施設のケアマネジメント全体像の理解			
ICT 活用の観点から、活用導入にあたり教員間の温度差が生じるのではないかと 教育におけるツールの一選択肢と捉えるのであれば、早期導入は可能かと考えられる	教員間の温度差	教員間での連携、共通理解	学内の調整等における課題	
介護過程担当教員の LIFE に対する共通理解	介護過程担当教員の LIFE に対する共通理解			
上記同様先生方の中で強化の連携が必要になる	先生同士での連携強化			
授業展開の中で何の科目と連動させるのか検討が必要だと考える	連動すべき他教科の検討	カリキュラム等の検討		
LIFE について、共通認識と授業、実習にどこまで活用するか検討が必要	授業・実習にどこまで活用するか検討			
既存の学習内容にどのようにとり入れるかを考えていく課題がある	既存学習内容へどのように取り入れるかの検討			
何を重点に学ぶかの段階別目標なども再検討が必要と考えている	重点を置くことなど段階別目標などの再検討	教員の能力や経験値		教員の能力や経験値
介護における根拠に基づいた実践の経験や、教員としても根拠に基づいた教育実践の経験がある教員が少ない 今後研修等で、勘と経験だけでなく、介護や教育における理論と実践の往還の経験やそれをベースに介護・教員の専門性を確立・向上させる主体者となる必要がある	根拠に基づいた教育実践の経験不足			
利用者理解、アセスメント能力の低下(思考整理)、観察力、カリキュラム(授業時間配分)	利用者理解、アセスメント能力の低下			
実際に利用者に対して介護過程の展開をするといった経験が無いため、実際の介護過程の展開方法や留意点、評価の方法などについて理解を深めていかなければならない	利用者に対する実際の介護過程展開の方法等の理解を深める			
現場での勤務経験がある教員はゼロに近いです 研修等で代替の学びは実施しますが、やはり LIFE を教えるにあたっては、対象となる人と関わる経験が必要ではないかと考えます	現場経験がある教員はゼロに近いため利用者と関わる経験が必要			
仕組みを理解するのが難しい	仕組みを理解するのが難しい	その他		
教員の介護過程の指導力の有無によっては取り入れるのは難しい	教員の介護過程指導力			
LIFE を取り入れた事例を展開できるような教材づくりが必要となる	LIFE を活用した教材づくり			
知識・教授方法の確立	知識・教授方法の確立	その他	その他	
事例を扱う際の個人情報保護について、不安がある	個人情報保護についての不安			

③学生の状況による課題

Q17 授業展開の課題 ③学生の状況による課題	コーディング	中項目	大項目
毎年学力的にも下がってきている学生が多い中で、LIFE を理解できるのかどうか心配	学生の学力低下	習熟ペースの差への配慮	学生の多様性に対する課題
目の前の利用者支援にフォーカスしがちな生徒が、施設のケアマネジメントまで視野を広げることができるか不明	目の前の利用者だけでなく施設のケアマネジメントまで視野を広げられるかどうか		
利用者理解、アセスメント能力の低下(思考整理)、観察力	利用者理解、アセスメント能力の低下、観察力		

Q17 授業展開の課題 ③学生の状況による課題	コーディング	中項目	大項目
理解力の低下、説明してもイメージしにくいのでは(理解が中途半端になる聞いたことはある程度で終わってしまう)	理解力の低下		
LIFE についてどこまで理解させるか、どこまで理解できるか	LIFE をどこまで理解できるか		
学習内容を理解できるかどうか	学習内容を理解できるかどうか		
高校生には、教科書に指定された学びでかなり手一杯なところがあります 特に本校では中学校では登校もできなかった生徒も多く、勉強は文章の読解から順に実施します さらに、学校で設定されている授業では足りずに長期休暇中も補習や実習を行っています	現在のカリキュラムや能力では時間が足りない		
通常使ってるツールの習得で、精一杯であり、追加で覚えることに消極的	使用中のツール習得で精一杯でありツールの追加には消極的		
新しい学習内容に対する負担感が出てくる可能性があります	新しい学習内容に対する負担感が出る可能性		
適応能力が低いと、テキストの内容と異なると途端に対応できないことが多い	テキスト内容と異なると対応できない適応能力の低さ		
10 代の生徒には、イメージしにくく掴みにくい部分がある	イメージしにくい可能性		
システムの煩雑さ、準備ができていない 様々なレベルの学生がおり、理解できるまでに要する時間が予測できない	様々なレベルの学生がおり、理解に要する時間が予測できない		
生徒・学生側の課題→介護への興味・関心が薄い生徒が増えている中で、そこまで時間を割くことへの需要は感じない	介護への興味関心が薄れている		
留学生などでも十分活用できるのだろうか	留学生が活用できるかどうか	多様な背景を持つ学生への配慮(留学生など)	学生の多様性に対する課題
留学生の日本語理解レベルによる習熟度の格差	留学生の日本語理解力の差		
LIFE の活用のために必要な情報を判断し収集する力、客観的に利用者の状況を表現する文章力が求められる	必要な情報を判断し収集する力、客観的な状況表現の文章力	根拠ある介護過程実践に必要な基本的力	
介護過程に興味をもち学習することが大切であり、介護実習と学内学習との連動にて介護福祉士が行う介護過程の意義を理解することが何よりLIFEの意義を理解することにつながるのではないかと思います	介護過程に興味を持ち学習すること		
介護保険制度の理解がすすんでいない 客観的、科学的根拠の意味が理解できていない	客観的、科学的根拠の意味の理解		
LIFE のデータから関連づけた介護を展開するまでには、他の専門科目の知識も必要であると考え	LIFE データを関連付けて介護を展開するための他の専門科目の知識		
現状、介護過程実践力に差がみられる状況である	介護過程実践力の差	利用者の思いなどを把握する力	
対象者の持っている力(ストレングス)や、個人因子の把握、尊重を忘れてはいけない	利用者のストレングスや個人因子の把握、尊重を忘れないこと		
学生のうちに、思いや希望の部分をしっかり読み取る姿勢を身につけることが重要であると考えているため、安易に記録・データに頼りすぎないような教育、自身で情報を集め確かめる力、そのための観察力、質問力が不足することのないように十分留意する必要がある	安易に記録・データに頼りすぎず、利用者の思いを読み取る姿勢や自分で情報を集め確かめる力が不足しないように留意すること	習得に要する時間的課題	
高校生が理解するには時間が必要、内容的に難しい	理解するための時間		
LIFE を取り入れることにより時間的な課題も考えられる	時間的な課題		
介護過程の展開で精一杯である、個人差はあるが	介護過程の展開で精一杯	学生の考える力が育たない危険	
①分析スケールを使用することで、学生自身で考える思考過程が育たない可能性がある	学生自身で考える思考過程が育たない可能性		
LIFE に頼ること前提の考えない介護になってしまうか	LIFE に頼ること前提の考えない介護になる可能性		
学生が考え、行動する機会が減ってしまう可能性がある	学生が考える機会行動の減少		
自分で考える力がますます欠落していく可能性がある	自分で考える力がますます欠落する	学びの環境の課題	学びを促進のための環境的課題
高校アカウントとしてログインし利用する場合、複数の教員・生徒が同時並行的にログインし利用することが可能か	複数の教員・生徒の同時ログイン利用が可能か		
実習現場でも、LIFE が導入され、それに基づいて介護が展開されている施設と、そうでない施設での介護の展開が違ふ為、理解が深まりにくい	実習先の LIFE 導入進捗の差による学生の理解に与える影響		
実践できる場がないと学習しにくいと思う	実践できる場がないと学習しにくい		

Q17 授業展開の課題 ③学生の状況による課題	コーディング	中項目	大項目
介護過程の展開には、高齢者の特徴や障害の理解など様々な知識の定着が必要となる 総合的な知識が無いと、利用者の状態像を想像しづらかったり、その後の見通しを立てづらい 実習の事前学習として、この介護過程教育を実施するのであれば、映像資料等の多岐にわたる補足が必要	総合的な知識が必要であり、多岐にわたる映像資料などの補足が必要	習熟促進のための教材	学びを促進のための環境的課題
介護過程(座学)ではほぼピンとこないと思われるが、介護実習等の受け持ちケースで活用できればわかりやすくなる可能性はある しかし、多くの情報が必要となると思われるので、学生用のものがあればよいと思う	学生用のものが必要		
LIFE の存在を知らない	LIFE を知らない	その他	その他
個人情報の扱い	個人情報の扱い		
福祉ロボットや情報システムなど、現場で取り入れている内容も授業の中で取り入れていく必要があると感じている	現場で取り入れられている ICT などの内容も授業に取り入れる必要性がある		

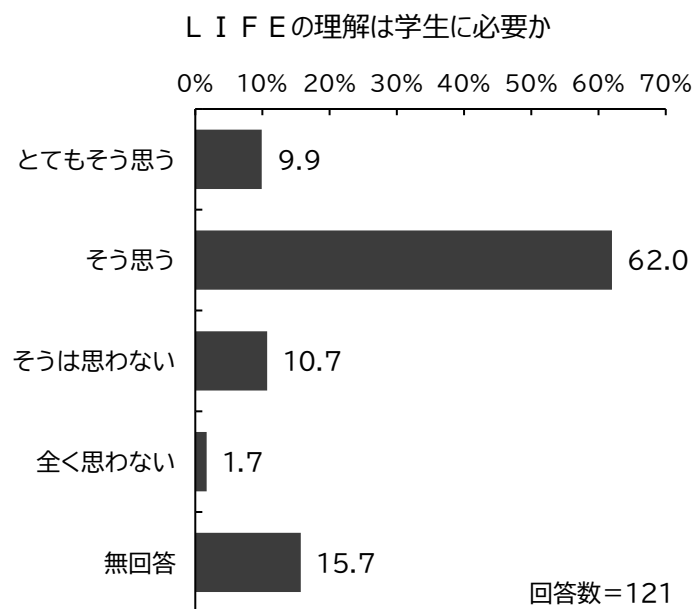
④その他の課題

Q17 授業展開の課題 ④その他の課題	コーディング	中項目
実習先でも学生に対して、LIFE についての話題は出ない	実習先で LIFE の話題が出ないこと	LIFE が広く認知され浸透すること
今回のアンケートで初めて「LIFE」を知ったので、福祉の教員への情報提供や周知をさせる必要がある	福祉教員への情報提供や周知の必要性	
LIFE の認知度を認知度を上げて欲しい	LIFE の認知度を上げること	
いかに周知され、施設でも学校でも使用されるものになり得るかどうかが課題だと思います 学ぶ側、現場ともに使用する共通のツールとなればメリットは大きいです	如何に周知され施設、学校で使われるものになり得るか	
現場での活用、浸透がまだ浅い	現場での活用・浸透が浅い	
LIFE はとかリハビリテーションに近い概念であると理解しています よって、介護福祉士にとっての LIFE をどのように理解するのか、そして教授するのかを整理することが喫緊の課題であると考えます	介護福祉士にとっての LIFE の理解・教授方法を整理すること	介護福祉士の業務と LIFE とのかかわり
介護過程の展開が数値化(データ化)できるものだけに限られてしまうのではないか	介護過程の展開が数値化できるものだけに限られてしまう可能性	
リハなどはまずまずと思えるが、肝心な介護福祉の評価指標(多くの介護現場で行われているケアをもとに対象事例のケアの過不足がフィードバックされるとしたら？ 充分理解できていないなら済みません)は少し改善する必要があるように感じている	リハだけではなく介護福祉の指標がもっと必要	
ライフ頼みのようになり、それがあたかも正解であるようにならないように、捉えていけるか重要である	LIFE が正解であるようにならないよう捉えていけること	
学習コンテンツを制作できるのか 介護福祉施設の職員さんと養成施設の教員に、学習コンテンツ制作協力スタッフを公募してみたいかがでしょう	学習コンテンツの制作が必要	
実際のものを見せることや触れることができるかなどハード面での課題	実際の LIFE を見たり触れることができるハード面での課題	教授するための教材
周辺地域の実践事例(特に介護現場)が知れると望ましい 仮に介護実習先に導入実績があれば、よりよい学びの接続が期待できる	周辺地域の介護現場の実践事例を知れることが望ましい	具体的な事例
厚生労働省の「LIFE」を紹介する資料等を拝見したが、手続き的なことばかりで、介護事業所・施設以外がどのように活用すればよいかわからなかった 実際に活用した場合の様子や経過・結果などの具体的な事例を示してほしい、このための研修が必要ではないか	実際に活用した具体的な事例の明示や研修が必要	
LIFE に掲載されている実践事例のもっと詳しい具体的な事例があれば、介護過程の練習に使うことができるのではないか	具体的な事例が必要	
介護過程は、実習も含めた展開になってくると思うので、実習先との連携が不可欠	実習先との連携	実習先との連携
介護現場と教育における介護過程に関するツールは統一されていません 現場では介護過程の理解、実践などの差も報告されています LIFE の活用にあたり、現場と教育との共通理解、連携の在り方をどのように構築していくのかも今後の課題といえます	現場と教育の介護過程に関する共通理解、連携のあり方	

Q17 授業展開の課題 ④その他の課題	コーディング	中項目
LIFE を教えるためのソフトやアプリのツール選びや作成が課題となるのではないか	LIFE を教えるためのソフトやツール選び、作成	実習先との連携
Wifi などのインターネット環境がない	インターネット環境がない	養成校に内在する 様々な課題
LIFE は施設では加算が取れるだけで義務ではない？ 養成校で教育するかどうかは養成校の判断になる	教育するかは養成校の判断になる	
学生確保が大きな問題な状況の中で、養成校に求めるものと現場に求めるものが混在している	学生確保が大きな問題であり、 現場と養成校のニーズに差がある	
運営指針等の中で、LIFE 等を学習できるシステムを導入するための予算措置の問題があるように思います	LIFE 学習を導入するための予算措置に問題がある	
その他の課題→客観的なデータが必要なことは理解できるが、高校生レベルでは、客観的データを求めるまでの実施に至らない また、客観的データを取るだけの実施期間がとれない	客観的データをとるだけの実施期間が取れない	
授業に取り入れる時期をいつにしたら良いか	授業に取り入れる時期	
学習する内容が介護支援専門員向けになるような気がする	学習内容がケアマネ向けの印象	その他
LIFE のフィードバックの内容の精査	フィードバックの内容の精査	
数字や統計に対する苦手意識	数字や統計に対する苦手意識	
事例を扱う際の個人情報保護について、不安がある	事例の個人情報保護について	

(7) L I F E の理解は学生に必要か

Q18 LIFEの理解は学生にとって必要だと思いますか。
そのように回答した理由をお教えてください。



学校種別×L I F E の理解は学生に必要か

	合計	とても そう思う	そう思う	そうは 思わない	全く 思わない	無回答
全体	121 100.0	12 9.9	75 62.0	13 10.7	2 1.7	19 15.7
4 年制大学	10 100.0	1 10.0	7 70.0	1 10.0	0 0.0	1 10.0
短期大学	8 100.0	1 12.5	5 62.5	2 25.0	0 0.0	0 0.0
専門学校	44 100.0	6 13.6	20 45.5	6 13.6	0 0.0	12 27.3
福祉系高等学校	59 100.0	4 6.8	43 72.9	4 6.8	2 3.4	6 10.2

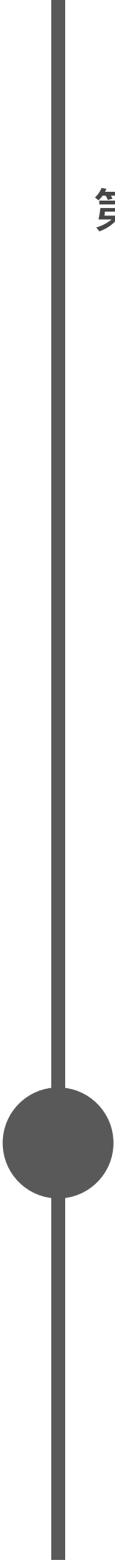
※上段は実数、下段はパーセント

【必要だと考える理由】

Q18LIFEの理解は学生にとって必要だと考える理由	コーディング	中項目	大項目
実際の介護現場で活用され TE いるため	介護現場で活用されているため	現場で実際に導入が進むものは理解しておく必要があるため	将来的に必要なものだから
高校卒業後、すぐに介護現場に就職する生徒が半数ほどいるため。また、現場でも実際に活用されている施設があるので必要だと思う	現場で実際に活用されている施設があるので必要		
将来、介護現場で活用されるのであれば、活用できるスキルを身につけておく必要がある	将来介護現場で活用されるならば活用できるスキルを身につけておく必要がある		
今後、施設、事業所を使用が増えていく場合、学生は、1つのツールとして知っておいた方がよい	現場で使用が増えていく場合のツールとして知っておいた方がよい		
現場での内容や現状を知る機会となる	現場での現状を知る機会となる		
介護現場で運用されつつあるようなので(各種「加算」の要件が LIFE の活用)、ケアの過程において知っておくべきことと考える また、根拠のある介護の具体的なツールとして理解しておく必要があると考える	現場で運用されつつあるようなので、知っておくべきことと考える		
今後必要になってくることが予想できる	今後必要になってくることが予想できる		
今後は、このようなシステムが増えていくと思うので必要な知識だと思う。	今後はこのようなシステムが増えていくため必要な知識である		
今後の介護分野での AI の活用は必須になると考えるからです 一方で、高校段階での限られた時間での介護福祉士養成では、学習内容の優先順位を考えるとあまり重視されない可能性も想定されます	今後の介護分野での活用は必須になると考えるから		
今後、LIFE を活用する介護現場が増加する可能性があり、概要や活用方法を学習しておく必要があるため	LIFE を活用する介護現場が増加する可能性に対して概要や活用方法を学習しておく必要があるため		
多くの現場で今後活用されていくことが予想され、ある程度スタンダードになっていくのではないかと考える	今後多くの現場で活用されていくことが予想されるため		
現場で導入されている、あるいは導入されることが見込まれるツールであること ビッグデータの活用方法が学べるのではないかと 業務を合理的に捉える視点と創造的に捉える視点を学べるのではないかと	現場で導入が見込まれるツールであるため		
介護現場の状況を理解するためには知っておく必要がある	介護現場の状況を理解するために知っておく必要がある		
実際に現場で導入されているのであれば、現場に送り出す前に指導しておく必要があるのではないのでしょうか	実際に現場で導入されているのであれば、現場に送り出す前に指導しておく必要がある		
これからの現場でこれが基本的に用いられていくのならば、学生自身が躊躇せず対応できるように必要かもしれない	今後の現場で用いられていくならば学生が対応できるように必要		
実際に介護現場に就職した際の LIFE の早期理解・活用に繋がる	介護現場に就職した際の早期理解・活用につながる	介護現場への就職において必要になってくるため	
取り入れている施設が増えているということなので、就職先などで使用することになるのであれば、理解しておく必要があると思ったから	就職先で使用するならば理解しておく必要があるため		
福祉系高校を卒業した後の進路先は、生徒それぞれではあるが、大半の生徒が福祉施設へと就職するため、知っておく必要があると思う	福祉施設へと就職する上で知っておく必要があると思う		
卒業後、職場で活用されることを想定し、知っておく必要があるため	職場で活用されることを想定し、知っておく必要があるため		
就職先で事業所が活用している場合の心構えができる	就職先で事業所が活用している場合の心構えができる		
今後、介護系に就職すると必要だから	介護系に就職すると必要だから		
将来、介護施設で働く生徒が多いため	将来介護施設で働く生徒が多いため		
働くうえで必要になる、また、思考展開のなかで根拠に基づく実践につながる	働く上で必要になる		

Q18LIFEの理解は学生にとって必要だと考える理由	コーディング	中項目	大項目	
卒業後の就職先を考えると LIFE の理解は、学生にとって必要であると考え	卒業後の就職先を考えると理解は必要である	介護現場への就職において必要になってくるため	将来的に必要なものだから	
自立支援をうたっている日本の介護について、LIFE の必要を理解しなければ十分に就労できないだけでなく、介護の専門性を磨くことができない	必要性を理解しなければ十分に就労できない			
介護福祉職に就く上で知っていた方がいいから	介護福祉職に就く上で知っていた方がいいから			
当たり前だと思って行っていることではあるが、就職前に知識としてある程度の知識の理解をしておく、現場に出てすんなりと理解していくことにつながると思う	就職前にある程度知識として理解しておくことで現場でのスムーズな理解につながる			
現場で活用されているものは養成校でもとり入れた方がいい	現場で活用されているものは養成校でも取り入れた方がいい	現場と養成校で同じものを理解しておくべきだから		
現場と乖離が生じないようにするのが、養成校としての役割の1つだと考えるが、現場での指導体制の強化も重要である	現場と養成校の乖離が生じないようにするため			
学ぶ側、現場ともに使用する共通のツールとなればメリットは大きいと思うからです	学校、現場共に使用する共通ツールならば学ぶメリットは大きいと思う			
今後の介護福祉教育には、様々な ICT 等のツールを活用した、専門性や効率性も必要になってくる	今後の介護福祉教育において ICT 等ツールを活用した専門性や効率性も必要になるため	介護福祉士としての専門性を高めていくために必要だから		
介護の専門性を高めていくため	介護の専門性を高めていくため			
これからの介護福祉士の実践には、LIFE の効果を取り入れた介護過程の展開に対応できなければ、国家資格としての役割を担えないばかりか社会に取り残されと考えるから	これからの介護福祉士の実践で活用できなければ国家資格としての役割を担えない、社会に取り残されと考えるため			
勘と経験だけに依存しない、科学的根拠に基づいた実践は介護の専門性を高めることに大きな期待を持てるものだと思います。介護や教育業界、その他の産業においても根拠に基づいた実践はまだ少数ないこともあり、多くの職種が専門性を確立しているとは言えません。そのため他国に比べ仕事の質や生産性が低くなり、日本経済低迷の一要因という意見もあります。LIFE を通して、介護の専門職としての資質・能力(根拠に基づいて実践できる力や*新しい専門知識を生み出す力)を身につけることはどのような仕事にも普遍的な力として役立つと考えているからです。 *参考:国分峰樹(2023)『替えがきかない人材になるための専門性の身につけ方』フォレスト出版	科学的根拠に基づいた実践は介護の専門性を高めることに期待できるため。			
自分の知識(生徒として学んでいる範囲)でしかアセスメントができないので、LIFE のシステムが使うことができれば、もっと異なるアセスメントの例を知ることができるのではないのでしょうか	自分の知識以外の異なるアセスメント例を知ることができる	幅広い視点や気づきの機会につながるため		
今後日本は生産年齢人口の減少と同時に働き方も変化してくる。そうした中での介護を行う環境へ適応する生徒たちに対して、様々なことを知ることは大切と考える	今後の介護を行う環境へ適応する生徒たちは様々なことを知る必要がある			
学生にとっての視点や視野を広げる機会になる	学生の視点や視野を広げる機会になる			
全くの新しい視点だったため	全く新しい視点だったため			
色々なケース(事例)で学ぶことが大切だと考える	色々な事例で学ぶことが大切だと考える			
ケアマネジメントは、合意形成の場であるのと同時に自身では思いつかなかったこと、新たな気づきに機会を得られるものだから	自身では思いつかなかったこと、新しい気づきの機会を得られるため			
幅広い理解ができるから	幅広い理解ができるから			
現場で導入されている、あるいは導入されることが見込まれるツールであること。ビッグデータの活用方法が学べるのではないかと。業務を合理的に捉える視点と創造的に捉える視点を学べるのではないかと	業務を合理的に捉える視点と創造的に捉える視点を学べる			

Q18LIFEの理解は学生にとって必要だと考える理由	コーディング	中項目	大項目
LIFE 活用の今後に期待している。導入がすすめば、データが増える。そうなれば、日々のケアが利用者の状況にどんな影響が出てくるかがわかり、それが根拠になっていくと思うから	日々のケアが利用者にも与える影響を知ることができ、根拠になる	根拠に基づいた介護実践を行う上で必要だから	専門性を高め、根拠ある介護過程実践につながるため
介護現場で運用されつつあるようなので(各種「加算」の要件が LIFE の活用)、ケアの過程において知っておくべきことと考える また、根拠のある介護の具体的なツールとして理解しておく必要があると考える	根拠ある介護の具体的なツールとして理解しておく必要がある		
活用をするより良い介護過程の展開ができると感じたから	より良い介護過程の展開ができると感じたから		
思考過程の訓練として用いる	思考過程の訓練として用いる		
科学的根拠を用いた介護を実践するうえで、各事業所でのデータは大いに役立つと思うから	科学的根拠を用いた介護を実践する上で、各事業所でのデータは大いに役立つと思うから		
知らないよりも知っておいた方がよい。データが集まることで、症例が細分化され、方向性が迷った時のヒントに繋げることができる	データが集まることで症例が細分化され、方向性に迷った時のヒントに繋げられる		
今後の福祉業界の人材不足、介護力向上を改善する上で LIFE は科学的根拠に基づき、ケアのアドバイスをくれるため有効。しかしそれを踏まえて、実際の利用者で実践可能か見極めなければならない	介護力向上を改善する上で科学的根拠に基づきケアのアドバイスをくれるため有効である		
働くうえで必要になる、また、思考展開のなかで根拠に基づく実践につながる	思考展開の中で根拠に基づく実践につながる		
科学的根拠に基づいた介護を提供するために、介護実践における客観的なデータが必要であるから	科学的根拠に基づいた介護を提供するために客観的なデータが必要であるから		
介護実践の根拠について理解を深めることにつながるため	介護実践の根拠について理解を深めることにつながるため		
教員以外の客観的なアドバイスや改善、指摘を受けることで、学ぶ意欲が高まると考えるため	教員以外の客観的なアドバイスなどにより学ぶ意欲が高まるため		
ICT の使用があると意欲的に授業を受ける傾向がある	ICT の活用があると意欲的に授業を受ける傾向がある	その他	
教育、福祉、介護何れにおいても ICT の活用は喫緊の課題であり、主体的に情報を入手し経験していくことは必要であるとする	ICT の活用、主体的に情報を入手する経験は必要であるため		
科学的な介護を実施することで、ケアの提供の格差が生じにくくなる。介護の質にばらつきがなくなるため	ケアの提供の格差が生じにくくなり介護の質にばらつきがなくなるため		
国が推進しているから	国が推進しているから		
ICT の活用は今後必要な社会になっていくものとする	ICT の活用は今後必要な社会になっていくため		
介護を学ぶうえでは、身につけるべき考え方だから	介護を学ぶ上では身につけるべき考え方だから		
実践現場の全国的なアクションを理解することは介護福祉士の使命感育成につながるため	実践現場の全国的なアクションを理解することは介護福祉士の使命感育成につながるため		



第3章 L I F Eを活用した介護過程 実践に関する調査 (ヒアリング調査結果データ)

1 ヒアリング調査の枠組み

ヒアリング調査の基本的枠組みと概要は、以下のとおりである。

●対 象：6か所の介護福祉士養成校（有意抽出）

日時		対象	実施者
1	令和5年 12月5日（火） 14：00～	日本福祉大学 久世淳子先生 武田啓子先生 鈴木俊文先生	鈴木真智子（現地） 藤野裕子（現地） 相澤京美（現地） 下川玲子（現地）
2	令和6年 1月12日（金） 13：30～	和歌山YMCA国際福祉 専門学校 嶋田直美先生	品川智則（リモート） 鈴木真智子（リモート） 藤野裕子（リモート） 相澤京美（現地） 下川玲子（現地）
3	令和6年 1月15日（月） 13：00～	淑徳大学短期大学部 木田茂樹先生	野田由佳里（現地） 金山峰之（現地） 下川玲子（現地）
4	令和6年 1月16日（火） 8：50～	埼玉県立誠和福祉高等学校 中嶋芳乃先生 栗原真理江先生 大久保理沙先生	真田龍一（現地） 鈴木真智子（リモート） 金山峰之（現地） 下川玲子（現地）
5	令和6年 1月17日（水） 14：45～	大阪人間科学大学 時本ゆかり先生 水谷真弓先生 玉井美香先生	二瓶さやか（リモート） 鈴木真智子（リモート） 藤野裕子（リモート） 相澤京美（現地） 下川玲子（現地）
6	令和6年 2月21日（水） 13：00～	西九州大学 加藤稔子先生	井口健一郎（現地） 武田卓也（現地） 藤野裕子氏（リモート） 金山峰之（現地） 相澤京美（現地） 下川玲子（現地）

●ヒアリング日時・対象・実施者：

●実施方法：対面とリモートのハイブリッドによる実施とした。

本調査研究事業の検討委員及びオブザーバー、事務局により実施した。

●そ の 他：埼玉県立誠和福祉高等学校、日本福祉大学、大阪人間科学大学については介護過程の授業についても見学をさせていただいた。

●調査における配慮・留意点

・事前にヒアリングガイドを送付して、目的やヒアリング内容について情報の共有を図った。

・①ヒアリングは記録のため録画・録音をすること、②目的外では利用しないこと、③報告書の掲載にあたっては個人情報に配慮するとともに、事前に対象者に内容の確認をすることをヒアリングガイドに明記した。

2 ヒアリングガイド

■4 調査内容

(1) LIFE について
LIFE に対するお考え、根拠に基づく介護過程を推進していくために必要な教育に活用することへのお考えについてお教えてください。

(2) LIFE の要素を活用した介護過程教育について
介護過程の PDCA 流れにしたがい、下表の AB についてお教えてください。

	A	B
	LIFE の要素を活用した介護過程教育の現状についてお聞かせください	LIFE の要素を活用した介護過程教育の今後の可能性や期待についてお聞かせください
アセスメント		
計画		
実施		
評価		

(3) 介護過程教育に LIFE の要素を取り入れていく上での課題
授業展開、教員側、学生側、その他の課題についてお教えてください。

■5 その他留意点

- 調査結果の活用
 - ✓ ヒアリング結果は、本事業の目的である根拠に基づく介護過程実践につながる教育内容等の方向性の検討、または具体的事例を示すための資料として活用します。
- 個人情報の保護取り扱いについて
 - ✓ ヒアリング内容のまとめ方、その内容については、すべて確認をさせていただき、承諾を得てから報告書に掲載いたします。
 - ✓ 個人を特定した結果の表出はいたしません。
 - ✓ 本事業の報告書には、ご協力者として学校名、職位及び氏名を記載する予定ですが、匿名を希望の場合はお申し付けください。
- 留意点について
 - ✓ 回答できない内容等は遠慮なくお申し出ください。
 - ✓ ヒアリングは記録のため録音をいたします。
 - ✓ 事務局等によりヒアリング内容のまとめ及び分析等を行います。
 - ✓ ヒアリング結果及び関連資料は、本調査の目的の範囲内では利用いたしません。
 - ✓ 一定の保存期間を経て、すべてのデータを消去いたします。 以上

令和5年度社会福祉推進事業

根拠に基づく介護実践を推進するための介護福祉士養成課程における介護過程教育のあり方に関する調査研究事業

ヒアリングガイド

[ヒアリングガイドは、ヒアリング調査が的確かつ滞りなく実施されるよう、ヒアリングを受ける側、ヒアリングをする側が情報を共有するために作成しています。]

■1 ヒアリング調査の目的

- 介護過程実践の推進に資するため、根拠に基づく介護過程実践につながる教育内容等の方向性を示すことを目的に、調査研究に取り組んでいます。
- 根拠に基づく介護過程実践につながる教育の状況(介護過程の授業に関する教授の内容や工夫)、LIFE(科学的介護情報システム)の視点を活用することによる介護過程教育の深化の可能性等について把握するため、ヒアリング調査を実施いたします。

■2 調査の対象

- 介護福祉士養成校(養成施設及び福祉系高等学校)
- 根拠に基づく介護過程実践につながる介護過程に関する教授の内容や工夫についてお話しをしていただける養成校、あるいはLIFE(科学的介護情報システム)の視点を活用した介護過程教育の実践例、あるいは取組の可能性等を有する養成校
- ヒアリングの対象者は教員を想定

■3 調査方法など

- 実施者 : ****
- 場 所 : ****
- 月 日 : **月**日 ~
- 方 法 : 以下の調査項目を柱として、半構造化面接の手法によるヒアリング
- お問い合わせ: 株式会社コモン計画研究所 担当: 相澤 下川 mail: shimokawa@comon.jp
東京都杉並区成田東 5 丁目 35 -15 サプラザF2 階
03-3220-5415

3 ヒアリング調査結果

(1) 介護過程教育の課題等

介護過程教育の課題等	コーディング	中項目	大項目
アセスメントのばらつきは確かにあります	アセスメントにばらつき	アセスメントの理解にばらつき	アセスメントの課題
学生によると、病気で自分からコミュニケーション取らない人とか発言がない人っていらっしやるので、そういう人の情報収集は苦労はしましたという意見があった	情報収集が難しい人		
一部介助だという情報を何となくの感覚で集めてしまっている	一部介助だという情報を何となくの感覚で集めている		
学生もそうなんですけど、すぐサービスを入れます 転倒の危険性があるから車いすを使用する必要がある、転倒の可能性が高いので歩行器を使用しなければならないなど	すぐサービスを入れる	支援やサービスを考えがち	
情報収集の不十分さ、多角的なアセスメントの不十分さ、利用者の主観的な情報をきちんととらずに、〇〇ありきの計画が立てられていたり、実施することが目的になってしまっている	利用者の主観的な情報をとらず実施することが目的に		
左半側空間無視の人の場合であれば、左側の食事が認識できないので栄養不足になるので、右側へ置かなければいけないとかね いやいや、違う	左側の食事が認識できないので右側へ置かなければいけないとなる		
いやいや違うと、右側へ置かないでいいからどうなるので止めなさいと、それが課題だというふうに言っています	課題に行かない		
学生は介護計画、いきなり思い付く、一足飛び	学生はいきなり介護計画にいく		
心身機能・身体構造の情報収集や評価って得意じゃない	心身機能・身体構造の情報収集や評価が難しい	心身機能・身体構造の理解が苦手	
アセスメントにおいて全体を見て優先順位を決めて組み立てるということがちょっとできてないのが1つ課題	優先順位を決めて組み立てることができてない	優先順位が決められない	
言葉上で何々できる、何々している、それが違いなんです、そこも学生が分かりにくい	できる・している活動が分かりにくい	できる・している活動が曖昧	
介護過程というか、ICFの言葉遣いとしてもう考えてほしい できる活動と、している活動を明確に分ける	できる・している活動が分かりにくい		
2年生の介護過程の例えば特養とかになってくると、している、できるってかなり難しい	特養では、している、できるがかなり難しい		
「している活動」のところで「できる活動」は、「している活動」がちゃんととらえていないとできる視点が養えない	「できる活動」が難しい	できる活動が難しい	
情報整理の活動の真ん中にLIFEを置いて、「している活動」、「できる活動」って記載してもらようにしたんです、圧倒的に「している活動」が多く、「できる活動」が2年生でも少ない	「できる活動」が難しい		
「できる活動」の情報の整理というのは、意識づけが去年はまだ足りなかった	「できる活動」の情報の整理		
健康状態から来る心身機能・身体構造のマイナス面ですね、そういった状況がその方の食事、排泄、入浴などのADLにどう影響を与えているのかを、きちんと結び付けて判断できる力が必要	健康状態が与える影響	情報の解釈、関連付け、統合が苦手	
生徒が一番つまづいているのは、アセスメントをした後の情報の解釈、関連付け、統合化、その統合化についてどうやって生徒に情報を結び付けて、課題につなげるかというところが毎年の課題	アセスメント後の情報の解釈、関連付け、統合化		
アセスメントのところは何とかいろいろな知識を活用しているんですが、いざ計画となると見えづらい	計画に収集した情報がいかせない	計画に収集した情報を計画に生かせない	計画・実践の課題
介護福祉職は活動や参加にアプローチしていく専門職だと思う、情報をどう活動・参加につなげて支援としてやっていくかというのは勉強が必要	活動にしていけるためにどうしていったらいいのか	情報を活動・参加につなげる力が弱い	

介護過程教育の課題等	コーディング	中項目	大項目
実習での実践がどちらかというとADLとか評価的な視点ではなくて、取りあえずレクをやったというところの評価になってしまう	実習での実践が取りあえずレクをやったという評価	レクレーションに偏る	
何をもって評価をするかというところで、私たち教員も何をもってしたらこの結果が出るんだろうかということを教えるのに迷うところ	何をもって評価をするか	評価に関する教授が不十分	評価の課題
評価項目とか評価指標がなかなか教育の中に出てこないところをどうやっていったらいいかなということを課題に感じておりました	評価指標が教育の中に出てこない		
介護福祉士として仕事をしだしたときに、カンファレンスとかで介護福祉士としてこの人はどんな人ですか、しっかりと説明できるようにということで、その全体像の文章化に関しては何回も添削します	利用者を説明ができることが大切	説明する力が必要	説明・言語化の課題
再現性とか言語化といった、説明ができるということを、それこそが専門性の証明であり、根拠であると	再現性、言語化、説明ができることが根拠		
説明とか言語化できるという、そこの専門職としての……根拠の大きな1つの情報になる	説明、言語化できることが根拠の情報になる		
評価がどうしても作文指導になってしまっていたところがあった	評価が作文指導になってしまいう	言語化が苦手	
専門性の証明として、自分たちがやることを説明できたり、言語化できたりする、伝えられて再現性があるということ、これが根拠としてお伝えをされていると	自分たちがやることを説明、言語化できる		
言語化、自分の言葉として説明というところまでが苦手で、そこは我々の弱点だと自覚する	言語化が苦手		
介護過程の授業には障害の理解であったり、認知症の理解というテキストを持ち込みなさいというふうに言っています	障害の理解、認知症の理解が重要	他科目の知識を介護過程につなげるのが難しい	他科目の知識応用の課題
復習として認知症の症状をもう1回調べさせたりとか、介護過程の授業が始まる前は、他科目の復習から入ることもあります	他科目の復習から入る		
ほかの科目での学習、専門的な知識、技術をリアル利用者に結び付けていくというところがうまく結び付けることが苦手で、その専門的知識と目の前の利用者を結び付ける橋渡しが必要	ほかの科目での学習、専門的な知識、技術をリアル利用者に結び付けていくところが苦手		
前にも〇〇県の高校さんを見学させていただいたときも事例に結構苦労されているというお話をされていた、介護過程を理解するときに事例がないとなかなか理解が難しいと思う	介護過程の事例がないと理解が難しい	介護過程の事例教材不足	事例教材不足
ペーパー事例だとやるけど、リアルになるとここがもう使えなくしまう、使うことを忘れてしまう	リアル事例になると情報や知識が使えない	リアル事例で情報や知識が使えない	その他
介護職がその数値を見て分析できるということも、それによって生活の質が変わるところって絶対あると思うので、そういう気付きができるような学びってどうやたらできるのかと思う	数値を見て分析	数値を読み解く力	
誰もが理解できるような客観的な伝達、要はチームにかかわる、将来チームリーダーとして活躍できるような資質の教育	チームリーダーとして活躍	リーダー教育	
介護の分野ではまだまだ構築が遅れているといわれる学問としての介護学、そういう研究姿勢も介護過程を通して養いながら将来性、将来リーダーを担っていく	将来リーダーを担っていく		
介護は長らく数値にしたらだめだと、主観を大事にみたいところが長らくあった	介護は長らく数値ではなく主観を大事に	その他	

(2) 介護過程の授業の工夫

介護過程の授業の工夫	コーディング	中項目	大項目
必ず複数名で持つ、しかも専任でということをしていまして2人以上で持っていました、オムニバスではなくて全15回に入ります	専任が複数名で担当	教員体制(専任、複数体制)	教員体制
全員が持つということを念頭に置いて、必ず介護過程の1か2か3は全員が何らか持っているということになります	専任が複数名で担当		
担当教員が重複しているところもあれば違う教員も 学生個々の習得度や進捗状況を連携しながらどうフォローするか、何を確認したらいいのかみたいところで科目間連携を絶えず行いながら進めている	複数の担当教員		
学生がどうやって学習効果を得ていくのかといったところが必要などころだと思っています そのための教授方法、教育内容を絶えず検討しながら連携	教授方法、教育内容を絶えず検討		
実習での担当者、事例というのは貴重になります それをうまく活用して授業展開していく	実習での担当者事例を活用	実際の事例	事例の効果的活用
介護実践能力を養うために1年生の後期に介護過程演習1、介護実習1A、Bの事例を用いた演習を行っている	実習での担当者事例を活用		
1年後期では実際の事例を使った介護過程を実際にやっている、情報収集と観察、各論的な事例を使った教育が早い	各論的な事例を使った教育		
実際の事例を使った授業になるって、総論的に教えていく流れではない学び方をしているのは、ある意味で底上げしやすいということがあるかもしれない	事例を使った授業		
実習1、2の積み上げをどのようにフィードバックして発揮するのかといったところで相乗効果が得られている	実習をフィードバック	実習のフィードバック	事例の効果的活用
移動というのが日常生活の基本となると思うので、移動の状態はどうかということを徹底的に分析させます 移動が危なかったら、排泄にも影響があるし、入浴にも影響が出てくるとつなげていくように指導をしています	移動を徹底的に分析	移動介助などの理解しやすい事例	
1で使った事例を2で展開していく、2で使う事例、そこでは何を教える、3では何を教えるべきかというような、そういう階段型のところ	1で使った事例を2で展開していく	事例の工夫(他科目と同じ事例の利用等)	
添削で修正させたりしながら、これを4事例します	4事例、その中で繰り返し学んでいく		
事例は現場の事例、食事と移動のどちらかでまずはやる	事例は現場の食事と移動のどちらか	食事と移動の事例	
学生が持ってくる情報量で一番多いが実習1だと、食事と移動、かわる機会が多いということです	食事と移動		
利用者さんから健康状態、脳梗塞で、脳梗塞から左片まひとか、そういうふうにつなげていく 生まれつきと言うと違います 何で?こんな病気があるからというふうに修正しながら関連図はつなげていきます	関連図から理由を探る	関連図作成による理解	関連図作成による構造的な理解
文章化し分析させた後に全体像として関連図でつないでいく 文章化よりも関連図の方が全体像をつかみやすいというものはある	関連図を作成することで理解		
情報と情報との関連性をとらえるときに、ICFの形だったものに情報を入れていくという段階を1つ設けておきまして、これが実践しながらICFのことを理解する1つの要素になっていると思って取り入れています	ICFの形に情報を入れていく		
関連図を全体像として関連図で出来上がった可視化された全体像を、それを文章で	関連図で可視化された全体像を文章にする	文章化による理解	文章化による理解
説明できるようにということで、その全体像の文章化に関しては何回も添削します	全体像の文章化		
文章化し分析させた後に全体像として関連図でつないでいく	文章化し分析させた後に全体像として関連図		
アセスメントシートの分析でいろいろの根拠を文章化していく	根拠を文章化していく		
まず活動状況はどうか、その次に心身機能、その次は、その人の思い、参加をどんなに思っているか、環境因子を入れて最後一番右端に情報の解釈、関連付け、統合化というふうに教えています	活動、心身機能、参加、環境因子	アセスメントの順番を工夫	指導方法
心身機能・身体構造障害が起こったら活動にどう影響があるか、という順番でアセスメントをさせている	心身機能・身体構造からアセスメント		

介護過程の授業の工夫	コーディング	中項目	大項目
学生にはなぜこんな状態になっているのか、状況になっているのかという根拠を、理由を重ねて重ねて、それが根拠ということで指導している	理由を重ねて根拠を指導	繰り返しの学び	指導方法
添削で修正させたりしながら、これを 4 事例しますので、その中で繰り返し学習していくというような、そんな形がうちの ICF と介護過程とのつながりといえるかなと思っています	4 事例、その中で繰り返し学んでいく		
アセスメントのばらつきを解消するためにまず個人ワークをさせて、その次にグループワークで、グループももう 3 人、4 人ぐらいの少ない人数でやっています	個人ワーク、その次にグループワーク	個人・グループワークでの 気づき	
介護総合演習 1 は実習記録とかプロセスレコードとか実習のフォローアップをしつつ、介護過程の基礎となる情報の整理を含んだアセスメント、介護計画、個別の指導	実習をフィードバックで個別指導	個別指導	
複数教員で、個別指導の厚みも多いと、教育の中で成果があるというのも教育活動の特徴	複数教員で、個別指導		
個別指導が欠かせない	個別指導		
事例というより個人ワークで進めながら事例につなげていっています	個人ワーク	チェックリスト	その他
介護学専攻の授業で生活支援技術のチェックリストをかなり細かく動作項目をあげるといって 1 年生でやっていて、それもすごい影響しているのかもしれない	生活支援技術のチェックリスト		

(3) LIFEに関する教育の現状

LIFEに関する教育の現状	コーディング	中項目	大項目
社会の理解等、制度についての授業では学ぶ機会、知る機会はあると思うが、積極的に LIFE のいい面を介護過程の授業の中に取り入れるという段階にはまだいけない	LIFE を介護過程の授業にはいれられていない	授業の中で触れている	制度や全体像の理解
介護概論で政策、政策のまず理解というところのこれは私の担当ではないのですが、LIFE というところの政策の部分だけを落とし込んでいる	介護概論で政策		
LIFE だけに特化してやっているわけではなく、政策の中の 1 つとして医療・介護データ基盤の整備の推進というところで LIFE の活用が導入されているんだということを伝えている	医療・介護データ基盤の整備の推進		
急ぎ足で LIFE の位置付けというところを教えています 具体的にデータの出方とかを示しているものではなくて、どういものか、なぜ必要かというところを書いている程度	LIFE の目的程度を教えている		
ケアマネジメント論で入れてもらおうということになった	ケアマネジメント論で紹介		
送り出す先がさまざまであるということも踏まえて、現状、こういうシステムが存在していて、加算が付き始めていて、現場でこれからどんどん導入が進んでいくよという情報提供ぐらい	LIFE があることの情報提供しかしていない	副教材でLIFEをとりあげている	
しっかり押さえてというところで少しまとめた副教材、教科書にはない情報が入っています	教科書にはない情報の副教材		
客観的に、どう取るかというとアセスメントツールのことが載っていたり、ICF も項目がきちんと載っていたり、教科書にそこまではないので、そこがこれで補完されている	教科書にないものを補完		
昨年度から一番後ろに LIFE を載せています	LIFE を掲載		
2 年ほど前に本学で学生へのテキストとして、私たちの進め方に合ったものを作ろうということで冊子があり、その中に LIFE に触れている	学生へのテキストの中に LIFE	介護現場の人が授業で説明	介護現場と連携
介護過程では外部講師を呼ぶ方向で動いている 老人保健施設さんが LIFE をやっている施設さんに話をいただいた	外部講師を呼び LIFE についてはなしてもらう		
老人保健施設の介護士長さんの方に来ていただいて、科学的介護情報システムに基づく新たな介護の在り方というものが始まるよということで話を生徒に説明していただいた	生徒にLIFE事例を説明		
職員の方がどういうふうにご利用者さんと LIFE に基づいて介護をすることによって変わっていったか、今後の課題も含めて、現場ではこういうふう に LIFE に基づいた介護を行っているということを説明	LIFE に基づいて介護をすることによって変わったこと		
介護実習で行っている施設さんが、介護計画の中で LIFE のことを重点的に生徒に説明してください	介護計画の中で LIFE のことを重点的に説明		

(4) 教育にLIFEを活用する効果

教育にLIFEを活用する効果	コーディング	中項目	大項目
入力もしやすい、アセスメントの部分において、生情報の書き出しということに関しては非常に大きく貢献します	生情報の書き出しに貢献	アセスメント の向上	アセスメント への寄与
解釈を加えるのかというところは、そこが面白さでもあるけど、我々のセンスだったりするんだけど、それがまばらになりがちなんですよ、気付ける人、気付けられない人	漏れのない生活課題の抽出につながる		
AIによる状況の分析とか、傾向の提案みたいなものがあれば、より高い漏れのないというか、生活課題の抽出ということにつながっていく可能性はあるかなという気はします	気付ける人、気付けられない人に傾向の提案		
現場からその人のアセスメントした LIFE による情報を得られることができれば、それはここから、中庭散歩と考えたのはどれだと、どこどれを使えば中庭散歩になる？と一緒に考えることができるかもしれない	LIFE の項目をもとにアセスメントを再考		
このようなツールを用いてアセスメントをすることによって、ぶれのない質の高いアセスメントができる	ぶれのない質の高いアセスメントができる		
可能性としては、生徒のアセスメント力がつくんじゃないかなというところ	アセスメント力がつく		
LIFE の項目も少し、こういうものもあるんだよねという紹介の中に入れてながら、最初のアセスメント項目の中に少し部分的に入れて	LIFE の項目を最初のアセスメント項目の中に少し部分的に入れていく		
上向き傾向にあるのか、下降傾向にあるのかというのも瞬時に分かるし、これは本当にアセスメントの正確性といいますか、個人差ではなく正確性が極められるのかなというふうに思います	アセスメントの正確性が極められる		
一部介助には幅がある、見守りといってもどこを見守りの定義にするのか、そこは自分たちができるところ、できないところをしっかりと見ていくというところは、その力も必要になってくると思うので LIFE を活用する	一部介助には幅		
実習前の段階で、例えば睡眠時間が少ないとなったときに、何で睡眠時間が短いのかなと、例えば部屋の気温など、目の付けどころがグループワークの中で、これが原因なんじゃない、あれが原因なんじゃないというふうに生徒の中で考えるポイントができやすいかなと思いました	データ化されたことで考えるポイント	アセスメント ポイント 明確化	
学生からは、LIFEを知ることでアンテナの幅が広がったという意見があった	アンテナの幅が広がった		
介護福祉士として持たなければいけない視点を補完する視点であるということ	介護福祉士として持たなければいけない視点を補完する	できる・している活動の 明確化	
LIFE は、できる活動をどういうふうに明らかにするかをしてくれたら分かりやすいかなと思います、している活動よりもね	LIFE は、できる活動をどういうふうに明らかにするか		
食事と移動は LIFE のバーセルとの関係でも、できる、しているというところでも観察項目としてすぐとらえやすい	食事と移動はできる、しているというところとらえやすい		
種別 1 が実習なので、2 に比べると要介護度が低い方が多い、可能性を感じているのは、「している活動」と「できる活動」を見ようと思うと、ある程度自立のある人の観察ってすごく大事	自立の人の観察		
「している」、「できる」の違いをちゃんと見て理解できるようにすることは LIFE を活用したというところの切り口の 1 つ	「している」、「できる」の違い		
LIFE データとどう対応させるかというのってたぶんいろいろな考え方があると思う、1 つ前提は動作、ADL 情報って基本になる	ADL を指標化		
データサイエンス的に介護過程に見込めるということを考えると、今の ADL ベースのものをちゃんと指標化してやっていくのはすごく可能性があるなというの思っている	ADL を指標化		
一つ一つのステップを上っていくように積み重なって、だんだん感受性とか考える力というのが育っていくと思うんですけども、でもそれが及ばない場合には、データを用いて、例えばこういう生活状況がある中で、利用者さんの体の自立度とかいうことを考えると、こういうことが必要なんだという	データの補完	情報の解釈 を補完	
変化とらえきれない我々が、例えばその LIFE による情報の蓄積の傾向によって、AI などがそこに情報の解釈を補填してくれることによって、例えばターミナルの状態に近づいている可能性があるかもしれない	変化とらえきれない我々に情報の解釈を補填		
要は AI 的な情報の蓄積による解釈を、我々が介護過程の展開に導入できるという意味で、中長期的に価値のあるツールであるというとは間違いない	AI 的な情報の蓄積による解釈		
実施していく過程で、記録もしますよね、その記録を補填するツールにもなるわけですよね	記録を補填するツールにもなる		

教育にLIFEを活用する効果	コーディング	中項目	大項目
一足飛びにはいかないでしょうけど、ステップアップしていく過程の中の教材としては最高かもしれない	ステップアップしていく過程の中の教材	情報を結び付ける教材となる	アセスメントへの寄与
LIFE ということ自体が学生たちに対してステップアップできる教材だというような言葉が出て私たちも現場にこれで働き掛けられるなと思いました	LIFE が学生たちがステップアップできる教材		
私たちってデータシミュレーションでやっているものですから、それがさっきの3者の情報だけを見る習慣から、LIFE が入ってきたことによって、もう1回、現場に LIFE の情報を見せてやってくださいみたいなことを言えば	LIFE が学生たちがステップアップできる教材	情報を結び付ける教材となる	
学生からは、自分が思っている行動と LIFE の行動が一致すると、こういう表現だ、この人この行動だったと、自分の中でつながるという意見があった	思っている行動とその LIFE の行動が一致		
客観的な数値の情報としてこういう能力がある中で、それをしている活動にしていけるためには、かわり方としてどうしていったらいいのか、活動、参加の向上のために、この方の能力をどう最大限生かしていけるのかというふうに介護職の専門的なアプローチにもつなげていける	活動にしていけるためにどうしていったらいいのか	活動、参加の向上のための視点	
そういうところがそういうチェックであったり、LIFE などでも数値化されたりするもので情報として私たちが見える共通の何と言うんでしょう、こう見える化	情報として見える化	情報の見える化	
客観的な何らかの数値や誰が見ても判断できる形として情報があると、僕たちもきちんと客観的な分析ができるのかなと思いました	客観的な数値や誰が見ても判断できる情報		
心身機能・身体構造に関する情報が介護福祉職にとっても分かりやすい数値等で分かると、例えばこの人は立位がこれだけ取れるというものが数字上分かる	心身機能・身体構造に関する情報の数値化		
その方がどう改善されたかというのもまた数値として出てくると問題、客観的な数値からスタートした支援がこのように改善されて、QOL 等の向上につながったというふうに堂々と僕たちもほかの専門職に行った支援が説明できるのかな	どう改善されたかが数値として出てくる		
健康状態からいろいろ心身機能状態からすべて何かこう影響があると思うので、例えば糖尿病であれば血糖値が下がっていたりとか、そんなケースもあるかも分からないので、そこらのところははっきりとした、そういうチェックという数値化ができればいいですね	健康状態・心身機能状態の数値化		
LIFE に関しましては、結果が見える形を求められているということで、身体的な評価に傾いているという不安もありながら介護の専門性がどう動いていくんだろうかと感じました、国の指し示す方向は必要で、情報キャッチをして、まずはいち早く私たちが勉強していく、そして教育に入れられるものは入れていかなきゃいけないというスタンス	結果が見える形を求められている		
このようなツールを用いてアセスメントをすることによって、ぶれのない質の高いアセスメントができて、そこから情報を解釈して、いわゆる一連の流れに持っていくって、ひいては利用者の生活の質というところ	ぶれのない質の高いアセスメントができる		
学生からは、コード同士をつなげるのが、何か自分の中であんまりイメージがなくて、ICF、情報収集だけのイメージが強く、そこでコード化されて自分で、見たものを自分でつなげていくというイメージ、アセスメントよりも情報収集のツールだなという印象が強いという意見があった	情報収集のツール		
アルツハイマー型認知症の利用者に共通する問題点や、情報収集の視点というものが、何らかの形で標準化されていくと、見るべきところがみえてくる、それを利用者の生活習慣や背景因子の全体像に含めながら判断していくかということになる	利用者に共通する問題点	情報収集の標準化	
学生に書くのではなく、移動の場合はこういうところを押さえておくかというところがあったらなおいい、移動はこういう機能を使います、排泄にはこの機能を使います、食事にはこの機能を使いますというのはいいと思う	押さえておくべきところの明確化		
学生も経験しながら、こんなふうに評価ができるんだということをより多く触れる必要があるだろうなと思っています	学生も経験しながら評価に多く触れる	具体的な評価につながる経験	評価への寄与
基本ベースは評価をどんなふうに評価をしていくか、その集合体が事業所の評価になったり、次の目標、計画につながっていくと思う	LIFEの基本は評価	評価しやすい	
介護過程の展開の過程と、その時点における LIFE で上がってくるさまざまな情報をリンクさせることってきつとできます それ評価になるでしょうけど、そういうものなのだという形をつくる	介護過程の展開と LIFE の情報をリンクさせる		
LIFE についてもデータの事例みたいなものがあるって、実際の施設で行われていたパターンでもいいんですけど、それを基にグループワークで考えさせて、現場ではこうやっていたけど、でも本当にその介護でよかったかなという視点でもいいと思うんですけど、それを取り組むというのはいいかなという感じです	実際の施設で行われていた事例から評価		

教育にLIFEを活用する効果	コーディング	中項目	大項目
LIFE がどう動いたとしても、まずは評価ができるということは大事	評価ができるということは大事	評価に LIFE を活用	評価への寄与
リハビリの方もアウトカム評価で ADL を評価していくという方向に進んでおり、介護も何をしたかの話ではなくて、その結果、利用者にどんな変化があったのかを見ていかないといけない時代に	利用者の変化を見ていく時代		
今まで介護過程の展開で評価をしようとしているんですけど、介護ってなかなか見えないような形で進みますので、そこを見える形にして数値化できるものは数値化していく	評価について見える形にして数値化できる		
一般的になっている評価指標もありますよね、そういうものからまた自作も可能ですので、何かできるだけ一般化されているような評価指標を見せるとか、読ませるとか、教えるという、触れさせるといことも大事	一般化されている評価指標をおしえることも大事		
だから評価の多様性というのも LIFE によってもたらされるかもしれないですよね、笑う、笑顔、満足というのは何によって証明されるのか	評価の多様性も LIFE によってもたらされる	評価に LIFE を活用	
おそらく評価にももう少し活用ができと思っています	評価に活用		
何か評価のところで弱いなど実際に思っている	評価が弱い		
評価について、これもうこうだった方がよかったかなというところは授業の中に取り入れていなかったと思ったので、評価の場面でも LIFE が使えるといいのかなと思います	評価の場面でも LIFE が使えるといい		
教員がその利用者さんの LIFE が理解できていれば、評価のフォローはできる、そもそも着眼点が違ったのかという、何か目安という情報にはなるのでフォローはしやすい	教員が利用者さんの LIFE が理解できていれば評価のフォローしやすい		
生徒は利用者の反応を見て、成功した、失敗だったと、そういうだけじゃなくて、立てた目標に対しての評価、評価の尺度が変わってくるかなと	LIFE であると評価の尺度が変わってくる	アセスメント～評価の一連性	
実施、評価とかのプロセスにもつながる	実施、評価のプロセスにつながる		
アセスメントと評価はつながっているので、アセスメントし、計画を立てて実施をし、どうだったかというところで、何か評価票のツールとアセスメント票のツールというところを関連付けてあるといい	評価とアセスメントのツールを関連付け		
少し評価でははっきりと分かるようなツールがあって、それをアセスメントに照らし合わせて、アセスメントのツールを作っていくみたいなのもあると思う	評価とアセスメントのツールを関連付け		
このようなツールを用いてアセスメントをすることによって、ぶれのない質の高いアセスメントができ、そこから情報を解釈して一連の流れに持っていく	評価とアセスメントのツールを関連付け	変化をキャッチする	変化への気づき、支援の変更への寄与
たぶん Barthel Index とか、そこまであんまり介護過程で使われてない学校の方が多と思うんですけど、もししたらそういったものも入れていくと、変化というところもキャッチできるでしょうし、これは大事だと思うんです	変化をキャッチする		
介護過程は、比較ということをあまりしない、厚労省が使っている LIFE の個別のリハの例なんてすごくいいと思う、結局どれだけ立ち上がりを応援したって、その人のいわゆる食事量が上がらないとだめなんだということに気付く、これは今までの介護士は気付くことができないような観点でもないかなと思う どうすると同じような人がどういう効果が出ているのかという、参照できる例が増えるって大事だと思う	参照できる例が増える	気づきやすい、理解しやすい	
そういうところって教えてはきているけれども、気付けるセンスが物を言うみたいなものもあった LIFE があることで、ここを見ればいい、ここがだめだったらこっちを見られればいいというのが分かる、はっきりしているというのは、みんなが同じように理解する、学ぶといったときには使えるツール	参照できる例が増える		
LIFE に入力した結果を見るという視点で見たときに、だからこの人は、この数値がこうなっているからあれだったんだという気づきにつながっていくというのはすごく感じました	LIFE に入力した結果を見る		
今のしている活動になるので、できる活動と、している活動にギャップがある支援の状況を見直して、この方の立てる機能をどう日常生活の中で生かしていけるのかというふうに、根拠に基づく分析であったりプランを考えていく、重要な情報の 1 つになる	している活動とできる活動にギャップ	支援を見直すきっかけ	
例えば 10 秒立てます、じゃあ、立てるように生活で何か支援できることを増やしていきたいというようにところだけを僕たちがやるんじゃなくて、10 秒立てるのに今そういう機会がなく全介助を受けている理由は何なんだろうと	全介助を受けている理由に気づく		

教育にLIFEを活用する効果	コーディング	中項目	大項目
心身機能・身体構造に関する情報が介護福祉職にとっても分かりやすい数値等で分かると、例えばこの人は立位がこれだけ取れるというのが数字上分かる でも実際に生活の場面では立つ機会がなく全介助を受けているとなると、それが今のしている活動になるので、できる活動と、している活動にギャップがある支援の状況を見直して、この方の立てる機能をどう日常生活の中で生かしていけるのかというふうに、根拠に基づく分析であったりプランを考えていく、重要な情報の1つになる	支援の見直し	支援を見直すきっかけ	変化への気づき、支援の変更への寄与
見えない予測、予期せぬ転倒とか、情報からリスクとかも含めて考えていける、そういう見える化というのも情報ですとか、それから評価指標のツールを活用しながらいくと、そこで現実的に近づいていくかなと思いました	見えない予測	リスクの予測	
実際の利用者さんというのが分かる実習先もあれば、まったく分からず生徒のこの情報のみで想像していくというところも、数値化されると、会えていない先生も、本人、生徒の情報が足りないとか偏るが、イメージしやすかったりする場合もある	LIFE から見える利用者	利用者情報の共有により教育の場で指導しやすくなる	
数値が出ると、こういうふうになっているけど、でも実際はこのぐらいなんだねというのが分かるのは、教員としても指導はしにくくなるということはないと思います	LIFE から見える利用者		
実習対象者の共通認識を生徒と教員がより明確にすることで実習指導の先生方の質だったり、栄養が悪そうだから私だったらここ気になるなという指導ポイントがより輪郭が出てくる	実習対象者の共通認識		
LIFE が現場と教育の共通ツールということで活用できるのであれば、それは今後のこういった展開能力にも反映し得る可能性を持っている	LIFE が現場と教育の共通ツール	LIFE が現場と教育の共通ツール	教育の全体への寄与
施設はデータを持っているので、名前を消してどこかのデータを見せて読めるかというのをグループワークをしても、身に付くデータの読み方とともに、こんなものが求められて入力したりアウトプットで出てくるんだなということが分かるということで、このデータを見るということは意義がある	データを見せて読めるかをグループワーク	いろいろなデータを見る	
いろいろなデータを見ることも LIFE によってもたらされる	いろいろなデータを見る		
例えば外国人の介護職との連携強化にもなるでしょう	外国人の介護職との連携強化	多文化でも共有しやすい	
例えば情報が非常に精査されています、シンプルに	情報がシンプル		
多文化でも共有しやすい知恵である	多文化でも共有		
学生が多様化してきて、言語が違ったり学習能力も全然違うといったときには、分かりやすいものがないとすごく時間がかかるし、一定のレベルまでは持っていけない	学生が多様化	バックグラウンドが違う教員の教育の均質化	
どんなバックグラウンドの先生でも、標準的に教えられるようなあのシートを作成できる可能性も、そういった LIFE の導入のポジティブな面としてあるのかなとは思いました	違うバックグラウンドの先生でも標準的に教えられる可能性		
教員もそれぞれバックボーンはいろいろですので、差があるんだろうと思う	教員もバックボーンにより差がある		
学生からは、LIFE のコード化とかは難しいけれど、あれを見ることでいろいろな人に客観的に伝わりやすいなというのを感じた、という意見があった	コード化	客観的に伝わりやすい	
学生からは、言葉にできないと思った観察項目を、客観的に分かりやすいふうにはかの人に伝えられるようになるのが LIFE かなと思ったという意見があった	言葉にできない観察項目		
学生によると、言葉にしづらいとか、何となくこれを見たらいいんだろうな、は分かるけど、どう表現したらいいか分からないと思っている学生、職員さんにとっては、元のコードがあると何となく、確かにこの人、こういう行動しているかという、何を見たらいいというちょっとしたアドバイスか、参考になるんじゃないかなというふうに思いました、という意見があった	コード化		
項目の整理というのはすごく具体的になっていて、例まで載っている、だから初学者が見てもその項目に対するイメージが付きやすいと思いました	項目の整理が具体的	具体的イメージが付きやすい	
例えば情報収集するに当たって、その情報の持つ意味が分かっていないと収集しても使えない、関連させられない、LIFE はそういうような資料も具体的に提示してあって、各項目ごとに分かりやすい、何も分からない学生さんは情報としてとらえやすい可能性は大いにあると思います	各項目ごとに分かりやすい		
今までそういった入り口というのが ICF のテキストには書いてありましたが、あまり具体性はなかった、そういった意味ではより具体的になっている	より具体的		

教育にLIFEを活用する効果	コーディング	中項目	大項目
LIFE の具体的な項目がたくさんあり、使うと学生が考えていることがきちんと文章になるような中身を何か探せたらいい	使うと学生が考えていることがきちんと文章になるような中身	文章化による理解につながる	教育の全体への寄与
教育では LIFE の情報をこれから活用していくと思うんですけども、その蓄積された、提供された情報から何が見えてくるのかを思考するところを教えることが大事	蓄積された情報から思考するところを教える	思考力の向上	
これとこれを足したら根拠になるというのが LIFE で示されるのであれば、教育もやりやすいと思う	これとこれを足したら根拠になるというのが LIFE で示される	根拠につながりやすい	
根拠に基づく介護実践、ツールを活用していくというところと何かつながってくる、LIFE の活用の可能性というところと結び付いていくのではないかな	根拠に基づく介護実践、ツールを活用		
根拠を伴って説明しきることができるというふうには、ツールとして使えるような気がいたしますね、教材になるということ	根拠を伴って説明しきることができるツール		
そういう学び方ができるのは何が根拠なのかという明確さはできるので、ある意味ではすごく教育的にはいいことだと思っている	何が根拠なのかという明確さ		
LIFE を意識すると利用者主体になるんだというのにつながる	LIFE を意識すると利用者主体	LIFE を意識すると利用者主体になりやすい	介護過程をよりよくするツール
栄養のところなんかは使えますよね、BMI とか低栄養状態とか、この人は食事ね、BMI が上がってきたよねと、それは何がよかったのか 栄養士にそれを助言できているのか、反対に栄養の方に、調理の方にいろいろ提案ができていく、データ化されてないと現場では見過ごす可能性	栄養のところは使える	数字で測りやすいデータを効果的活用	
心身機能、身体構造とかは数字とかで測ることができるという根拠が 1 つ	心身機能、身体構造は数字で測ることができる根拠		
今まで少しぼやっとしたところを、LIFE が 1 つのツールとして今、導入されていて、それを介護過程をよりよくする、より促進させるために活用できるのではないかなという可能性	今まで少しぼやっとしたところ	介護過程をよりよくするツール	
現場で活用されているものを何も知りませんということであると、それは困ったなみたいな声も聞こえているので、LIFE というものが導入されていて、どういったもので、介護過程と結びつけるとこういう生かし方ができるよねということぐらいは学校教育の学んでおくということは、学生の不利益は決してならないのではないかな	介護過程に活かせることを知る		
学ぶことが増えるということは、負担にはなると思うんですけども、ただ不利益かどうかというところで見ると不利益にはならないのとは思っている	学ぶことは不利益にはならない		
介護も看護もそれぞれの資格が共通に使えるシートがあると、それを基にして LIFE が組み込まれていたらなおいい チェックというか科学的にチェック項目があって、そこに LIFE がつながる	介護・看護が共通に使える LIFE が組み込まれているシート	多職種との連携に必要な	多職種連携
LIFE は共通言語として他職種の間で事業所の中でも使っていけることになりましたので、介護福祉士の教育から LIFE を軽視しちゃうと反対に疎外されるという気持ちであります	LIFE を軽視すると多職種の中で疎外される		
読むことが介護職は苦手、データを冷静に分析して統合して、こうだからこう、こうかもしれない、だからこうなんだ、こういう理由なんだということをみんながケース会議とかの共通言語に介護ができるといい	ケース会議の共通言語に		
これを踏まえておかないと発言力がなくなる、多職種連携ができなくなってしまう	多職種連携ができなくなる		
結局、数字で見ていないか、見ていないかというところで自信が、データがないことへの自信のなさみたいなどころがあるんだけど、アイデンティティの確立にも役立つ	多職種連携の中でのアイデンティティ確立		
生活の支援者たる我々と、病気、疾病をよりよい状態に戻していく医療ではアプローチが当然違うが、LIFE という同じツールを多職種が使い、専門職として自分の解釈を伝える、それが仕事に反映されるという未来が訪れれば、実感してほしいアイデンティティに、これを教育の段階からしっかりと根付かせることにつながっていく	多職種連携の中でのアイデンティティ確立		
チームでやることの意味も LIFE によってもたらされる	チームでやることの意味	チーム形成につながる	チーム形成
ひいては利用者の生活の質の向上につながるものであるということは、うまくいけば間違いないというのは個人的には考えているところではあります	利用者の生活の質の向上につながる	利用者の生活の質の向上	介護過程のアウトカム

教育にLIFEを活用する効果	コーディング	中項目	大項目
ひいては利用者の生活の質というところにつながっていくというのは間違いない	利用者の生活の質		
利用者の生活の質というところ	利用者の生活の質	利用者の生活の質の向上	介護過程のアウトカム
利用者を長期的に見ていくことも LIFE によってもたらされる	利用者を長期的に見ていく		
個人的には推進がなされるべきと考えておりますし、それが介護職の業務の効率化、省力化、ひいては利用者の生活の質の向上につながるものであるということは、うまく用いれば間違いないと個人的には考えている	介護職の業務の効率化、省力化にもつながる	生産性の向上	
我々の仕事の業務効率化というところにつながっていくというのは間違いない	仕事の業務効率化		
こうなんだ、だからだめなのねとかって、単純なところになっちゃうかもしれないですけど、でもそれで納得して進めるという子は出てくる	数字のほうが理解しやすい学生もいる	その他	その他

(5) LIFEを教育に活用するにあたっての課題

LIFEを教育に活用するにあたっての課題	コーディング	中項目	大項目
自立度が維持されることによる加算というような言説が間違って導入されてしまうと、現場でADLが維持されることがお金をもらうためには最優先というような感覚、違和感があると思う、その違和感の調整がうまくいかないと、現場へのさらなる導入が難しいところがある	ADLが維持されることが最優先という現場の違和感	LIFEありきという認識を助長させない	教育内容
先生たちが懸念されている通り、そこだけに行くというのは全然違うので、そこの根拠を持ってさらにというのが私はすてきなと思うので、そういうふうにやれるかなとは思ってはいる	根拠を持ってさらに		
どんなツールを使ってもいいんだと思うので、介護過程はしっかり教えるそれに合わせてこんなのもありますという紹介の仕方だろうなと思っはいます	介護過程にLIFEを使う視点		
介護も看護もそれぞれの資格が共通に使えるシートがあると、それを基にして、LIFEが組み込まれていたらなおいい、チェックという科学的にチェック項目があつて、そこにLIFEがつながる	介護・看護が共通に使えるLIFEが組み込まれているシート	使用している書式の見直し、再考が必要	
それが次にどうなっていくかというものを見ていくような短期目標を立てさせていくというようなことも、1つの流れとして重要なので、様式の見直しもやっていかないといけないという	LIFEの要素を取り込んだ様式		
学生が立てる書式、うちの演習書式も少し若干見直していかないといけないという声が出ています	書式の見直しが必要		
様式の見直しということを先ほど申し上げたんですけど、計画の様式になったときに、その評価をどこに持っていかということで、LIFEを意識した計画要旨にしていけないといけない、計画評価ができる様式にしていけないといけないということが課題に挙がっています	様式の見直し		
結果を読む、データを読むとか、データをするためにいわゆる世間で言う調査方法とか、何かそういうところをちゃんと踏まえておかないと、いけない	結果を読む、データを読む	データを 読む力を どうつけるか	
調査方法みたいな部分ってどこかで押さえておく必要がある、これからはデータに強い介護福祉士になるためには必要かもしれない、そういった科目は一般的な一般基礎科目ではありますけれども、全員が受けるわけではありまないので、そのところが課題	データの読み方を学ぶ機会		
データをどう解釈するかみたいなところを教育の方でやっていただけると、いいんじゃないかなと思っていて、そのためには、そのデータがないとなかなか難しい	データをどう解釈するかを教育で		
アセスメントとか評価とかのところで、確かにそうしたらデータを読む力が必要ですね、本当に弱い、もう少しストイックに介護がそれを理解できるように、この数字とかをもつとこう教育に	データを読む力が必要		
数値化されることが得意な子、これがあつたらばつと分かる子もいる、何でこの方この方、こうやってやり方が違うんだろうというのが分かる子もいれば、余計分からなくなっちゃう子もいるんだろうなと思ったりはして	数値が得意な子、得意ではない子		
LIFEがとらえているアセスメントと、LIFEがとらえられてないアセスメントも、おそらく介護福祉士は大事にしていけないといけないんだろうなというところ、そこは整理が必要だなということも思っています	LIFEがとらえられてないアセスメントも大事に	数字では表せない内容との精査	
身体的なところに傾いたり、認知症のBPSDのところに傾いたりしているようなアセスメントなので、そこまで行き着かないような小さな発見とか、そういうところを大事にできるような教育もしていけないといけないと思っています	小さな発見を大事にできる教育もしていけないといけない		
文字だけで見るのではなくて生活というところも、きちんと人としてとらえて情報の意味を考えていけるというふうに思いました	文字だけではなくて生活もとらえて情報の意味を考えていく		
その人の生活の質の満足って何かといったところで、効果を測定するのは数値的に難しいというところが大きな1点	生活の質の満足、効果を測定するのは数値的に難しい		
すべてデータに基づいたもので介護され、私はそんなふうと思ってないんだけどなというところで、何か利用者さんの思いとずれてしまうことが起こってくるんじゃないかなというのは非常に不安です	利用者さんの思いとずれ		
でも、人が見て感じるということの大切さというのを、私は昔の人間なんですけれど、すべてデータに基づいたもので介護され、私はそんなふうと思ってないんだけどなというところで、何か利用者さんの思いとずれてしまうことが起こってくるんじゃないかなというのは非常に不安です	利用者さんの思いとずれ		

LIFEを教育に活用するにあたっての課題	コーディング	中項目	大項目
本人の言っていること、思い、または言えないことも結構あると思うので、どうこの LIFE の中でやっていったらいいのかな、思いとかも反映できるようなものになればいいのかなと思いました	思いも反映できるようなものに	数字では表せない内容との精査	教育内容
思いというのは数字では表せないし、一人一人違う、何を根拠としているかといったときに、その人の発言であったり、どういう動きをしていた、どういう表情をしていたと、その人から導き出していく、そこがほかの人に分かるように情報として、文字として書けているという、そういう意味の根拠	発言、表情		
QOL という観点は LIFE は落とし込みにくい	QOL という観点		
介護過程をやることで ADL ベースの根拠と QOL という観点からのいわゆるニーズをベースにするというのは両方やらないと、ものすごい医学モデル的な介護過程になる	介護過程の ADL ベースの根拠と QOL という観点からのニーズベース		
学生からは、参加とか、個人因子は難しいかな、生活歴がその行動とかに影響していたりとか、その方の性格でその行動になっていたりする場合がありますので、個人因子が難しいのかなという意見があった	参加とか、個人因子は難しい		
例えば LIFE で自立の観点で 25 メートル以上歩けるとか、実際 25 メートル歩くのを見るかという話になると、介護施設の介護過程に必要な情報と、LIFE で提供が必要な情報が必ずしも全部合うとは限らない	介護過程に必要な情報と LIFE で提供が必要な情報	介護過程と LIFE で必要な情報が一致しない	
健康状態に関する情報があったとしても、それがその方の活動や参加にどんなマイナスや影響を与えているのか、そこを理解する学習というものが無いと、LIFE にしてもさまざまなツールがあったとしても、明確な根拠としてアプローチ、実践をしていくのも難しい	LIFE のツールがあっても明確な根拠としてアプローチ、実践をしていくのは難しい	LIFE の蓄積と介護過程教育内容の整理	
シートの構成をきちんと理解して LIFE にしても ICF の視点で情報を整理する でもツールとして活用していかねばならないので、非常に教員の教える側の力量が求められるような気がします	LIFE を ICF の視点で情報整理		
まずどんな形で見せるか、それを踏まえてアセスメントをさせるというようなことを意図するために、どういうふうに入力していったらいいかなということが検討課題だと思っています	どういうふうに入力していったらいいかが課題		
A さんのどの部分を LIFE の視点、LIFE の評価票でとらえることができるのかということの整理が必要、それから A さんの介護の計画を立てていくときに、LIFE がどの部分に貢献できるのかということ整理していく必要がある	LIFE の視点の整理が必要		
介護は介護の視点でその人を見る、このときはどこを見たらいいんだとか、その数字だったらどうするみたいなの何か論拠につながる部分が一部分あるといい	論拠につながる部分があるといい		
解釈の加えられていない生情報、ここから意義を見いだす 意図を見いだすのが我々の仕事であるという部分を単純化して伝え、それが現場でどういうふうになるんだということで、LIFE の情報を見せて、この人、今こうい状態にあると、何が起きているか想像できる？というようにしていく	アセスメントの情報と LIFE の情報をつなぐ		
どういう蓄積の中からここに至っていて、それがどう変化していったら将来像としてはこういう可能性があるとか、例えば筋力がこれ以上、このまま安静状態が続けば、今以上に筋力の低下、移動能力の低下などにつながってしまう可能性があるみたいなのところに、よりリアルにつながっていく	LIFE の蓄積と介護過程を連動		
LIFE に使われている項目だったり、指標、こういったものの情報も今、たぶん Barthel Index とか、そこまであんまり介護過程で使われてない学校の方が多いと思うんですけど、もしかしたらそういったものも入れていく	Barthel Index などの LIFE の項目		
実施は PDCA の Do、私たちの実施というのはチームが皆同じ均質の再現性を持ったケアをして、それがきちんと記録をされているということが実施、先ほどの中庭散歩、それを記録といったときに「中庭散歩しました」じゃない、本人の表情、疲労感、長すぎたなと思えたのはなぜかということも記録をしなければいけない、というようなところの根拠にも LIFE の情報が寄与する可能性はある	記録の根拠に LIFE の情報が寄与する可能性		
1 人の人の全体像を、LIFE だけで語れることはできないというのは見えている、ただとらえるときに、この部分については LIFE の指標が使えるかもしれないという点が明らかになると	LIFE の指標が使える部分の明確化		
ICT を含めて、使いこなすというところに特化した教育をこれからしていかなければ、リーダーシップを取る人材になれないと体感している	使いこなす教育がリーダーに必要	リーダーとして LIFE を使いこなす教育	

LIFEを教育に活用するにあたっての課題	コーディング	中項目	大項目
例えば学生が持ってきた利用者の情報を介護過程の授業の中で、個人の作業として入力するツールとして、教材として、要素を抜き出した、基礎的なものとして LIFE というこのようなものの見方、情報ツールを、アセスメントツールを使っているんだよというシステム紹介のための教材として全国の学校で共有できると	教育の場で事例の LIFE の情報を活用	LIFE の目的を現場と教員が共有	現場と養成校の連携
確かに多くの施設がこれを用いるということは、そこに送り出す我々は、それをベースにした教育ということに振り切ることができます	多くの施設が用いるということを意識		
現場の方たちの肌感覚も含めて、正直なところ負担感が強いものになっている、義務化されてしまうということになれば適応しかねる、利用者、我々にどのようなメリットがもたらされるのかというのを実感できていない状況は明らか	利用者、介護職へのメリットが実感できていない		
LIFEが何のために存在しているのかというような目標値、落としどころ、着地点を、誤解のないように現場の方たちと共有し、教員もそれを誤解のないように、苦手意識を取っ払って受け入れやすい土壌をつくる、現場の抵抗感は想像以上に存在するのが現実	目標値、着地点を現場の方たちと共有		
改善しながら継続していく中で、どんな恵みが利用者、職員にもたらされたのか、それが事業所にどんな恵みをもたらして、それが我々の職業の社会的な評価の向上にいかにつながっていくのかということを説明できるような努力がなされればうれしい	職員、事業所、職業の社会的な評価の向上につなげる		
本気で僕らはこれを活用したいと思うのであれば、現場、それから学校への丁寧な、間違いのない、誤解のない情報提供というのは試行錯誤し続けなきゃいけないのかなという気はする	現場、学校への間違いのない情報提供		
例えばそういう知見を持った人たちを紹介するような情報を集約したところがあると、例えば LIFE について、現場での実践事例についてお話をいただきたいみたいなことで、リストがあって、その方にアポイントしてもいいリストみたいなものがあると、個人的にはうれしい	LIFE の実践事例についてお話をいただける現場リスト		
実習施設、実習指導者さんで意見交換をしたところ、多くは活用できてないという意見、それはデータが読めないからできないだけだと、いろいろな意見があった 実習生を送り出す施設さんは、そういう状態	多くは LIFE を活用できてないという現場の意見	現場・介護実習との連携	
実習先がこういうことに関与しておられたらフィードバックをされていたら、また、実際に見させてもらったりするということもできるかと思いますので、実習との連動というはあるなと思っています	実習との連動というはある		
施設の側も LIFE を理解をされているとか、扱っておられるのは管理者であったり、上のほんのごく一部の方であって、一般の介護職には下りてきていないんだろうなと思いました	施設も LIFE を理解をされているのは一部		
こちらで学生がいろいろな知識を入れていっても、実習先で具体的に個々につながっているんだというようなところを実習で身に付けることができなかったら、絵に描いた餅になる	実習先で具体的に身に付けることができない可能性		
私たちも、施設サイドも、それぞれに底上げを図っていったところ、求められているんだろうなと思います	LIFE の理解		
不可欠なのが実習先施設での介護過程の教育の連続性	実習先施設での介護過程の教育の連続性		
もしかしたら教育の方が LIFE の内容を先行するという可能性もあるのかなというふうに、管理者は LIFE をご存じだと思うんですけども、現場の職員さんは実習生が LIFE を含めた介護過程を追っていったときにどんな指導ができるか	現場は実習生が LIFE を含めた介護過程を追っていけるか		
実習先と連携してデータをもし活用できるのであれば半年前との違いを見て、あの人はこうだから変わったんだよねみたいな、個別的な把握みたいなものができると素晴らしいなと感じました	実習先と連携してデータを活用		
企業とかがアセスメントツールなどは競争するように開発をして、いち早く導入している施設などもあって、それらと LIFE との整合性、バランスはどうなのかというようなところも、問題としてあるんじゃないか	現場での活用		
完全に出来上がっていないところがあったり、施設さんによっても、かなり温度差があるというのは感じていて、何かそこも難しいので、私たちも完全に分かってない、施設さんも強い施設さんもあれば、まだというところもある	施設によって温度差		
LIFE を取り入れるということに関しては、全国平均と比較してとなつて、こういうことが理想的なんだろうなというイメージもわきやすくなるような気がするんですけど、ただ現場の施設さんがそれを取り入れていないと、生徒が実際、実習に行ったときに批判につながらないかなと	現場の施設がそれを取り入れてない		

LIFEを教育に活用するにあたっての課題	コーディング	中項目	大項目	
こういう面ではよかった、次回はこういうふうな工夫をするという話はするんですけど、実際のところ利用者さんと私も話ではできない、職員さんの話を聞いて、生徒がやった介護計画によってどうだったかという話をお聞きすることができれば、継続性につながる	生徒の介護計画によって どうだったか聞けない	現場・介護 実習との連携	現場と養成校 の連携	
職員さんが LIFE に基づいたものによって指導、これはこうだからこういう視点もあるんじゃないというのがもしあるとするならば	職員が LIFE に基づいたものによって指導			
根拠を持って職員さん側は説明をしてくれると、たぶん施設さんと実習生と学校の三者の基準ということですね、共有ツール	施設と実習生と学校の共有ツール			
実際にどんどん積み上がっていても、事業所にデータ提供とデータの確認でひもづくので、教育現場でそれが見えるわけじゃない、そうしたら教育に使えるのに限界があると思う	介護現場のデータ			
総合実習が集大成の場になる、施設さんとの連携、共同というのが必要不可欠になる、いくらいい LIFE の教育をしても、そこで実際に使えないとなると、やっぱりすごくそこはそこで難しい	介護現場での浸透			
学校で介護過程を学んで、現場でもそれをつなげてしっかり、そういう方を専門として実践していくというところは非常に大事	介護現場での浸透			
実習指導者交流会とかで何かできるといいかもしれない	実習指導者交流会で何かできるといい			
シートの構成をきちんと理解をして LIFE にしても ICF の視点で情報を整理する、でもツールとして活用していかねばならないので、非常に教員の教える側の力量が求められるような気がします	情報を整理、ツールとして活用する教員の力量	LIFE を活用 する教員の 力量	教員の理解	
教員側の課題として、教員が LIFE を触ったことがないので、自分たちが携わったものは経験も含めて伝えやすいが、触ったことがないものを知識だけで伝えるというのが難しいという意見が出ました	自分たちが触ったことがないものを知識だけで伝えるのが難しい			
私たちも勉強しなきゃいけない	LIFE の理解			
教育に入れるからには、LIFE 自体の目的、認知度、そういったところがもう少し客観的にないと、教育に入れるといったところにはばらつきが出てしまいます	LIFE 自体の目的、認知度	教員の 共通認識		
可能性もある反面、ほかの先生方がおっしゃっていたようなテキストのこととか、時間的なこととか、やっぱりまずは教える側の教員が共通理解しないと、FD はちょっと LIFE について話すなど、FD で LIFE について話す取組	教える側の教員が共通理解			
LIFE を現場でどのように活用されているかなかなか聞くチャンスがなかった	LIFE を現場でどのように活用されているか聞くチャンスがなかった			
個人のフィードバックが出てくると、事例の示し方も違ってくるのかなということ、また、そこでもう 1 回検討が必要かもしれないなということを思っている	個人のフィードバックが出てくると事例の示し方も違ってくる	LIFE の 個人フィード バックの活用		事例
実際に LIFE を入力する画面というのを見てみたい	LIFE の使い方など、生徒が使えるツール	実際の LIFE のシミュレー ションが必要		
例えば LIFE の使い方モデル、実際に現場に出て即戦力としてというご要望がもしあるのであれば、生徒が使えるツールものもあるといい	LIFE の使い方など、生徒が使えるツール			
資料集だけだと、うーん？と、生徒はこれに意味があるのというふうに思うかもしれない、実際の現場に近い形で何かシミュレーションができるようなものがあるといい	実際の現場に近い形でシミュレーションができるようなもの			
でも目で見えるのは得意、耳で聞くのはどんどん苦手になっていく、視覚的な方が得意な子が多い	視覚的な方が得意な子が多い			
ドキュメンタリーじゃないけど、LIFE を用いて実際に介護過程を 1 年間やってみたらこうなりましたみたいな、生の情報に近い教材みたいな動画	LIFE を用いて介護過程を 1 年間やったらこうなりましたという動画			
教育に活用するということになると意見が出ていたのは、演習事例として私たちが持っている事例にどんなふうに、まずは情報として落とし込んで見せてあげるか	演習事例	LIFE の 具体的事例 が必要		
演習事例に LIFE をどう入れていくかというところがまず最初の課題であります	演習事例に LIFE をどう入れていくかというところが課題			
授業の中で、この部分で活用したら、この視点を使ってみたら学生が分かりやすかった、理解がしやすかった、例えば誰が見ても客観的に評価できるような目標が立てられるようになったとか、実際の事例も集めていくことが大事	実際の事例も集めていくこと			

LIFEを教育に活用するにあたっての課題	コーディング	中項目	大項目
事例が少ない	事例が少ない	LIFE の 具体的事例 が必要	事例
事例少ない、私たちも何をもって、中央法規のはいまいち分かりづらかったりするので、それが LIFE のこういうのにあると	LIFE の事例があるとよい		
現場の教員は事例があると使いやすい	教員は LIFE の事例があると使いやすい		
もっと事例を取って、その事例から LIFE というものの理解につなげるというのが、現場の先生方の 1 つの課題になる	事例から LIFE というものの理解につなげる		
リアリティーある事例にどれだけ取り組めるか	リアリティーある事例に取り組んで、思考過程を経験し、蓄積していけるか		
事例にどれだけ取り組んで、思考過程を経験していけるか	事例で思考過程を経験しできるか		
事例集があったらいい	LIFE の事例があるとよい		
本当にそういう、動画でもいいんですけど、さっきおっしゃった表情ですとか、声の大きさとか、そういうのって本当文字では伝わらなくて	表情、声の大きさは文字では伝わらない		
例えばアシストする意味でも、介護過程の授業をしていて、テキストが具体的に LIFE を用いた介護過程の事例集として作られて、そこにやはり QR コードとかでデータが入れられる	具体的に LIFE を用いた介護過程の事例集	LIFE を用いた教材が必要	教材
LIFE に特化したということで、バーセルインデックスの入力だったりとか、LIFE の初期画面みたいなものが見えるようなのがあれば	バーセルインデックスの入力や LIFE の初期画面が見える		
理想ですけどね、学生がそれで学ぶ、実習に行ったらそれを使っている、戻ってきてそれでまた学ぶ、そして就職したら本格的に本当にそれを使う	実習でも就職後も実際に使える		
共鳴するときって学生の受け取るタイミングなんです、こちらが伝えたいタイミングじゃない、受け取って、そのタイミングに、よくいい球を投げてやるかどうかだけだと思うので、学生が学びたいといったときにアクセスできるものが、いつでも、今の学生ならではの、「TikTok」だったりとか、そういったもの	学生が学びたいときにアクセスできるもの	動画教材が必要	
「YouTube」も生徒は食いつく	「YouTube」		
私たちが作った介護過程のガイドブックも、学生がいつでも閲覧できるようにしておくのも必要かもしれないなということは意見が出ています	学生へのテキストの中に LIFE	副教材	
日々記録だとか個別援助計画がクラウドでできるといい	日々記録、個別援助計画がクラウドでできるといい	有効活用のための情報共有のあり方	
知見は積み重なってきてはいるようですが、これを導入して何がもたらされたのかという具体が、もっと明確に説明ができなければ、教材として用いるのはもしかしたらまだ難しいのかもしれない	導入効果が明確に説明ができなければ、教材として用いるのは難しい	導入効果の明確化が必要	その他
デメリットも含めて、情報がもたらされるメリットと困難さのようなものが共有されてくれば、より誠実に学生に使う教材として用いやすくなるような気がする	メリットと困難さについての共有が明らかになれば教材として用いやすくなる		
LIFE が変わっていくごとに教育がころころ変わるというのも困る	LIFE に連動して教育が変わるのは困る	その他	
学生からは、コードを毎回見ないと分からなかったりするという面では、実習で使おうと思うと、持っている資料を持ってないと分からないとかいうのがデメリットになるという意見があった	コードを毎回見ないと分からない		

第4章 関係者による意見交換の実施

関係者による意見交換の基本的枠組みと概要は、以下のとおりである。

- | | | |
|-------|-----------|---------------------------|
| ●参加者： | 井川淳史氏 | 聖隷クリストファー大学 社会福祉学部 准教授 |
| | 井口健一郎氏 | 社会福祉法人小田原福祉会 理事 |
| | | 特別養護老人ホーム潤生園 施設長 |
| | 真田龍一氏 | 全国福祉高等学校長会 事務局長 |
| | 品川智則氏 | 東京YMCA医療福祉専門学校 介護福祉科 専任教員 |
| | 鈴木俊文氏 | 静岡県立大学 短期大学部 社会福祉学部 教授 |
| | 武田卓也氏（司会） | 大阪人間科学大学 人間科学部 教授 |
| | 金山峰之氏 | オブザーバー |
- 日時：令和6年3月1日（金）18：00～20：00
- 実施方法：リモートによる実施

■意見交換の記録

※以下では、「開催にあたっての挨拶」や「意見交換の目的等」について掲載を省略している。

※「生徒」「学生」などの表現が使われているが、発言者の立場による違いであるため、発言のとおりに掲載している。

1 はじめに

2 自己紹介

3 課題の共有

4 介護過程教育に関する課題の共有

事務局より、以下のスライドを用いて、ヒアリング調査から明らかになった介護過程教育における課題を説明した。

座談会論点 介護過程教育における課題

- ① 根拠を伴う情報を収集する力を教育する課題
- ② 専門的知識や視点から情報の意味づけをする力を教育する課題
- ③ 情報からニーズ・課題を導き出す力を教育する課題
- ④ 言葉として表現する力の教育に関する課題
- ⑤ 他科目で学んだ知識や技術を活かして計画立てたことを実施する力に関する課題
- ⑥ 評価に関する教授が十分できていないという課題

5 意見交換

▼課題に対する認識の共有

武田氏 今、事務局よりヒアリング調査から明らかになった介護過程教育に関する課題について説明がありました。

まずは、皆さんが感じている介護過程教育に関する課題について、意見交換をしたいと思います。いかがでしょうか。

真田氏 事務局から説明があったスライドの課題④にもありましたが、特に言語化する能力というのは大事と思っています。まさにチームアプローチとか、多職種協働・連携という部分では情報共有が必須で、自分の考えていることを相手に正しく伝えるために、インプット・アウトプットはすごく大事です。そういった意味でも、この言語化が苦手というのは課題であり、良い対策を考えられたらと思います。

井川氏 どちらかというと介護実習の指導的立場での介護過程教育という見解になりますが、学生が介護過程を実施するとき、色々な利用者さんの課題をあげますが、果たしてそれは本当にその人が抱えている課題なのかということを考

えます。学生が考える課題、支援者から見た課題も大事ですが、利用者の視点をどれだけ理解して取り組んでいるのかということに、時々疑問を感じることがあります。そういった意味では、課題と感じていることを客観視するためのツールが、LIFE の活用というところかと感じています。

品川氏 そうですね、事務局から説明があった課題にもある「②専門的知識や視点から」の「視点」に対しては、時々疑問を持つことがあります。介護過程を学生に教えていると少々曖昧というか、僕自身が明確に根拠を持って、こういった視点でこのような情報に注目していけばいいと、正しく伝えることができているのかどうかを考えてしまうことがあります。

例えば、介護過程において ADL の維持・改善という視点においては、どのような情報を収集し、どこに着目していけばいいのか。こういった物差しで図ればいいのか。そのような点が僕の中で、曖昧になってしまうことがあります。そのような際に LIFE の評価や内容の活用をすることで、明確な根拠や視点を持つことができるのではと思っています。

鈴木氏 率直な意見として、今のお話はどれも感じています。

ただ、これは介護過程教育上の課題だけではなく、介護実践上の特性でもあると思います。教育として賄えることもあります、不確かさを伴うことが前提という特性をもつ介護実践の中で、どう言語化の折り合いをつけていくのか。これがベストだ、これで確定だと言い切れる状態では進められないのが介護過程の特徴なので、一つひとつのことを確実に明確にしていくことが大事ですし、PDCA サイクルを回していくという推進力を高めていくことでカバーできることもある。介護過程を単発に見るだけではなくて、PDCA サイクル全体の流れの中でも見ていくというのが大事なのではないかと、あらためて率直に感じました。

武田氏 確かに介護過程は色々な要素を含みますから、そのぶん課題も多くなります。そこで LIFE の可能性や要素、視点、こういったものが介護過程のどのような点に生かせるかを考えることも大切だと思います。

▼各養成校における教育の現状

真田氏 気になっているのは近年、生徒の能力差というのがあります。この能力差は、アセスメントのばらつきや、計画を考えることが難しいこと、言語化が苦手ということも、そこに起因しているのではないかと考えます。こういった能力差がある中で、生徒が少しでもアセスメントがやりやすくなる、介護過程を展開しやすくするために、どのように LIFE の活用ができるのかと考えています。

例えば、アセスメントを行う際に「できている」と評価する生徒もいれば、「できてない」という評価の生徒もいる。では、何をもって「できている」とするのかといった、評価の指標のような、そういった点で LIFE を活用することで、能力差を埋めていくことができると、状況が少し変わってくるのではないかと少し期待しています。

武田氏 ばらつきを統一していくような視点というところで LIFE が活用できるのではということですよ。

品川氏 例えば、私たちの学校で使っている情報収集シートには、一部介助、全介助、見守り、自立といった各項目に中項目が設定されていて、そこに具体的な状況や支援の現状などを整理しながら記入するようなシートになっています。

例えば、着脱という項目があったとして、一部介助、全介助、見守り、自立のどれに印を付けるのかが、学生によってそれぞれ違う。もちろんそれぞれに理由がありますが、「先生、僕と〇〇さんここが違いますが、どちらが正しいでしょうか」と質問されたりもします。そういったときに LIFE を活用したらばらつきが解消されていくのではないかと、学生指導をしていて最近感じました。

また、能力差については、私たちの学校は半分以上が留学生です。日本語で表現させる際に、どのように言語化するのかという点は常に課題として感じています。介護過程の思考過程の枠組みを言語化しやすいように、こういう表現が正しいのか分かりませんが、考え方の型を示しつつ、そこを少しずつ言語化していく。そのように留学生も言葉にすることで、自分自身の考えを見える化していく。

このようなばらつきや共通の視点という点は、常日ごろ、課題として感じています。

真田氏 アセスメントの評価表の作り方、アセスメント表の作り方というのは各学校によって違うと思うので、どういった形のアセスメント表を作っていくかということもすごく大切になってきます。

あとは、結果的に計画を立てて実施、評価というところでも指標という部分で LIFE は重要になってくるのではないのでしょうか。

武田氏 今のお話の“ばらつきがある”という点に注目すると、例えば、一部介助をどういう基準で判断するのかというような。介護過程では、それを詳細な情報に置き換えてから分析につなげていくことが多いと思うのですが。そもそも一部介助というものが、本当に一部介助という判断でいいのかという点で、LIFE のデータの活用ができないかということでしょうか。

品川氏 はっきりとした答えではないのですが、そういった一部介助とか、見守りといった客観的な評価と、実際に自分が利用者さんに行っている支援の現状・状況というところから、ギャップのようなものが出てきたりしたら、それが支援のきっかけになるのではないかと思います。

武田氏 なるほどそういうイメージですね。

鈴木氏 今、私たちが取り組んでいる、4 年制大学の 1 年生後期の介護過程教育の研究的な取り組みの中で、“している活動”から“できる活動”を捉えていくということを前提に、そこに Barthel Index の活用がどのように意識的に使えるか、無意識にその観察点を持って行っているのかということを研究しました。1 つ分かったことは、“している活動”を観察するのですが、学生はどちらかというと動作を習うという授業があまりないように思います。この人はどのような介護が必要かということは、さっと頭に浮かぶのですが、立ち上がる動作や歩く動作ということを分解し、さらにそれらのことを一連の流れで見て、どう記述するのかということは十分ではなく、このようなことは授業の中でも扱わないと思います。極端に言うとなんか介護技術系の授業では、介護職の動きを中心に動作を分割していくので、利用者の動作を書く機会がありません。すると ADL を“している活動”と“できる活動”という観

点で分析する材料自体が集めにくくなってしまいうというのを強く感じています。

では、LIFE を使うとそれが改善されるのか。LIFE の中で、いわゆる Barthel Index の動作の例のような観点を、学生自身が無意識に持って観察できているかどうかや、そこにつながるような観察力を、ある程度、教育において項目立てして行っていないと、なかなか進まないだろうと私自身は思います。

例えば、歩く動作をよく観察しようという際に、介護の役割において安全に配慮するということを、当然一緒に考えていかなければいけない。見ているだけでは今度は介護過程がぶつ切りになってしまい、本来の支援を目的にした観察ではなく、動作を目的にした観察になりやすくなってしまいうという点に、教育上の矛盾を感じています。これが旧カリキュラムのように、別の科目で補えるとか、そういうところでうまく紐づくようなことがあったほうが、介護過程教育で全てを扱うというよりはいいと思います。

武田氏 完全なる観察者みたいなものじゃなくて、そこには安全とか動作をどう理解していくのかというようなものが含まれていく教育がそもそも必要じゃないのか、と捉えてよいのでしょうか。

鈴木氏 そうですね。“している活動”を捉えるためには、動作を理解する観察が必要だし、かといってそこから介護過程で課題分析をしようと思うと、その動作のどこに危険性があるって、どのような支援が必要なのかということを含めて分析しなければいけない。この 2 つを観察で求めてしまうことが、今の解決の話のように思えます。

しかし、それを行おうとすると、介護過程教育の中ではその 2 つはどちらかといえば矛盾する観察にもなるのではないかと思います。別の科目で扱った方が教育的には意味があるように思います。ただ、そもそもの教育内容が欠けているというのは非常に感じてはいます。

武田氏 具体的な科目はありますか。

鈴木氏 「ADL 評価」という言葉が学習上のキーワードに入ると好ましいと考えていて、今だと領域「介護」の中か、もしくは「こころとからだのしくみ」だと思いますが、ではその ADL 評価をどう行うのかということも考えてしまいます。うちの短期大学部の授業で言えば、介護リハビリテーショ

ンという科目の中で、ADL 評価ということを行うことはできると思います。ただ、理学療法、作業療法系の非常勤の先生が受け持ってくださいるリハビリにおいては、FIM といった、もっと細かい観察視点とか評価軸があるため、「Barthel Index で動作の例を ADL 評価することはできない」ということを仰います。だからといって「ADL 評価」という言い方にしてしまうと、もっと専門的なもので見ないと、というふうに扱われる意識もあります。それを考えると、少なくとも領域「介護」の中で収まる話ではないというのが、正直な見解です。

井川氏 そうですね、今の話でいう「歩く」という動作をアセスメントすることも大事なのですけれども、ご本人が「歩きたい」「歩く」という意思、利用者にとって本当にそれが課題なのかどうか。私はそこをどうやって考えるかというところをいつも意識しています。利用者にとっての課題という認識がどこまであるのかということです。ですから、“している活動”“できる活動”というところは、動作に関してのご本人の意思も連動していくという考えも必要なのではないかと思います。

武田氏 ここまでの議論を踏まえ、井口先生から LIFE の視点について 1 度お聞きしたいのですがよろしいでしょうか。

▼介護過程教育に LIFE をどう生かしていけるか

井口氏 ※LIFE に関するしくみ、実際の現場の状況説明

武田氏 では、ここからはただ今の説明を踏まえて、課題に対して LIFE の視点や要素を介護過程教育にどう生かしていけるかという点に焦点を置きながら、意見交換をしていきたいと思います。

真田氏 今の井口先生の説明を聞いて感じたことは、実際どういうふうに使われているのか、それによりどのような効果がみられたという実践例を通して、私たちが活用の方法や活用の仕方を学んでいかなければいけないのではないかと感じました。もう少し具体的に実践例とかを聞けると、

生徒も私たちもすごく参考になるのではないかと思います。

井口氏 LIFE で一番分かりづらいのは、これは何のために行うのかという理念があまり見えてこないという点ですね。急に LIFE というのを言われ、“データ入力しなければいけない”“大変だ”“ICT だ”といった視点や感情であったり、“これを一体何のためにやっているのか分からない”ということはあまり語られてこなかった。でも紐解いてみたら、こちらは自立支援をするために、尊厳を保持するというところの介護保険の制度に則って行っているということ。自分たちが行った介護の結果が、このように可視化されましたよ、というところではないかと思っています。

LIFE についてはフィードバックが返ってくることが前提になっていて、こういうふうに関護しなさいというのが返ってくるのかと思いがちなのですが、実際には自分たちの行ったケアがこういうふうにご利用者に影響しました、自分たちの行っている介護が全国平均と比べて、他の事業所の数値に比べてこのようになっているよという点が見えるだけのものなのです。自分たちの行ったケアに対する評価を、今後どのように改善につなげていくのかということが一番重要なのではないかと思います。

真田氏 それこそアセスメント表だけでなく、全体として介護過程を捉えていく視点ということもやはり大切になってきます。アセスメントだけで部分部分で見ってしまうのではなく、やはり一連の流れの中でしっかり展開していくということが大切なのだと改めて思います。

鈴木氏 すごく分かりやすいです。今の話と先ほどの井口先生の説明を聞いて印象に残ったのは、井口先生の観察眼という言葉と、Barthel Index を活用するためには研修の中で見る視点をそろえていくということ。ただ、やはり介護職以外の人の方が評価が厳しくなるという点で、そこに介護過程を考える醍醐味があるなというのをすごく思いました。

例えば、今までだと介護過程で、歩いている人だと「あの人は自立しています」というふうに一文しか書かなかったものが、Barthel Index を活用すると、「どのように歩いているか」という観察眼になり、そこにとても意味があると思います。

もう一方で、介護はADLだけではなくてQOLという概念をととても大事にするので、ニーズベースの話では、この人が歩けるのかだけではなく、歩きたいのか、例えば、どういうと場所なら歩くのかというような、好みや本人の個性のようなものを含めた情報に変わってくる。すると、一気にADLという評価ではない物差しの評価が加わってくる。それが介護らしい評価にはなるのですが、一方で科学的な評価で言う甘いという基準にもなってしまふことが考えられます。ただ、やはりこういう議論をきちんと行っていくと、介護過程で扱うデータが何かということはすごく明確になってくると思います。ですから介護の甘さと、いわゆる他職種が言う客観的な評価という部分がもっともっとディスカッションでぶつかっていくと変わってくると思うのです。

介護は実践上曖昧なものを扱うことが多いからこそ議論をしていくことが大事だと思います。ADLだけで捉える自立に、LIFEの活用が担ってしまうことを防ぐことにもなり、すごく良いと思いました。

井口氏 鈴木先生が仰っていることはまさにそのとおりで、じゃあ、評価するときにどうしたらいいのかという点なのです。生物としての人間しかLIFEでは表せないし、現在の状況しか表せないのです。では、心をどのように評価するのか。これは個別性が高く、価値観もありますし、それを評価するとなると哲学的な問題にもなってしまふので、非常に大変な議論に我々は踏み込んでいっていると思います。しかし、評価しやすいものという点で、ADLをまず評価して可視化しようという、初めのステップだと僕は思っているのです。QOLをどう評価するか。主観対主観で行っている介護で、加えて本人にも主観があります。よりよく生きるとか、哲学的、宗教的な話であったりするので、見えるものと評価できるものは取りあえず評価しようというのがLIFEなのではないかなと僕は思っています。

武田氏 見えるものを評価するということの逆の方で、本人の思いもあると思いますがこの思いを情報として捉えていくときにはどのように捉えていけばよろしいでしょうか。

井口氏 例えば、抑うつと躁うつを交互に繰り返しているご利用者がいて、抑うつ状態のときには全

然食事を食べなかったというデータが分かった。我々は無理やり食事を食べさせることはできないので、どうしたらこの利用者がご飯を食べることができるのかという視点で、環境調整をしたり、本人の思いを聞いたり、そして食べたいようになるような声掛けをしたり、食べたいようになる人に会わせたりしていった中、抑うつ状態でも躁うつ状態でもご飯を全量食べられるようになった。そして抑うつ状態でふさぎ込んでずっと寝込んでいた点に関して言うと、普通にフロアまで起きて来るようになった。これって医療の力ではなくて介護の力だと思うのです。その人がどうしたらよりよく生きていけるのかというふうに考えていくことが大事なのです。

LIFEに関しては、施設だと24時間可視化できるというメリットがあるのですが、医療の場合はこういった障害を抱えています、こういった認知症の症状を抱えています。では、自宅に帰ったときにはどうしたらいいですかと聞いたら、そこまではあまり答えてはくれないことが多い。なので、そのような中で生活者としてその人を捉えていく。このような中で、今後LIFEも色々考えながら活用していくことが大事になるのではないかなと思います。

武田氏 抑うつと躁うつと食事の関係のお話がありましたけれども、そこには本人のニーズが表れてくるような。そんな視点を持っているとも思いました。

鈴木氏 そうですね、本当によく分かります。介護計画そのものがサービス計画上ニーズから始まって目標があるので、ニーズベースで話します。でも、LIFEってどちらかというとエビデンスを明確にしていくので、エビデンスベースで評価をしていく。だからニーズベースの評価とエビデンスベースの評価をセットでやらなければいけないという話になると、目標の設定をどうするかがたぶん鍵になるのだろうと井口先生の話から感じました。

先ほどLIFEの基本項目のところにADLと食事の関係も話してくださったと思いますが、例えば、厚労省がよく使う個人フィードバックの使い方で、歩きの悪い人が全然リハビリの効果がないのだけれども、その人は実は低栄養で低体重だったというデータも出てきます。それがよくサンプルで使われるのですが、あれは介

護過程教育にすごくいいなとは思っています。歩かないと、気持ち的にもっと頑張って歩けるように散歩を企画するとか、レクリエーションを考えるというのは介護学生はやりがちです。ただ一方で食事量とか低体重、低栄養に対することをそこに盛り込んでいかないと達成はできないことでもあります。そうすると今言ったニーズベースの評価と ADL のエビデンスベースの評価ということをセットで介護過程で組み合わせることができるのかなというように思いました。多角的な視点に導いていくという手掛かりにできるのも、LIFE の活用の良い点なのではないかと感じました。

▼介護過程の目標と評価について——

武田氏 鈴木先生、そのニーズベースの評価と ADL を考えていった場合には、それは分析においても活用できるような、そんな感じでしょうか。

鈴木氏 アセスメントを文章化するときには当然ニーズベースと ADL のエビデンスベースの評価をやはり両方行わないといけないと思うのです。でも基本的にはやはりニーズの達成がサービス計画なので、そのニーズの達成を阻害している ADL を、ちゃんと段階的に考えるというのが介護過程のプロセスでもあるし評価の仕方でもあると思います。そうしないと、よくある例えですが、歩くことよりも車いすです自由に動けたらその方が自立が高いのではないかという発想につなげることも当然できるわけですが、でも自分の足で歩けることにやはり意味があるという話で考えられるのは、QOL と ADL の 2 つのアセスメントがあるから言えることなのかなと思いました。

品川氏 僕も今の話を聞かせていただいて、非常に考えさせられることがありました。極端な例になってしまうのですが、例えば、ALS の患者さんの介護ですと、病気の影響で ADL が低下していきます。でも、例えば、僕の知っている ALS の人は介助があればポータブルトイレに座ることができます。もちろん、介助者の介護が適切でなかったり、看護師やヘルパーとの関係性がまだきちんとできていなくて、羞恥心などから断ってしまうというようなこともあります。けれども、

慣れた人や馴染みのある介護職が、その方に合った方法で上手に介助を行えば、ポータブルトイレに座り、気持ちよく排泄することができます。その方にとって ADL の 1 つである排泄をすっきり気持ちよく行えるというのがこの人の QOL としてもすごく重要な意味を持ちます。病気がある中で、その人のニーズが毎日すっきりと排泄できる、トイレで行えるという点であり、ADL の評価ともすごく関連してくる大切な視点なのかなというふうに聞いていて思いました。

また、先ほど井口先生のお話にあった“ケアニードを導くための関連図”はすごく重要だと思いました。介護教育の中で学生が介護過程の学習を通して、あの関連図の意味をちゃんと理解できると良いと思います。一つひとつ注目する情報やその人の状況が書かれていて、あの矢印がどうしてつながるのか、上がってきた一つひとつの情報がその人の真ん中にある目標、課題とどう関係していくのか。その中で自分たちの役割がどういったものなのかというものを、きちんとあの図から読み取れる学習というのは改めて大切だというふうに思いました。多角的な視点でというのもそうですし、生活の全体像をきちんと理解して介護過程というものを学習していかなければならない、他科目で学んだ知識をそこにどう盛り込んでいくかということの重要性をすごく感じさせてもらいました。

井口氏 今、品川先生が仰っていたように、しっかり理解してないといけません。これは実習生によくみられるのですが、足浴を計画しがります。足浴したらそれは幸せで満足度が高いし、体がぼかぼかして循環がよくなったなどというので一番評価が出やすい。けれども本来その人にとって一番よいケアなのかと思うことがあります。介護過程で実習生が足浴ばかり計画するようになったので、禁止にしようと思ったくらいです。要はオリジナルで介護過程をつくるという、ゼロからみんなしっかりアセスメントして本人のニーズを導き出しならやっていくというというのは結構難しいことです。偏ってしまうこともあるかとも思います。だからこそ、そこをどういうふうにディレクションするかというのも、教員のさじ加減と言っても過言ではないと思います。QOL という部分だけに関して言えば、ニーズが導き出せなくても、足浴したらだいたいみんな満足を得

られます。でもそれは本来の介護過程とは違うと思うのです。

井川氏 その人のモチベーションを上げていく力というのは、先ほど鈴木先生のお話で言う QOL や、いわゆるニーズベースという話になるのでしょうか、実は介護過程教育で一番学生に求めたい点かなと僕は少し思っています。この人は本当に何がしたいのか、何を求めているのだろうかという。先ほど足浴のお話がありましたが、それで満足と表面上は見えるかもしれないが、本人は学生さんに気を遣って気持ちよかったとか満足と言っているかもしれない。本当はもっと違うやりたいことがあるのかもしれない。「コミュニケーション」というキーワードでは曖昧になってしまうかもしれませんが、それを活用しながら介護過程教育を通して利用者のニーズベースを理解する。もちろん、そこには今の LIFE であるエビデンスベースというところの観点も重要だとも考えます。その両方というところが介護過程をいかによくしていくかというところのキーワードになるのではないかと思います。いわゆる、根拠に基づいて、そして客観的に両方の観点で総合的に評価できるような視点に持っていけるのかどうか。介護過程でそのアセスメントもそうですし、計画の目標設定のときに両方というのをどのように設定するのかということではないでしょうか。

武田氏 ADL の目標関係とニーズベースの目標、この2つを目標として設定していくことがよいのではないかというご意見ですね。

井口氏 そうだと思います。ご利用者が幸せに暮らしていながら、失ってしまった自分ができることを再獲得するという点であったり、自己実現の目標を少しでもかなえられるというところが大事だと思うので、これは両輪でいかなければいけないと感じます。

武田氏 それは目標なのか評価なのかと言ったらどちらか。

井口氏 両方だと思います。ADL ベースのものに関して言えば、結局納得がいくのは、これだけ改善したとか、これだけ数値が上がったというように示せる指標だと思います。例えば、孫の結婚式に行くためには体力が必要だと言っている

人に、ここからここまで歩けるようになったとか、ここからこれだけの時間を保てるようになったらいいよねなど、やはり数値が出ないで行っている張り合いがないのではないのでしょうか。なので目標はニーズベースではないかと思います。そういった意味で評価を ADL で行うということが大事と考えられます。

鈴木氏 今の議論だと、どうしてもやはり目標って到達度で評価すると「できる」という表現を重視することになると思うのです。そうすると ADL にした方が評価しやすい。楽しむことができるとか、誰々と何々することができるというような評価であっても。そうすると今度はニーズベースの評価になるのかなと思ってみたいもします。どちらの評価にすることが介護過程上の評価に適切なのかというのは、今の議論だと私はこっちですとは言いがたいなとすごく思いました。

例えば、最初にお話しがあった介護過程教育の課題の「⑤他科目で学んだ知識や技術を活かして計画立てたことを実施する力にかんする課題」と、「⑥評価に関する教授が十分できていないという課題」の関係で強く思ったのは、今の評価の部分の⑥は介護過程だからといって、介護職のみで評価するという経験よりも、学生自身はもっとサービス担当者会議レベルを経験した方がいいと思います。要は看護師だとこれをどう評価するかとか、機能訓練士だとどう評価するかというようなことを、経験上きちんと行えることの方が評価とは一体何なのか、ということの学習と実践力につながるのではないかと思います。

また、「⑤他科目で学んだ知識や技術を活かして計画立てたことを実施する力にかんする課題」ですが、他科目で学んだことを統合的に介護過程の中で経験するということがとても介護養成課程上の重きとしては多いと思うのです。私が言った⑥の他職種での評価ということを組み込もうと思うと、⑤でいかに介護過程をチーム活動として経験できるかという実習内容にならないと、自分が見た観察と自分が考えた説明と、その自分が設定した目標と評価、それについて妥当かどうかを実習指導者から評価を受けるといっただけだと、今の話には結びつかないと思っています。

これは私自身が介護福祉士養成課程とチームマネジメントの新しい領域の科目を持ってい

る関係で、実習経験でチームマネジメント学習と介護過程とを、LIFE 活用に関する学習にどうリンクさせるかということから思いました。ある意味で統合させていくというよりも、その経験を担保させていくような教育カリキュラムが必要なのではないかと思いました。

井口氏 本当に鈴木先生がおっしゃるとおりだと思います。なので、今行っているスタイルで、自分でアセスメントして、自分で実施して、自分で評価して、それを担当指導員に評価してもらうということになると、それはそれで介護の世界ではいいと思うのですが、ほかの職種からもやはり妥当性をしっかり評価してもらうことも大事だと思うのです。例えば、私の施設では実習の際は看護師に1日付けたり、理学療法士に付けさせながら、他職種の視点もしっかり理解した上で、では介護福祉士にとって何が役割期待をされているのかということもしっかり再認識してもらうということを大切にしていきたいと思っています。

武田氏 ありがとうございます。評価もなかなか難しいと思いながら、介護過程教育をしています。ただ、それを客観的にどう評価するのかというところでは LIFE の視点が活用できると漠然に思いつながらも、それをどう結び付けていくのかという点が私の中でも明確ではなくて、難しさを感じているところです。評価の中にも先ほど少し出てきた ADL の評価と、そして満足度の評価とか、様々な視点が含まれている中で評価をしていく必要があるというふうに考えていくと、その1つの手法としては LIFE から導き出されたものは ADL の評価では活用しやすいけれども、実際に LIFE 自体を用いながら QOL の部分を見ると、本当にこの人にはこの介護実践がよかったのか。このような部分をどう評価していくのか、という点に結び付けていきたいと考えてはいますが、難しい現状があります。

鈴木氏 私が授業の中で取り組んでいて、学生がすごく納得感が得やすいやり方が1つあります。それはマズローの欲求を活用します。そこでいうと生理的欲求はかなり LIFE で言えるんですよ、ADL 評価なので。ただ、上の自己実現の欲求の方に高くなればなるほど科学性じゃなくて非科学性の話なので、上に行けば行くほど

それは科学的な評価ではないところで評価しなければいけないということを言うと、学生は「なるほど」という感じになっています。

武田氏 そうしたら、一番下のところは生きることにかかわる評価になると思いますが。そこは測りやすいけど、そこから上の評価がやはり難しい。

鈴木氏 安全ぐらいまでは活用できる感じがします。でも下の部分はやはりそれは個別性の話ではないので。それこそ施設フィードバック表の全体のこととの兼ね合いでも何か言えることがあると思います。ただ、上の高次のニーズになればなるほど、それは施設全体の傾向の話ではなくて、個人に紐づいているものになってくると思います。すべてのことが科学的だと言えるものではなくて、個別性、事例性がすごく求められるというような落としどころを、学生が見つけることができれば、もう少し介護過程の自立の考え方とか評価の考え方ができる。でも、とても難しいことではあります。

武田氏 最終的に評価は介護福祉士が担うのですが、その介護実践を受けた利用者さんの生活課題の解決ができたかを評価すると考えると、答えは利用者さんが出してくれるものだと思います。

井口氏 介護ってとても個別性がある。特に高齢者は実際に行ってみて改善することとしないこともあるということです。看取り期の人もいる。そしてこれは1+1は必ずしも2にならないというところが、なかなか難しい。あとは心の人心掌握とか心のマネジメントもあります。付度もあると思います。なので AI でもなかなか介護の仕事は取って代われないということです。ソーシャルワークに関してはそういうところがあり、でもこれをすべて科学的にやるというのも不可能かと思います。だから、下の階層の段階については評価できるというのは、まさに LIFE はそういうところなのかなと思っています。

品川氏 今、皆様のお話を聞いていて、ある学生の実習をちょっと思い出していました。その方の希望の1つとしてそれが実践できるかどうかを具体的に計画として実施していく上で、その子は施設のリハビリの先生に相談をして、その際に注意点などの情報をもらいました。例えば、

今の QOL と ADL といったときに、その学生は利用者さんが非常にいきいきとした表情で活動してくれたということを報告してくれました。一方できちんと、歩ける距離が長くなったり、より安定したとなれば、もっとその方の家事活動の幅も広がってくると学生の指導をされていて思ったことがあり、客観的な評価を介護職として知ることができれば、その方の大切な QOL にかかわってくる部分の内容にも、広がりが出てくるのではないのでしょうか。そしてそこから介護過程の展開が変わってくるのではないかと思ったのです。

また、ADL を丁寧にきちんと捉える視点がすごく大切だと思いました。その学生はシンプルにこのぐらい歩けるかな、お盆を持って歩けるかなという視点で、その方の歩行を丁寧に見ようとするのができたわけですが、そこが曖昧だと、お盆を持って歩きましょう、家事活動をしましょうということで転倒させてしまうこともあるでしょうし、利用者さんにとってはマイナスになってしまうこともあるかと思います。ADL を丁寧に捉えること、そのように体が動いて、どう動いていくのか。そういったことが理解できるように、介護過程の実践のための方法として生活支援技術があるわけです。そこが丁寧に見られていないと、安全の配慮ですとか、どんな基本的な技術を組み合わせるその人に合った介護過程の具体的な支援の内容として行っていたらいいのかということもつながってこないと思います。

また、活動って参加の準備だなと思ったのです。歩行がこのぐらいできる、だからこういう活動に移せる。じゃあ、その活動をよりよくしていくためには心身機能、身体構造もきちんと捉えて今の活動の状況を見ていかなければ、その人の QOL にかかわってくる参加の部分のアプローチも関連づけて見ていけないのかというように。その辺をどう学生に伝えていけばいいのかという感想を持ちました。

井口氏 アセスメントでリアルに LIFE を活用するには、色々な帳票があるので、そこに落とし込んでいく。LIFE を活用した介護過程の展開の中で、もう独自の帳票をつくるのをやめようとなりました。まず当てはめてみて、様々なところで情報が得られました。それを全体的に見たら何が言えるのかという分析に力を入れていこうという話をしてきました。なので、LIFE の帳票つ

てとてもたくさんあって、栄養面、ADL、認知機能、そういった点で何を可視化していったらいいの、そのデータをどのように活用していくのかというところが大事なかなと思います。

武田氏 学生のアセスメントでは、認知症の判断に難しいという感覚があります。それも先ほどの LIFE を活用すれば、ある程度一定の評価指標にはなりますか。

井口氏 自立支援促進加算のところに関して言うことができなくはないです。ただ少し未熟ではありますが。なので軽度の認知症の人に対するスクリーニングのテストは沢山ありますけれども、重度者で生活しなきゃいけない人の認知症のスクリーニングは、あまりよい評価指標ではないと思います。

▼教育における LIFE 活用の可能性——

金山氏 時間もそろそろ終わりに近づいてきましたが、ここまでのお話を踏まえて、LIFE にはこんな可能性がありそうだとか、どんな印象を持たれましたか。

井川氏 例えば、学生が実習に行ったときに、そこでは利用者さんと職員さんが目で行っている介護実践というものがあるわけです。それというのは何が根拠になっているのかというところを考えたときに、先ほどのみなさんのお話のとおり、ADL とか LIFE というところの身体的な情報と、それがどういうことに影響しているのか、どういう精神状況に影響しているのか、そこから性格的な配慮を踏まえたコミュニケーション技術、そしてこの方の動きから考察された身体介助などの生活支援技術というものが必要なのだと思います。

最初の方で、鈴木先生が、利用者の動きという点の学びが浅いという話がありましたが、まさにそこが実習で学ぶ際の LIFE の視点という点で非常に重要になってくるのかなと思っています。それを学生にも知ってほしいと思います。つまり主観的に済ませてはいけないう。だから科学的に証明し得ることをしないままではいけないよということが、今までの介護現場の場面でも結構あったと思うのです。そこを LIFE の視点で捉えていく。例えば、数値化もそうですけ

れど、マズローで言えば安全とか生理的欲求。そこを見過ぎて、所属、自尊、自己実現という段階には多分飛び越えられない。余計分らなくなるということになるのではないか。その点で LIFE を学んでいただきたいと思います。

金山氏 つまり、例えば、先生が実習巡回に行ったときに、学生さんが受け持ちの A さんという方について情報共有をした際、それはどういうことなのか、どうしてそういう人と思ったのかという点に対し、今でいう LIFE の項目の評価軸で評価できていることから、こういったことに困っていると考えられるみたいな、そういった共通言語での話し合いがしやすくなるということでしょうか。

井川氏 まさに今おっしゃった共通言語という点がネックになっているかと思います。その理解を助けるという意味合いで、LIFE を活用する。そこからかなというふうに思います。そこを飛び越えて非科学的にというのは、本当にある意味勘という方向にもなりかねない、いわゆる、主観的なものだけに追われてしまうということになってしまう。そこで客観的、科学的に証明することがいかに大事かという意味で LIFE の導入は意味があるかと思います。共通言語というところが学生にも理解を促すのではないかと思います。

金山氏 今はどちらかというと項目とか評価スケールの話になっていますが、LIFE の取り組み全体としては、介護福祉士の人がそういった情報を多職種と話し合いをしたり、地域ケアの部分にも生かされる要素があるのかなというふうに思うのですが、そういった共通言語としてチームで話し合う要素については、現在の介護過程教育の中でどんなふうに LIFE に可能性を見い出せそうですか。

井川氏 やはり連携の重要性、また他職種、異職種連携も含めてですけれど、そこが身体的な評価項目という、ある意味共通言語としたらそこになると思います。

先ほどの評価の話で言えば、看護、医療の評価の見方とか、リハの見方とか、学生サイドで言えば色々な視点ということです。うちの大学は看護学部、リハビリテーション学部、社会福祉学部と 3 つあるのですが、多職種連携教育というところでも、それぞれの学生がそれぞれの学んでいる領域の視点で、お互いに専門

性として受け入れるということ、そうやって多職種を本当の意味で受け入れるところから連携が始まるのかなと思います。それにはまさに LIFE がツールとしては非常に重要なと思いますし、学生にも学んでほしいと思います。

金山氏 LIFE をツールとして捉えたり、しくみとして捉えたり、様々な要素があるかと思いますが、鈴木先生は LIFE の良さとか可能性についてどんなことを思われていますか。

鈴木氏 一言で言うと PDCA サイクルの C と A の科学性が高まるということだと思います。それはいわゆる観察項目とか情報項目がより科学的に全体と個人を見比べながら比較できる。経時的にも追っていきける項目とデータが溜まっていくから。要はデータという言葉にしやすくなるという意味での C と A、ここが一番大きいかなと思いますね。

金山氏 なるほど。その要素は、現在の介護過程教育の中でどんな打開策といえますか、可能性を切り開いていくものとか。

鈴木氏 アセスメントをするときに ICF の構成要素をアセスメントの枠組みにするというのはよくやると思います。でも、その活動の中に入っている項目が何なのかということまで緻密にはやっていないと思います。その部分を LIFE の基本項目で明確的にしていく。総論でも ADL というところを明確にずっと追っていくわけなので、そこはより具体的になると思います。ただ、一方で ICF の高度レベルで、LIFE でいうならば、例えば、個別機能訓練加算とか、目標レベルの言葉などについても、ICF のコードときちんとそろえて書きましようみたいな話になってくると、学生の教育でそこまでやるのにはかなり難しさがあるように思います。その難しさは基礎能力の話もあるし、順次性の学習の仕方として学んでいくときにもそうです。だからどうしても、可能性はあると言いつつ、やはり過大に言ってしまう点があるのです。

金山氏 なるほど。今、先生がおっしゃってくださった LIFE の強みや可能性は、現場の実践者にとっての魅力にすごく聞こえます。まさに現場で運用されているので。なので、現場で、本当に最前線で、最高のケアを頑張って目指す上

では非常に強力なツールになり得ると思うのですが、そこまで最高に使いこなすというところまで行かずとも、この要素自体は、学生さんたちのレベルではどんな一助になるのでしょうか。

鈴木氏 介護福祉士養成課程は LIFE の活用ができること＝介護過程の到達度というわけではないはずです。LIFE を使えるということは結局、観察項目が分かるとか、評価という観点が分かるとか、そういうところが当然前提になると思います。そういう落とし込みの仕方をしていくときに、今の介護過程教育の不足が明確になるのは、先ほど言ったとおり、いわゆる観察項目とか、動作という形に置き換えることとか、その辺のところは必要だと思います。

金山氏 例えば、こんな学生がいるんだけど、この要素があるとういうふうになるかもしれないと言ったことは何か思い浮かびますか。

鈴木氏 トイレからデイルームまで自力で歩くことができるという利用者に、各学生が何メートル、どのような動作で歩くことができると観察します。その際に、どういう座り方をしているかという座る動作をセットで観察するというようなこと。先ほど言ったように、動作が分解されて、ADLとして確認できるような視点です。なので Barthel Indexという言葉だけで言うと、自立とかという評価そのものよりも、動作の例が何をしたらいいのかとか、どう観察したことを書けばいいのかということの模倣的な参考になるのだと思います。そこを応用的に見ていくというのは、学習の難易度としても、学び方の順次性としても、私はすごく難しいなと感じてしまいます。

金山氏 学生個人レベルで、何メートル歩けるとかというのは、言語化能力が高まって書けるような状況は、介護過程教育とか介護過程そのものの視点からするとありやなしやという議論がわいてくるとは思うのですけれども。その学生にとっては何ほどの価値になると思いますか。

鈴木氏 観察としてどれくらい歩けるのかという動作を観察眼として見る点と、この動作は危ないから、もっとこういう支援が必要だというアセスメントの論点って、実践者であれば同じベースにのっているのですけれども、学生でいうと2つのことをさせるので、どの段階でどこを目指して介

護過程教育として扱うかはすごく難しいなと直面しています。

金山氏 なるほど。逆にその2つの視点だったりレイヤーで考えると、第1段階ではこれを考え、第2段階ではこれを考えというようなステップを、今までよりは設置しやすくなっていると言えますか。

鈴木氏 そうですね。設置しやすくなっているということ、これはおそらく養成校の先生なら納得してくださると思うのですが、介護福祉士養成課程では、実習種別のⅠとⅡがあって、2はほとんど要介護度の高い人たちの施設の実習になります。そこで介護過程というのを基本的にメインで行う実習教育になるので、ひとりで歩くには危なさそうな人たちを見る機会の方が多いと思います。そうすると、今、言ったようなADLとしてのできる活動を見ていく発想以上に、この人の危険なところをアセスメントするとか、そちらの観察眼を持って考えることの方が、学生の学習活動としては自然になると思います。そこはやはり課題ではないでしょうか。

金山氏 価値が明確が故に、新たな課題も生むということですね。武田先生にも聞いてみたいのですが、LIFEの魅力、可能性、学生にとっての価値みたいなものを捉えるとどういったことがありますか。

武田氏 私もやはり鈴木先生と一緒に、その2つなんです。あとはLIFEのところでは経過的にその人を見ることができるのでその経過的な情報が客観的に採れる点はアセスメントに活用できると思います。学生も情報をどう取り扱っていいのか。情報自体、何か分からないという学生もいるので。そのときに「こういう情報を採ればいいんだよ」という指標にもなると感じているところ です。

金山氏 ここのアセスメント部分とか評価の部分というのはすごく大きいのです。では、武田先生、あえて先ほど先生が振ってくださっていた実施とか計画のあたりに対して、どのような可能性があると思いますか。

武田氏 計画をして実践をしていくということになれば、当然、評価もかかわってきます。単体ではなくてトータル的に見ていくことが必要だと思います。

ています。そうしますと、全体的に LIFE の活用にもなると思います。実際に LIFE を実施とにどのように結びつけるかが難しいんですが、評価と連動させていくのであれば、計画の見直しでも活用できるとも考えます。LIFE を活用をしながら介護過程のサイクルをスパイラルアップで活用できるのではないかと思います。あとは学生が情報を客観的な言葉として言語化するために LIFE で用いる言葉を活用しながら、アセスメントを行い、計画を立案し、実践、評価につなげることができるような感覚を持っています。

品川氏 僕も先生方がお話ししてくださったような、アセスメントの情報収集の視点ですとか分析、解釈をしていく際にきっかけとなるような、どんな視点で注目したらいいのかとか、そういったことを伝えるのに LIFE の内容は効果的に生かせるのではないかなと思っています。

真田氏 最初にあげられた課題に、支援やサービスを考えがちというのがありますが、計画をつくるときに、今行っている支援とかサービスから計画を考えたりしている生徒がいます。逆に、今こういうサービスを行っているからこそ、こういうことが分かるよねということです。

では、今度はどういうことがあるのか。それこそデータ分析する力とか、気付く力だとか、新たな視点という部分で、やはり LIFE が活用することができてくるのではないかと思います。「今こうやっています」で終わるのではなく、やはりそこから出てきたものに対して、今度はどういう発見があるのかとか、気付きがあるか。そういうところを介護過程の中で生徒たちに気付けるような力を伝えていく。その 1 つの情報として、LIFE が活用できるのかなと感じました。

井口氏 実習の中で、例えば、介護過程で絶対 LIFE を使わなきゃいけないという縛りをつける必要はないと思っています。先ほど鈴木先生がおっしゃっていたように、施設実習 2 になると重度者の人たちも対応することになります。ある一定程度のケアを受けている環境の中で、介護過程をしていかななくてはならないわけです。その中で、課題を抽出するところになってくると、自分が実際に目視しながら、生活を見ながら、では、実態の体の状況としてはどうなんだろうということになります。栄養の面でどうい

うふうになっているというのを色々一緒に見ていっていただいて、体重が減っているとか、主食があまり取れてないとか、「これは何でだと思う？」という疑問を学生に投げ掛けながら、義歯が合っていないのかもしれないだとか、こういうものが好きじゃないのかもしれないだとか、そこからまた、「どういうふうにしたらいいと思う？」というように更に色々な疑問を学生に投げ掛けながら、この中から探して行って、「1 つでもよくなったらいいよね」という話をしながら行ってきたということがあると思います。なので、「これは何でこうなっているんだろうね」というに情報を解釈するための 1 つの手段と思っています。

LIFE だけにかかわらず、色々なデータが定性評価されている。その中で特定の分野で、過去のデータから見ているもので、介護過程というのは、全体から見て定性評価をして、情報から判断して、これからの未来をつくっていく、予後予測をつくっていくことが大事ではないかと個人的に思っています。

武田氏 調査から見えてきた課題のうち「言葉として表現する力の教育に関する課題」、この点に対してせっかくですのでご意見をいただける先生はいらっしゃいませんか。いかがでしょう。

井川氏 学生の基礎学力の差が関係してくるところもあるかもしれません。また、言語化するということと、介護過程を担当している教員にも私も分からないことが多いのです。ヒアリングをしてみると、そもそも学生が高齢者と生活をした経験がないとか、そういう環境も含めて、感覚的に生活の場への理解が根本的にずれているのではないかと感じます。それはもちろん学生によっても違いはあると思いますが、言語化する点が苦手というのは介護過程以外のところでも必要な科目もあるのかもしれない。ですから LIFE などの活用によって、共通の言葉をまず知ることから始め、それを今度は表現するということにつなげ、そしてさらにその下にある「説明できる力」というところに広げていく必要があるのではないかと思います。これは確かに非常に難しい課題かなと思っています。

武田氏 ありがとうございます。共通言語というところで LIFE の活用が見込めるというご意見だと思いました。

鈴木氏 今の記録のところですが、今は外国人の方も増えてきているので、言語化は養成校にとってすごく大きな課題です。叙述的に書くというのが基本的にアセスメントの形になってきますが、その叙述をするのに、金山さんがすごく意図的に、そのときどう思ってたか、例えば、というふうに話された。結局、実習スーパービジョンでいかにそういう発音をたくさん受けられるかが学生の介護過程の表現力につながってくるのではないかというのは教員としては強く思いました。実習巡回のときに、教員だと机に座って対面で行うのですが、現場だとそこまでの丁寧な対話をしながらの確認がなかなか難しいので、介護過程教育を高める実習スーパービジョンの在り方は、やはり調査研究的にもっと進めていくことが大事だなということを思いつつ、他力本願的に期待しつつという感じがあります。

武田氏 スーパービジョンは教える内容に入っているけど、十分な教育がなされているかというと、表面的な教育にとどまっているような感覚を持っています。

鈴木氏 やはり同行型のスーパービジョンが介護の中ではすごく重要だと思っています。その形って、いい施設は明確になっても絶対あると思います。そこで実習経験できている学生は表現力の豊かさに間違いなくつながっていると思います。

事務局 皆さま、2 時間あっという間でしたが、色々なご意見をありがとうございました。

令和5年度社会福祉推進事業

根拠に基づく介護実践を推進するための介護福祉士養成課程における
介護過程教育のあり方に関する調査研究事業 報告書

発行：令和6（2023）年3月

株式会社コモン計画研究所

166-0015 東京都杉並区成田東 5-35-15

03-3220-5415 <https://www.comon.jp/>